

国指定史跡

怡 土 城 跡

前原市文化財調査報告書

第 94 集

2006

前原市教育委員会

国指定史跡

怡 土 城 跡

前原市文化財調査報告書

第 94 集



怡土城全景 (南西より)



第5望楼（東より）



第4望楼（南より）



懸庄礎石群（北より）



高来寺遺跡（高祖60-1）（西より）

卷頭4



大門遺跡（大門484-1）（全景）



大門遺跡（大門484-1）（土層）



大門遺跡 (大門29・30) (全景)



大門遺跡（大門29・30）（No.2トレンチ）



大門遺跡（大門29・30）（北側土層）



手嶋氏寄贈資料 1



手嶋氏寄贈資料 2



末永出土鬼瓦



大圓寺所蔵鬼瓦

序

怡土城は前原市と福岡市とが境を接する高祖山（416m）西斜面一帯に築城されました。その築城に関して『続日本紀』には天平勝宝8年（756）6月から神護景雲2年（768）2月までの約12年の歳月を要したことが記されています。当時、中国大陸では「唐国」、朝鮮半島では「新羅国」、中国東北部は「渤海国」、それに日本を交えて東アジア情勢は展開していきます。そのような国際的政治情勢のなか、中国大陸では「安祿山の乱」が起こります。日本と新羅国は東アジアにおける国際的地位をめぐり、次第に歪みが発生します。日本国内において、藤原仲麻呂政権下の天平宝字2年（758）には天平期に続いて2度目の新羅征討計画が論じられるほどでした。そのような状況下で築城されたのが怡土城なのです。

この怡土城の所在する高祖山は自然遊歩道が設置され、軽登山のメッカとして市民に親しまれています。自然遊歩道は怡土城の土塁上に設置されているために、現時点におきまして、計6ヶ所の礎石群を見学しながら登山することができます。さらに高祖山の頂上部には中世の「高祖城」も所在し、古代のみならず中世の石塁・礎石なども堪能できます。

本書は昭和47年から現在にいたるまでの怡土城に関する主な発掘調査の成果を整理したものです。この報告が文化財保護思想の普及・啓蒙ならびに古代史の解明に少しでもお役にたつことを心から願うばかりです。

最後になりましたが、発掘調査、遺物の整理および報告書作成に当たりましては各関係諸機関、それに多くの方々のご協力を賜りましたことを、心からお礼を申し上げます。

平成18年3月31日

前原市教育委員会
教育長 菊 竹 利 嗣

例 言

1. 本書は国指定史跡「怡土城跡」に関する昭和47年から今日にいたるまでの主な発掘調査成果を整理・収録したものである。
2. 怡土城は福岡県前原市大字高祖字東谷1717他に所在する。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、川村 博、角 浩行、瓜生秀文、山口裕平（那珂川町教育委員会）が行った。
4. 本書に掲載した遺構図面の製図は友池真由美の協力を得て瓜生が行った。
5. 本書に掲載した昭和11年の遺構実測図等については鏡山 猛著『怡土城址の調査』（日本古文化研究所報告・第六・1937年）に掲載されたものを原図とし、あるいは再構成したものをトレースし掲載している。
6. 本書に掲載した遺物実測図の作成は瓜生、山口が行った。
7. 本書に掲載した遺物図面の製図については瓜生と協議の上、山口が行った。
8. 本書における遺物の色調については小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修 1995年版）を使用した。
9. 本書に掲載した遺構写真は、川村、角、瓜生が撮影した。
10. 本書に掲載した遺物写真は瓜生が撮影した。
11. 巻頭カラー図版の遺物については、岡紀久夫氏が撮影した。それ以外については川村、角、瓜生が撮影した。
12. 本書に示した方位は磁北を意味する。
13. 本書の執筆は川村、角、瓜生、山口が分担して行った。
14. IV-7の化学分析結果については林 重徳氏（佐賀大学）より玉稿を賜った。
15. 本書の編集は山口と協議の上、瓜生が行った。
16. 図版17の筑前高来寺城縄張図は中西義昌氏（大分県竹田市教育委員会）の御了解を得て転載させていただいた。
17. 図版82の高祖城想定図は小幡政義氏の御了解を得て転載させていただいた。
18. 付図2の高祖城縄張図は山崎龍雄氏（福岡市教育委員会）、阿部泰之氏（福岡市教育委員会）、石橋逸郎氏、藤野雅基氏、前田時一郎氏、山口裕平氏、坪内国基氏（福岡市教育委員会）の御了解を得て転載させていただいた。
19. 発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の機関及び方々の御協力、御教示をいただいた。記して感謝いたします。（順不同、敬称略）

福岡県教育委員会、福岡市教育委員会、大圓寺、太宰府市教育委員会、筑紫野市教育委員会、春日市教育委員会、行橋市教育委員会、古代山城研究会、古代交通研究会、北部九州中近世城郭研究会、小田富士雄、北垣聰一郎、林 重徳、長 洋一、酒寄雅志、大庭康時、上角智希、前田時一郎、山村信榮、長 直信

「国指定史跡 怡土城跡」の訂正について

本報告書における「懸庄礎石群」は誤りで「縣庄礎石群」が正しい表記となります。お手数をお掛けしますが「懸庄」から「縣庄」に訂正していただきますようお願い致します。

本文目次

I. はじめに (瓜生)	1
1. 今日までの発掘調査の経緯	1
2. 収録遺構	1
3. 調査の組織	1
II. 位置と環境 (瓜生)	4
III. 怡土城概説 (瓜生)	6
1. 時代背景	6
2. 地理的環境	7
3. 築城の経過	8
4. 渤海国との関係と新羅征討計画	8
5. 吉備真備	8
6. 築城秘話	9
7. 築城の理由	10
IV. 調査報告	13
1. 第5望楼 (川村・山口)	13
(1)調査概要	13
(2)調査の記録	13
2. 第4望楼 (川村・瓜生・山口)	24
(1)調査概要	24
(2)調査の記録	24
3. 懸庄礎石群 (川村・山口)	31
(1)調査概要	31
(2)調査の記録	31
4. 高来寺遺跡 (高来寺60-1) (角)	36
(1)調査概要	36
(2)調査の記録	36
5. 大門遺跡 (大門484-1) (瓜生)	39
(1)調査概要	39
(2)調査の記録	39
6. 大門遺跡 (大門29・30) (瓜生・山口)	41
(1)調査概要	41
(2)調査の記録	41
7. 怡土城における版築層等についての土質工学的考察 (林)	55
V. その他 (寄贈資料・採集資料)	65
1. 手嶋氏寄贈資料 (山口)	65

2. 怡土城に関連する鬼瓦 (瓜生・山口)	71
(1) 末永出土鬼瓦	71
(2) 大圓寺所蔵鬼瓦	74
(3) その他の鬼瓦 (聞き取り調査)	80
3. 怡土城採集資料 (瓜生・山口)	81
(1) 大門地区土塁崩壊地点採集資料	81
(2) 一ノ坂礎石群採集資料	84
(3) 砂防工事に伴う採集資料	86
(4) その他 (出土地点不明)	87
VI. おわりに	88
1. 遺構 (瓜生)	88
(1) 土塁	88
(2) 城門	90
(3) 望楼	92
(4) 水門	94
(5) 濠	94
2. 遺物 (山口)	96
3. 怡土城の終焉 (瓜生)	100
4. 怡土城その後 (瓜生)	100

挿図目次

第1図. 怡土城の主要遺構と既調査地点 (1/10,000)	3
第2図. 怡土城関連遺構と中近世の城館跡 (1/50,000)	5
第3図. 「白村江」後の東アジア情勢	6
第4図. 大宰府政庁を中心とした防衛プラン	7
第5図. 吉備真備像	9
第6図. 吉備真備と藤原仲麻呂	11
第7図. 怡土城想定図	12
第8図. 第5望楼地形図 (1/200)	14
第9図. 第5望楼遺構配置図 (1/100)	15~16
第10図. 第5望楼I区遺構実測図 (1/100)	17
第11図. 第5望楼II区1号土壌実測図 (1/20)	19
第12図. 第5望楼II区2号土壌実測図 (1/20)	20
第13図. 第5望楼出土土器実測図 (1/3)	21
第14図. 第5望楼出土瓦実測図 (1/6)	22
第15図. 第5望楼出土埴実測図 (1/6)	23
第16図. (参考) 大宰府出土埴	23
第17図. 第4望楼地形図 (1/150)	25

第18図. 第4望楼遺構図 (1/75)	26
第19図. 筑前高来寺城縄張図 (1/1,500)	27
第20図. 第4望楼出土遺物実測図 (1~41は1/3, 42・44は1/4, 43は1/6)	29
第21図. 懸庄礎石群地形図 (1/100)	32
第22図. 懸庄礎石群遺構実測図 (1/75)	33
第23図. 懸庄礎石群出土土器・瓦実測図 (1・2は1/3, 3・4は1/6)	34
第24図. 懸庄礎石群出土瓦実測図 (8は1/4, 5~7は1/6)	35
第25図. 懸庄礎石群 (東より)	35
第26図. 高来寺遺跡 (土塁と濠) (北より)	36
第27図. 高来寺遺跡遺構実測図 (1/100)	37
第28図. 高来寺遺跡土層実測図 (1/40)	38
第29図. 怡土城土塁築造方法想定図	39
第30図. 大門遺跡 (大門484-1) 土層実測図 (1/20)	40
第31図. 大門遺跡 (大門29・30) 現況断面図 (1/200)	41
第32図. 大門遺跡 (大門29・30) No.1 トレンチ土層図 (1/40)	42
第33図. 大門遺跡 (大門29・30) 地形図 (1/100)	43~44
第34図. 大門遺跡 (大門29・30) No.2 トレンチ土層図 (1/40)	45
第35図. 大門遺跡 (大門29・30) 石塁立面実測図 (1/100)	47~48
第36図. 大門遺跡 (大門29・30) 石塁Ⅰ区立面・断面実測図 (1/40)	49
第37図. 大門遺跡 (大門29・30) 石塁Ⅱ区立面・断面実測図 (1/40)	50
第38図. 大門遺跡 (大門29・30) 石塁Ⅲ区立面・断面実測図 (1/40)	51~52
第39図. 大門遺跡 (大門29・30) 土塁現況断面図及び復元想定図 (1/150)	53
第40図. 大門遺跡 (大門29・30) 出土土器実測図 (1/3)	54
第41図. 大門遺跡 (大門29・30) No.2 トレンチ土壌サンプル採集箇所 (1/40)	62
第42図. 手嶋氏寄贈資料出土地点 (1/2,500)	65
第43図. 手嶋氏寄贈資料土器実測図1 (1/3)	66
第44図. 手嶋氏寄贈資料土器実測図2 (1/4)	67
第45図. 手嶋氏寄贈資料瓦実測図1 (1/6)	68
第46図. 手嶋氏寄贈資料瓦実測図2 (1/6)	69
第47図. 手嶋氏寄贈資料瓦実測図3 (1/6)	70
第48図. 末永出土鬼瓦採集地点 (1/2,500)	71
第49図. 末永出土鬼瓦実測図 (1/3)	72
第50図. 末永出土鬼瓦	73
第51図. 怡土城土塁と木下讃太郎氏 (大正年間)	74
第52図. 木下氏収集の怡土城の瓦 (大正3年)	75
第53図. 大圓寺所蔵鬼瓦	76
第54図. 北浦廃寺出土鬼瓦	76
第55図. 大圓寺所蔵鬼瓦実測図 (1/3)	77

第56図.	伊都国歴史博物館所蔵鬼瓦	78
第57図.	大鳥居口城門北側土塁上部の祠 (木下讀太郎氏コレクションより)	80
第58図.	大鳥居口城門 (城外側より城内側を望む)	80
第59図.	大門地区土塁崩壊地点 (1/2,500)	81
第60図.	大門地区土塁崩壊地点採集遺物実測図1 (1~7は1/3、8~16は1/4)	82
第61図.	大門地区土塁崩壊地点採集遺物実測図2 (1/6)	83
第62図.	一ノ坂礎石群実測図 (昭和11年実測) (1/150)	84
第63図.	一ノ坂礎石群採集瓦実測図 (1/6)	85
第64図.	出土熨斗瓦とその使用例 (熨斗棟)	85
第65図.	砂防工事に伴う採集資料採集瓦実測図 (1/6)	86
第66図.	砂防工事に伴う採集資料採集地点 (1/2,500)	86
第67図.	怡土城出土地点不明採集瓦実測図 (1/6)	87
第68図.	怡土城土塁構築法想定図	88
第69図.	土塁版築工法想定図	89
第70図.	大鳥居口城門 (城外側より城内側を望む)	90
第71図.	大鳥居口城門門礎石実測図 (1/30)	90
第72図.	伝大鳥居口城門門礎石実測図 (1/20)	91
第73図.	伝大門門礎石実測図 (1/30)	91
第74図.	小城戸口城門	91
第75図.	望楼礎石配置図	93
第76図.	土塁と濠 (高米寺地区)	94
第77図.	怡土城城外側濠跡実測図 (大門334) (1/300)	95
第78図.	高祖城全景	100
第79図.	高祖城石塁	101
第80図.	高祖城出土瓦一式	101
第81図.	原田信種像	101
第82図.	高祖城想定図 (小幡政義氏画)	102

図面目次

図版 1	怡土城全景 (南東より)
図版 2	a. 怡土城全景 (南西より) b. 怡土城想定図 (北西より)
図版 3	a. 第5望楼 I 区全景 (東より) b. 第5望楼 I 区近景 (東より)
図版 4	a. 第5望楼 I 区礎石 (南より) b. 第5望楼 II 区全景 (東より)
図版 5	a. 第5望楼出土土器 b. 第5望楼出土瓦・埴

- 図版6 a. 第4望楼全景（南より）
b. 第4望楼土器出土状況
- 図版7 a. 第4望楼出土土器
b. 第4望楼出土瓦
- 図版8 a. 懸庄礎石群全景（北より）
b. 懸庄礎石群全景（西より）
- 図版9 懸庄礎石群出土遺物
- 図版10 a. 高来寺遺跡（高来寺60-1）全景（西より）
b. 高来寺遺跡（高来寺60-1）Aトレンチ（北より）
- 図版11 a. 大門遺跡（大門484-1）全景（南より）
b. 大門遺跡（大門484-1）土層（南より）
- 図版12 大門遺跡（大門29・30）全景（南西より）
- 図版13 a. 大門遺跡（大門29・30）No.1トレンチ（南西より）
b. 大門遺跡（大門29・30）No.1トレンチ土層
- 図版14 a. 大門遺跡（大門29・30）No.2トレンチ（南西より）
b. 大門遺跡（大門29・30）No.2トレンチ土層
- 図版15 a. 大門遺跡（大門29・30）石塁Ⅰ区
b. 大門遺跡（大門29・30）石塁Ⅲ区
c. 大門遺跡（大門29・30）出土遺物
- 図版16 a. 手嶋氏寄贈資料（集合）
b. 手嶋氏寄贈資料（土器1）
- 図版17 a. 手嶋氏寄贈資料（土器2）
b. 手嶋氏寄贈資料（土器3）
- 図版18 手嶋氏寄贈資料（瓦）
- 図版19 a. 末永出土鬼瓦
b. 伝怡土城出土鬼瓦（大圓寺所蔵）
- 図版20 a. 大門地区土塁崩壊地点採集遺物（製鉄関係遺物）
b. 大門地区土塁崩壊地点採集遺物（瓦）
- 図版21 a. 一ノ坂礎石群採集資料
b. 砂防工事に伴う出土資料
- 図版22 出土地点不明資料
- 図版23 a. 大鳥居口城門
b. 怡土城碑
c. 大鳥居口城門門礎石
- 図版24 a. 伝大鳥居口城門門礎石
b. 伝大門礎石
c. 伝大門礎石（天上部）

付図目次

- 付図1 怡土城遺構図 (1/10,000)
付図2 高祖城縄張図 (1/1,000)

表目次

表1	怡土城周辺における主な調査地点一覧表	2
表2	第5望楼出土遺物観察表	103
表3	第4望楼出土遺物観察表	105
表4	懸庄礎石群出土遺物観察表	107
表5	手嶋氏寄贈資料観察表	108
表6	大門地区土塁崩壊地点採集資料観察表	110

I. はじめに

1. 今日までの発掘調査の経緯

怡土城に関する本格的な発掘調査は、昭和11年（1936）の九州帝国大学（現九州大学）による発掘調査が最初になる。その発掘調査の成果を基に昭和13年8月8日（昭和19年6月5日一部追加）文部大臣より、怡土城の遺構の一部（土塁の一部及び礎石群等）は国指定史跡に指定される。その面積は26.5haである。

ところが、昭和16年（1941）に太平洋戦争が勃発し、昭和20年（1945）の終戦をむかえるまで怡土城の解明は中断を余儀なくされる。さらに、時期は不明ではあるが、開発が怡土城郭内（指定地外）にも及んでいたようで、怡土城郭内に所在したと想定される礎石群の礎石の一部が怡土城郭外に移築されているのを確認している。

昭和47年（1972）に怡土城郭内（指定地外）に再び開発計画がおこり、文化財保護法に基づき福岡県教育委員会により発掘調査が実施される。その後も国、県の補助を受けて前原市（平成4年10月に市政施行）が発掘調査を実施し、今日にいたるまで怡土城の解明及び史跡保存に努めている。その結果、一部ではあるものの、徐々に怡土城の構造が解明されている。

2. 収録遺構

昭和11年から本格的な発掘調査が実施された怡土城であるが、著名な遺跡にもかかわらず調査結果の報告事例は少なく、昭和11年の九州帝国大学（現九州大学）による発掘調査結果の報告書と若干の概報・図録が刊行されているにすぎない。なかでも昭和47年からの発掘調査結果については高祖東谷1号墳など一部については報告済みではあるものの、その大部分が未報告のままであった。

そのために、各方面・各機関から昭和47年からの未報告の発掘調査結果についての問い合わせが絶えない状況にあり、また前原市が昭和56年度から怡土城郭内全域を国指定史跡に指定する文化財事務を進めている経緯があったことから、過去における未報告の調査結果を整理する必要性が生じ、この報告書を刊行するにいたった。

ただし、調査成果は多岐にわたり、また紙面の制約のため昭和47年から今日までのすべての調査結果を収録することができず、今回は第5望楼、第4望楼、懸庄礎石群など怡土城に直接関連する主な遺構・遺物に限定して収録することにした。なお、今回報告できなかった調査結果については次の機会で報告することにする予定である。

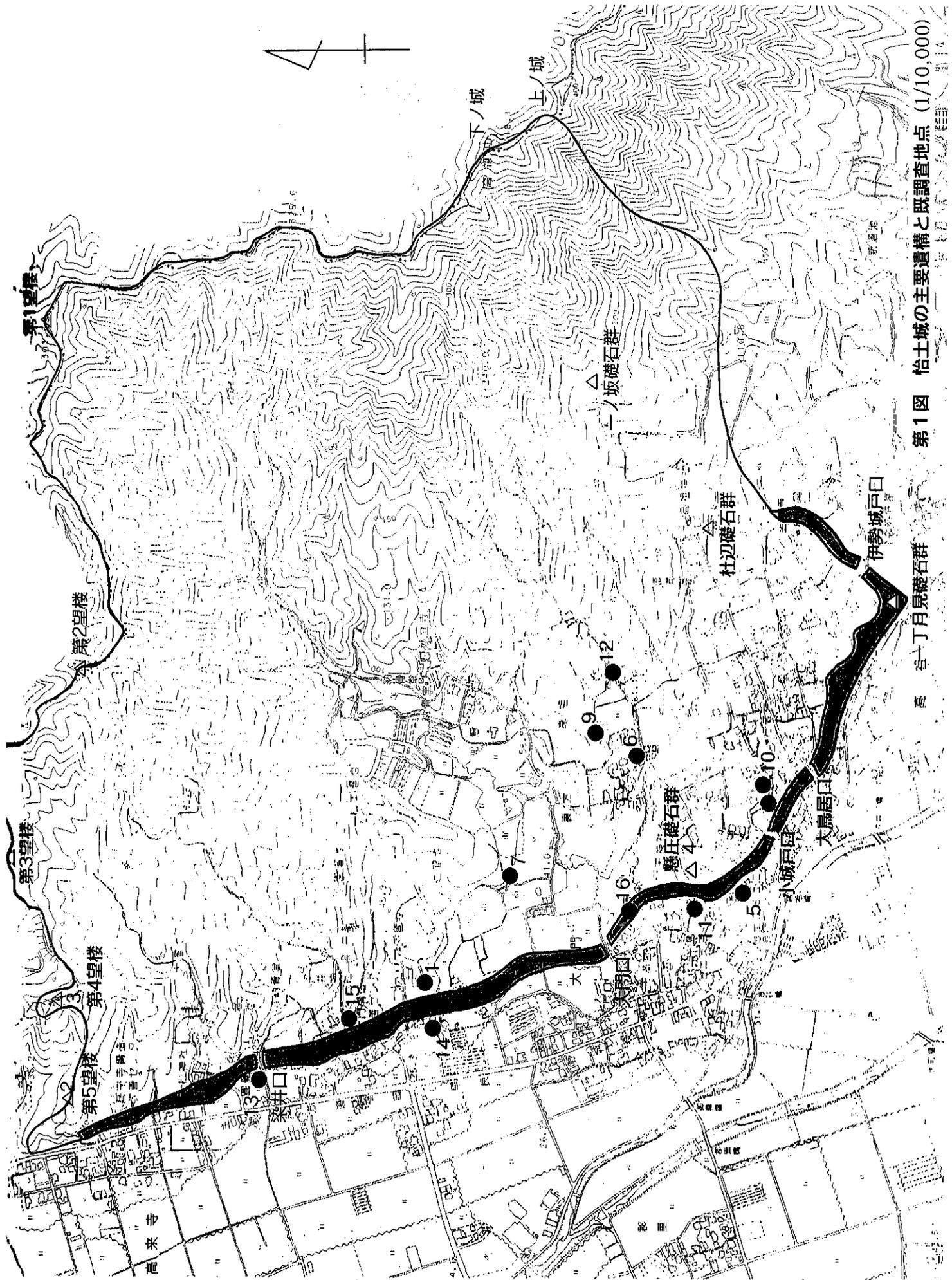
3. 調査の組織

平成17年度の報告書作成体制は次のとおりである。

調査主体者	福岡県前原市教育委員会		
総括	前原市教員委員会	教育長	菊竹 利嗣
	前原市教員委員会	部長	久我 和彦
	前原市教員委員会文化課	課長	鬼木 武信
	同	課長補佐	中村 鉄弥
	同 文化財係	係長	岡部 裕俊
調査担当	同	主査	瓜生 秀文
庶務	同	主事	中野 幸功
整理作業	山口 裕平（那珂川町教育委員会）、友池真由美、末益真奈美		

番号	発掘調査地点	調査内容		遺構、遺物の時期	調査年度
		遺構	遺物		
1	大門321	大溝（土塁内濠？） 柱穴状ピット	弥生土器 須恵器 鉄滓	城ノ越期 Ⅲ-A～B	昭和47～48
2	高来寺161-7	第5望楼（2間×3間・地山整形基壇）	須恵器 瓦 土師器	Ⅲ-B	昭和53
	高来寺161-5	土壇	瓦	奈良時代	昭和54
3	高来寺1615	第4望楼（2間×3間・地山整形・岩盤）、溝	瓦、 土師器	奈良時代	
4	高祖1467	懸庄礎石群（2間×3間・地山整形基壇）	瓦	奈良時代	昭和55
5	大門3	濠（土塁の前面・幅15m）	瓦	奈良時代	昭和56
6	高祖	建物跡？（近世）	陶器	近世	昭和56
7	高祖1856-1、 2	溝2（弥生、古墳周溝）	弥生土器 須恵器	弥生時代 古墳時代	昭和56
	高祖1856-3	古墳	須恵器、瓦片、 瓦器片	古墳時代	昭和56
8	高来寺189	濠（土塁前面・幅約12m）	瓦	奈良時代以後	昭和57
		濠（土塁前面・幅約12m）	瓦	奈良時代以後	昭和58
9	高祖1658	前方後円墳（高祖東谷1号墳） 主体部（箱形木棺、石棺）	鉄剣、朱	古墳前期	昭和58
10	高祖1437	土壇3、溝2	須恵器 摺鉢	古墳 中世	昭和57～58
11	大門15、16	水門？	瓦 須恵器 鉄滓	奈良時代	昭和60
12	高祖1605-5	遺構なし			昭和61
13	高来寺60-1	濠（土塁前面・幅約15m）	瓦	奈良時代	平成9
14	大門334	濠（土塁前面・幅約12m）		奈良時代	平成10
15	大門484-1	版築確認		奈良時代	平成9
16	大門29、30	土塁構造（城外側）確認	土師器	奈良時代	平成14

表1 怡土城周辺における主な調査地点一覧表



第1図 怡土城の主要遺構と既調査地点 (1/10,000)

源 台一丁目見礎石群

II. 位置と環境

怡土城は、前原市と福岡市とが境を接する高祖山の西斜面一帯に城域を持つ古代の山城である。

『続日本紀』によると、天平勝宝8年(756)から神護景雲2年(768)までの約12年間の年月を費やして築城されたとされる。当初は吉備真備が築城を担当するが、途中で佐伯今毛人に交代して完成をみる。怡土城は9世紀初頭まで「城」として機能していたようであるが、その後については不明である。怡土城が所在する高祖山は時代を問わず軍事的拠点であったようで、中世になると原田氏が廢城になった怡土城を再利用して高祖城を築城する。その際、怡土城の望楼跡などは支城もしくは郭の一部として機能していたと考えられる。

その高祖山山頂(標高416m)から北側を望むと、今津湾を一望できる。今津湾一帯には奈良・平安時代に主船司(大宰府の一機関)が設置されたと考えられている。有事の際には今津湾に軍船が集結され、それを管理・統括していたのが主船司であり、平安時代になると入国管理に関する権限も与えられるようになる。

高祖山山頂から西側を望むと、糸島半島を一望できる。糸島半島は律令制下で志麻(嶋)郡であり、遣唐使船、遣新羅使船の寄港地であった。『万葉集』で詠われた「鞆泊」、「引津泊」が現在でも遺称地名として残る。九州大学移転予定地も含まれ、移転に伴う発掘調査の結果、当該地一帯には奈良時代の官営の製鉄工房、瓦窯などが発見されている。なかでも、怡土城から出土する厚手の平瓦と同一の平瓦片も出土しており、^(註1)怡土城との関係を知る上で貴重な資料となる。糸島半島の東部には筑紫富士と称される加也山と火山がそびえ、両山は玄界灘を一望できる景勝の地となっている。その加也山と火山は古代の山城である稻積城の比定地の一つとなっている。

糸島半島の南側を望むと、糸島平野が目前に広がる。律令制下では怡土郡であり、平野部の北側には官道が設置されていた。その官道は怡土城の北側を走っていたと考えられ、鴻臚館を經由して大宰府へと繋がっていた。糸島平野の中心部には弥生時代に栄えた伊都国の王都であった三雲遺跡群が広がる。律令制下でも怡土郡の中心地であったようで、三雲地区の小字名に「郡」・「番上」など官衙・官僚に関する遺称地名が残っており、当該地区に怡土郡の郡衙もしくは郡衙に関連する施設が設置されていたと考えることができる。

糸島平野の南側を望むと背振山脈が一望できる。その山脈の一部を構成する雷山の中腹(標高約400m~480m)には怡土城より約100年遡る7世紀代に築城されたとされる雷山神籠石が所在する。現時点において、水門と列石を確認しているが本格的な発掘調査が実施されていないためその詳細については不明な点が多い。怡土城が機能していた時代において、この雷山神籠石は烽火の一つとして機能していたとも考えられていることから、その解明が待たれる。

雷山神籠石の麓には日向峠越えルートが走る。このルートは弥生時代から今日にいたるまで大宰府方面に繋がる重要なルートであり、怡土城の南側を走る。怡土城とこのルートが接する末永地区には末永高木遺跡があり、当該遺跡からは線刻土器、墨書土器など出土している。また、当該遺跡一帯からは怡土城に使用する予定であったと考えられる鬼瓦片2点が出土し、さらには瓦窯跡・礎石群もあったという情報も得ている。このことから、末永地区にも官営の瓦窯群があり、築城中の怡土城に瓦を供給していたと考えることができる。

註

1. 元岡・桑原遺跡群第31次調査で出土。上角智希氏(福岡市教育委員会)よりご教示賜った。



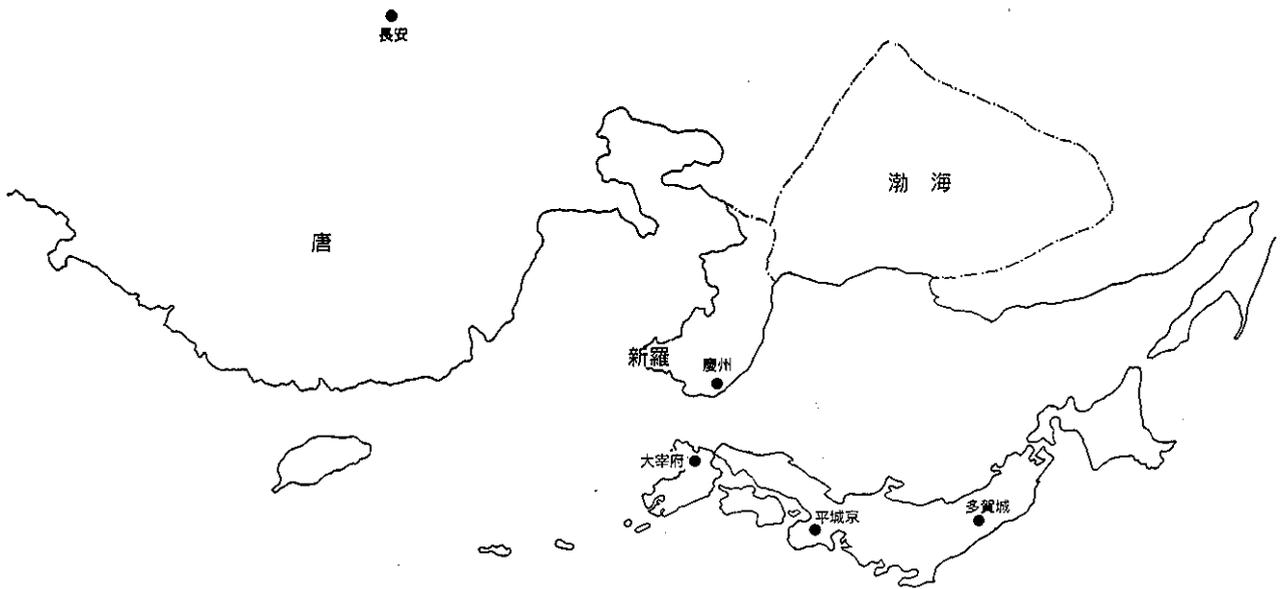
第2図 怡土城関連遺構と中近世の城館跡 (1/50,000) (太枠の囲みは主要遺跡群、もしくは遺跡。■は方形の屋敷跡を示す。)

Ⅲ. 怡土城概説

1. 時代背景

白村江の敗戦後、朝鮮半島では旧百濟領をめぐる唐と新羅が戦争をくりひろげる中で、日本（倭）と新羅両国の国交が回復し、新羅は宗主国として日本（倭）に朝貢してくる。

しかし、8世紀に入ると日羅関係は必ずしも順調でなくなりつつあった。なぜなら、新羅は旧百濟領をめぐる唐と対立していたため、国際的に挟み撃ちにあわないために日本（倭）に朝貢せざるを得ない状況下にあった。ところが、8世紀に入ると唐と新羅の関係が好転し、新羅としては日本に朝貢する必要性がなくなる。そのために新羅は天平期から、毎年の朝貢を3年に一度にしたりして今までの朝貢形式ではなく対等形式の国交をめざしてくる。一方、日本としてはしばしば常礼を失したとして新羅使を放還する。このようにして日羅関係は悪化し、天平9年（737）には新羅国において我が国が派遣した遣新羅使が冷遇され、官人達の間で新羅征討論が生じる有様であった。この後、日羅関係は一時回復の兆しを見せるかにみえたが、天平勝宝5年（753）には新羅国王が日本国使小野田守の無礼を咎めて会見せず帰国させるという事件が起こり、両国の関係は決定的な対立にいたった。そして、藤原仲麻呂政権下の天平宝字2年（758）に新羅征討計画が発議される。このような状況のなかで築城されたのが「怡土城」である。

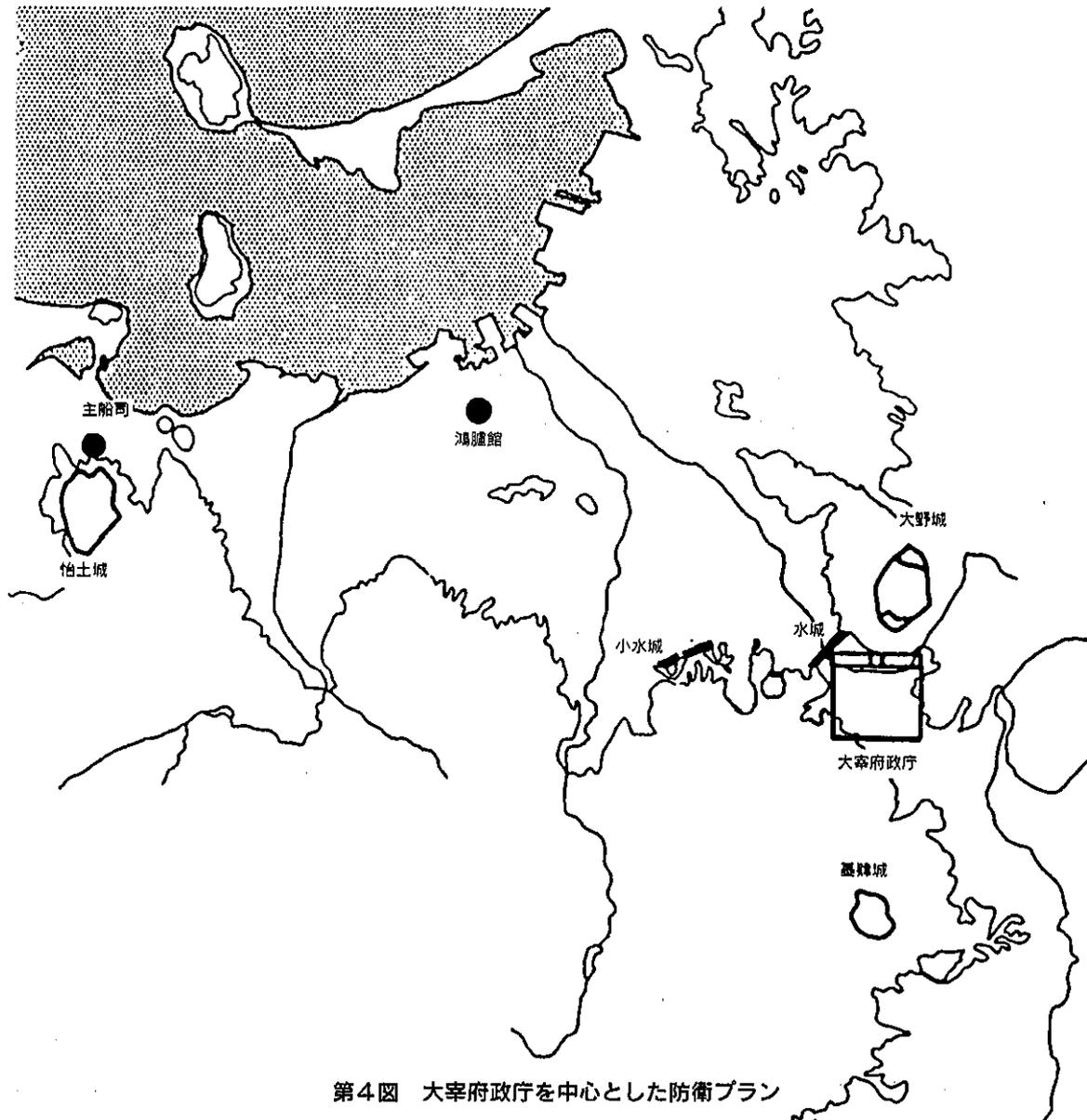


第3図 「白村江」後の東アジア情勢

2. 地理的環境

怡土城が築城された糸島地方は筑前国の北西部に位置する。古くは『魏志倭人伝』に記載された「伊都国」の故地でもある。当該地は律令時代になると、行政区として「嶋郡」・「怡土郡」に分割される。

怡土城が所在する「怡土郡」は現在の前原市、糸島郡二丈町と福岡市西端部を郡域とした。古代には「飽田・託社・大野・長野・雲須・良人・石田・海部」の8郷から成り（『倭名抄』）、「比菩・深江・佐尉」の各駅が設置された。「駅路」としては「深江駅家」（塚田南遺跡一帯）→武→牧→前原→浦志→「主船司」（福岡県福岡市西区周船寺）を經由して「額田駅」（福岡県福岡市西区野方）へと通じる海岸沿いのルートが想定されている。また、このルートの他に「日向峠越えルート」も想定されており、怡土城はその三角州に位置し「駅路」と「日向峠越えルート」を見渡すことができる。さらに、怡土城は「怡土郡衙」と「主船司」に隣接する位置に所在することも考えると、「駅路」・「日向峠越えルート」・「主船司」等を視野に入れた^(註1) 軍事的プランの下に築城されたことがわかる。



3. 築城の経過

『続日本紀』によると怡土城は天平勝宝8年6月(756)から神護景雲2年2月(768)まで約12年の歳月を要して完成したとされる。築城担当者は当初吉備真備であったものの中途から佐伯今毛人に交代し完成をみた。

この怡土城築城は急を要した工事であったようで、最初の築城担当者の吉備真備は「防人」までも動員してその作業にあたらせている。本来、防人は白村江の敗戦後、国防上の重要拠点に配置されており、城の一部の修理は例外として、築城などの作業には従事させてはいけない規定になっていた。ところが、当時の大宰大貳の吉備真備は大宰府の官人達の反対を押し切って中央政府にこの要求を認めさせ、実際に怡土城築城に従事させている。ほぼ同時期に東北地方で築城に城兵等が動員されていたのもその背景にあるのかもしれないが、吉備真備が怡土城築城に防人を動員することは明らかに違法行為であった。このように本来ならば動員してはならない防人までも動員して怡土城築城に従事させていることは、この工事がいかに急を要した工事であったことを物語る。

ところで、『続日本紀』によると吉備真備は「専当官」、佐伯今毛人は「専知官」となっている。

「専当官」は正式の官職名ではなく、吉備真備はあくまでも大宰府の官人の一人として怡土城築城の担当を命じられていたことを示していたと考えられる。一方、「専知官」とは正式の官職名と考えられ、佐伯今毛人は怡土城築城の為の官司機構の長官であったことが想定される。このことから、築城初頭から完成にいたるまで次第に大宰府の官司機構の一つとして怡土城築城のための官司機構が整備されていったことも同時に示唆していると考えられる。

4. 渤海国との関係と新羅征討計画

藤原仲麻呂政権下の天平宝字2年(758)に新羅征討計画が発議されるが、そこで重要になってくるのが渤海国との連携である。ここでは日本と渤海国との関係と新羅征討計画の推移についてふれることにする。渤海国は698年に高句麗の遺民が靺鞨諸族を支配下に組み込みながら建国した国家である。建国当初、唐の軍事的圧力を受け、新羅と同様、国際的に挟み撃ちにあわないために8世紀前半から日本に朝貢してくる。ところが、8世紀後半に入ると唐と渤海との関係は好転し、天平宝字6年(762)に唐からそれまでの「渤海郡王」にかえて「渤海国王」の称号を得ることになる^(註2)。このことにより渤海国は唐や新羅と事を構えることを回避して関係を改善する方向へと向かう。その結果、日本の期待した渤海との連携関係が得られず、日本が新羅征討計画を進める国際的条件は失われていった。また、藤原仲麻呂にとっては、天平宝字6年5月に、道鏡を寵幸する孝謙上天皇と、仲麻呂が擁立した淳仁天皇との関係が決定的に悪化したことにより、自らの政治権力の基盤に動揺が生じて、国内的条件も失っていた。こうして、藤原仲麻呂の対外政策としての新羅征討計画は、急速にしぼんでいったのである。

5. 吉備真備

「怡土城」築城の最初の専任者である吉備真備^(註3)は持統天皇9年(695)右衛士少尉を極官とする下級武官下道朝臣園勝の子として生まれ、宝龜6年(775)10月2日に薨じた。享年83歳であった(薨伝では81歳)。薨伝の記載から推測すると老衰であろう。真備の一族は吉備地方(現岡山県)の地方豪族の出身であった。ただし、真備本人は畿内で出生したと考えられている。極官は右大臣であった。真備の一生は5期に分けてみるができる。

第1期は誕生(695)から靈龜2年(716)。この22年間は学問に精進した。下級武官の子であ

りながら遣唐留学生として抜擢され、入唐留学を命ぜられる。

第2期は養老元年（717）から天平7年（735）までの留学期間である。真備23歳から41歳。ここではその学問が極めて多方面に及んでいる。彼のもたらした漢籍の数量・内容がそれを物語る。

第3期は天平7年（735）から天平勝宝元年（749）まで。真備41歳から55歳。官位の昇進は目覚しい限りであり、玄昉と共に橘諸兄政権のブレーンとして活躍する。真備の最初の栄達時代であった。

第4期は真備の大宰府時代。56歳にして筑前守、続いて肥前守に左遷される。翌天平勝宝3年（751）には2度目の遣唐使任命。帰路は難破して漂流するが帰国。帰国後、大宰大貳へと昇進し、「怡土城」築城の専任者となる。この間の10年間は主として軍事方面にその才能を発揮するが、政敵藤原仲麻呂の真備を京から遠ざけ大宰府から動けないようにする巧みな政略に屈する時期でもある。

第5期は参議・右大臣時代。70歳にして造東大寺長官に転じた真備は恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱に際してその軍学用兵の妙を実地に試みて大成功を取める。72歳で右大臣。まさに遅咲きの大家であった。

6. 築城秘話

（1）吉備真備と西海道出身防人

「怡土城」の築城を開始した3年後の天平宝字3年（759）3月、吉備真備は大宰府防衛の不安4ヶ条を中央政府に奏上する（『続日本紀』）。そのなかで第2条と第3条は「防人」に関するものであった。

第2条は天平宝字元年（757）8月27日の勅にもとづく「東国防人」の廃止による防衛上の不安を訴え、さらに「東国防人」の復活を望んでいる。第3条は天平宝字元年に廃止された「東国防人」のかわりに新しく差し遣わされた西海道（九州）出身の兵士で編成された「防人」を「怡土城」の築城に従事させたいという内容であった。特に、第3条は当時の防人の規定になかったために大宰府の官人達の反対を押し切ってまでもあえて奏上している。

そもそも「防人」は大化改新の詔にその記述を確認できるが、実際に制度化され充実していくのは天智3年（664）の白村江の敗戦後と考えられている。はじめは諸国から出されたようであるが、天平2年（730）をさかいに東国出身の兵に切替えている。その後、運営が困難になったため、次



第5図 吉備真備像

第に筑紫（九州）出身の兵に代えられるが、東国出身の兵に固執する傾向にあった。

この理由の一つとして、東国の地は早くから大和政権に掌握され、その軍事的・経済的基盤となっていた。それに対して筑紫（九州）の豪族は筑紫君磐井に代表されるように反公権力的エネルギーを強く温存する特徴があつて、東国の中央権力への従属度に比べると大きな差があつた。筑紫へ左遷された吉備真備も天平12年（740）に乱を起こした藤原広嗣を支持し、刑死後も彼のために「知識寺」^(註4)を建立する筑紫の豪族の反公権力的な特質を筑前守・肥前守のときに体験したのであろう。そのために吉備真備は西海道出身の兵士で編成された「防人」を最前線に配置しないであえて「怡土城」の築城に従事させ、その一方で「東国防人」の復活を熱望したと理解できる。

（2）吉備真備と藤原仲麻呂

吉備真備は持統天皇9年（695）、右衛士少尉を極官とする下級武官下道朝臣罔勝の子として生まれる。一方、藤原仲麻呂は慶雲3年（706）、藤原武智麻呂の子として生まれる。地方出身の真備とかたや中央で権力を掌握している藤原一族の仲麻呂。この生い立ちの対象的な2人は政治という舞台で鍋を削ることになる。

吉備真備は僧玄昉とともに橘諸兄政権のブレーンであつた。ところが橘諸兄政権が弱体化するとつぎに頭角をあらわしてくるのが、かつて中央政府を席卷していた藤原四子の一人の藤原武智麻呂の次男である仲麻呂であつた。仲麻呂はまず僧玄昉を造観世音寺長官として筑紫に左遷する。結果として天平18年（746）、僧玄昉は観世音寺の落成式の際、藤原広嗣の亡霊（支持者）に暗殺される。つぎに吉備真備も天平勝宝2年（750）に筑前守、さらには肥前守へと左遷する。仲麻呂は真備も僧玄昉と同じ運命にあわせようと考えたのであろう。しかし、真備はその危機をうまくかわす。さらに仲麻呂は真備を遠ざけるために天平勝宝3年（751）、遣唐副使として唐へ派遣する。真備は船路で漂流はするものの、帰国する。思惑がはずれた仲麻呂は天平勝宝6年（754）、真備を大宰大貳に昇格させ、さらに「怡土城」築城の専当官に任命する。これは真備の軍事方面の才能を活用しつつ、真備を大宰府に釘付けにする巧みな政略であつた。大宰府の10年間、真備は仲麻呂の巧みな政略に屈することになる。

ところがその後、藤原仲麻呂政権は弱体化し、天平宝字8年（764）、真備は造東大寺長官として帰京する。仲麻呂は同年、恵美押勝の乱（藤原仲麻呂の乱）を起こし、自滅するが、その背後で軍学用兵の妙を実地に試みて大成功を取めたのはかつて仲麻呂によって辛酸をなめさせられた真備であつた。

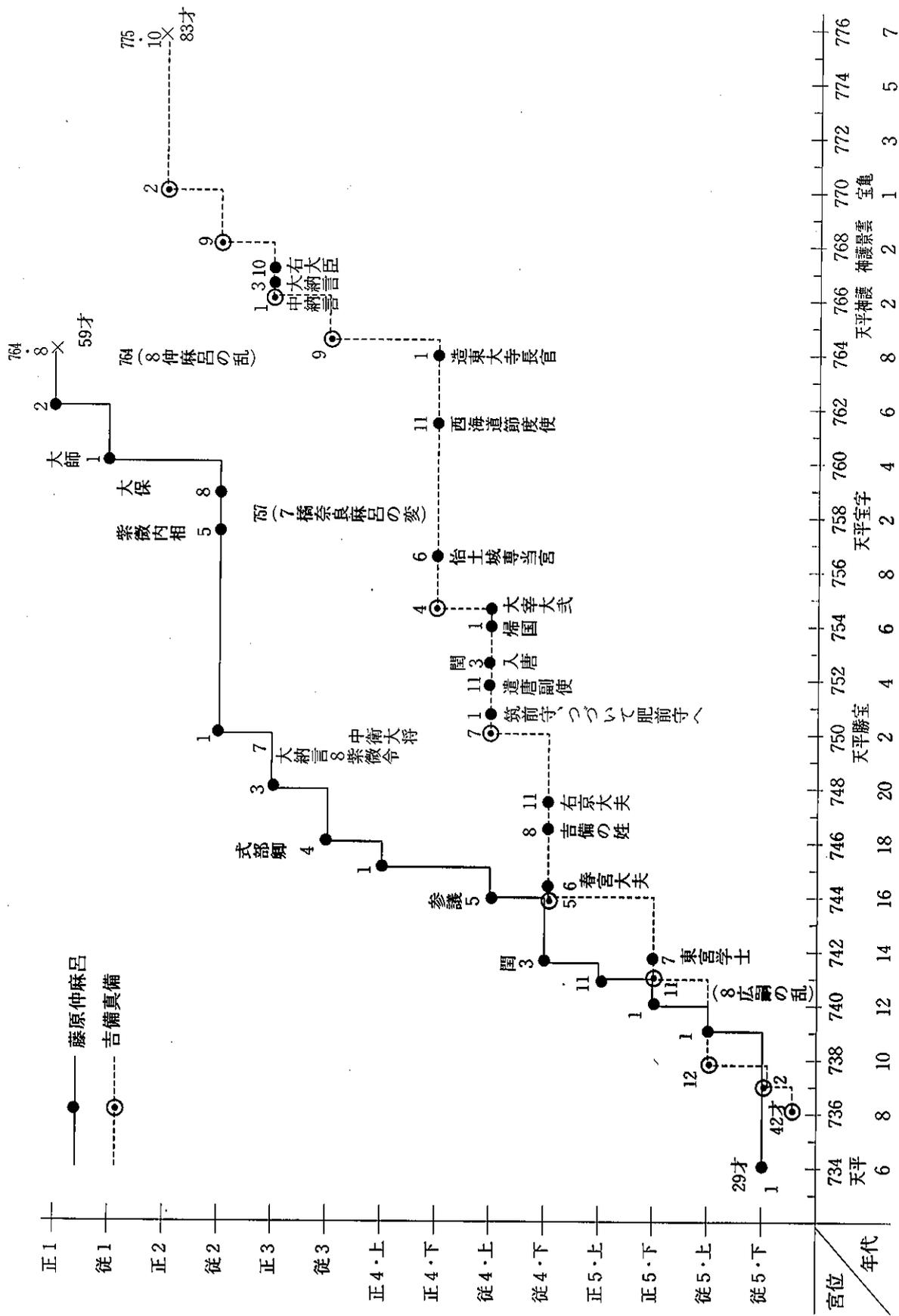
7. 築城の理由

怡土城の築城理由は果たしてどのようなところにあつたのであろうか。今日まで提示されている説は大きく2つに分類できる。

- ①. 安祿山の乱に備えて築城されたものであつたとする説
- ②. 新羅征討計画の一環として築城されたものであつたとする説

①の説の最大の拠り所は天平宝字2年（758）12月10日、遣渤海使小野朝臣田守によって安祿山の乱の報告をうけた中央政府が大宰府に対して下した勅である。この勅は安祿山が中原の支配に失敗することを想定し、その場合、兵を我国へ差し向ける可能性のありうることを指摘したものである。

しかし、この説の最大の弱点は小野朝臣田守の報告が怡土城築城の2年後であつたことである。



第6図 吉備真備と藤原仲麻呂

また、乱に最も近接して派遣されたのは天平勝宝4年（752）の遣唐使であり、その副使であった吉備真備は翌年の天平勝宝5年（753）12月に益久嶋に帰着し、大使の藤原清河は遭難して帰国できなかった。いずれにしても乱の勃発以前に唐を離れており、天平勝宝4年の遣唐使から乱の勃発についての情報を得ることは不可能であった。さらに、渤海使の来朝も乱の勃発（755）から天平勝宝8年（756）にかけては全くみられない。以上の事情を考慮すると、安祿山の乱が怡土城築城の原因となったとは考えにくい。

②の説の最大の拠り所は怡土城築城の開始期が日羅関係の緊張の度を増していた時期にあたっていたからである。また、天平勝宝5年正月に起こった唐の朝賀における日羅両国間の席次争いから、日羅関係がさらに悪化し、その結果、新羅征討計画が建議されその一環として怡土城築城となったと説明している。なかでも、当初の怡土城築城の責任者となる吉備真備が天平勝宝5年正月、唐において遣唐副使としてその席次争い事件に遭遇していることも考慮すると非常に可能性の大きい説といえる。ただし、この説もこれ以上の裏付ける確固たる資料が存在しないために今後の調査・研究に期するものが多い。

ところで、怡土城築城を担当した吉備真備と佐伯今毛人であるが、特筆すべきことに両者共に「肥前守」を経験しているのである。また、怡土城も肥前方面を強く意識して築城されている。これらのことも考慮に入れると、怡土城は日羅関係の悪化に伴い反政府的動向がみられる肥前地方^(註5)をも軍事的視野にいれて築城されたと理解することもできる。

註

1. 瓜生秀文 2001「神功皇后伝承覚書―神功皇后伝承で覆い隠された二つの史実」（『筑紫野市史』・資料編（上）考古資料）
2. 佐藤 信 2003「奈良時代の「大臣外交」と渤海」（『日本と渤海の古代史』・山川出版）
3. 宮田俊彦 1988『人物叢書 吉備真備』（吉川弘文館）
4. 長 洋一 1985「藤原広嗣の怨霊覚書」（『歴史評論』417）
5. 長 洋一 1986「天平宝字五年の肥前司」（『西南学院大学国際文化論集』1-6）



第7図 怡土城想定図

IV 調査報告

1. 第5望楼

(1) 調査概要

第5望楼の調査は、昭和53年及び昭和54年の2ヵ年、国指定史跡環境整備事業の一環の事業として、史跡整備資料作成を目的に実施したものである。発掘調査は第1年次には第5望楼周辺の地形測量と第5望楼の把握を行い、第2年次には第5望楼建物跡の補足調査と東側の平坦部を行った。

第5望楼は、鏡山 猛氏が過去に調査され、建物規模は2×3間の礎石建物であり、別名として、丸尾礎石群とも報告されている。

第5望楼東側平坦部は、鏡山氏調査時も注目されていたということである。

今回の報告では、第5望楼建物跡の調査区をI区、その東側をII区として記述するが、時期的には同時期のものである。

(2) 調査の記録

遺構

第5望楼及びその東側平坦部は、標高50mの丘陵上に立地している。丘陵は、高祖山から派生するもので、怡土城跡の城郭の北西端部側にあたる。第5望楼からの眺望は、西・北・南側によく、地形上の制約から東側は望むことはできない。

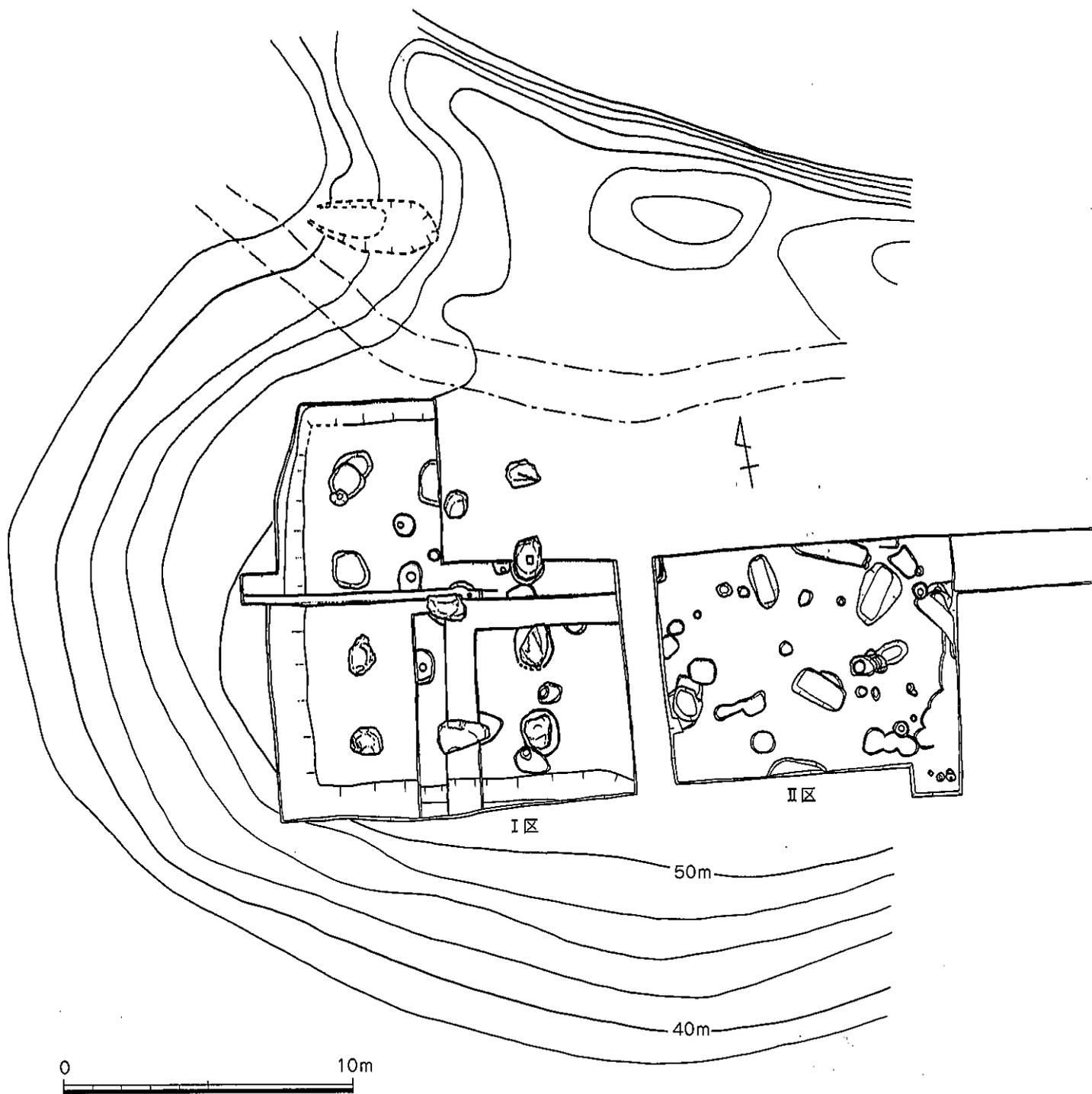
I区(第8～10図、図版3-a・b、4-a)

地形測量で確認できたことであるが、第5望楼の北側には、土塁状の高まりがある。これは、怡土城跡の土塁の延長になる遺構があり、その北側の下部は、急峻な斜面である。この急峻な斜面は、途中に、犬走りをもつ2段の斜面で、丘陵裾まで認められる。この急峻な斜面部は、未調査ではあるが、丘陵斜面を利用し、斜面を削出しなどの地行で整形されたものであり、土塁状の高まりは、第5望楼及びその東側平坦部の整地時残土により形成された土塁であると考えられる。しかしながら、未調査であるため、断定はできない。なお、鏡山氏の報告では記述されていなかったが、鏡山氏からの御教示により、この土塁状の地形のことは、調査当時から認識されてようである。

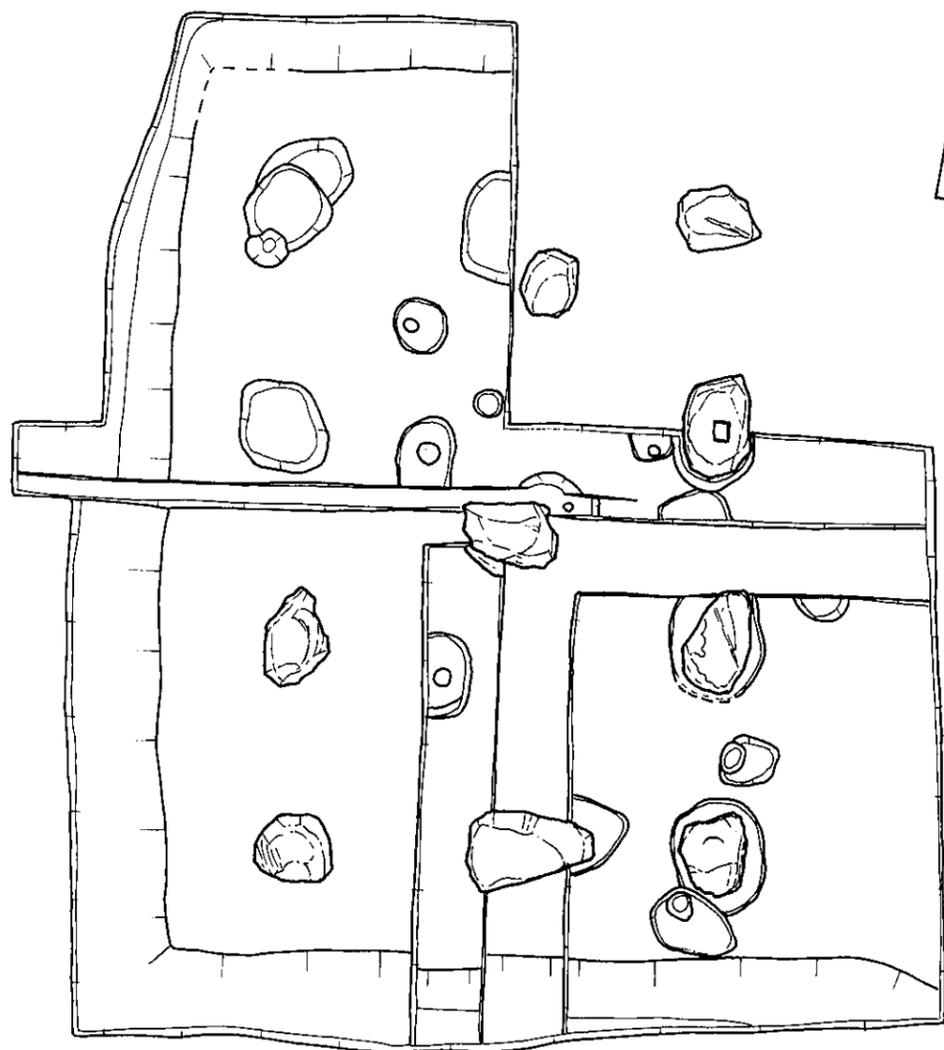
第5望楼の調査は建物規模の把握等を目的に実施したものである。

建物規模は2×3間の礎石建物で、柱間間隔は3mであることは既報^(註1)どおりであるが、建物基壇等は不明であった。調査により、基壇については削出しによる地山整形であり、基壇部上端部は10×12.6mで、その基底部は11.4×14mを測る。ただし、第5望楼の出土遺物のなかに磚が含まれることから、地山整形の後、磚で基壇部を構築した可能性がある。なお、基壇部斜面部には、10cm程度の大きさの河原石が認められたが、それで基壇の石組みをしたと判断するだけの出土品ではなかった。

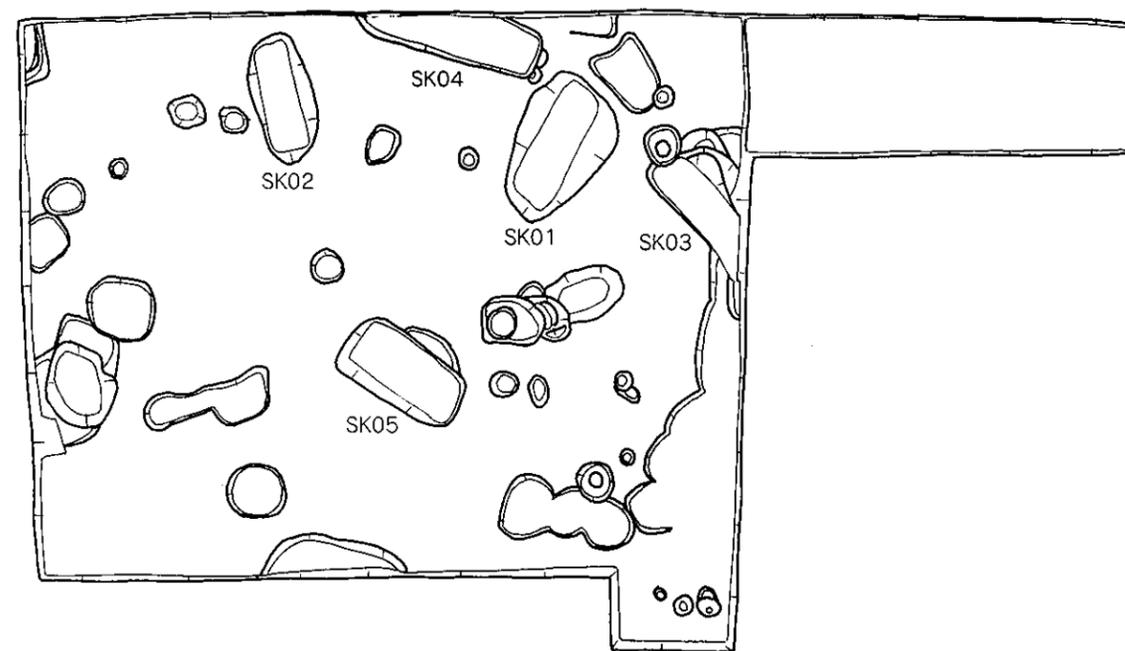
礎石は、鏡山氏調査時から9個が現存し、北側中央部の礎石1個は原位置を保っていないが、南東側に掘り出された状況を呈している。他の8個は原位置を保っている。礎石の調査対象は7個であり、石質は花崗岩質である。礎石の掘方は、礎石形状に併せて掘られ、一回り大きめの形状である。礎石掘方内、礎石の根石は手踝程度の小石が5～7個見られる程度であり、堅古な形状とはいえないものであった。棟行中央部における1個の礎石は、他の望楼では平坦であるが、当該礎石群の礎石の上面部については平坦ではなかったため、調査時から疑問であったが、澤村 仁氏から現地では柱の基底部を礎石上面部の形状に合わせれば問題はないという教示を得た。礎石列東側の北から



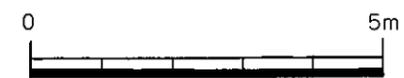
第8图 第5望楼地形图 (1/200)



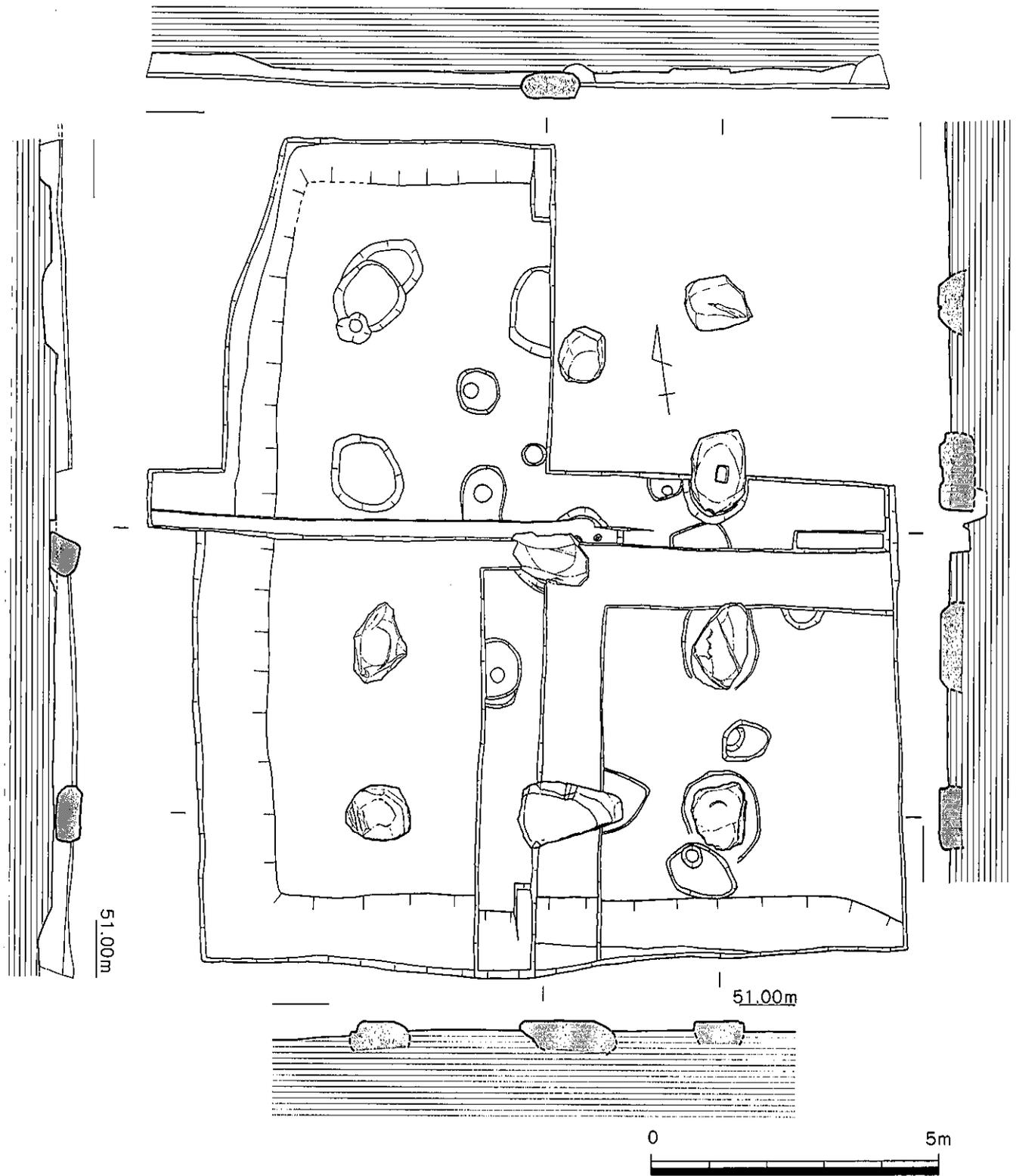
I区



II区



第9図 第5望楼遺構配置図 (1/100)



第10図 第5望楼I区遺構実測図 (1/100)

2個目の礎石上面には、20×25cmの長方形の凹部が掘り込まれている。礎石の上の柱を安定・固定させるために長方形の凹部を掘り込んだのであろうが、当該礎石群における他の礎石に同様の凹部が見られないことから、この礎石の長方形の凹部に他の礎石にはない特別な機能（扉の軸受け等）があったと考えることもできる。また、礎石列東側の南から1個目の礎石上面には、円弧上の削り込みがみられる。なんの意匠であったかは不明である。

2年次の調査では、地山整形の再確認のため、基壇部等にトレンチを設定し、掘下げた。基壇上面及びトレンチ内から柱穴を検出した。柱穴は第5望楼先行時（礎石設置以前）のものであることを確認した。このことから、第5望楼には2期に亘り建造物が構築されていたことがわかる。I期は掘立柱による建造物、II期は礎石建物による建造物が第5望楼に構築されていたと考えられる。

II区（第8・9図、図版4-b）

II区は、2年次の調査で、第5望楼の東側に平坦部があるため、第5望楼の関連遺構を検出を目的に調査したが、土壇5基、柱穴ピットが調査できた。なお、平坦部には、戦後に家屋が建っていたことや地形測量で確認できていた小溝がその家屋の雨落ち溝であることを地元の調査協力者・役員の方々から、事前に教示を得ていた。

調査は、トレンチを南北・東西2本に設定し、遺構検出状況の有無に従い、南西側に調査区を拡張した。調査面積は約95㎡である。遺構検出面の土壌は赤茶色粘質土である。

土壇

SK01（第11図） 調査区北側で検出した土壇で、2.1×1.4m、深さ0.8mの規模の隅丸長方形の土壇で、底部面は、ほぼ水平ではあるが、9cm程度の段をもち、断面はほぼ垂直である。埋土は、上層で灰茶色砂質土、下層でやや黄味をもつ灰茶色砂質土である。遺構内中位には瓦・礎石がほぼ水平にみられ、蓋状の形状であるが、土壇が埋葬遺構であるという確証は得られていない。瓦は怡土城特有のものである。

SK02（第12図） 調査区の北東側で検出した土壇で、1.9×8.5m、深さ0.9mの規模の非整形長方形の土壇で、底部面は、ほぼ水平である。断面は、短辺側では垂直であるが、長辺側では2段の斜目の形状を呈している。埋土は、SK01と同様で、上層で灰茶色砂質土、下層でやや黄味をもつ灰茶色砂質土である。遺構内についてもSK01と同様で、中位には瓦・礎石がほぼ水平にみられ、蓋状の形状であるが、土壇が埋葬遺構であるという確証は得られていない。瓦は怡土城特有のものである。

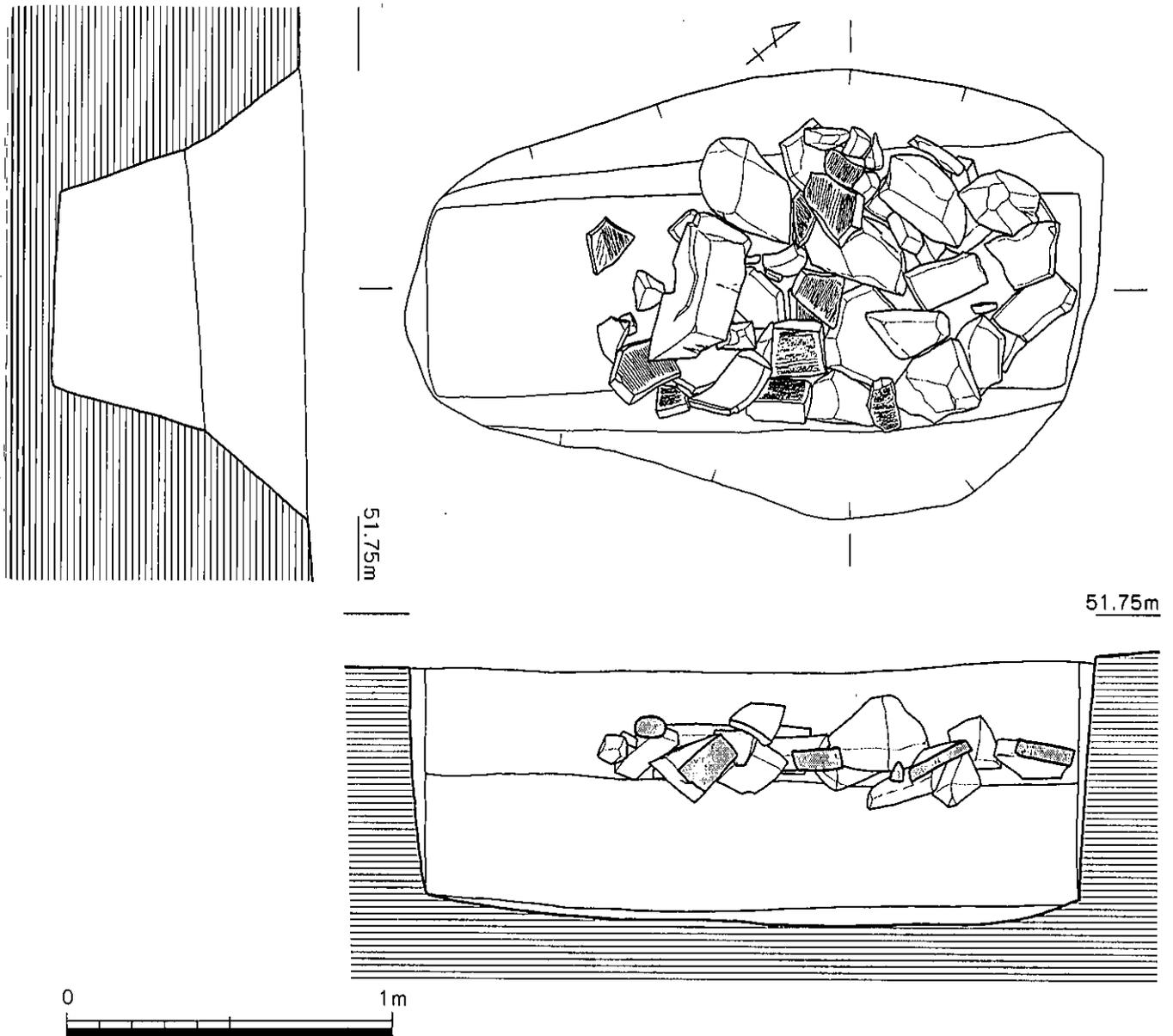
SK03（第9図） SK01の東側で検出した遺構で、一部、調査区外である。0.6×1.7m、深さ約0.45mの規模の隅丸長方形プランを呈した土壇で、底部面は、ほぼ水平である。断面は、ほぼ垂直である。

SK04（第9図） SK02の東側で検出した遺構で、他の遺構と重複関係にあるが、切合い前後関係は確認できなかった。一部、調査区外である。0.8×2.5m、深さ約0.75mの規模の隅丸長方形プランを呈した土壇で、底部面は、ほぼ水平である。断面は、ほぼ垂直である。

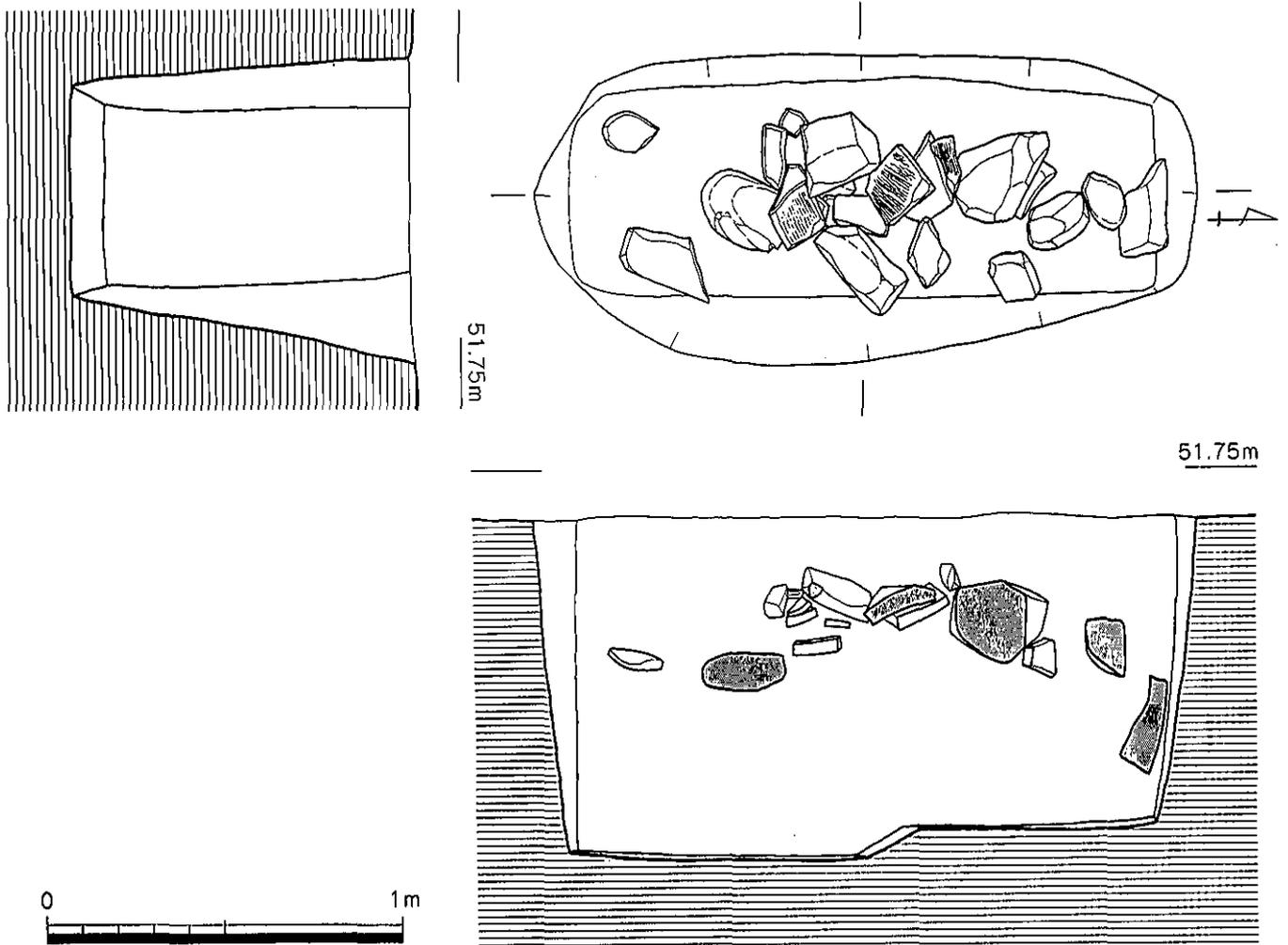
SK05（第9図） 調査区ほぼ中央で検出した遺構で、他の遺構と重複関係にあるが、切合い前後関係は確認できなかった。1×1.8m、深さ約0.95mの規模の長方形プランを呈した土壇で、底部面は、ほぼ水平である。断面は、ほぼ垂直である。

柱穴状ピット（第9図） 調査区内で、柱穴状ピット等を検出している。礎石設置以前のものである。

以上、5基の土壇は同様な形状を呈する遺構である。SK01・02内の埋土中に、瓦・硯石がほぼ水平に埋められていたが、瓦・硯石の下部に、板状の蓋があったと確認できる土層等を認めることができなかつたし、また、遺構埋土下層内で、動物遺体の検出していない。しかしながら、動物遺体を検出できておらず、また、蓋状土層の確認がないといえども、検出した土壇は、埋葬遺構であった可能性があることは捨てきれない状況である。(川村)



第11図 第5望楼Ⅱ区1号土壇実測図 (1/20)



第12図 第5望楼Ⅱ区2号土壙実測図 (1/20)

遺物 (第13～15図、図版5-a・b)

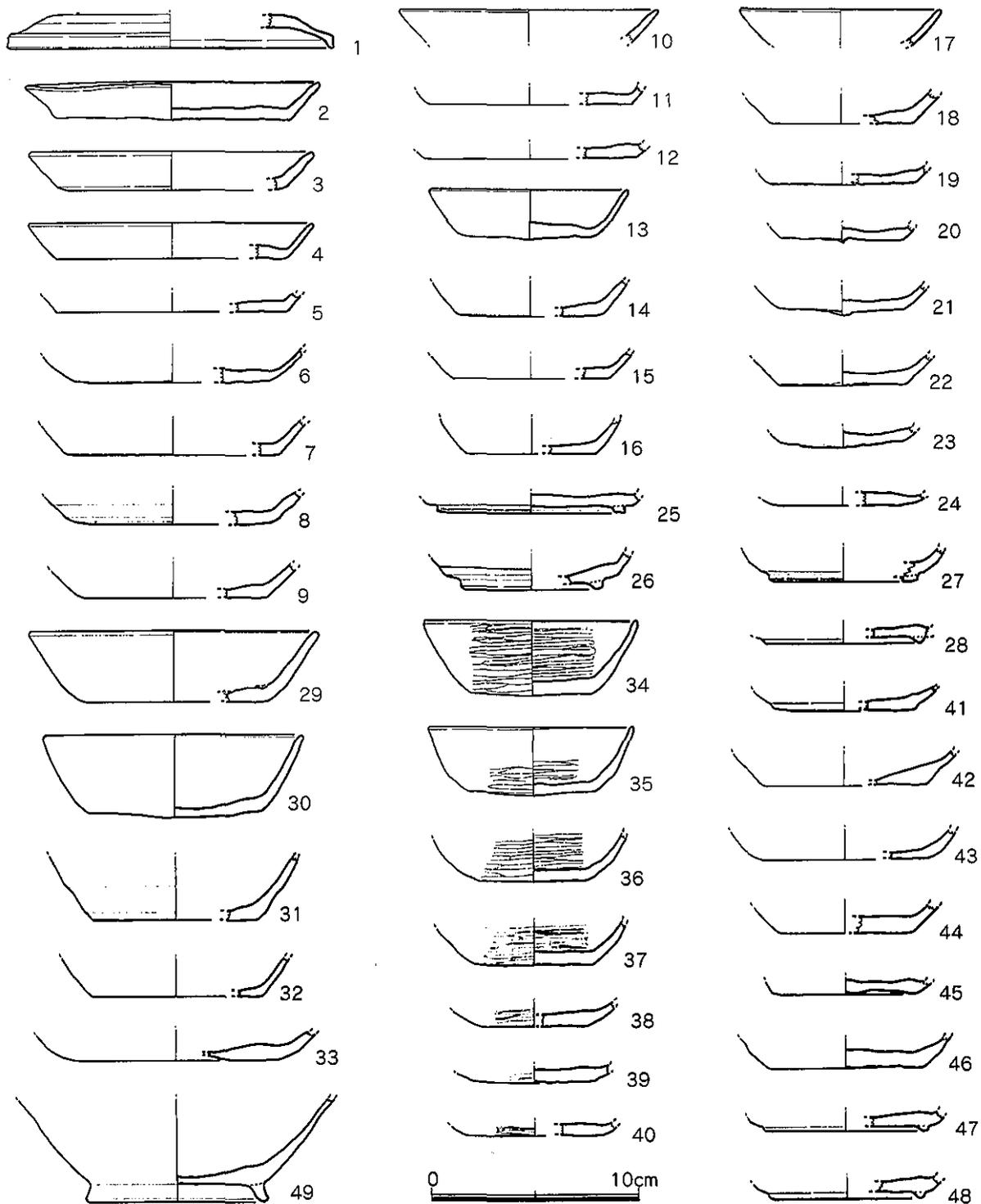
第5望楼の出土遺物は須恵器、土師器、瓦、埴など総量はパンケース約50箱に及ぶ。限られた紙数のためその多くは報告できず、また報告する出土遺物の詳細も表2の遺物観察表にゆずり、ここでは大まかな概要を述べるに留まりたい。

須恵器

1～28は須恵器で、1が蓋、2～12が皿、13～24が坏、25～28が埴として図示した。皿と坏の区別が曖昧なものも含んでおり、また一部焼成が悪く土師器の可能性を含むものもある。皿・坏はすべて回転ナデ成形後底部回転ヘラ切りで、埴は底部に高台をナデ付けたものである。

土師器

29～49は土師器で、29～32、34～46は坏、33は皿、47～49は埴として図示した。坏・皿は回転ナデ成形後底部回転ヘラ切りと思われるが、焼成不良や摩滅が著しいためヘラ切り痕が明瞭でないものもある。34～40は体部内外面に細かいヘラミガキを施す。埴は高台をナデ付けたものである。



第13図 第5望楼出土土器実測図 (1/3)

瓦

50・51は平瓦で一枚作りによって成形される。凹面には布目痕を残し、凸面には縄目タタキを施す。端部はヘラ削りによって面取りされる。破片のため長さ、幅は不明だが、厚さは50で3.1～3.4cm、51で2.4～2.6cmと薄手のつくりである。

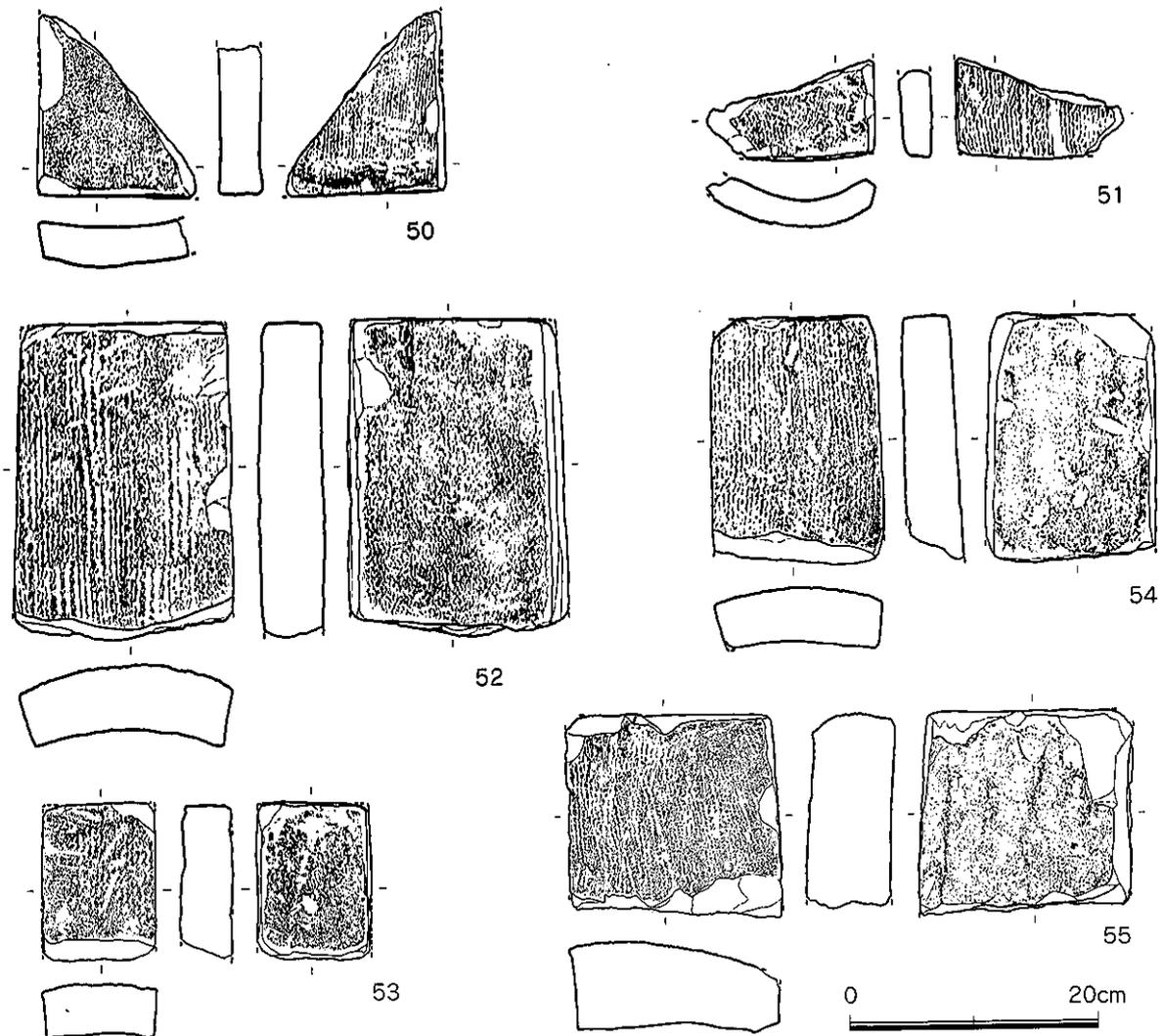
52～55は熨斗瓦でいずれも一枚作りで成形された平瓦を半裁したものと思われ、53は形状よりさらに半裁したものと思われる。端部はヘラ削りによって面取りされるが、52・54は半裁の際に

生じた破面を残す。凹面には布目痕を残し、52・53はナデを施す。凸面には細目タタキを施す。幅は52で18.0cm、53で9.5cm、54で14.0cm、55で17.5cmを測る。厚さは52～54はそれぞれ4.8～5.5cm、4.0～4.3cm、4.2～4.6cmとほぼ整っているが、55は5.4～6.9cmと厚みをもつ。

埴

56・57は埴で直方体を呈す。無文で蓮華文などの装飾文様はない。56は完形で、57は割口を石膏で覆われ完形に復元されている。56は長さ32.9cm、幅19.9cm、厚さ8.1cm、57は長さ33.3cm、幅21.1cm、厚さ8.7cmとほぼ同大である。おそらく箱状の範型で成形されていると思われ、57は表面に細目タタキを残すが、56のすべての面を含めた他の面はナデによって整えられている。大宰府政庁跡での使用例から建物の基壇などに使用されたと推測できる。

以上が出土遺物の概要であるが、須恵器、土師器は底部ヘラ切り後未調整のものが多く8世紀後半～9世紀の特徴を示している。^(註2)器形からもそれを矛盾しない。また34～40の土師器坏にみられる体部内外面のヘラミガキは豊前・筑前に多く見られる手法で8世紀後半～末に比定される。また特筆すべきことはすべてが皿・坏・碗の供膳具であり、貯蔵具や煮炊具はまったく含まれていない点にある。また多量の平瓦・熨斗瓦に加え埴の出土もあり、それらを用いた瓦葺建物が存在したこ

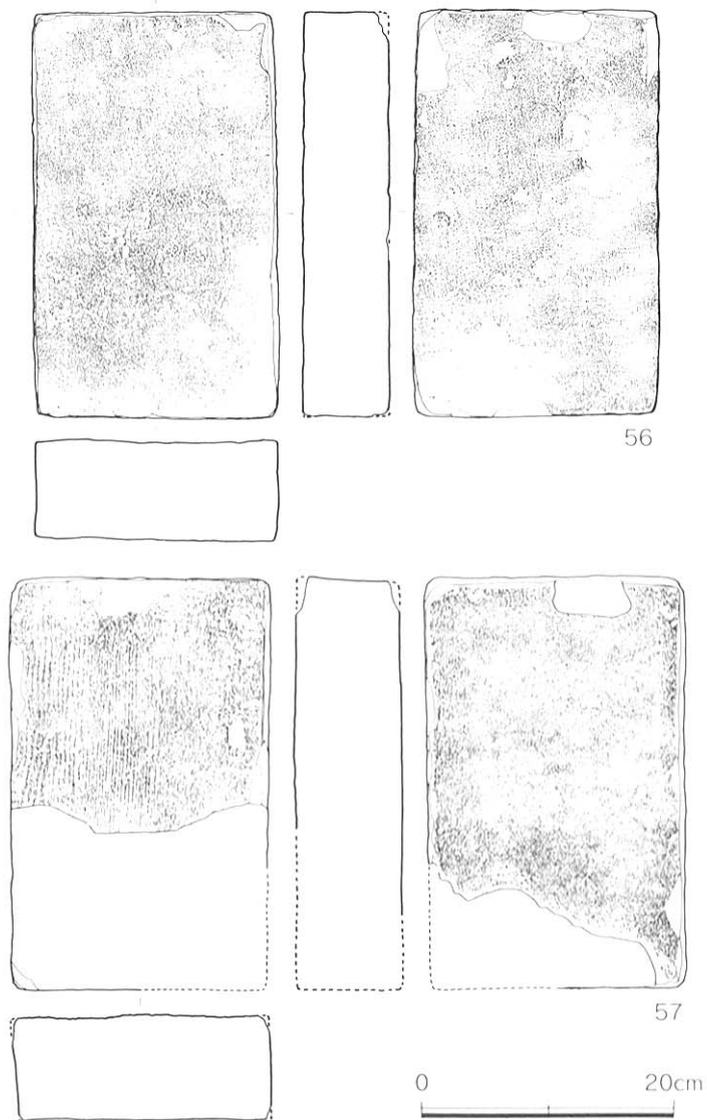


第14図 第5望楼出土瓦実測図 (1/6)

とは揺るぎ難い事実であろう。(山口)

註

1. 鏡山 猛1937「怡土城跡の調査」『日本古文化研究所報告 第六』
2. 土器の年代観は以下の文献を参考にした。
山本信夫1992「北部九州の7～9世紀中頃の土器」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東—』(古代の土器研究会第1回シンポジウム)



第15図 第5望楼出土埴実測図 (1/6)



第16図 (参考) 大宰府出土埴

2. 第4望楼

(1) 調査概要

第4望楼の調査は、昭和53年及び昭和54年の2ヵ年、国指定史跡環境整備事業の一環の事業として、史跡整備資料作成を目的に実施したものである。発掘調査は第1年次には第4望楼周辺の地形測量を行い、第2年次には第4望楼の調査を行った。

第4望楼は、建物規模は2×3間の礎石建物であり、別名として、古城礎石群とも鏡山氏より報告されている。

(2) 調査の記録

遺構 (第17～19図、図版6-a)

第4望楼は、標高100mの丘陵上に立地している。丘陵は、高祖山から派生するもので、怡土城跡の城郭の北端部にあたる。第4望楼からの眺望は非常によい状況である。

丘陵自体は10m弱の痩せ尾根であり、表土の下層は即、地山で花崗岩質の岩石である。

鏡山氏調査時点から、礎石1個が現存していたと報告されていた。しかしながら、第4望楼の調査では、礎石と考えられていた石は、高祖山を形成している花崗岩質の岩石の岩盤であることが判明した。また、発掘調査の結果、2×3間の礎石建物の礎石掘方等も検出できなかったが、怡土城跡特有の瓦は出土したため、何らかの怡土城に関する施設があったことは疑う余地はないものである。

地山は、花崗岩質の岩石であるため、非常に、遺構検出には困難を極めたが、曇天の頃に、岩石のメの方向に帚等で精査することで、遺構の輪郭を把握することができた。遺構内の埋土は、すべてやや粘質がある花崗岩質砂質土である。

検出した遺構は、溝1条、柱穴状ピット等である。

溝

SD01 (第18図) 調査区東南隅で検出したもので、溝断面は、底部ではU字形で、斜めに立ちあがっていた。溝からは、土師器・坏が出土している。

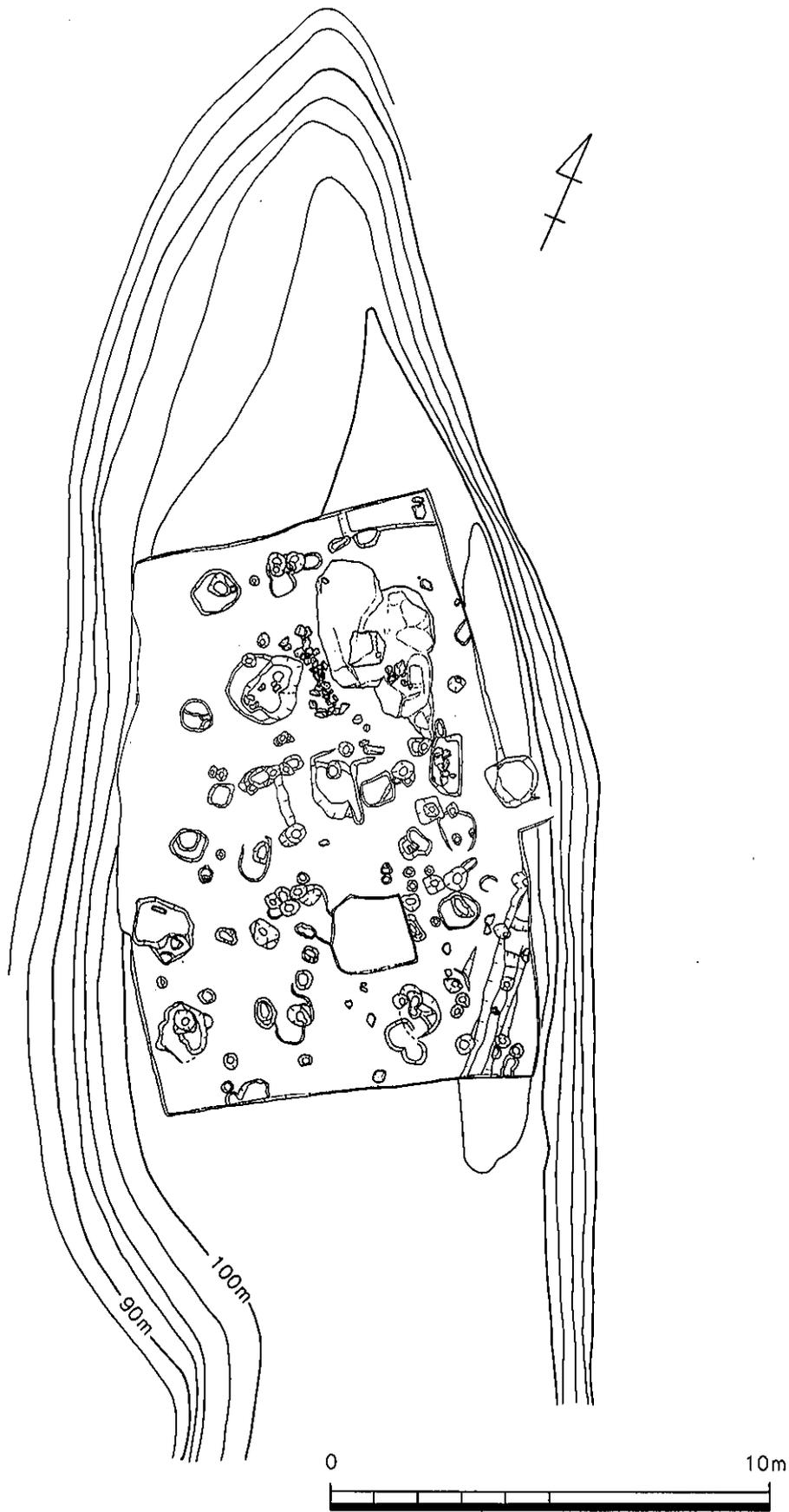
柱穴状ピット (第18図) 礎石建物の礎石掘方の残存部検出に努めるため、礎石の根石と想定できる礎石などはできるだけ原位置の残しながら調査を進め、礎石を有する遺構をもとに、建物を復原しようとしたが、その存在を確証できるものは発見することができなかった。また、鏡山氏報告にみる掘り出された礎石状のものは地山の花崗岩質岩石が露呈したものであり、礎石であると認定できるものではなかった。しかし、前述したとおり、怡土城の瓦は出土するため、何らかの施設があったと想定できる。

また、溝その他の遺構からは、中世以降の遺物が出土したため、周辺の中世山城関係遺構の調査も気になったが、調査目的からはずれるものになるため、第4望楼周辺の調査は断念した。

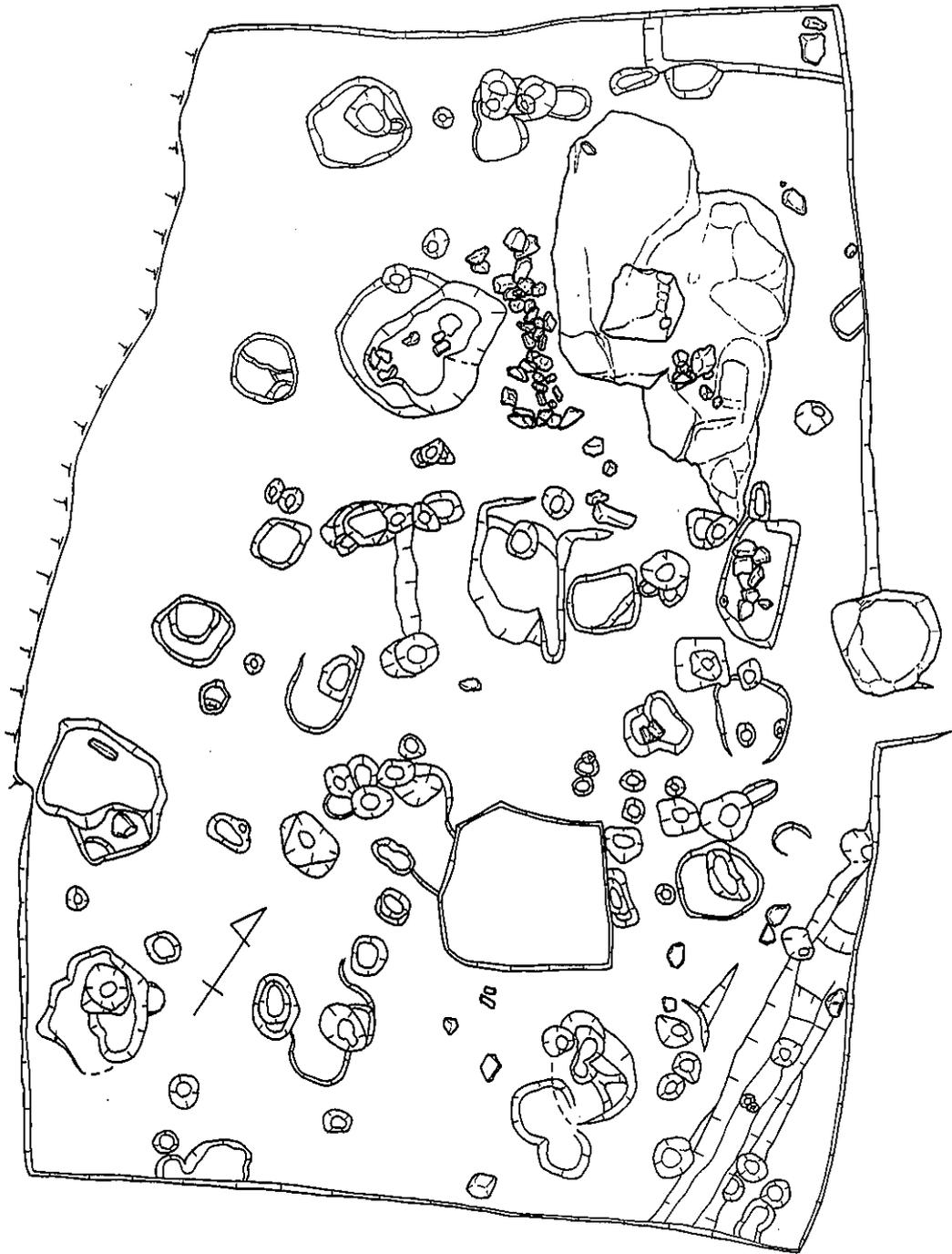
なお、中西 義昌氏が筑前高来寺城の縄張図を製作されている(第19図)ので、詳細はその報告に委ねることとする。(川村)

高来寺城 (第19図)

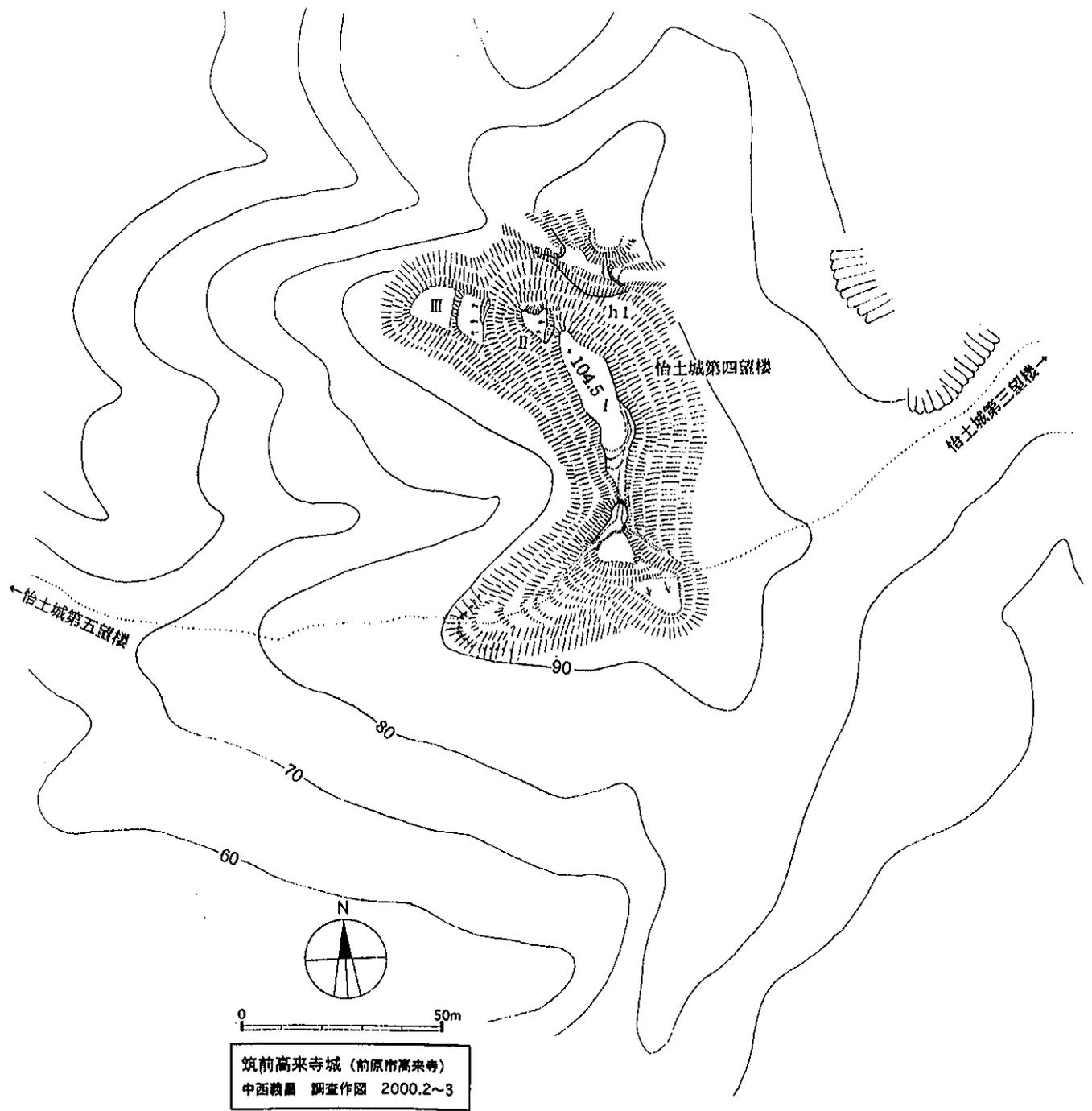
高来寺の東方にある山頂部に掘切が確認される。『筑前国続風土記拾遺』にも「古城と云」と紹介されている。この地点は古代怡土城の第4望楼にあたるが、発掘調査では15～16世紀頃の遺物が確認されている。中世に城郭として使用されたことを窺わせる。近接して高来寺の跡が伝わる。地名をとって、高来寺城(仮称)とする。



第17図 第4望楼地形図 (1/150)



第18図 第4望楼遺構図 (1/75)



第19図 筑前高来寺城縄張図 (1/1,500)

高来寺城の主郭Ⅰは第4望楼を用いた箇所であり、表面の削平は良い。主郭Ⅰの北西には曲輪Ⅱ、Ⅲが連なり北西部への備えとなっている。そして主郭Ⅰの北側に対しては掘切h1により強力に遮断されている。これに対して、南側については急勾配のためか、ほとんどが手が加えられていない。

このように、高来寺城は北面からの侵入に対して強く意識した縄張りを持つ城郭である。しかしながら構造的には単郭構造である。築城主体は不明であるが、高来寺集落の土壌層か、或いは原田氏の番城^(註1)と考えられる。

なお、中西氏の縄張図を基に踏査を実施したところ、高来寺城の西側の谷部において花崗岩質岩石が露呈している場所を確認した。当該場所は第4望楼の西側真下に位置し、周辺一帯には礎石程の大きさの石材が散乱している。この石材群は自然崩落ではなく人の手が加えられていると考えられることから、当該場所はかつて石切り場であり、ここで石材を切り出して礎石に加工し怡土城の各礎石群に運んだのかもしれない。また、高来寺城の西側の谷部においては石垣で囲まれたテラス群及び土塁等も確認している。未調査のため遺構群の構築された時期は不明であるが、高来寺城に関連する遺構もしくは地名の由来となった高来寺に関連する遺構とも考えられる。今後の調査・研究に期するところである。(瓜生)

遺物 (第20図、図版6-b、7-a・b)

先述のように第4望楼は戦国時代に高来寺城が築かれたため、出土遺物は古代の土器、瓦などに加え、中世の糸切り土師皿、貿易陶磁器など多岐にわたる。総量はパンケース約15箱分に及ぶが、細片も多く図化に耐え得る遺物のみを抽出した。紙数の都合上その詳細は表3の遺物観察表にゆずり、ここでは大まかな特徴を概述する。

土師器・陶磁器

1~34は土師器の皿または坏として図示したが、底部の断片資料から反転復元したものが多く、皿、坏の判別が明確でないものも多い。また底部成形が1~14は回転ヘラ切り、15~34は回転糸切りによるものと判断したが、多くは摩滅のため不明瞭で今後再検討が必要なることを予め断っておきたい。特に前者の中に後者を多く含んでいる可能性がある。

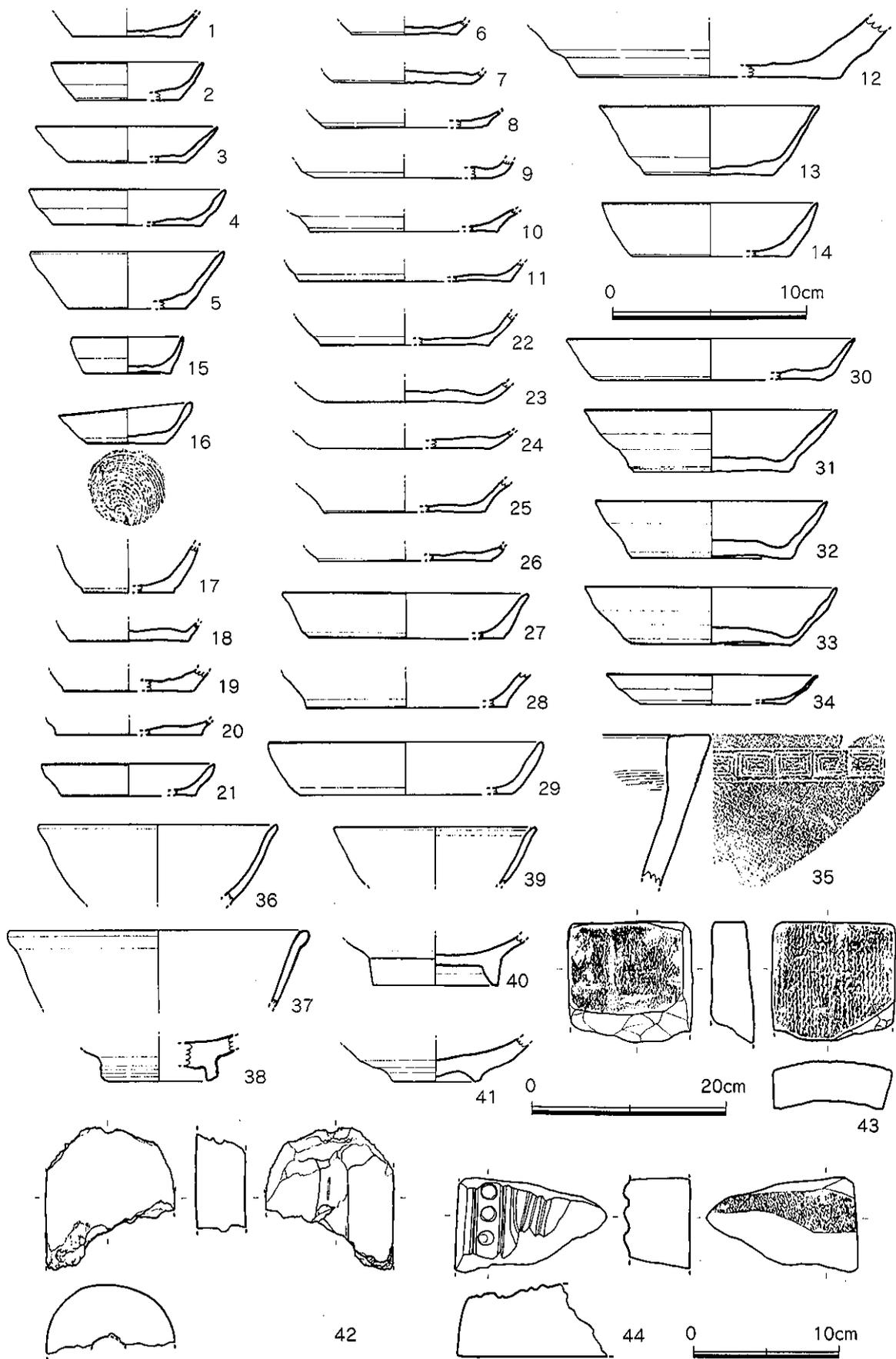
35は土師質土器火鉢で口縁部は肥厚する。内面の一部にヨコハケを施し、外面は雷文をヘラ描きする。平面形は方形になると思われる。36~38は青磁碗として図示した。36・37の口縁部は外反し、端部は丸みを帯びる。龍泉窯系青磁と思われ、上田秀夫氏の分類案でD-II類に該当する^(註2)。38は底部片で見込みは釉を掻き取り露胎となる。39・40は白磁で39は皿、40は碗として図示した^(註3)。39はいわゆる口禿げのもので、施釉後口縁端部の釉を掻きとる。太宰府分類皿IX類に該当する。40の高台は削り出しによるもので角張る。外面は露胎となる。41は施釉陶器の皿で唐津系のものと思われる。内面は施釉し、残存部位で2個の目跡が残る。外面は露胎となる。

製鉄関係遺物

42は轆羽口で形状は円筒状を呈す。断片資料のため長さは不明だが、幅(直径)8.8cmを測る。おそらく棒状工具に粘土を巻き付け成形し、棒状工具を引き抜き円筒状に仕上げるものと思われる。胎土は粗い。表面には鉄分と思われる溶解物が付着し、割れ口にも広く認められるため使用時に破碎したものと思われる。

瓦

43は熨斗瓦で一枚作りにより成形した平瓦を半裁したものと思われる。端部はヘラ削りにより



第20図 第4望楼出土遺物実測図 (1~41は1/3、42・44は1/4、43は1/6)

面取りされる。凹面には布目痕を残し、凸面は縄目タタキを施す。断片資料のため長さは明確でないが、幅は13.0cm、厚さは4.6cmを測る。

44は鬼瓦で外縁部から歯牙の破片である。いわゆる都府楼式（大宰府式）鬼瓦^(註4)と思われるが、細片のためどの型式に該当するか判断しにくい。ただ外縁の珠文は小さく間隔は密で、歯牙と外縁の珠文が接し、口端の巻鬚の表現が無い^(註5)ため『大宰府政庁跡』で新設定されたⅢ式Bに該当すると思われる。この型式は現在まで大宰府政庁跡で1点と鴻臚館跡でそれと思しき1点が確認されている。

以上が第4望楼の出土遺物であるが、冒頭で述べたように大まかに怡土城が機能した奈良時代と高来寺城が築かれた戦国時代の2時期の遺物に分けられる。怡土城跡に伴う遺物は底部ヘラ切りの土師器、瓦である。土師器に関しては先述のように摩滅のため判別がつかないものが多い。熨斗瓦は他の調査地点で見られるものと同様のもので、今回は報告を割愛したが平瓦も多く出土している。また第4望楼の出土遺物で特筆すべきものは大宰府式鬼瓦である。細片のため判然としないが、類例が少ないⅢ式Bの可能性があり、その帰属時期は最新の研究成果では8世紀代とされる^(註6)。よって第4望楼にそれらを用いた瓦葺建物があったことは想像に難くない。なお他の地点で見られる須恵器、埴の出土は無く、土師器も甕などの器種はみられない。一方、高来寺城跡に伴う遺物は底部系切りの土師器、土師質土器、陶磁器である。土師器の特徴は高祖城跡（1586年廃城）の土師器に近似するものを含み、概ね高来寺城が機能した時期を矛盾しないと思われるが、36・37の青磁は15世紀、38の白磁は13世紀半ば～14世紀前半に比定され戦国時代を大きくさかのぼる。その意味について言及する力量は持ち合わせていないが、土師器を含めて今後出土遺物を再検討する必要があり、高来寺城の築城を含めた中世における怡土城跡の再利用を検討する必要がある。なお鞆羽口は後述の「V-3-(1) 大門地区土塁崩壊部採集資料」でも報告するように、同様の形状のものが大門地区の土塁崩壊土中より多く採集されている。その帰属時期は明らかでないが、古代の糸島地域で製鉄が盛んな状況を考えると、怡土城に伴うものの可能性^(註7)がある。（山口）

註

1. 中西義昌2001『歴史史料としての戦国城郭—北部九州における城郭遺構と地域権力—』
2. 上田秀夫1982「14～16世紀の白磁椀の分類」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
3. 太宰府市教育委員会1999『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編—』（太宰府市の文化財第49集）
4. 小田富士雄1957・1958「大宰府系古瓦の展開」『九州考古学』1～6・13（のち小田1977『九州考古学研究 歴史時代篇』学生社に所収）
5. 九州歴史資料館2002『大宰府政庁跡』
6. 註4と同じ。
7. 八熊遺跡（志摩町）、元岡・桑原遺跡群（福岡市西区）、大原A遺跡（同）などで大規模な製鉄遺構、大量の製鉄関連遺物が検出されている。

3. 懸庄礎石群

(1) 調査概要

懸庄礎石群の調査は、昭和55年度に、国指定史跡環境整備事業の一環の事業として、史跡整備資料作成を目的に実施したものである。

懸庄礎石群の立地は、怡土城跡の他の建物跡（第1～5望楼、一の坂礎石群）と比較して、大きな相違点がある。懸庄礎石群は、怡土城跡の土塁内側の低地部に立地しているため、その眺望はどちらかといえば西側のみである。その一方、第1～5望楼は、丘陵部に立地しているため、城郭外の眺望は三方・四方に眺望がよくきいている。

(2) 調査の記録

遺構（第21～22、25図、図版8-a・b）

懸庄礎石群は、怡土城跡土塁の内側の土段（標高43.6m）上に立地している。土段上は、完全に土塁の内部であり、土塁と土段との間には、明らかに怡土城築城の際に、何らかの空間を設けていた様子を窺える。土段は、鏡山氏調査当時から、その東側は畑地により削平されていた。発掘調査時では、五角形状を呈し、東側の畑地と土段との間は、排水目的の溝が掘られ、西側の辺は約13mの長さであった。この土段は、礎石建物の建設を意識して、構築されたものであろう。

懸庄礎石群の礎石は、鏡山氏調査当時から、5個確認されており、他の建物跡と同様に2×3間と報告されている。

調査区は、地権者との関係で、やや制限されたが、遺構の把握には問題はなかったと考えている。鏡山氏の報告どおり、懸庄礎石群の棟行方向は東西で、柱間間隔3mの2×3間の礎石建物跡である。礎石列西側の南1・2個目の礎石は、原位置をやや動き、傾いていた。礎石の石質はすべて花崗岩質であり、特段の加工は施されていない。ただ、棟行部の南側に、礎石の大きさほどないが、礎石状の置石を検出している。このことは、棟軸上にあるため、2間の礎石列の外側に、同様な置石が存在するか否かは、ボーリング棒で確認したが、それに対応する置石はなかったようである。また、この土段を削平して、開墾しようとしたのか、土段全体も削平され、礎石掘方自体も検出できていない箇所もある状況である。

建物基壇は西側ではほぼ確認できた。北側・南側では一部確認できた。基壇は、第5望楼と同様に削り出し基壇であり、基壇斜面部には河原石等を検出したが、石積み基壇と断定できる量ではないものであった。

出土遺物としては、瓦などが出土している。（川村）

遺物（第23・24図、図版9）

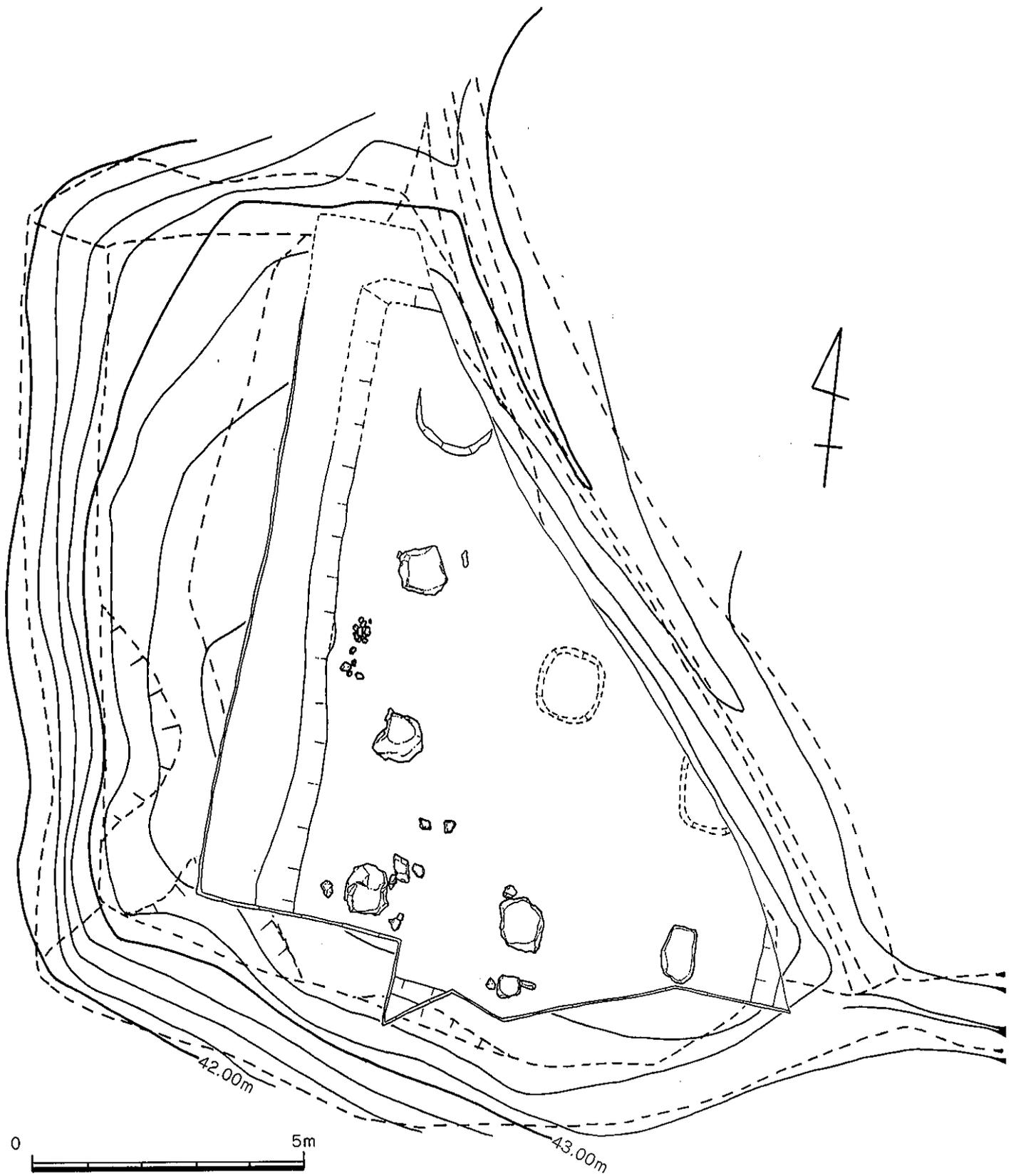
懸庄礎石群の出土遺物は土師器、須恵器、瓦などで総量はパンケース約15箱に及ぶ。そのうちの殆どが平瓦を中心とした瓦である。限られた紙数のためその多くは報告できず、また報告した出土遺物の詳細も表4の遺物観察表にゆずり、ここでは大まかな特徴について述べる。

土器

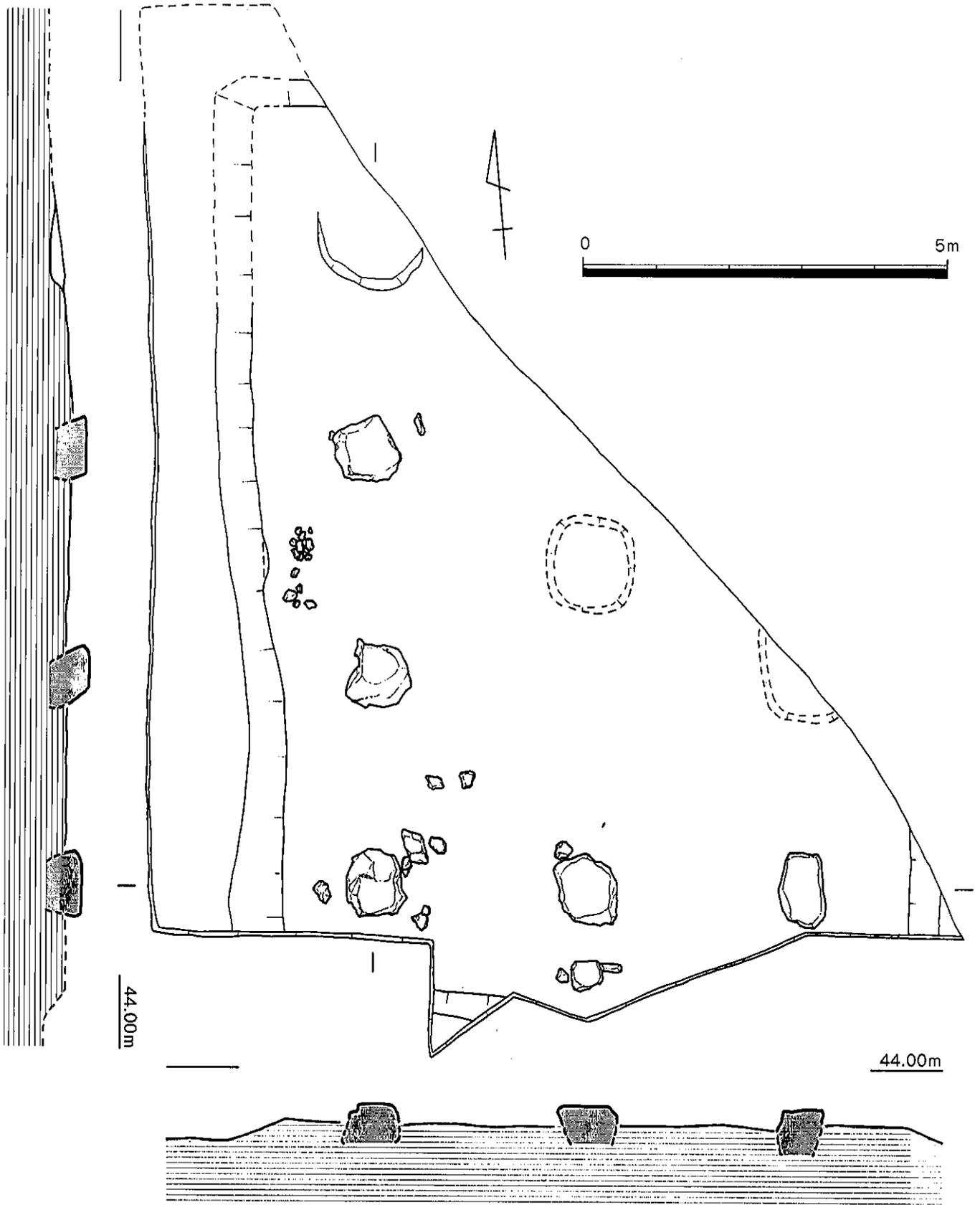
1は須恵器壺と思われるが壺類の底部の可能性もある。還元が不十分なため橙色系を呈す。2は土師器杯の底部片である。

瓦

3～5は平瓦で一枚作りにより成形される。凹面には布目痕を残し、3・4はナデ、5はタテハ



第21圖 懸庄礎石群地形圖 (1/100)



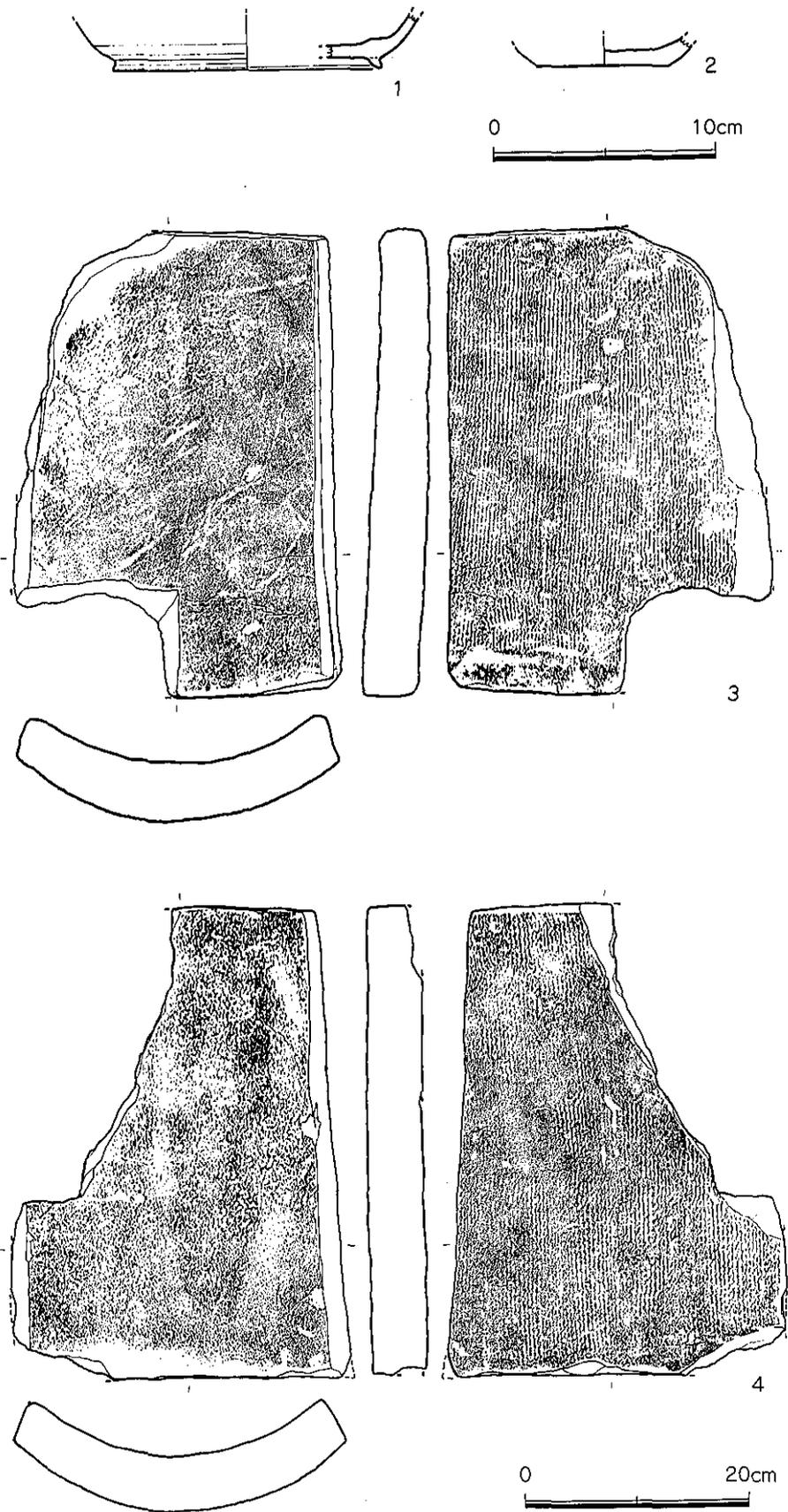
第22図 懸庄礎石群遺構実測図 (1/75)

ケを施す。凸面には縄目タタキを施す。端部はヘラ削りによって面取りされる。長さは3で42.6cm、4で43.0cmを測る。厚さは3・5で4.1~5.5cmと厚いが、5は2.8~3.2cmと薄い。

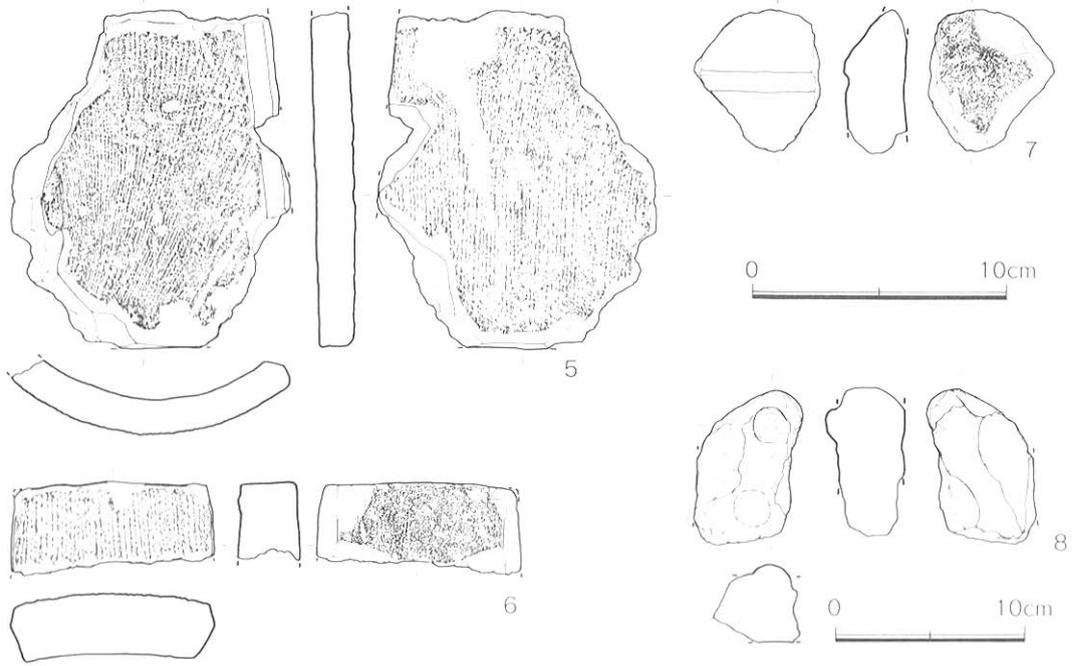
6は坂斗瓦で一枚作りにより成形された平瓦を半裁したものと思われる。端部はヘラ削りによって面取りされる。幅は16.2cm、厚さは4.6~5.0cmである。凹面はナデで布目痕は明瞭でない。凸面は縄目タタキを施す。

7は不明瓦で凹面、凸面が明瞭でない。ここでは縄目タタキが施されている面を凸面として報告する。凹面はナデ、凸面は縄目タタキ後凹線状の強いナデを施す。平瓦の可能性もある。

8は鬼瓦で外縁部の破片である。欠損が著しいが、



第23図 懸庄礎石群出土土器・瓦実測図 (1・2は1/3、3・4は1/6)



第24図 懸庄礎石群出土瓦実測図 (8は1/4、5~7は1/6)

残長8.3cm、残幅5.8cm、厚さ3.5~4.2cmを測る。2個の珠文が確認できるが、下に図示した1個は剥離する。いわゆる大宰府式鬼瓦と思われる。

以上が懸庄礎石群の出土遺物の概要であるが、最も注目されるのは鬼瓦の出土であり、また平瓦や燧斗瓦が多く検出されたことは、懸庄礎石群にはそれらを使用する瓦葺建物が存在したという傍証となる。対して土器の出土量は非常に少なく図化できたのはわずか2点に留まった。いずれも小片のため細かい時期の比定が困難だが、大まかに8世紀頃の所産と考えることができよう。(山口)



第25図 懸庄礎石群 (東より)

4. 高来寺遺跡（高来寺60-1）

（1）調査概要

平成9年4月1日に個人住宅建設に先立ち、文化財保護法の規定に基づく埋蔵文化財の発掘調査届が前原市教育委員会・文化課に提出された。それを受けて、前原市教育委員会・文化課は申請地（高来寺60-1）に確認調査を実施したところ、怡土城に関する遺構の一部を確認した。また、申請地は国指定史跡地ではないものの、怡土城の土塁の一部とその城外側の隣接地であることから申請者と協議し、その結果、国・県の補助を受けて発掘調査を実施することになった。調査期間は平成10年1月19日から同年2月13日までの25日間であり、調査面積は約150㎡である。

（2）調査の記録

遺構（第26～28図、図版10-a・b）

調査地点（高来寺60-1）は怡土城土塁（未指定地）の一部とその城外側の隣接地である。土塁部分には2ヶ所、その城外側の隣接地には1ヶ所の調査区を設定した。

土塁部分の2ヶ所の調査区はいずれも5m×3mの長方形を呈する。土層断面の観察の結果、B・C調査区はいずれも後世の攪乱土及び土塁の崩壊土による堆積状況が確認され、掘削した範囲では土塁本体は検出できなかった。ただし、B調査区の一部において、黄灰褐色粘土層が城外側に緩やかに傾斜しながらほぼ水平に堆積しており、その直上には明灰褐色土層、さらにその上部には淡灰茶褐色粘土層が版築状に堆積していることを確認できることから、この部分に関しては土塁前面に設けられたテラスの一部である可能性が高いと考えられる。

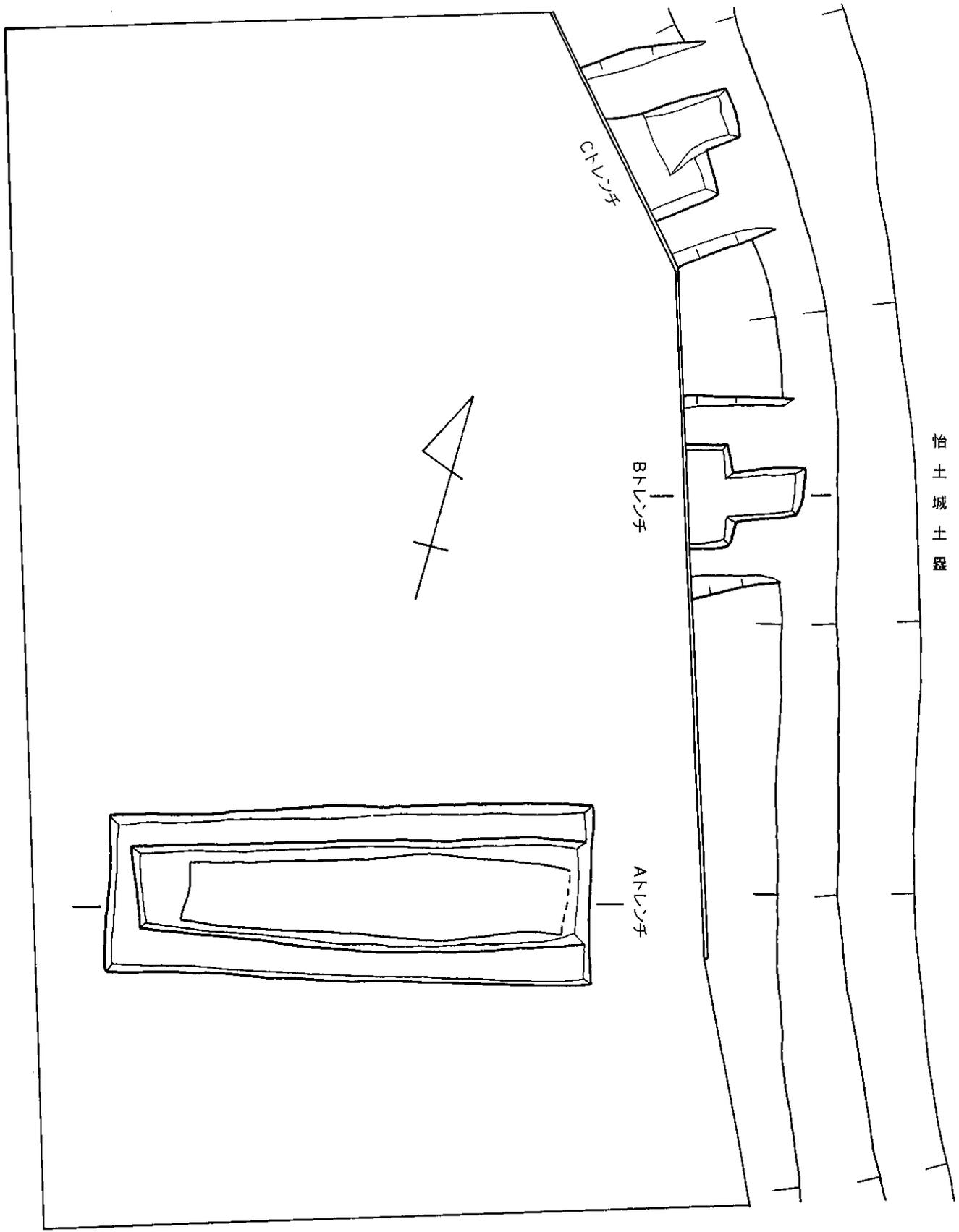
土塁城外側に隣接するA調査区は9m×3mの長方形を呈する。土層断面の観察の結果、当該地は数回にわたって造成されていることが判明した。現地表（最終造成面）から約1.7m程造成層が形成され、その下層に砂礫層が確認できた。この砂礫層には怡土城に使用したと考えられる瓦片を包含しており、さらに土塁との位置関係から考察すると、この部分は城外側の濠の一部（濠の落ち込み部分）である可能性が高いと考えられる。

遺物

出土遺物は瓦片、陶磁器片、須恵器片などが少量出土しているが、図示し得なかった。（角）

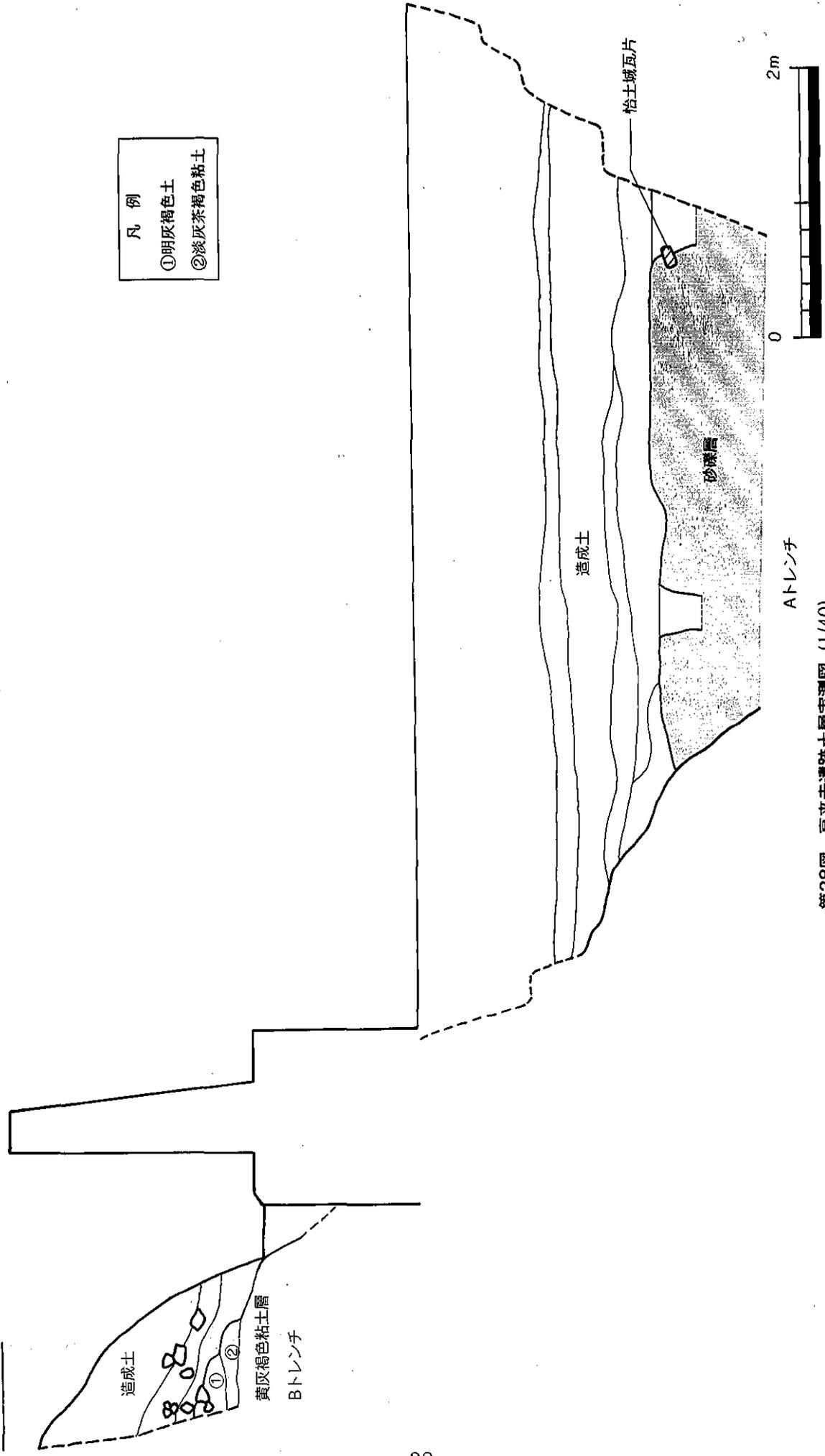


第26図 高来寺遺跡（土塁と濠）（北より）



第27図 高来寺遺跡遺構実測図 (1/100)

26.00m



第28図 高来寺遺跡土層実測図 (1/40)

5. 大門遺跡（大門484-1）

（1）調査概要

平成9年度に染井公民館裏（大門484-1）に所在する土塁の一部が崩壊した。それに伴い土砂が隣接する民家に流れ込む恐れがあったために、崩壊した土塁の一部を修築することになった。この修築工事において一部掘削する工程が生じ、その際当該地区の土塁の一部の土層を観察できた。

（2）調査の記録（第29・30図、図版11-a・b）

現在までの踏査および一部の発掘調査の結果、怡土城の土塁には以下3種類の築造法があったことを確認している。

- ① 地山整形の後、そのまま土塁として利用する。
- ② 地山整形の後、その上部にさらなる版築を施す。
- ③ 石組で基礎工事の後、その上部にさらなる版築を施す。

今回の土層観察の結果、地山である花崗岩風化土層（白灰色土層）の上に整地層と考えられる暗黒灰色土層が確認され、その上部には赤茶色土（砂粒を多く含む）と黒灰色粘土質土による版築が施されていることがわかった。このことから当該地区の土塁は②の「地山整形の後、その上部にさらなる版築を施す」築造法により築造されたことがわかる。

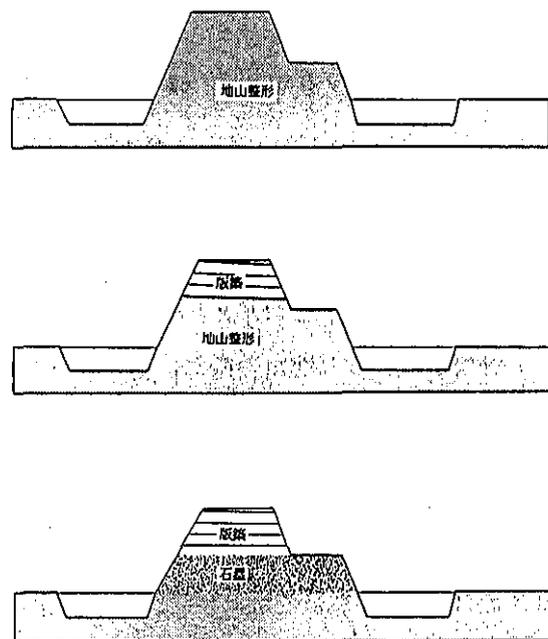
また、当該地区における版築の状況から注目できる点がいくつか認められる。

第1点としては外皮版築が確認できることである。土層観察によると、地山の直上に暗黒灰色土層が確認され、その上部には赤茶色土（砂粒を多く含む）と黒灰色粘土質土による版築が施されていることがわかるが、さらにその版築（本体部）を保護するように城外側には少し粗めの版築が施されていることが確認できる。

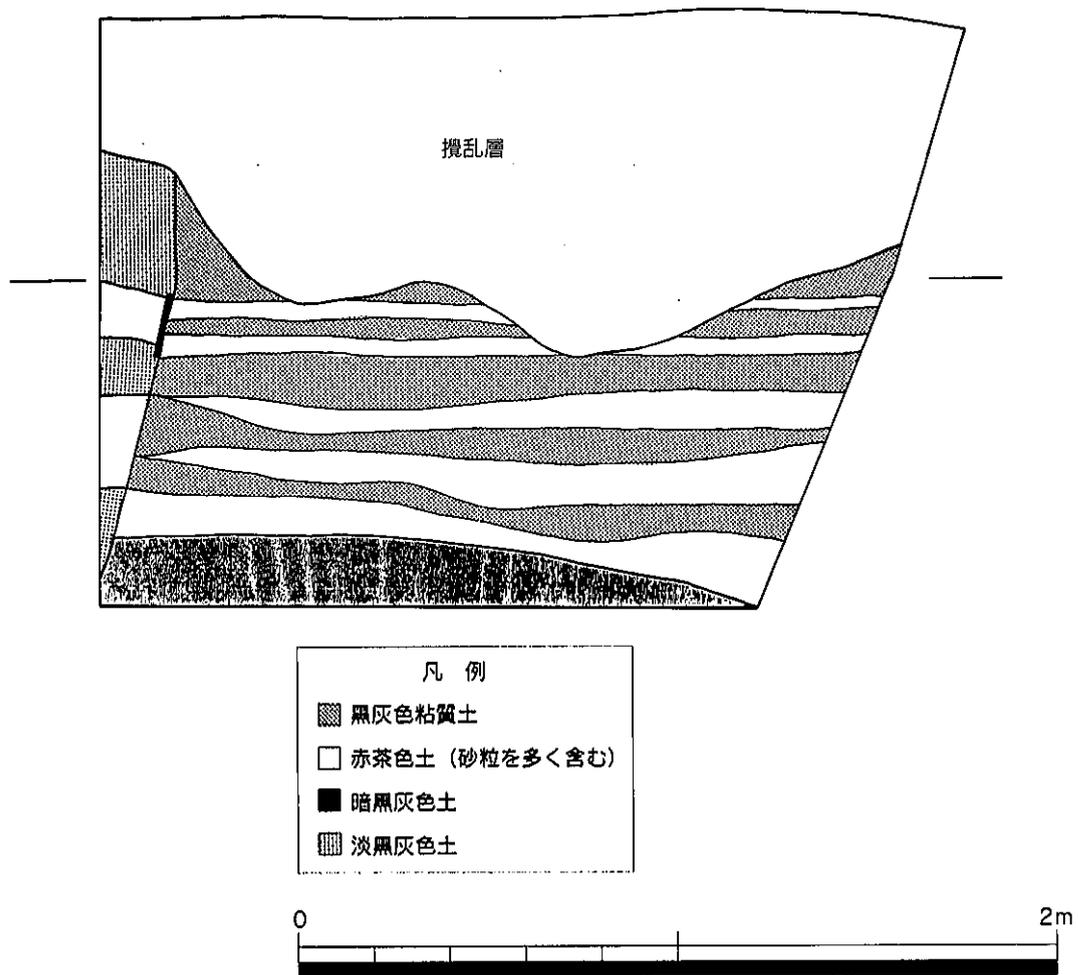
第2点としては本体部の版築と外皮版築との間に「板」状の痕跡を確認していることである。この板状痕跡は長さ約17cm、厚さ約3cmを測る。

今回の土層確認調査の結果、部分的ではあるが怡土城の土塁築造に関する情報を得ることができた。以下、土層確認調査の成果を整理してみる。

1. 今回の土層観察の結果、当該地区の土塁は地山整形の後、その上部にさらなる版築を施す築造法により築造されていることがわかる。
2. 地山整形の後、地山の直上に整地層と考えられる暗黒灰色土層が確認され、その上部には赤茶色土（砂粒を多く含む）と黒灰色粘土質土による版築が施されている。このことから、当該地区の土塁築



第29図 怡土城土塁築造方法想定図



第30図 大門遺跡 (484-1) 土層実測図 (1/20)

造においては地山整形の後すぐ版築工程に移るのではなく、地山の真上に整地層を設けるなどしっかりした基礎工事がなされていることがわかる。

3. 土層観察によると地山の直上に暗黒灰色土層が確認され、その上部には赤茶色土 (砂粒を多く含む) と黒灰色粘質土による版築が施されている。さらにその版築 (本体部) を保護するように城外側には少し粗めの版築が施されている。このことから当該地区の土塁築造においては外皮版築が施されていることがわかる。

4. 本体部の版築と外皮版築との間に「板」状の痕跡を確認している。板状痕跡は長さ約17cm、厚さ約3cmを測る。この板状痕跡は抜き忘れの「堰板」と考えられ、当該地区においては堰板を用いて版築部分が構築されたことがわかる。ただし、一部にしか板状痕跡が確認できないため、本来堰板は版築工程終了後には抜き取られていたと想定される。

なお、今回の修築工事に伴うにおいて遺物は出土しなかった。(瓜生)

6. 大門遺跡（大門29・30）

（1）調査概要

平成14年6月に国指定史跡「怡土城跡」の土塁（大門30）の土砂が隣接する宅地（大門29）に流れ込む危険性があり、対応してくれないかと地元行政区より要請があった。それを受けて前原市教育委員会（文化課）が至急現地を踏査したところ、土塁の前面にテラス状に張り出している土砂の塊の一部に版築層らしきものを確認した。そのことをふまえて福岡県教育委員会、前原市教育委員会（文化課）、地権者（大門29）の三者で協議したところ、まずは土塁の前面にテラス状に張り出している土砂の塊が果たして土塁の流れ土かどうかを確認するための遺構確認調査を実施し、その結果をもとに対応を考えることになった。調査は土塁の前面にテラス状に張り出している土砂の塊に計2箇所にはトレンチを設定して行った。調査面積は約18㎡であり、調査期間は平成14年9月18日から平成14年12月6日までの約3ヶ月間である。

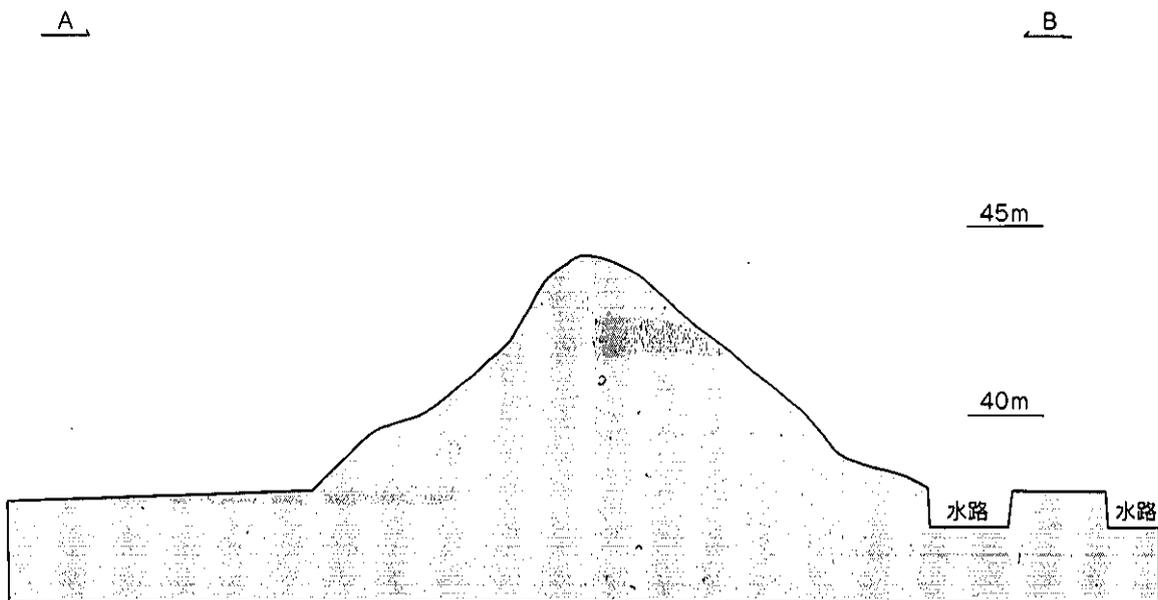
（2）調査の記録

遺構（第31～39図、図版12～15-a・b）

調査地点（大門29・30）は怡土城の南北方向に伸びる平野部の土塁のほぼ中央部に位置する。当該地の土塁の残存状態は良好であり、残存高は現地表面から高さ約5～7mを測る。

地形測量の結果、土塁の城内側には南東方向から北西方向に河川が流れ、調査区の南側端部まで自然の丘陵が続いており、その丘陵に接続するように土塁が構築されている。さらに踏査の結果、土塁を挟んだ南側、北側ともに砂礫層がひろがっていることがわかった。このことから調査地点一帯においては本来北東方向から南西方向に河川が流れていたのを、人工的に南東方向から北西方向にその流れを変え、自然の丘陵を巧みに利用して当該地に土塁を構築したと考えることができる。

当該地の土塁は石塁と石塁上部の版築層の一部が露出していたために、石塁による基礎工事を行った後にその上部に粘質土と砂質土による版築層を形成して土塁を構築する工法が採られているのを踏査の段階で確認できた。また、石塁の城外側にはテラス状に張り出している土砂の塊が飛び石



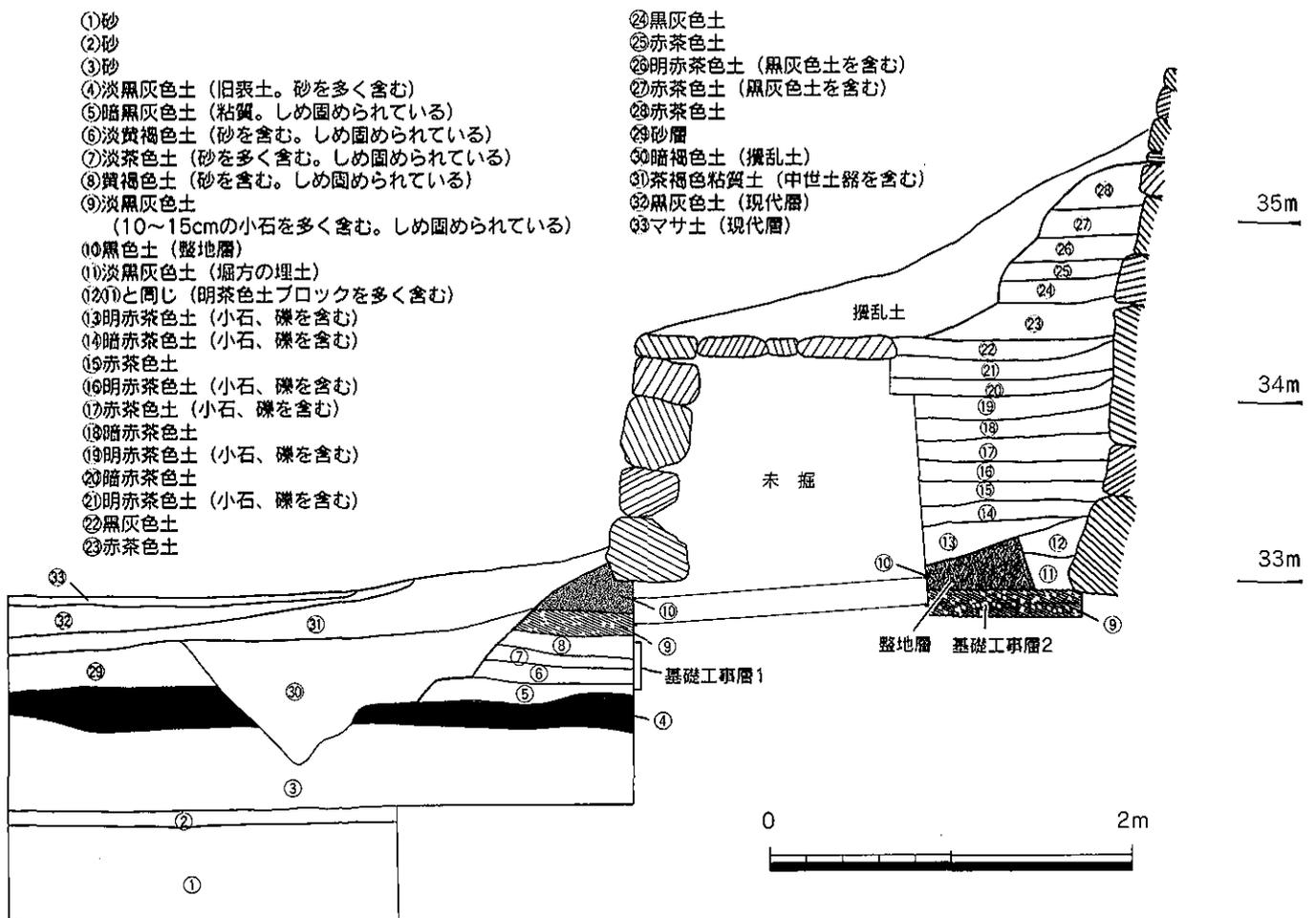
第31図 大門遺跡（大門29・30）現況断面図（1/200）

状に三箇所あり、その内部構造を確認するために中央部に位置するテラス状に張り出している土砂の塊にNo.1トレンチ(約1×10m)とNo.2トレンチ(約1×8m)を設定した。

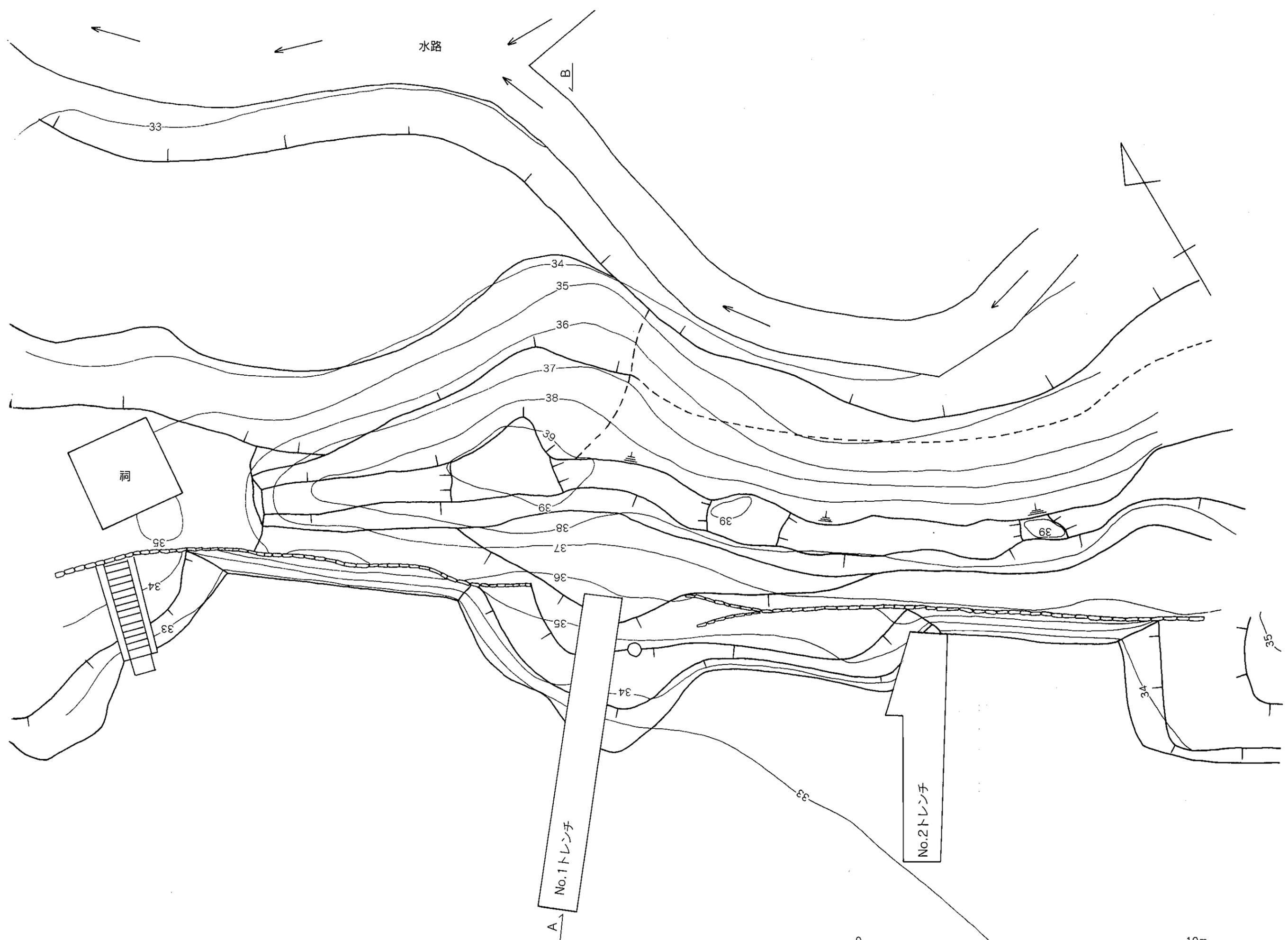
テラス状遺構

No.1トレンチにおいて最初に表土(腐葉土)を除去したところ、石塁から城外側約2.5mの場所に25cm~50cm程の大きさの石材が人工的に高さ約1.5m垂直に積まれているのを確認した。そこで垂直に組まれた石材に注意を払いながら石塁側に掘削していくと水平に組まれた石材群を検出し、さらに掘削していくと版築層がその姿を現した。版築層はしっかりと突き固められており、掘削する際手鋸から火花が出るほどの硬さであった。その版築層を層ごとに丁寧に掘削して精査した結果、一部ではあるものの層と層との間に版築の痕跡を確認できた。土層観察の結果、層序としては地山(砂層)→旧表土(淡黒灰色土)→基礎工事層1(しっかりと突き固められた砂質土)→基礎工事層2(10~15cmの小石を多く含みしっかりと突き固められている淡黒灰色土)→整地層(黒灰色土)→版築層となっており、現在にも相通じる土木技術で構築されている。

なお、整地層からは怡土城築城期以前の土器が出土している。当該地一帯はかつて河川敷であったことから地山は砂層であり、整地層に用いた土砂(黒灰色土)は当該地には所在しない。そのため整地層に用いた土砂は当該土塁構築の際に他の場所から運び込まれた可能性が高い。



第32図 大門遺跡(大門29・30) No.1トレンチ土層図(1/40)



第33図 大門遺跡 (大門29・30) 地形図 (1/100)

No.2トレンチにおいて最初に表土(腐葉土)を除去したところ、踏査の際に見え隠れしていた版築層がその姿を現した。その版築層はしっかりと突き固められており、掘削する際手鋤から火花が出るほどの硬さであった。土層観察の結果、No.1トレンチと同様に層序としては地山(砂層)→旧表土(淡黒灰色土)→基礎工事層1(しっかりと突き固められた砂質土)→基礎工事層2(10~15cmの小石を多く含みしっかりと突き固められている淡黒灰色土)→整地層(黒灰色土)→版築層となっており、現在にも相通じる土木技術で構築されている。

ただし、No.1トレンチで検出できた垂直に組まれた石材群は後世の攪乱を受けて消失しており、No.2トレンチにおいては検出できなかった。

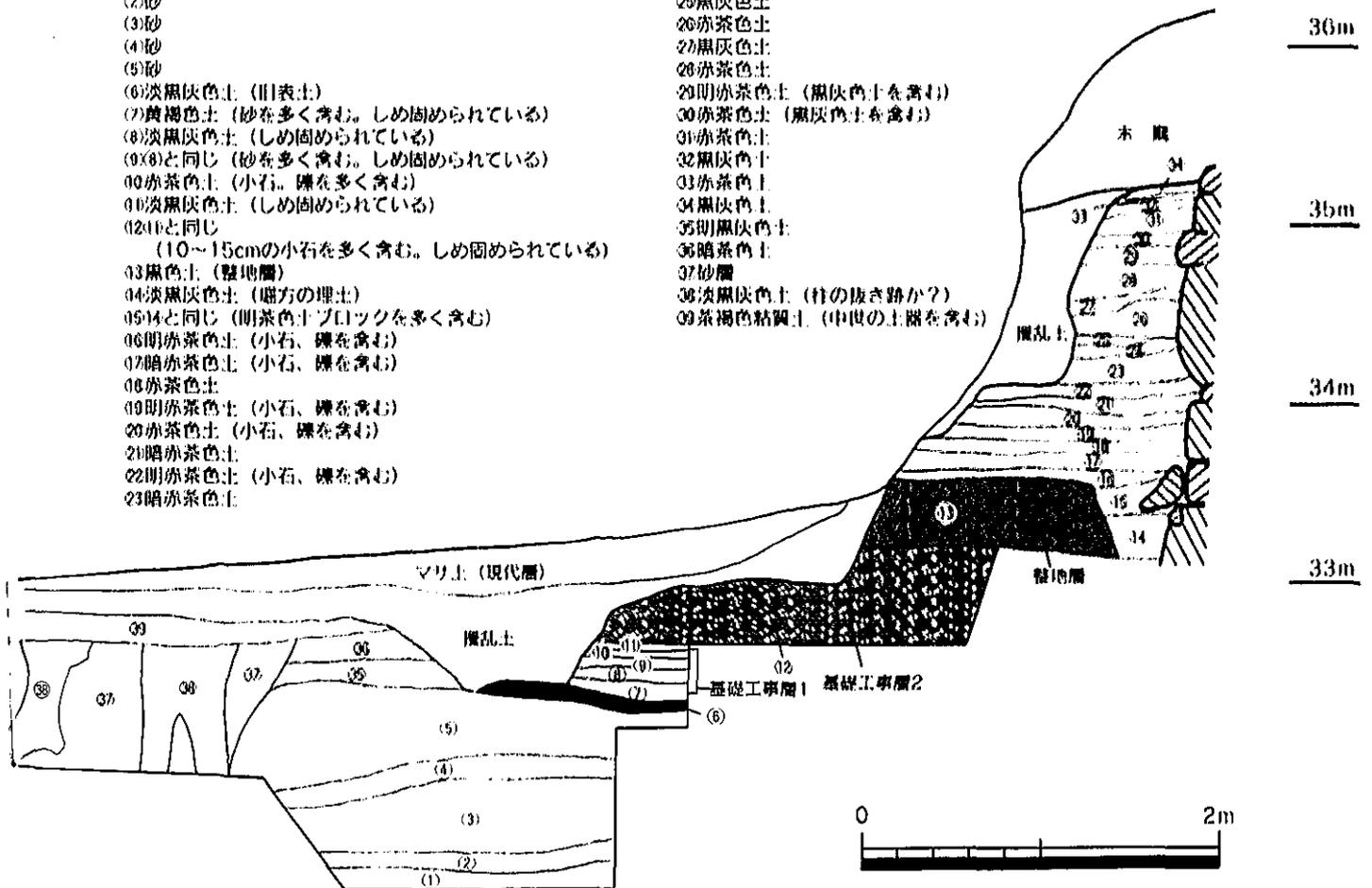
なお、No.2トレンチにおいても整地層からは怡土城築城期以前の土器が出土している。当該地帯はかつて河川敷であったことから地山は砂層であり、整地層に用いた土砂(黒灰色土)は当該地帯には所在しない。そのため整地層に用いた土砂は当該土塁構築の際に他の場所から運び込まれた可能性が高い。

以上、両トレンチの調査結果を整理すると、石塁の城外側にテラス状に張り出している土砂の塊の内部構造について以下の2点が明らかになった。

①現在にも相通じる土木技術で構築されている。

- (1)砂
- (2)砂
- (3)砂
- (4)砂
- (5)砂
- (6)淡黒灰色土(旧表土)
- (7)黄褐色土(砂を多く含む。しめ固められている)
- (8)淡黒灰色土(しめ固められている)
- (9)(8)と同じ(砂を多く含む。しめ固められている)
- (10)赤茶色土(小石、礫を多く含む)
- (11)淡黒灰色土(しめ固められている)
- (12)(11)と同じ(10~15cmの小石を多く含む。しめ固められている)
- (13)黒色土(整地層)
- (14)淡黒灰色土(堀方の埋土)
- (15)(14)と同じ(明茶色土ブロックを多く含む)
- (16)明赤茶色土(小石、礫を含む)
- (17)暗赤茶色土(小石、礫を含む)
- (18)赤茶色土
- (19)明赤茶色土(小石、礫を含む)
- (20)赤茶色土(小石、礫を含む)
- (21)暗赤茶色土
- (22)明赤茶色土(小石、礫を含む)
- (23)暗赤茶色土

- 24明赤茶色土(小石、礫を含む)
- 25黒灰色土
- 26赤茶色土
- 27黒灰色土
- 28赤茶色土
- 29明赤茶色土(黒灰色土を含む)
- 30赤茶色土(黒灰色土を含む)
- 31赤茶色土
- 32黒灰色土
- 33赤茶色土
- 34黒灰色土
- 35明黒灰色土
- 36暗赤色土
- 37砂層
- 38淡黒灰色土(柱の抜き跡か?)
- 39茶褐色粘質土(中世の土器を含む)



第34図 大門遺跡(大門29・30) No.2トレンチ土層図(1/40)

②人工的に構築された基礎工事層、版築層等で構築されており、土塁からの流れ土などが堆積して形成されたものではない。

このことから、石塁の城外側にテラス状に張り出している土砂の塊は土塁からの流れ土が堆積したのではなく、人工的に土塁の城外側に構築された高さ約1.5m、石塁からの幅約2.7mを測り、その表面を石材で覆い隠したテラス状遺構の一部であることがわかった。また、残りの二箇所のテラス状に張り出している土砂の塊についても精査の結果、テラス状遺構の一部であることがわかっている。このことをふまえると、当該調査区では現時点において飛び石状にしかテラス状遺構はのこっていないが、本来は土塁の前面（城外側）に高さ約1.5m、石塁からの幅約2.7mを測るテラスが設置されていたと考えられる。

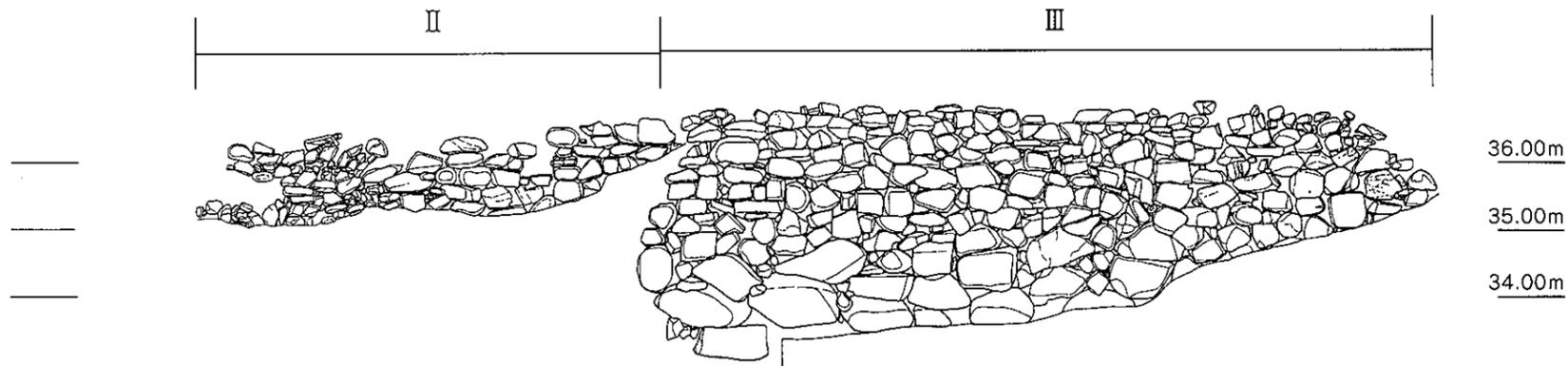
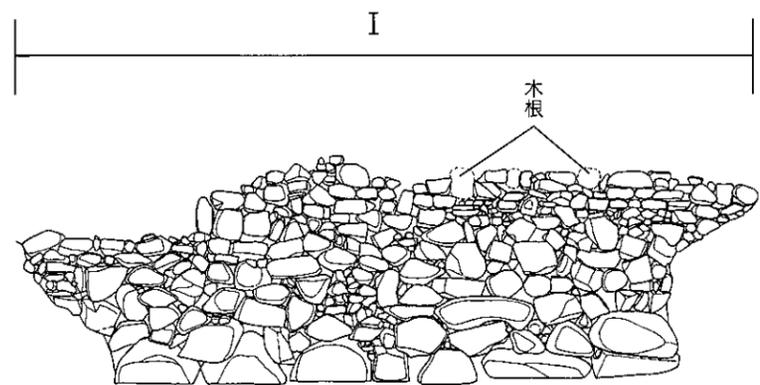
石塁（土塁の基礎構造部）

今回の調査では石塁の城外側にテラス状に張り出している土砂の塊の内部構造についての解明に主眼をおいたが、それに伴い石塁についても情報が得られたため石塁も3区に分けて報告することにする。

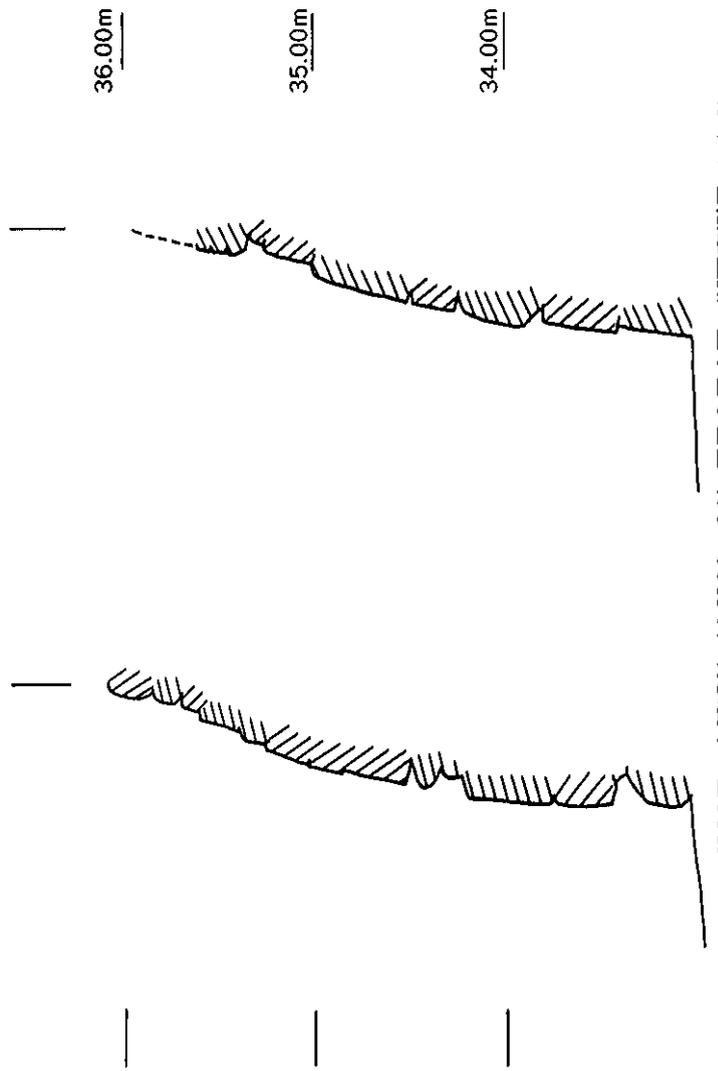
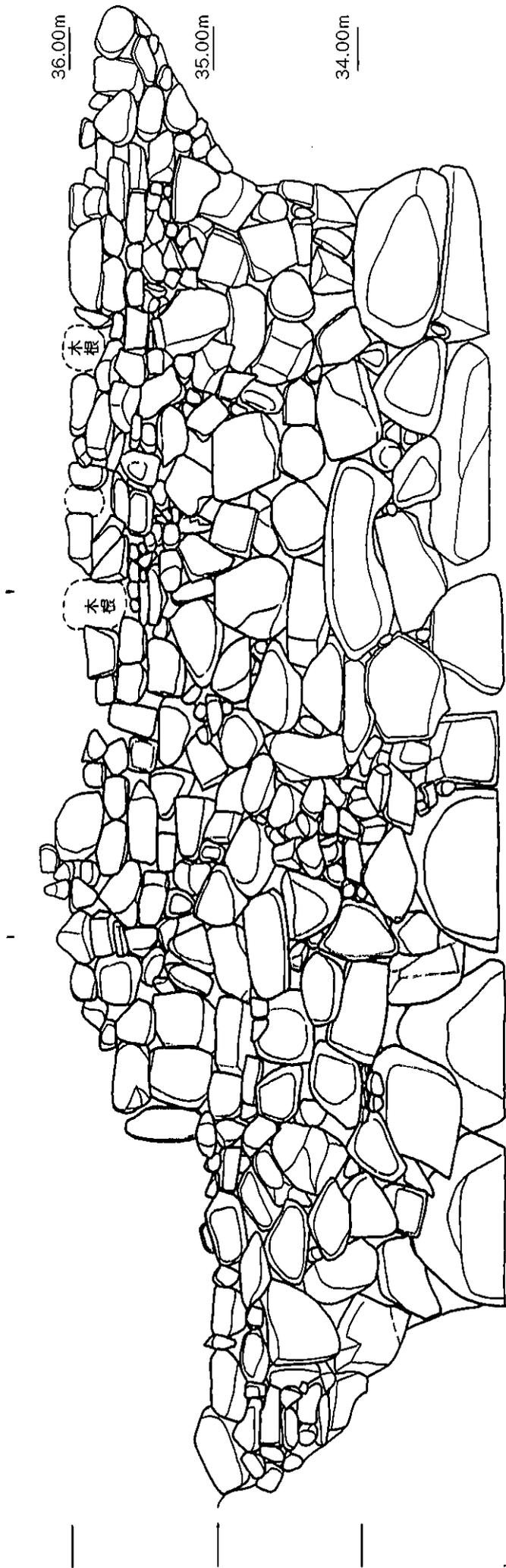
I区の石塁は調査区の北側に位置する。一部に後世の補修跡がみられるものの、残存状態は良好である。石塁は石材の大きさから3工程で構築されたことがわかる。第1工程は現地表から約1mの高さまでであり、1.0～1.5mほどの石材で組まれている。第2工程は現地表から約1m～約2mの高さであり、0.5～0.6mほどの石材で組まれている。第3工程は現地表から約2m～約3mの高さであり、0.2～0.4mほどの石材で組まれている。そして石塁の天井部はその上部に粘質土と砂質土による版築層を構築するため丁寧に面が整えられており、その石塁の天井部と版築層との間から奈良時代の土器片が出土している。石塁の傾斜角は約80°であり、石材の表面は綺麗に面取りされている。

II区の石塁は調査区の中央部に位置する。テラス状遺構が石塁の表面を覆っているため、その詳細については不明な点が多い。ただし、石材の大きさに注目して観察すると、小さい方から0.2～0.4m、0.4～0.5m、0.5～0.7mの3種類の石材に分類できる。なかでも中央部に位置する0.5～0.7mの大きさの石材群は横幅約3m、石塁の天井部に対してほぼ垂直に下方に向かって目地が走っていることから、当該地にかつて横幅約3mを測る方形の空間が存在したことを想定させる。その空間に如何なる構造物が所在したのかは不明であるが、ある時期に崩壊もしくはその使命を終えると埋め殺され土塁の一部として生まれ変わったのであろう。そのためか、II区の石塁は階段状の断面を呈しており、それは当該調査区における数次に亘る修築の痕跡を示唆していると考えられる。なお、当該調査区の石材の表面も綺麗に面取りされており、当該調査区からの出土遺物はなかった。

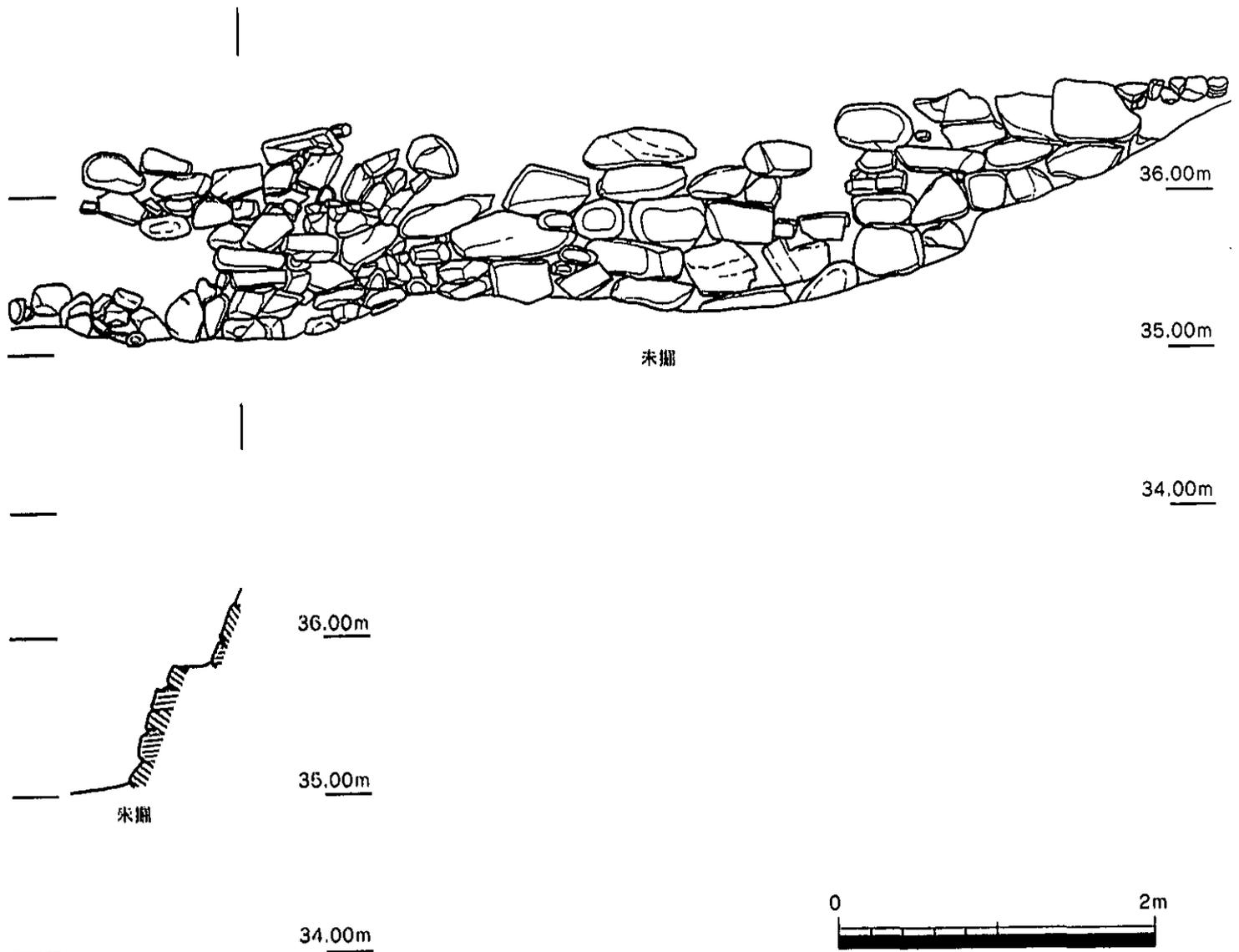
III区の石塁は調査区の南側に位置する。石塁は調査区の南側端部まで続く自然の丘陵を巧みに利用して構築されている。踏査の結果、石塁と自然の丘陵の接続部にはしっかり突き固められた版築層が形成されていることがわかった。当該調査区の石塁は一部に木根による崩壊部分がみられるものの、残存状態は良好である。I区と同様に当該調査区の石塁は石材の大きさから3工程で構築されたことがわかる。第1工程は現地表から約1mの高さまでであり、1.0～1.5mほどの石材で組まれている。第2工程は現地表から約1m～約2mの高さであり、0.5～0.6mほどの石材で組まれている。第3工程は現地表から約2m～約3mの高さであり、0.2～0.4mほどの石材で組まれている。そして石塁の天井部はその上部に粘質土と砂質土による版築層を構築するため丁寧に面が整えられ



第35図 大門遺跡 (29・30) 石壁立面実測図 (1/100)



第36図 大門遺跡 (大門29・30) 石壁 I 区立面・断面実測図 (1/40)



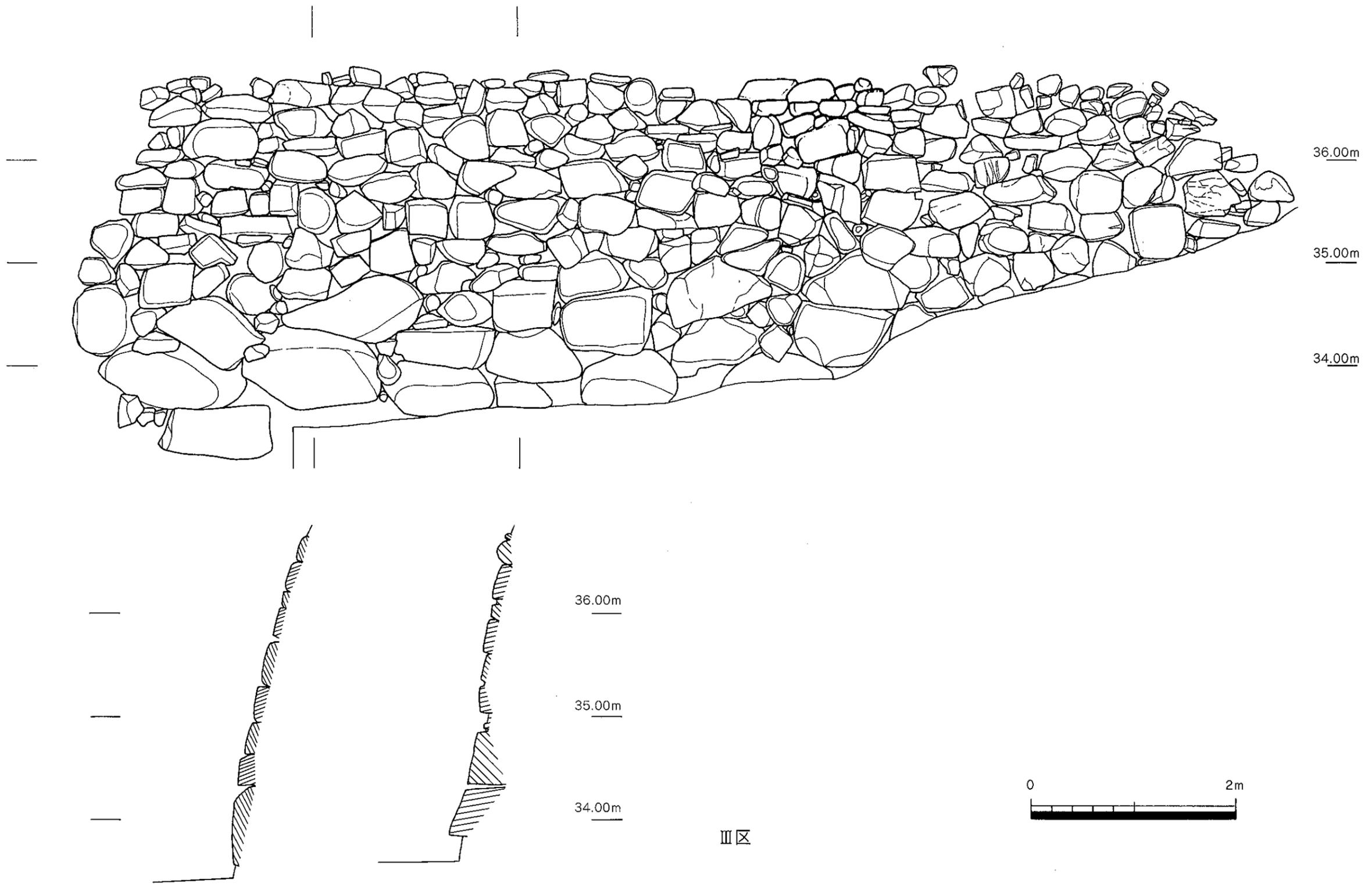
第37図 大門遺跡(大門29・30) 石塁Ⅱ区立面・断面実測図 (1/40)

ている。石塁の傾斜角は約 80° であり、石材の表面は綺麗に面取りされている。

土塁(城外側)の構造について

最後に当該地における土塁(城外側)の構造について整理して報告を終了することにする。

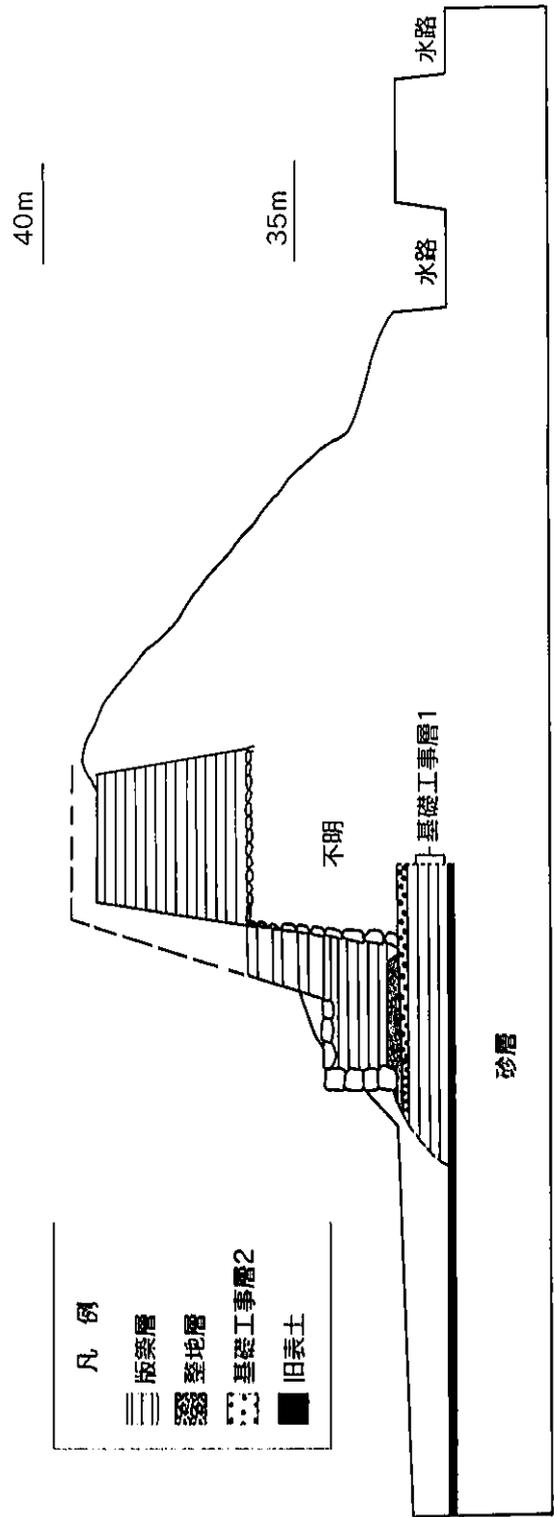
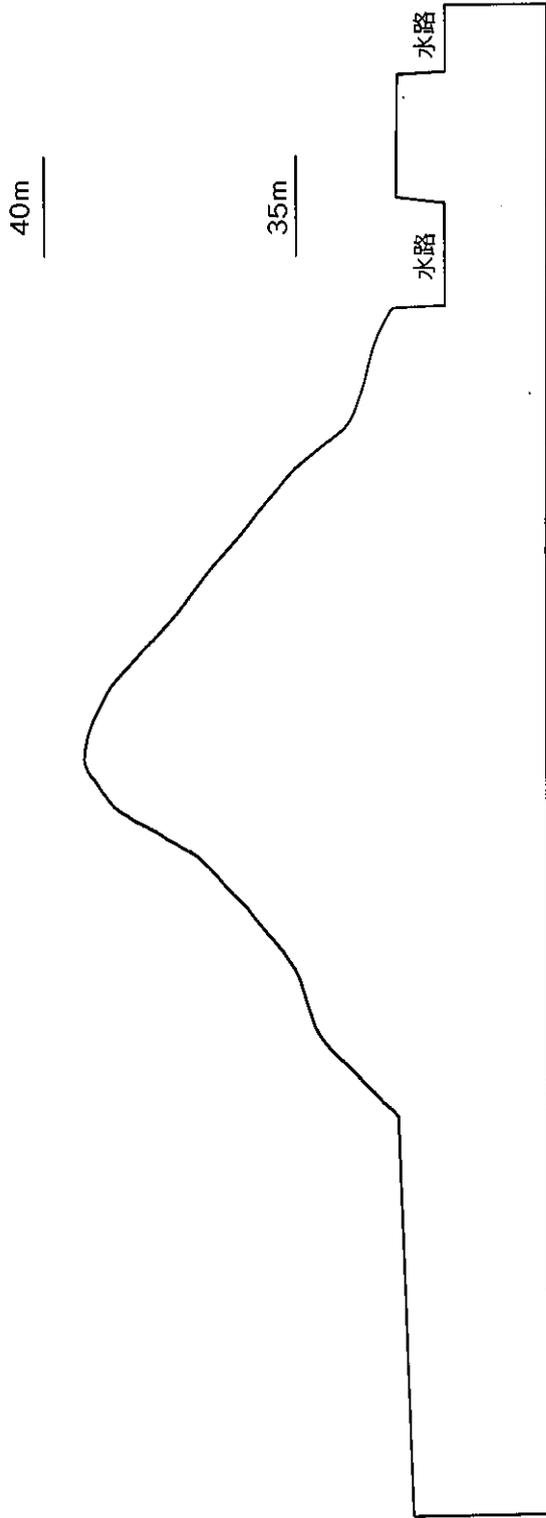
まずはNo.1トレンチと No.2トレンチの土層観察の結果でも明らかのように石塁の根石と整地層の間に掘り方と埋土層が確認できることに注目したい。両トレンチの土層観察の結果、当該土塁を構築する際、①地山(砂層)を整地する→②地山の上部に砂質土でしっかりと突き固められた基礎工事層1を構築する→③基礎工事層1の上部に10~15cmの小石を多く含みしっかりと突き固められている淡黒灰色土で基礎工事層2を構築する→④基礎工事層2の上部に整地層(黒灰色土)を構築する。これら4工程を経て基礎工事がなされていることがわかる。その基礎工事層の上部に石塁が構築されるのであるが、石塁の根石を設置する際、根石を直接その基礎工事層の直上に設置せず、わざわざ整地層を掘削して設置し、掘方に掘り起こした土砂を埋め戻している。この根石の設置方法は古墳の横穴式石室の根石の設置方法に相通じるものがあり、このことから当該土塁の構築に従事した人々は古墳の築造に何らかの関わりがあったことが想定される。



第38図 大門遺跡(大門29・30)石壁Ⅲ区立面・断面実測図(1/40)

A

B



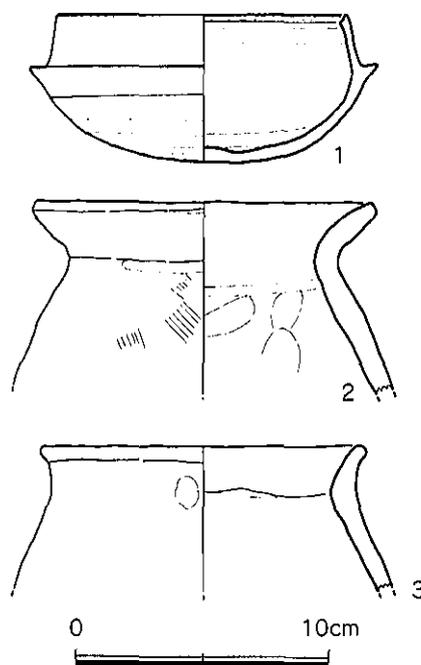
第39図 大門遺跡 (大門29・30) 土層現況断面図及び復元想定図 (1/150)

基礎工事層構築の後は石塁とテラス状遺構の構築となる。次は両者の関係についてふれることにする。先にも説明したように、石塁の石材の表面は綺麗に面取りされており、明らかに視聴覚的効果を持たせている。そのことをふまえると石塁は最終的に埋め殺しされているが、築城当初においては表に露出していた可能性がある。そのように考えると、テラス状遺構と本体部を覆い隠す版築層は後日構築されたことになる。ただし、テラス状遺構の高さと石塁の第1工程との高さが一致していることを考慮すると、テラス状遺構と石塁は同時平行して構築されていたと考えることもできる。そのように考えると、石塁は当初から埋め殺しされテラス状遺構を伴った姿が当初からの土塁の姿であったと理解することもできる。以上、二通りの理解が可能となるが、今回の調査ではその結論を出すまでの成果を得られなかった。今後、新たな資料の蓄積を待つて再び考察したいと思う。(瓜生)

遺物 (第40図、図版15-c)

大門29・30地点の調査で出土した遺物は少なく、パンケース1箱分にも満たない。そのうち図化できたのは3点のみである。

1は土師質の坏身だが形態、成形・調整方法も須恵器そのもので、いわゆる似非須恵土師器である。土塁基底部の整地層より出土した。口径11.6cm、器高5.9cmを測り、受部を一部欠くがほぼ完形である。口縁部の立ち上がりは高く、端部はやや丸みを帯びるがシャープに仕上げる。内外面を回転ナデ成形し、受部を回転ナデにより摘み出す。底部はヘラ切り後に回転ヘラ削りを施す。焼成は不良、胎土は精良で細かい白色砂粒を若干含む。色調はにぶい黄橙(5YR5/3)を呈す。2は土師器甕で1トレンチの版築土塁中より出土した。復元口径13.7cm、残高7.7cmを測る。頸部から口縁部が大きく外反し、くの字を呈す。ヨコナデ成形後、外面はナナメハケ、内面にはオサエを施す。焼成は良好、胎土はやや粗く細かい白色砂粒を含む。色調は橙(7.5YR6/6)



第40図 大門遺跡(大門29・30)出土土器実測図(1/3)

を呈し、口縁部の4分の1が残る。3も土師器甕で調査区北側の祠そばの土塁中より採集した。復元口径13.0cm、残高5.8cmを測る。厚みをもつ頸部より、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸みをもつ。ヨコナデ成形後、内面体部はヘラ削りを施す。焼成はやや不良、胎土はやや粗く細かい白色砂粒を含む。色調は内面にぶい黄橙(10YR7/4)、外面橙(5YR6/6)を呈す。口縁部がわずかに残存する。

器形や調整より1の坏身は5世紀後半、2・3の甕は6世紀後半～7世紀前半の所産と考えられ、いずれも『続日本紀』が伝える怡土城の築城時期を矛盾しない。(山口)

7. 怡土城における版築層等についての土質工学的考察

佐賀大学低平地研究センター 林 重徳

1. 土質工学的試験の目的と試料の採取

怡土城の城壁及びその基礎部の開削調査において、まさ土等を通常の方法で締め固めた場合に比較して、強度が明らかに大きな土層の存在が確認された。確認された土層の強度は、版築等によって入念に施工した層の年代効果を考慮したとしても、想定される強度を遥かに上回っており、怡土城の城壁及び基礎部を施工する際、それらの層（版築層等）の強度を増すために、土に添加材を混入する等、何らかの処置をして締め固めた可能性が推察された。締め固め層を固化させ強度を上げるための添加材としては、石灰や石膏とともに、海浜に近いことから牡蠣殻や貝殻の破砕物および濃縮された海水（塩を作った後のにがり）などが想定された。

そこで、これらの添加材を使用した可能性を探るために、版築城壁並びに基礎部の7地点から試料を採取し、2種類の試験を実施した。

試料の番号と採取位置並びに写真等との関係を、表-1に取り纏める。

表-1 試料番号と採取位置等

試料番号	採取位置等の記述	写真番号	トレンチ断面図
No.1	版築層上部	写真-2	No.2トレンチ土層図
No.2	版築層下部	写真-2	
No.3	基礎工事層（黒灰色土層）	写真-3	
No.4	砂層（旧川床層）	写真-3	
No.5	本体版築層上段（白色土層）	写真-5	
No.6	本体版築層（黒褐色粘土層）	写真-6	
No.7	本体版築層下段（白色土層）	写真-6	

2. 試験項目と方法

実施した試験は、（1）土中に含まれる交換性陽イオン（Na、K、Ca、Mg）計測、並びに（2）粒度試験である。各々の試験方法は次に示すとおりである。

1) 交換性陽イオン計測

○風乾した細粒土1gを振盪瓶に入れ、酢酸アンモニウム-塩化ストロンチウム溶液200mlを加え、1時間振盪した後、濾過する。

○原子吸分析装置により、濾過液のイオン濃度を測定する。

2) 粒度試験（地盤工学会試験基準に準拠）

○ふるい分析試験

○比重浮標による沈降分析試験

3. 試験結果と考察

1) 「交換性陽イオン」計測の結果と考察

交換性陽イオン濃度の計測結果を、表-2に示す。

表-2 交換性陽イオン濃度の計測結果

試料番号	陽イオン濃度 (mg/L)			
	Na	K	Ca	Mg
No.1	2.90	1.60	0.56	1.70
No.2	0.70	1.70	2.00	0.29
No.3	3.60	1.70	0.66	1.20
No.4	0.74	1.60	3.80	0.15
No.5	0.99	1.60	0.59	0.11
No.6	6.20	2.30	1.60	1.60
No.7	2.80	1.50	0.84	1.40

海水（塩分）の標準的な組成成分とその割合を、表-3に示す。

表-3 海水（塩分）の組成成分と割合（「たばこと塩の博物館」の資料による）

成分	塩化 ナトリウム	塩化 カリウム	硫酸 カルシウム	硫酸 マグネシウム	塩化 マグネシウム	その他
割合	77.9%	2.1%	4.0%	6.1%	9.6%	0.3%
				(15.7%)		
備考	塩	「にがり」の成分				重金属等
海水中の水と塩分（塩+にがり）の割合（水：塩分=97%：3%）						

交換性陽イオンの計測結果を見ると、No.6においてNa及びKとMgの含有が非常に大きく、次いで、No.1、No.3およびNo.7についても、NaとMgの含有量が大きくなっている。従って、No.1、No.3、No.6およびNo.7においては、当該土層を締め固め施工する際に、散布あるいは混入するなどの方法で、濃縮した海水（塩+にがり）を使用した可能性があると考えられる。特に、No.6においては、その可能性が非常に高いと考察される。

一方、No.2およびNo.4は、他に比較してCa分が多い。版築層であるNo.2については、固結作用のある石灰系材料を添加した可能性も考えることができよう。

いずれにせよ、更なる調査・試験の蓄積が必要である。

2) 粒度試験の結果と考察

7試料の粒度試験結果を、表-4に取り纏める。

表-4 7試料の粒度組成一覧

試料番号	粘土分 (%)	シルト分 (%)	砂分(%)			礫分 (%)
			細砂分	中砂分	粗砂分	
No.1	42.6	16.8	8.5	13.2	14.2	4.6
No.2	8.6	12.1	9.8	20.3	21.6	27.6
No.3	33.1	17.2	13.0	15.9	14.8	4.9
No.4	3.0	3.1	5.1	24.8	34.6	29.3
No.5	20.5	15.4	28.8	19.6	5.0	9.2
No.6	36.1	17.9	9.5	14.3	14.5	5.9
No.7	32.9	17.7	9.9	14.8	12.8	11.9

粒度組成で見ると、No.1、No.3、No.5、No.6およびNo.7は、ほぼ同じ粒度組成を持ち砂質土に区分されるが、礫分とシルト分と粘土分までを万遍なく含有しており、固く締め固めることのできる“粒度配合の良い”材料であるといえることができる。

No.2とNo.4は類似した組成で、粘土分とシルト分が少ない礫質砂に分類される。特に、版築層の1つであることが明白なNo.2層は、他の版築層と粒度組成が明らかに違っており、排水・透水層としての機能を意識して施工したものと推察される。

一方、No.4は、粘土～細砂分は約10%程度しか含有していない、河床砂礫である。

土の粒度試験

試料名 No.2 (締め固め層(A地点)) No.7 (本体版築層(白色)下段)

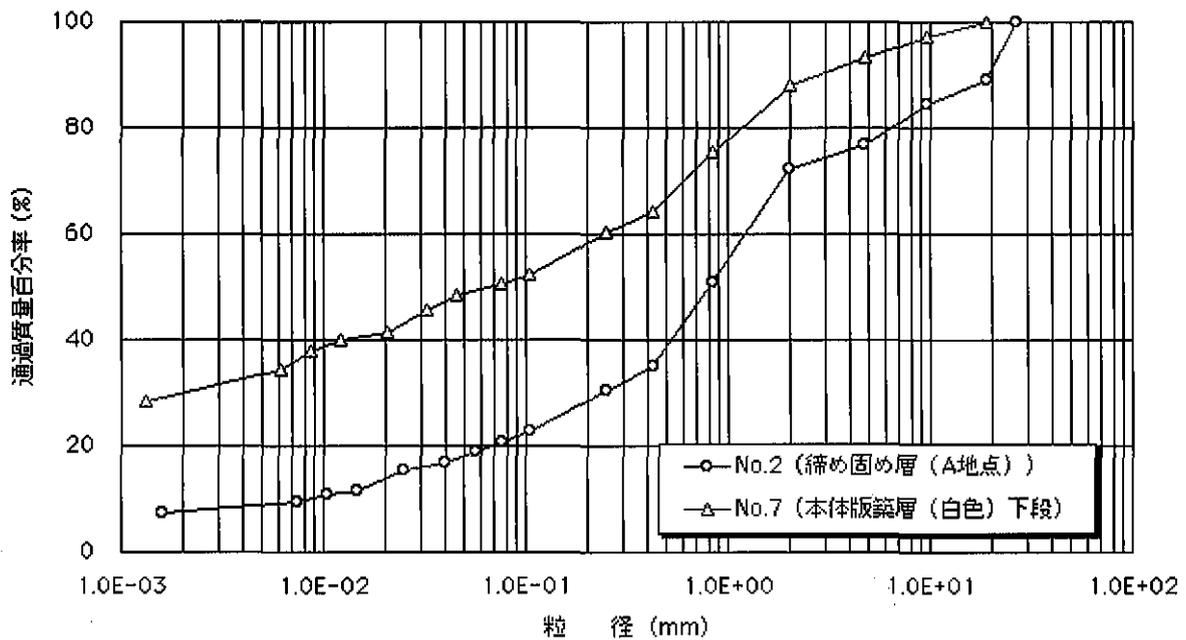
試験年月日

平成15年3月

試験者

牛原 裕司

試料番号	No.2 (締め固め層 (A地点))		No.7 (本体版築層 (白色) 下段)		粒度組成	締め固め層 (A地点)	本体版築層 (白色) 下段
	粒径 (mm)	通過質量百分率 (%)	粒径 (mm)	通過質量百分率 (%)			
ふるい分析					粗礫分	10.758	
	75		75		中礫分	12.275	6.669
	53		53		細礫分	4.535	5.215
	37.5		37.5		粗砂分	21.626	12.798
	26.5	100.000	26.5		中砂分	20.322	14.792
	19	89.242	19	100.000	細砂分	9.776	9.921
	9.5	84.631	9.5	97.305	シルト分	12.067	17.680
	4.75	76.967	4.75	93.331	粘土分	8.641	32.925
	2	72.432	2	88.116			
	0.85	50.806	0.85	75.318			
	0.425	35.050	0.425	64.044			
	0.25	30.484	0.25	60.526			
	0.105	22.665	0.105	52.178			
	0.075	20.708	0.075	50.605			
沈降分析	0.055938	18.830	0.045821	48.528			
	0.039713	16.920	0.03264	45.504			
	0.025231	15.591	0.020854	41.270			
	0.014763	11.604	0.012074	40.060			
	0.010468	10.773	0.008598	38.036			
	0.00743	9.610	0.006118	34.314			
	0.001596	7.284	0.001325	28.359			



粒径加積曲線

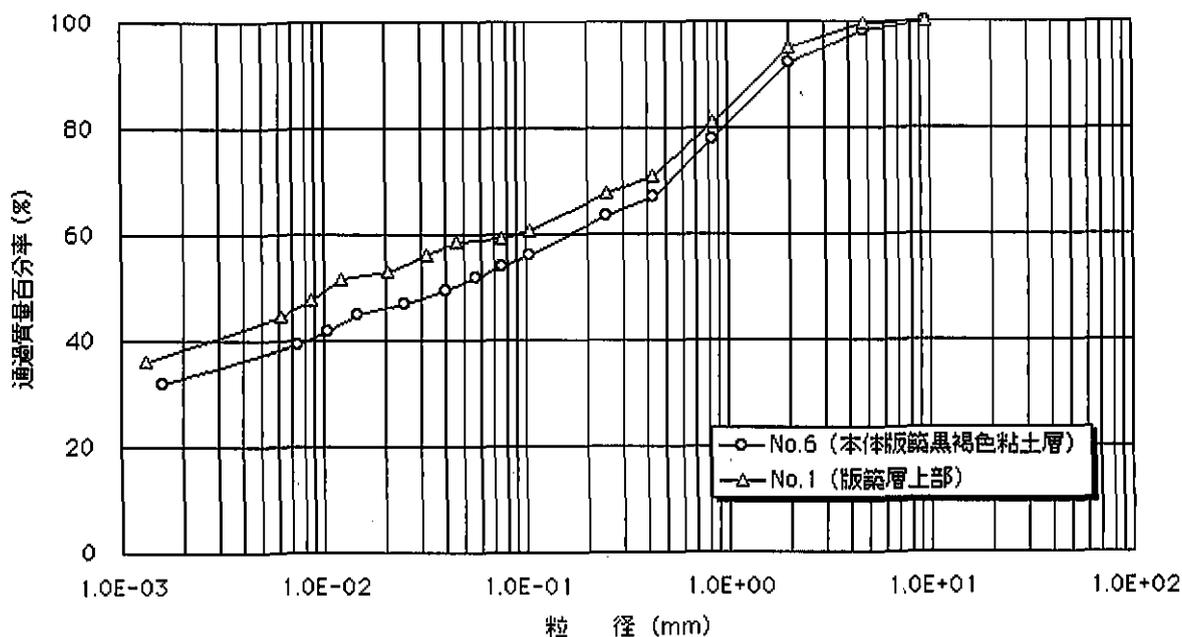
土の粒度試験

試料名 No.6 (本体版築黒褐色粘土層) No.1 (版築層上部)

試験年月日 平成15年3月

試験者 牛原 裕司

試料番号	No.6 (本体版築黒褐色粘土層)		No.1 (版築層上部)		粒度組成	本体版築黒褐色粘土層	版築層上部
	粒径 (mm)	通過質量百分率 (%)	粒径 (mm)	通過質量百分率 (%)			
ふるい分析					粗礫分		
	75		75		中礫分		
	53		53		細礫分	5.888	4.617
	37.5		37.5		粗砂分	14.491	14.157
	26.5		26.5		中砂分	14.345	13.165
	19		19		細砂分	9.519	8.488
	9.5	100.000	9.5	100.000	シルト分	17.943	16.798
	4.75	98.308	4.75	99.775	粘土分	36.122	42.550
	2	92.420	2	95.158			
	0.85	77.929	0.85	81.001			
	0.425	66.951	0.425	71.015			
	0.25	63.584	0.25	67.836			
	0.105	56.226	0.105	60.828			
	0.075	54.065	0.075	59.348			
沈降分析	0.055938	52.077	0.045821	58.742			
	0.039713	49.490	0.03264	56.229			
	0.025231	47.161	0.020854	52.879			
	0.014763	44.832	0.012074	51.483			
	0.010468	41.727	0.008598	47.575			
	0.00743	39.140	0.006118	44.504			
	0.001596	31.895	0.001325	36.129			



粒径加積曲線

土の粒度試験

試料名 No.4 (旧川床層) ・ No.3 (黒灰色土層 (整地層))

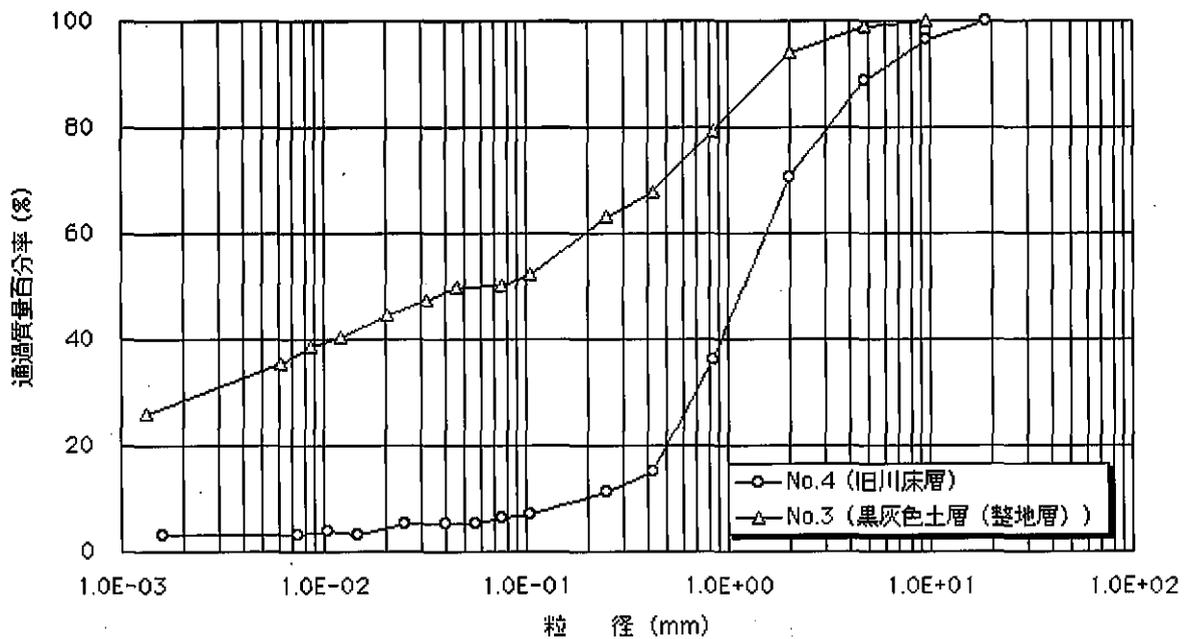
試験年月日

平成15年3月

試験者

牛原 裕司

試料番号	No.4 (旧川床層)		No.3 (黒灰色土層 (整地層))		粒度組成	旧川床層	黒灰色土層 (整地層)
	粒径 (mm)	通過質量百分率 (%)	粒径 (mm)	通過質量百分率 (%)			
ふるい分析					粗礫分		0.000
	75		75		中礫分	11.393	
	53		53		細礫分	17.920	4.932
	37.5		37.5		粗砂分	34.586	14.755
	26.5		26.5		中砂分	24.807	15.907
	19	100.000	19		細砂分	5.149	13.033
	9.5	96.372	9.5	100.000	シルト分	3.111	17.152
	4.75	88.607	4.75	98.839	粘土分	3.034	33.060
	2	70.687	2	93.907			
	0.85	36.101	0.85	79.152			
	0.425	14.939	0.425	67.631			
	0.25	11.294	0.25	63.245			
	0.105	7.009	0.105	52.326			
	0.075	6.145	0.075	50.212			
沈降分析	0.055938	5.423	0.045821	49.990			
	0.039713	5.264	0.03264	47.353			
	0.025231	5.105	0.020854	44.716			
	0.014763	3.193	0.012074	40.320			
	0.010468	3.831	0.008598	38.562			
	0.00743	3.034	0.006118	35.265			
	0.001596	3.034	0.001325	25.814			



粒径加積曲線

土の粒度試験

試料名 No.5 (本体版築層(白色)上段)

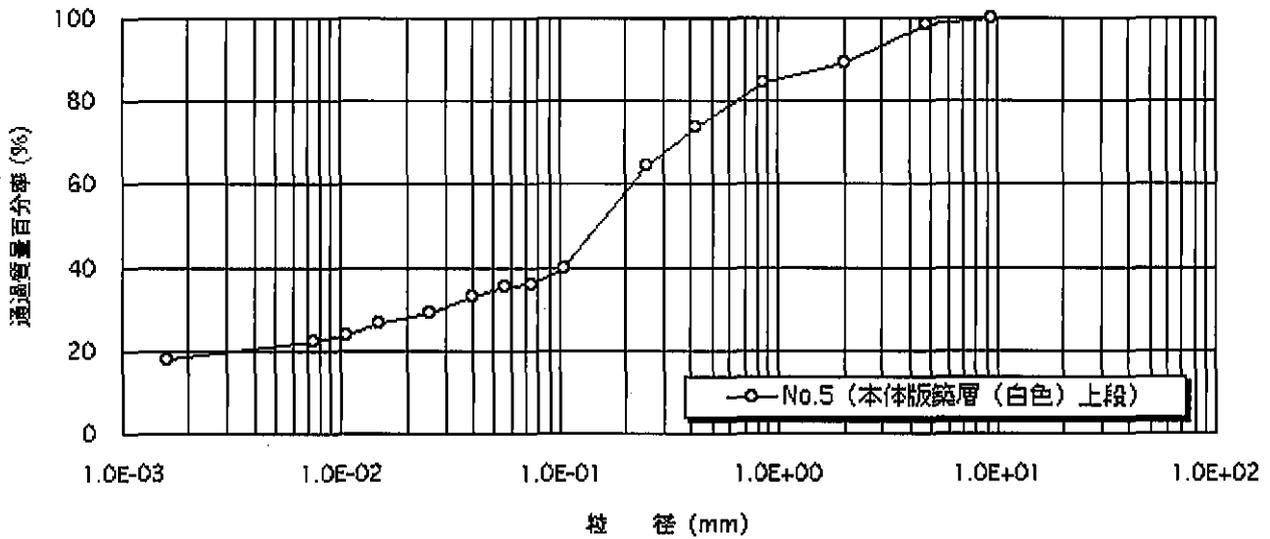
試験年月日

平成15年3月

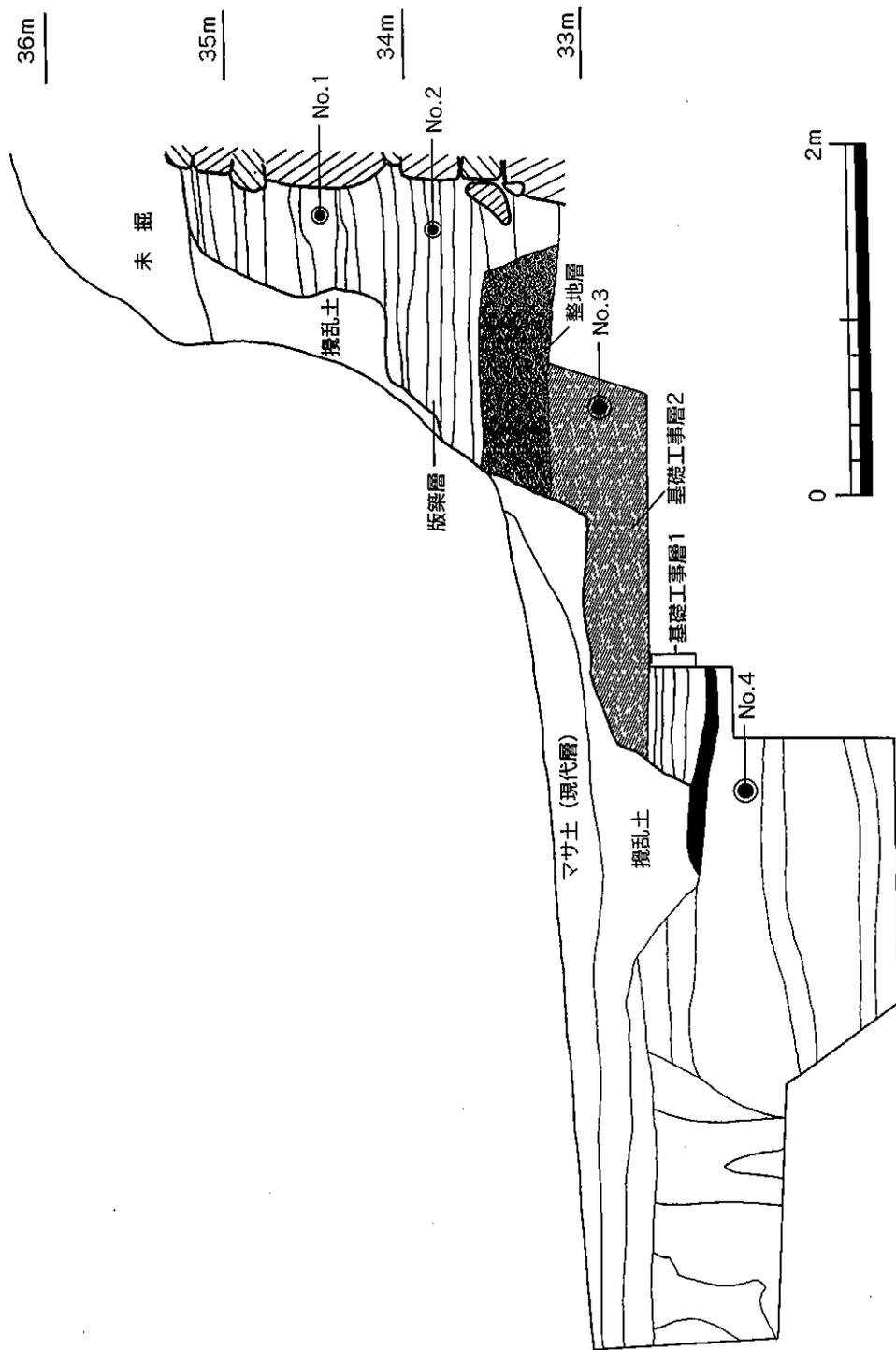
試験者

牛原裕司

試料番号粒	No.5 (本体版築層 (白色) 上段)				度組成	本体版築層 (白色) 上段
	粒径 (mm)	通過質量百分率 (%)	粒径 (mm)	通過質量百分率 (%)	粗礫分	0.000
ふるい分析	75		75		中礫分	
	53		53		細礫分	9.166
	37.5		37.5		粗砂分	4.962
	26.5		26.5		中砂分	19.643
	19		19		細砂分	28.814
	9.5	100.000	9.5		シルト分	15.390
	4.75	98.454	4.75		粘土分	20.479
	2	89.288	2			
	0.85	84.326	0.85			
	0.425	73.604	0.425			
	0.25	64.683	0.25			
	0.105	39.915	0.105			
	0.075	35.869	0.075			
	沈降分析	0.055938	35.289	0.045821		
0.039713		32.870	0.03264			
0.025231		29.148	0.020854			
0.014763		26.915	0.012074			
0.010468		23.565	0.008598			
0.00743		22.262	0.006118			
0.001596		17.982	0.001325			



粒径加積曲線



第41図 大門遺跡 (大門29・30) No.2トレンチ土壌サンプル採集箇所 (1/40)



写真1 大門遺跡（大門29・30）調査地点



写真2 No.2トレンチ土壌サンプル採集箇所1



写真3 No.2トレンチ土壌サンプル採集箇所2



写真4 本体版築層（北側土層）



写真5 本体版築層土壌サンプル採集箇所1



写真6 本体版築層土壌サンプル採集箇所2

V. その他（寄贈資料・採集資料）

1. 手嶋氏寄贈資料

(1) 寄贈に至る経緯

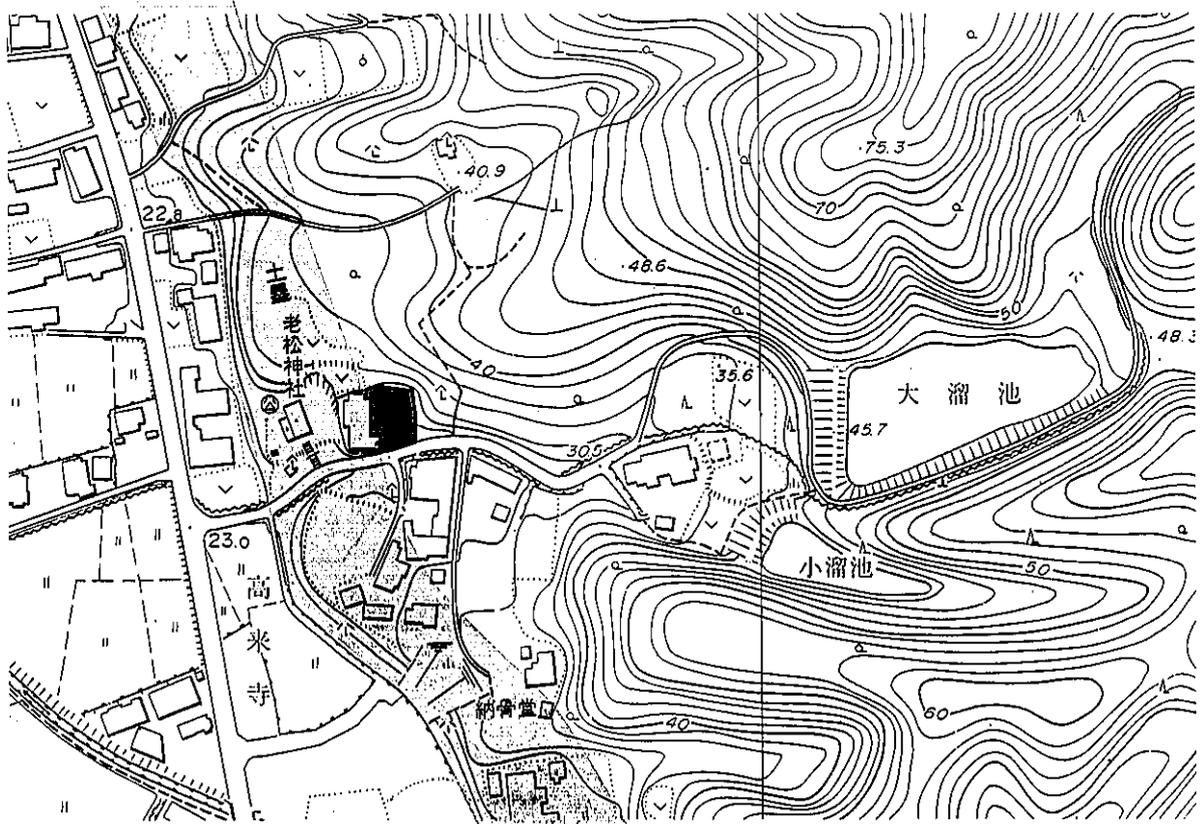
昭和54年に手嶋明氏が老松神社の東側に隣接する場所で農作業中に住居跡と考えられる方形の遺構を発見した。手嶋氏は以前に埋蔵文化財の発掘調査に従事した経験があり、その経験を活かして周辺を注意して踏査したところ完形品の瓦、土器片等を採集した。そして、その採集遺物を昭和62年、前原町立伊都歴史資料館（現前原市立伊都国歴史博物館）に寄贈されたのである。

(2) 資料紹介（第42～47図、図版16～18）

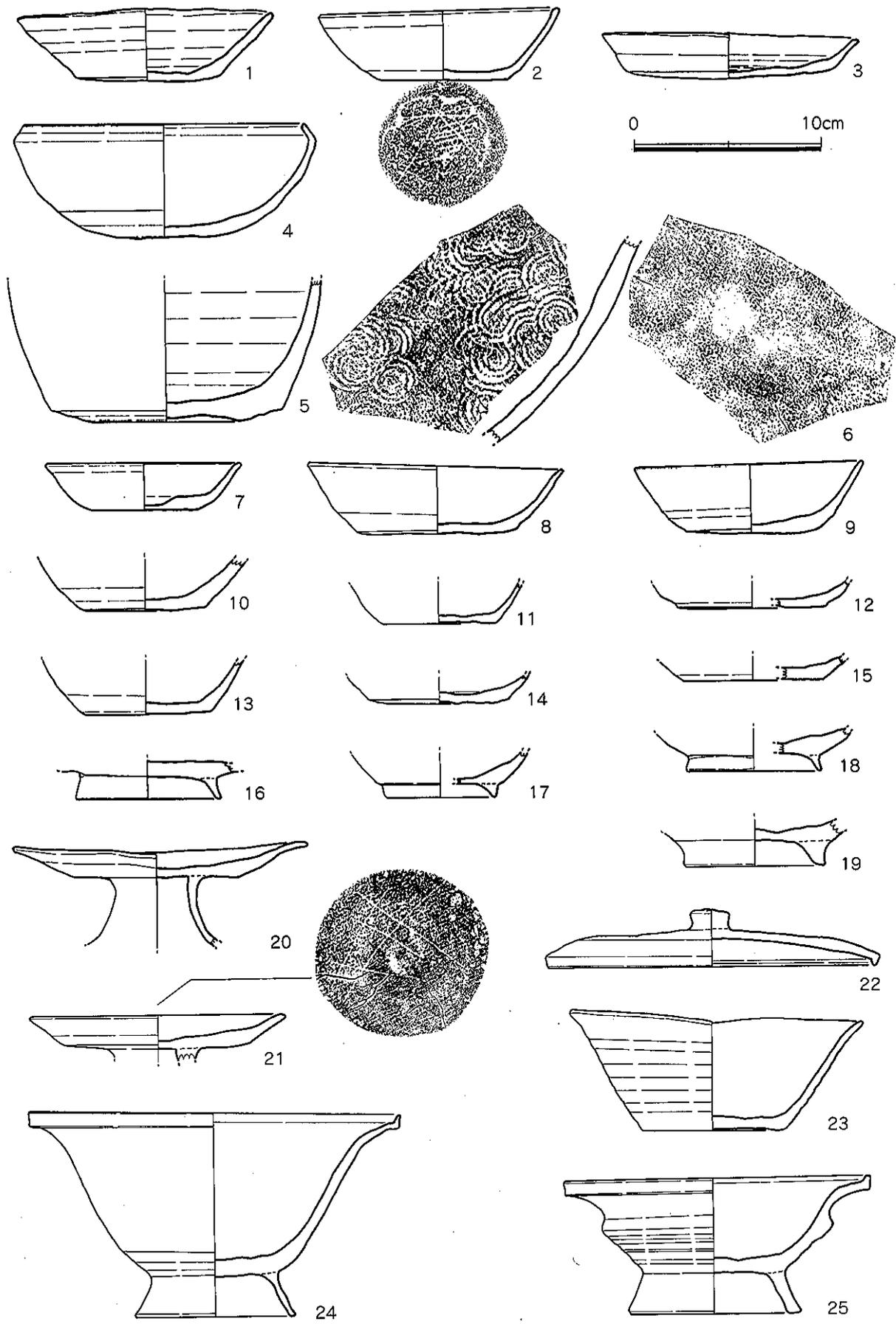
寄贈を受けた遺物は須恵器、土師器、平瓦を中心として、弥生土器や中世から近世にかけての陶磁器も少量含まれている。総量はパンケース約15箱に及ぶ。ここでは怡土城が機能した古代の遺物に限定し報告するが、量が多いため全形をうかがえるものを選択して図示した。また紙数が限られているためその詳細は表5の遺物観察表にゆずり、ここでは大まかな特徴について述べる。

1～6は須恵器で、1・2が坏、3が皿、4が鉢、5が壺、6が甗として図示した。一部焼成が悪く土師器の区別が曖昧なものも含む。坏と皿は回転ナデ成形後底部回転ヘラ切りするが、3は底部に板状圧痕を残す。2は底部にヘラ記号がみられる。4の鉢は平底の底部から若干内反り気味に体部が開き、口縁部との境で屈曲し内傾する。外面にススが付着する。6の甗は胴部片で外面は無文タタキを施し、内面に同心円文当具痕を残す。

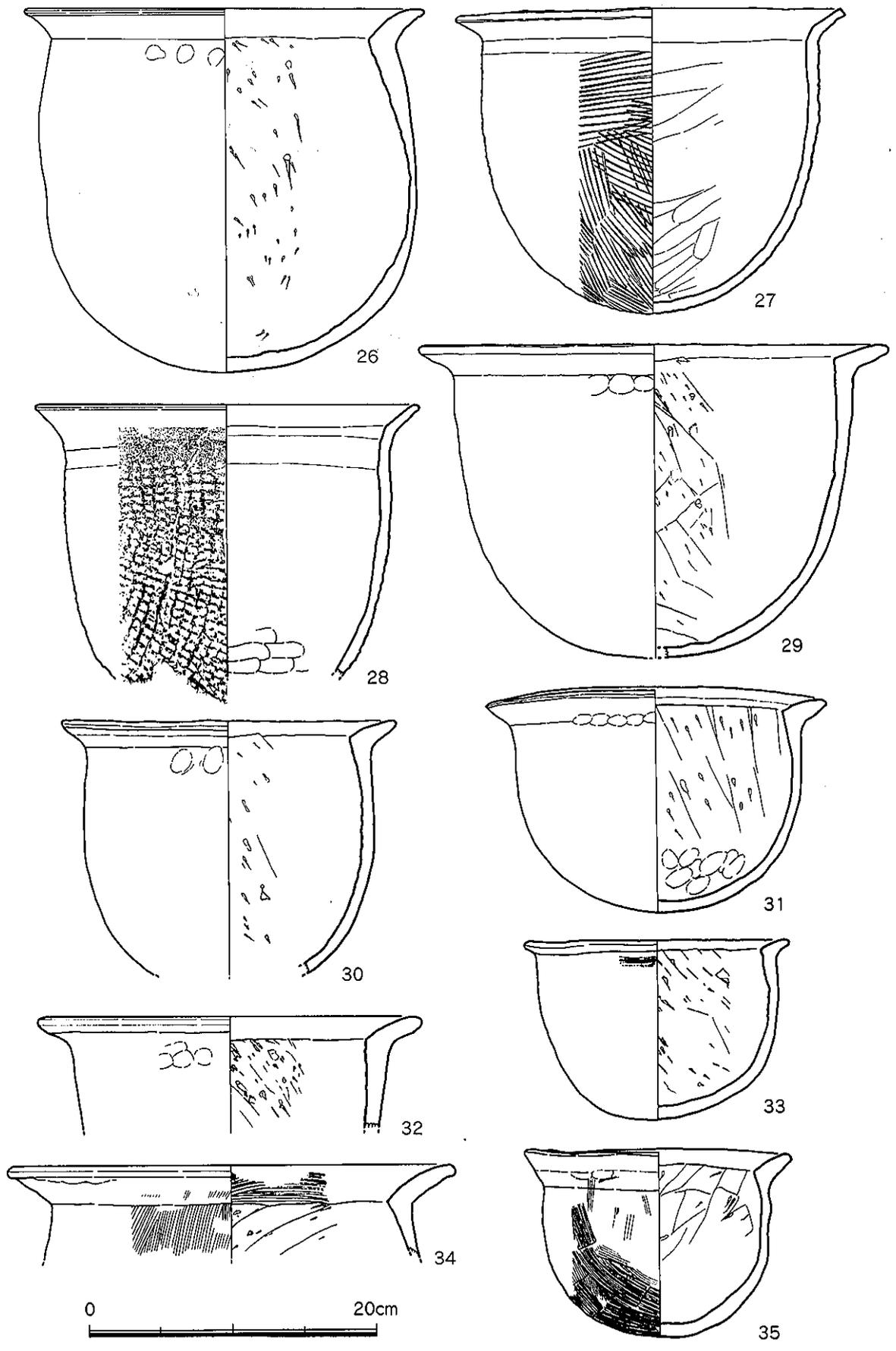
7～35は土師器で、7～15は坏、16～19は埴、20・21は高坏、22は蓋、23は鉢、24・25は脚付鉢、26～35は甗として図示した。前述の須恵器でも述べたが、須恵器の焼き損じを含めている可能性がある。坏は回転ナデ成形後底部回転ヘラ切りするが、焼成不良のためヘラ切り痕が明



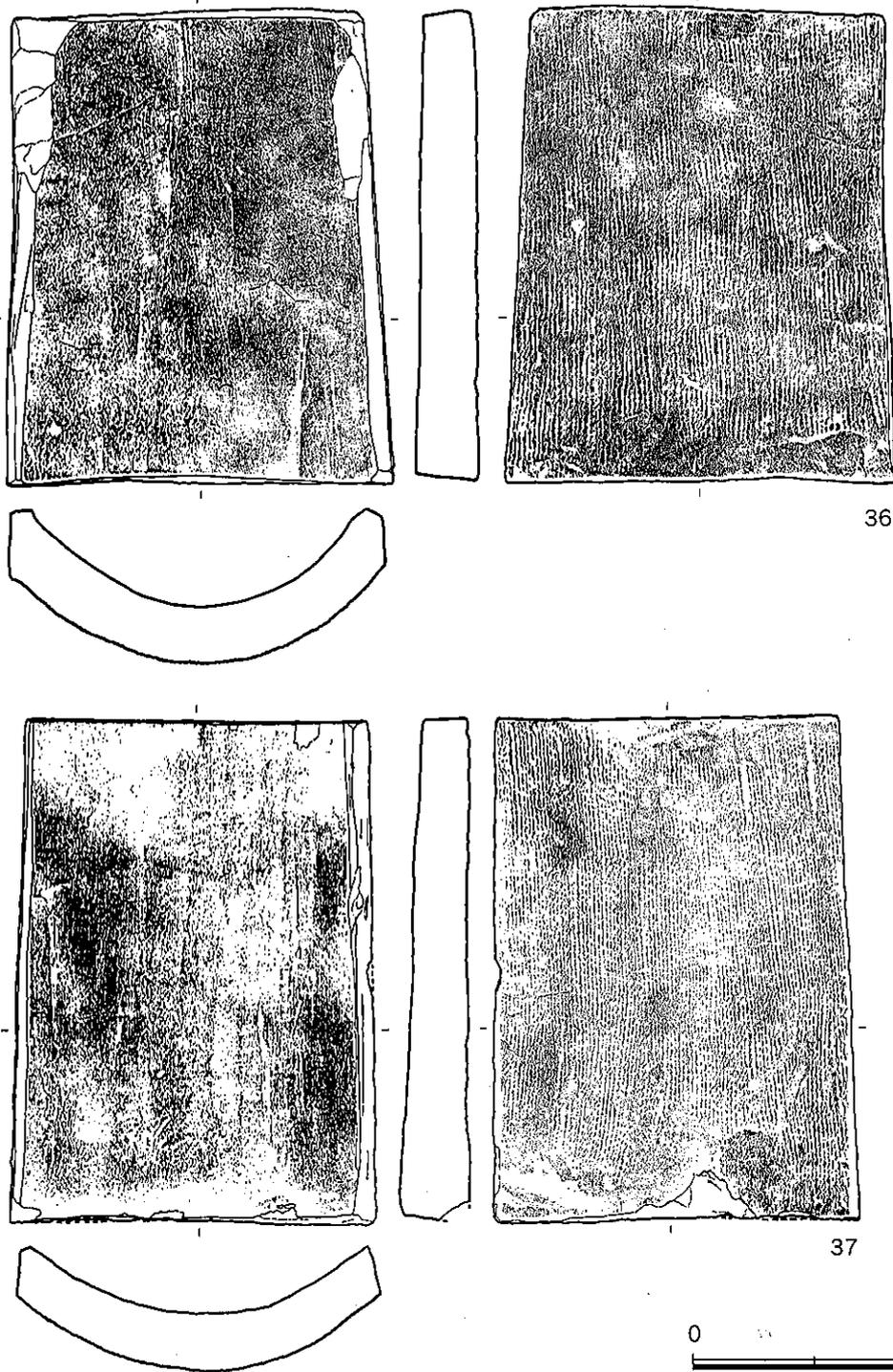
第42図 手嶋氏寄贈資料出土地点 (1/2,500)



第43図 手嶋氏寄贈資料土器実測図1 (1/3)

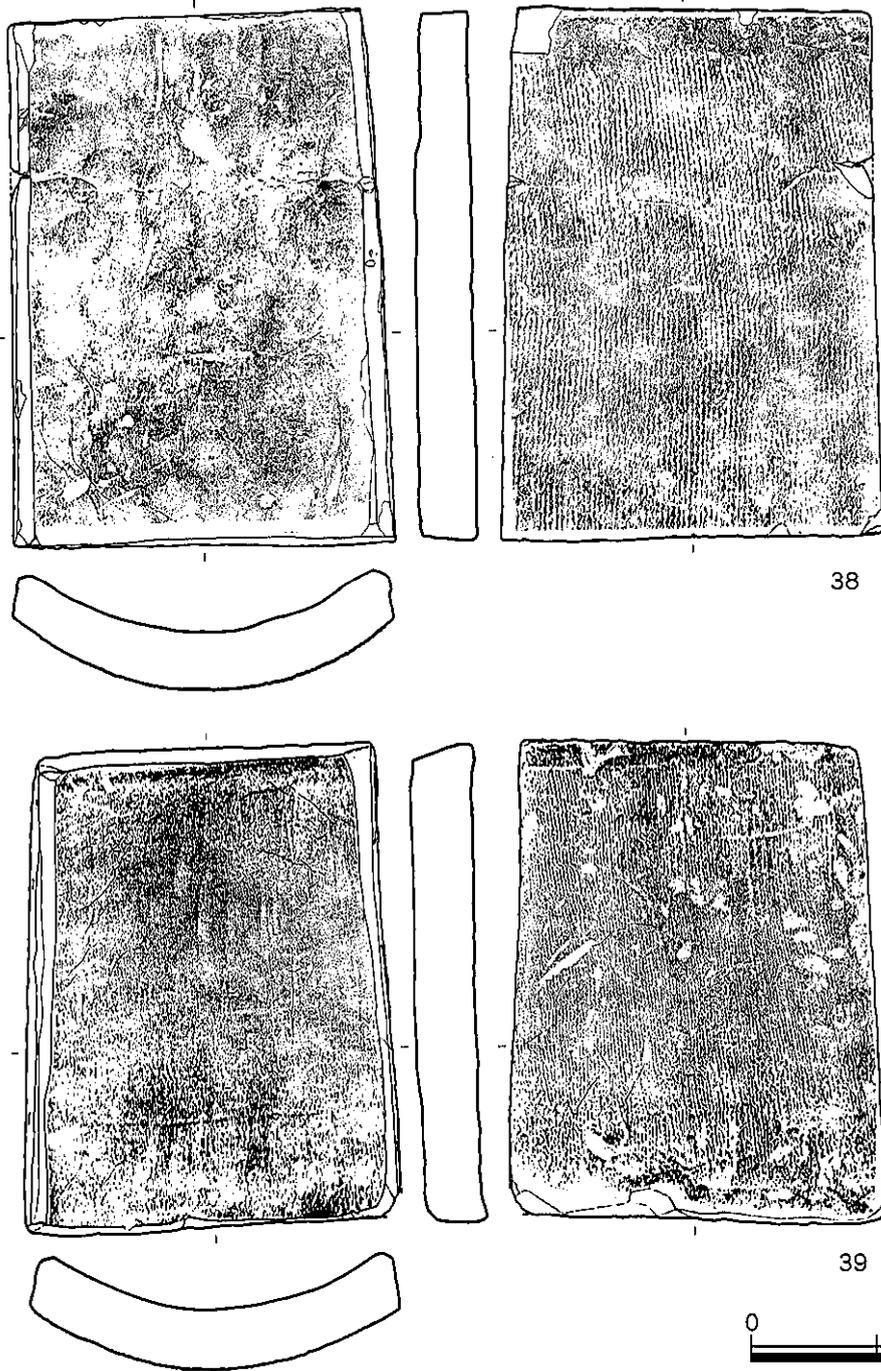


第44図 手嶋氏寄贈資料土器実測図2 (1/4)



第45図 手嶋氏寄贈資料瓦実測図1 (1/6)

瞭でないものもある。7・8・14は底部に板状圧痕を残す。壺は坏の底部に高台をナデ付けたものである。20・21の高坏は体部が大きく開く器高の低い皿に脚部を接合したもので、21の内面にはへら記号がみられる。高皿ともいえる器種である。22の蓋は回転ナデ成形後天井部回転へら切りし、摘みをナデ付ける。23の鉢は平底の底部から上方にひらく体部をもち、口縁部は若干外反する。回転ナデ成形後底部回転へら切りする。24・25の脚付鉢は平底気味の底部から上方にひらく体部

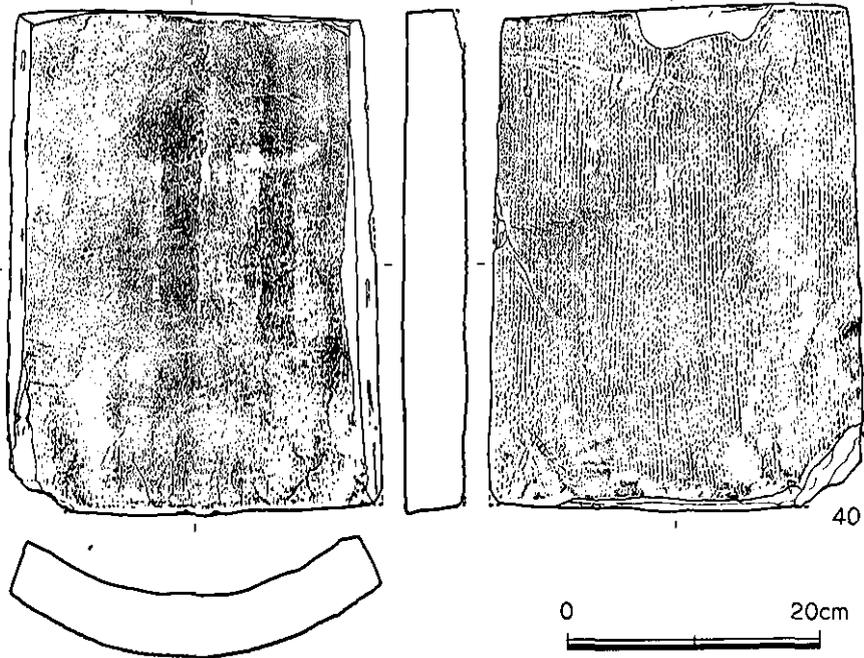


第46図 手嶋氏寄贈資料瓦実測図2 (1/6)

をもち、上位では大きく外反する。口縁部との境でほぼ水平となり、口縁部は直立し端部は丸みをもつ。25は体部外面中位が回転ナデにより突帯状に肥厚する。甕には大小の個体差がみられるが、大まかな共通しており、器形は丸底を呈し、胴部上位は直立気味（26・34は若干胴張り）で、口縁部は大きく外反する。頸部内面の稜は比較的明瞭である。成形は粘土紐を積み上げた後ヨコナデによるもので、内面は26・29～35でヘラ削り、34の口縁部ではヨコハケを施し、外面は27で平行タタキ、28で格子タタキ、34でタテハケ、35でヨコハケを施す。

36～40は平瓦でいずれも一枚作りによって成形される。凹面には布目痕を残し、凸面には縄目

タタキを施す。端部はヘラ削りによって面取りされる。いずれもほぼ完形で長さは36で40.5cm、37で42.9cm、38で43.3cm、39で39.4cm、40で40.8cm、幅は上端部で26.8~29.3cm、下端部で30.6~32.5cm(39・40は欠損)を測る。厚さは最も薄い38で3.8~4.1cm、最も厚い37で4.0~6.0cmと若干ばらつきがある。



以上が手嶋氏寄贈資料

第47図 手嶋氏寄贈資料瓦実測図3 (1/6)

の概要である。土器は遺存状態の良好なものを多く含むため、以前より怡土城跡の土器として認知されてきた。Ⅲ・坏は底部ヘラ切り未調整のものが多く8世紀後半~9世紀の特徴を示す。また器形、調整などから24の脚付鉢は8世紀後半~末、4の鉢、20・21の高坏、23の鉢は9世紀初頭~前半に比定できよう。また土師器甗は10個体分確認でき、礎石群の調査で煮炊具の出土が皆無だったのとは大きく異なる。胴部は張りが少なく、上位が直線化する特徴から8世紀後半~9世紀前半に位置づけられる。ただ27・28は外面にタタキを有するという9世紀後半以降にみられる特徴をもつが、大宰府史跡24次SD2680では下限が8世紀半ばに位置づけられる外面格子タタキの甗が存在するため、ここではイレギュラーな存在として捉えておく。出土状態が明確でないためこの見解は今後改める可能性がある。また平瓦も遺存状態が良好で、今後怡土城跡の平瓦の基準資料となり得るものである。(山口)

註

1. 土器の年代観は以下の文献を参考にした。

山本信夫1992「北部九州の7~9世紀中頃の土器」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東』(古代の土器研究会第1回シンポジウム)

山本信夫1996「古代前期の煮炊具—筑前・筑後・豊前・豊後・肥前」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東 煮炊具—』(古代の土器研究会第4回シンポジウム)

2. 怡土城に関連する鬼瓦

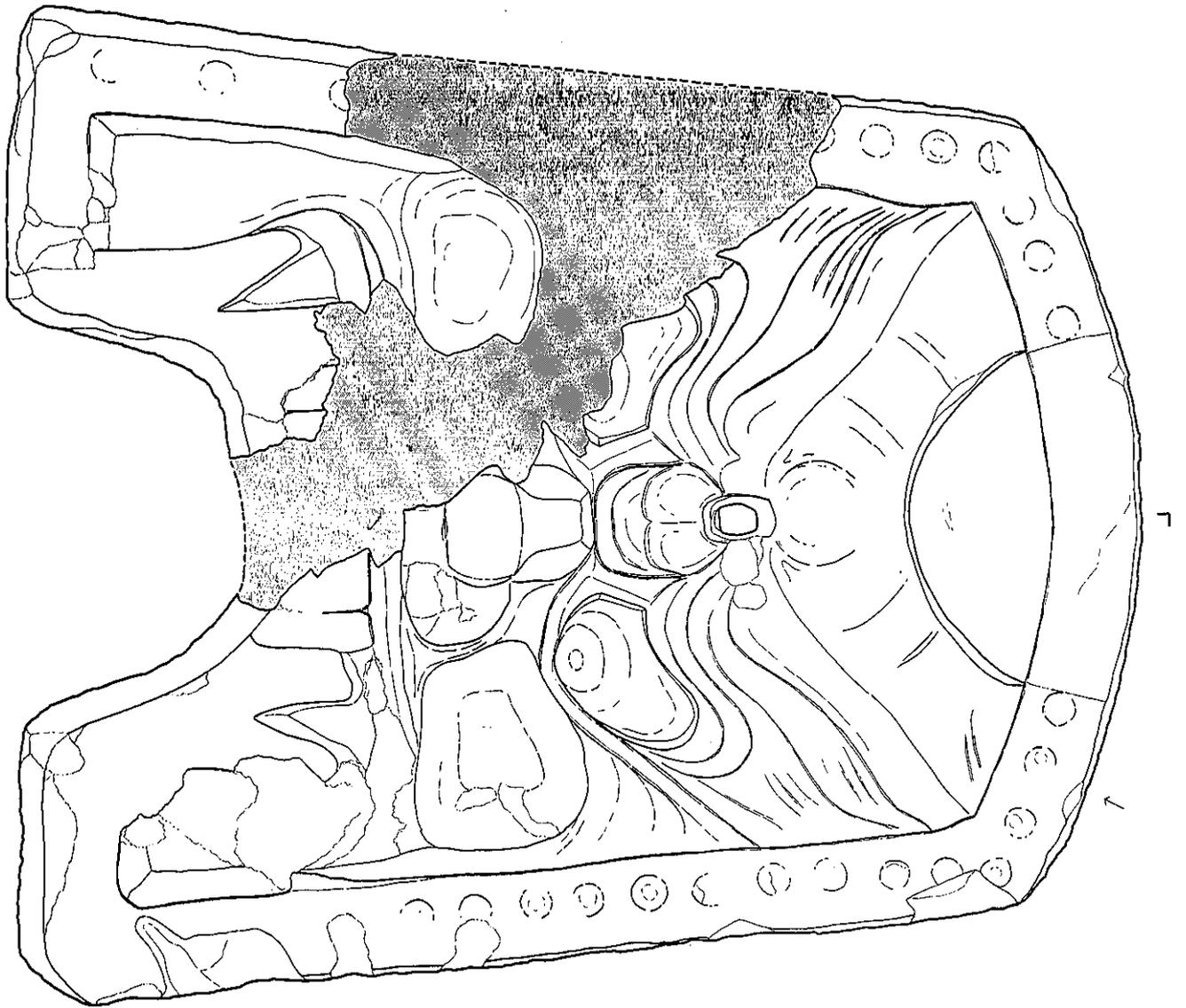
(1) 末永出土鬼瓦 (第48～50図、図版19-a)

怡土城跡の鬼瓦と一般に認知されている資料だが、厳密には怡土城跡の南東1.2kmの大字末永字松ヶ浦で採集されたものである。1936年の鏡山猛氏の報文で紹介され、当時末永在住の立花久松氏により自宅裏手の畑より採集されたとある。小田富士雄氏が設定したいわゆる都府様式鬼瓦で、毛利光俊彦氏のいうところの大宰府式鬼瓦Ⅰ式Aに該当する。現在伊都国歴史博物館に末永出土鬼瓦として常設展示されている。

資料は2つの破片からなるが、今は欠損部がコンクリートで補修され、全形を窺うことができる。形状は台形を基調とし、上辺は上向きに張った弧状をなし、下辺の真ん中を軒丸瓦に載せるため半円形に切り取る。また上辺の中央は半円形に浅く窪ませ、鳥衾瓦のかかりとする。長さ50.2cm、基底部幅44.5cm、肩幅35.9cm、厚さは中央で最大12cm前後だが、縁は上縁で3.3cm、基底部で5.5cmを測る。摩滅が著しいためその細部までうかがえないが、顔面のみ肉厚に表現した鬼瓦で、下顎下端、下歯の表現を欠く。空豆形の大きな怒り目と太く吊り上がった眉をもち、額には同心円状の力瘤が表現される。鼻は下向きで、鼻柱には3段の瘤がある。口唇部の側辺は内湾し、上顎には鋭く尖った1対の牙をもつ。その牙に挟まれるかたちで歯が表現されるが、中央部を欠き、また摩滅のためあまり明瞭ではない。類例より本来は整然と並んだ6本の歯があったと思われる。また通常は額の力瘤の両端に頭髮、頬から顎にかけては細かい巻鬘を配すが、本資料は摩滅が著しいため明瞭でない。外縁に沿って幅約4cmの珠文帯があり、径1.5cm前後の大粒の珠文が配される。欠損や摩滅のため正確な数は知りえないが、上辺の割込の両端に各3個、右外縁に12個以上、左外縁に7個以上を確認できる。眉間には隅丸長方形の釘穴を両方から穿孔する。土型もしくは木型で成形され、側面は平滑に仕上げる。裏面は擬格子タタキ、ナデなどの痕跡が確認できるが、摩滅

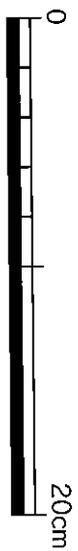
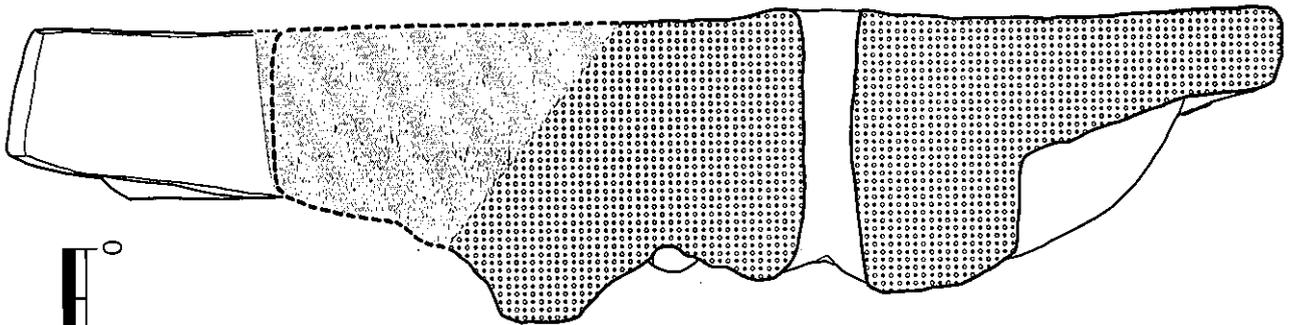


第48図 末永出土鬼瓦採集地点 (1/2,500)



7

7



■ コンクリート補修箇所

矢印部裏面の拓影



第49図 末永出土鬼瓦実測図 (1/3)



第50図 末永出土鬼瓦

が著しいため明瞭でない。焼成はやや不良、胎土は粗く、細かい白色砂粒を多く含む。色調はにぶい黄橙（10YR7/2）を呈す。同型の鬼瓦（大宰府式鬼瓦Ⅰ式A）は大宰府政庁跡を中心として、大野城跡、水城跡、筑前国分尼寺跡などの大宰府史跡内より多く出土しているが、それ以外では本例のみがしられる。

また鏡山報告も言及しているが、同地点よりもう1点鬼瓦片が採集されている。^(註4)今回は実測には至らなかったが写真（第50図）にてその概要を紹介したい。鼻を中心とした日から口唇部までの断片資料で、表面の一部が剥離するため全形はつかめないが、大宰府式鬼瓦特有の空豆形の怒り目と、上顎には4本の歯とそれを挟む牙（現状は1本）を確認できる。また眉間には釘穴が穿たれている。色調は橙色系を基調とする。毛利光氏の分類では大宰府式鬼瓦Ⅱ式に該当し、大宰府政庁跡、観世音寺、筑前国分寺、三宅廃寺、杉塚廃寺、弥勒寺跡、肥前国分寺跡など筑前を中心に豊前、肥前と広範に分布が認められる。

なお鏡山氏は同地点の「舌状に北に伸びた丘陵の北端に当り、周囲の水田より僅かに高くなっている」という地形と、2点の鬼瓦に加え怡土城跡で多く発掘される平瓦片も採集されることからここに瓦窯跡を想定している。^(註5)（山口）

註

1. 鏡山猛1937『怡土城跡の調査』（日本古文化研究所報告第6）日本古文化研究所
2. 小田富士雄1957・1958「大宰府系古瓦の展開」『九州考古学』1～6・13（のち小田1977『九州考古学研究 歴史時代篇』学生社に所収）
3. 毛利光俊彦1980「日本古代の鬼面文鬼瓦－8世紀を中心として－」『研究論集Ⅵ』（奈良国立文化財研究所学報第38冊）
4. 末永在住の立花氏が所蔵。瓜生秀文も以下の文献で言及している。
瓜生秀文2001「伝怡土城跡出土の鬼瓦」『溝漕』第9・10合併号 古代山城研究会
5. 註1と同じ

(2) 大圓寺所蔵鬼瓦 (第51～56図、図版19-b)

調査にいたる経過

平成11年(1999)11月、前原市教育委員会では伊都歴史資料館(現伊都国歴史博物館)を会場として「怡土城とその時代」展を開催した^(註1)。その際、各方面から資料の借用などで多大なるご協力を賜ったのであるが、その特別展の終了後(1999年12月20日)、福岡市博物館の林文理氏より貴重な情報を入手した。それは大圓寺(福岡県福岡市中央区唐人町所在)が伊都歴史資料館所蔵の鬼瓦とは異なったデザインの伝怡土城とされる鬼瓦を所蔵しているというものであった。そこで、後日、大圓寺を訪ねて、木下讚太郎氏が生前収集していたという遺物(古瓦)を実見した。

木下讚太郎氏について

木下讚太郎氏は明治8年(1875)4月18日、福岡県福岡市で誕生し、昭和37年(1962)1月28日に死去するまで多数の実績を遺した福岡市在住の地方史家である^(註2)。ここでは、木下氏の実績のなかで怡土城に関するものを紹介したい(『福岡日日新聞』による)。

大正6年(1917)6月10日に糸島郡怡土村大門の稲戸常吉氏の報告を受けて、当時、糸島史談会会長であった木下氏以下、糸島史談会員が怡土村の東方一帯の丘陵部(詳しい場所については不明)を発掘調査している^(註3)。同年6月23日にも糸島史談会員一行が怡土城址を踏査し、城郭内で警報臺(望楼跡)を発見している^(註4)。同年7月8日には怡土城址保存会が発足。会長に木下氏が就任している^(註5)。同年8月上旬「怡土城址記念碑」建碑計画が決定され、それに伴い同年8月18日に木下氏は怡土村民一同を高祖金龍寺に集めて怡土城に関する講演会を行っている^(註6)。なお、怡土城址碑は大正7年(1918)2月中旬に建立の許可が下りている^(註7)。また、怡土城址保存会においては怡土城址実測大地図を作成するために、木下氏の指揮の下に測量に着手している^(註8)。写真(第51図)は、大圓寺



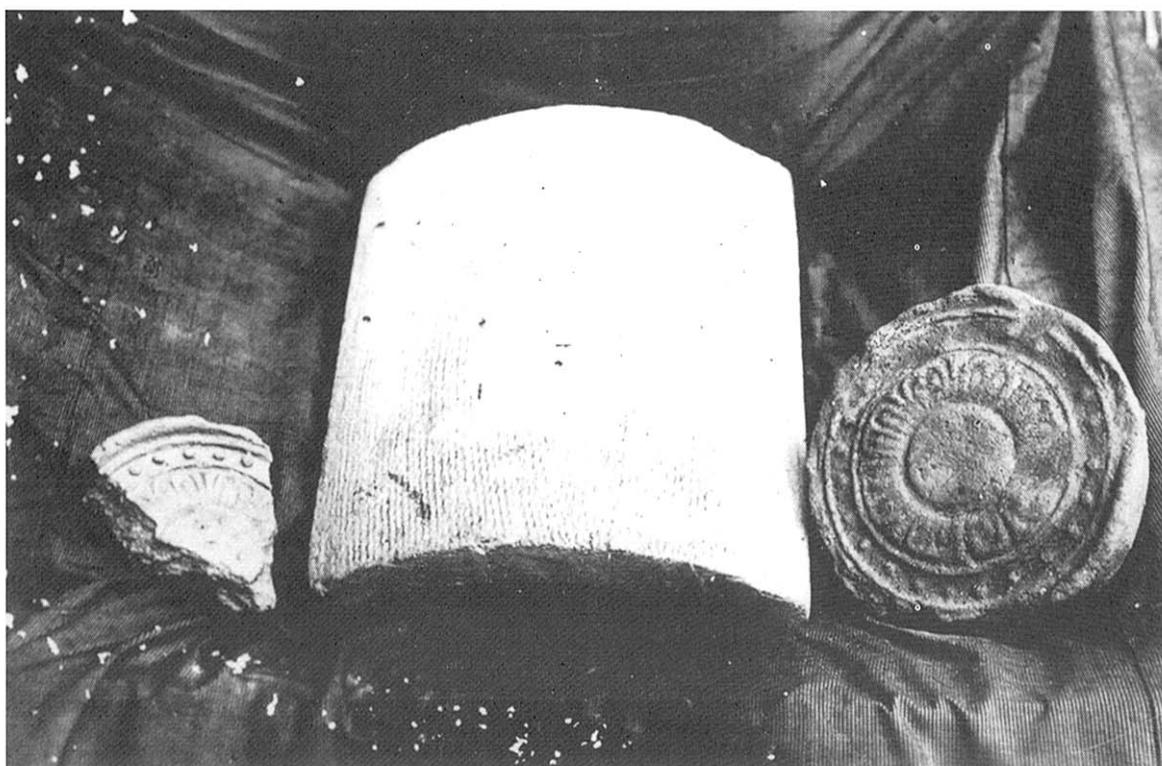
第51図 怡土城土塁と木下讚太郎氏(大正年間)

寺に保管されている木下氏の記録写真の1枚で、怡土城の土塁（場所は不明。大門地区か）の一部を発掘調査した際のものと思われる。写真の裏面に「大正三年 怡土城にて」と裏書があることから、大正3年にも怡土城の土塁の一部を発掘調査しているのかもしれない。木下氏は怡土城を精力的に調査しており、大圓寺所蔵の遺物（古瓦）には、大正年間の調査の際に表採もしくは出土したものがふくまれている可能性があると思われる。

木下コレクションについて

大圓寺に所蔵されている怡土城跡出土と伝えられる遺物（古瓦）は、整理・未整理分を含むとハンコンテナー約3～5箱くらいになり、平瓦の破片が大半を占めている。それらを復元すると、幅約29cm、縦の長さ約41cm、厚さ約4cm、重さ約10kgを測る厚手の平瓦となる。胎土に2mm程の白色砂粒を含み、焼成は良好である。調整は内側に布目が残り、外側には縄目状の調整痕を残す。これらは通常の平瓦よりもかなり厚く、怡土城からも多く出土している。こ厚手の平瓦について、栗原和彦氏は「怡土城の新営に採用された瓦は、厚手の縄目叩きの平瓦で怡土城に限って用いられたようである。」と指摘している^(註10)。この他に丸瓦・軒丸瓦・鬼瓦を各1点確認しているが、丸瓦と軒丸瓦に関しては他の遺跡からの混入の可能性があるのでここでは割愛することにする^(註11)。なお、鬼瓦については次項で説明する。

以上が現在確認できる大圓寺の木下コレクションであるが、かつて木下氏はこの他にも怡土城に関連する遺物（古瓦）を所蔵していたようである。その一部が大圓寺に保管されている木下氏の記録写真として残されている（第52図）。この写真（第52図）には平瓦が1枚、軒丸瓦が2片納められている。写真の裏には「大正3年 怡土城瓦（高祖山）」と裏書があることから、これらも大正年間の調査時に出土したものと推定される。平瓦は厚手で大圓寺所蔵の平瓦と同種のもの、軒丸瓦



第52図 木下氏収集の怡土城の瓦（大正3年）

は中房に1+8の蓮子を配し、その周辺に複弁7つと単弁1つとからなる変則的な複弁八弁蓮花文をもつタイプとみられる。このタイプの軒丸瓦は怡土城郭内からの出土が知られており、同じ瓦当文様は筑前国分寺からも出土している。国分寺造営や怡土城の築城時期から8世紀中頃に編年されている。^(註12)^(註13)

大圓寺所蔵の鬼瓦について

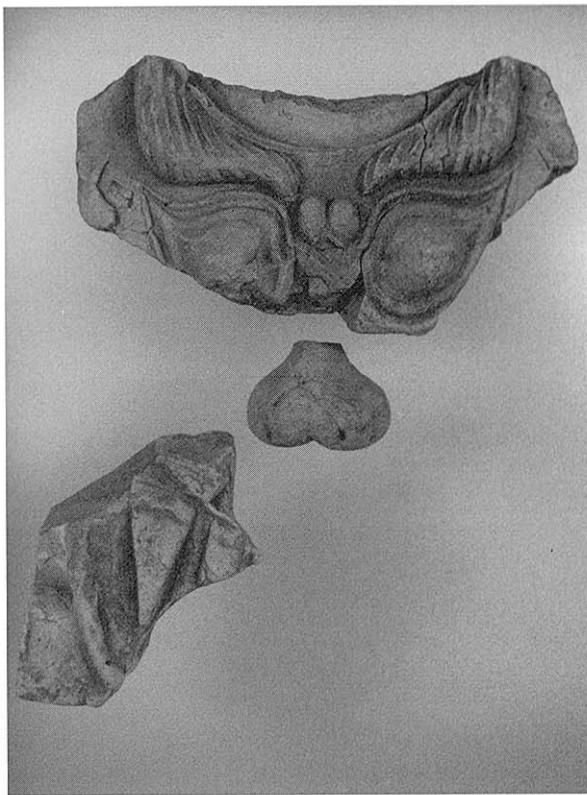
大圓寺所蔵の鬼瓦は、木下氏が生前に怡土城出土遺物として大圓寺第32世住職・波多野聖雄氏に寄贈したもので、伝怡土城出土とされるのはそのためである。残念ながら墨書きはない。現在、大圓寺に保管されている平瓦、記録写真(第51・52図)、木下氏と怡土城との関わりからみて、この鬼瓦も大正年間の調査の際に表採もしくは出土したのかもしれない。

この鬼瓦は復元長約43cm、復元幅約33cm、厚さ9cmを測る。鼻から上の部分と歯の一部が残存している。胎土は2cm程の白色砂粒を含む。焼成は良好で、色調は暗赤茶色を呈する。表面の調整は丁寧であるが、裏面の調整は粗い。外形は円頭台形で、外縁に珠文はないが、その代わりに雲状の文様が施されている。眉の形はし字形に鋭く上側に向き、烏衾かかりの削り込みがある。眼の部分はあまり起伏がなく比較的になだらかな形状をしている。頬の部分もあまり起伏がなく比較的になだらかな形状をしている。全体的にあまり起伏がなく、すなわち平板上に眼、鼻、口を単に取り付けたというような平面的なデザインである。

大圓寺所蔵の鬼瓦のデザインはほとんど類似例をみないが、北浦廃寺(北九州市八幡西区大字犬丸)の鬼瓦と酷似している。北浦廃寺の鬼瓦は竹中岩夫氏の採集品であり、現在は北九州市立考古博物館(現いのちのたび博物館)の所蔵になっている。北浦廃寺の創建は出土古瓦の年代観から平安前期頃(9世紀代)に比定され、鬼瓦は創建時に使用されたものと推定されている。^(註14)北浦廃寺に



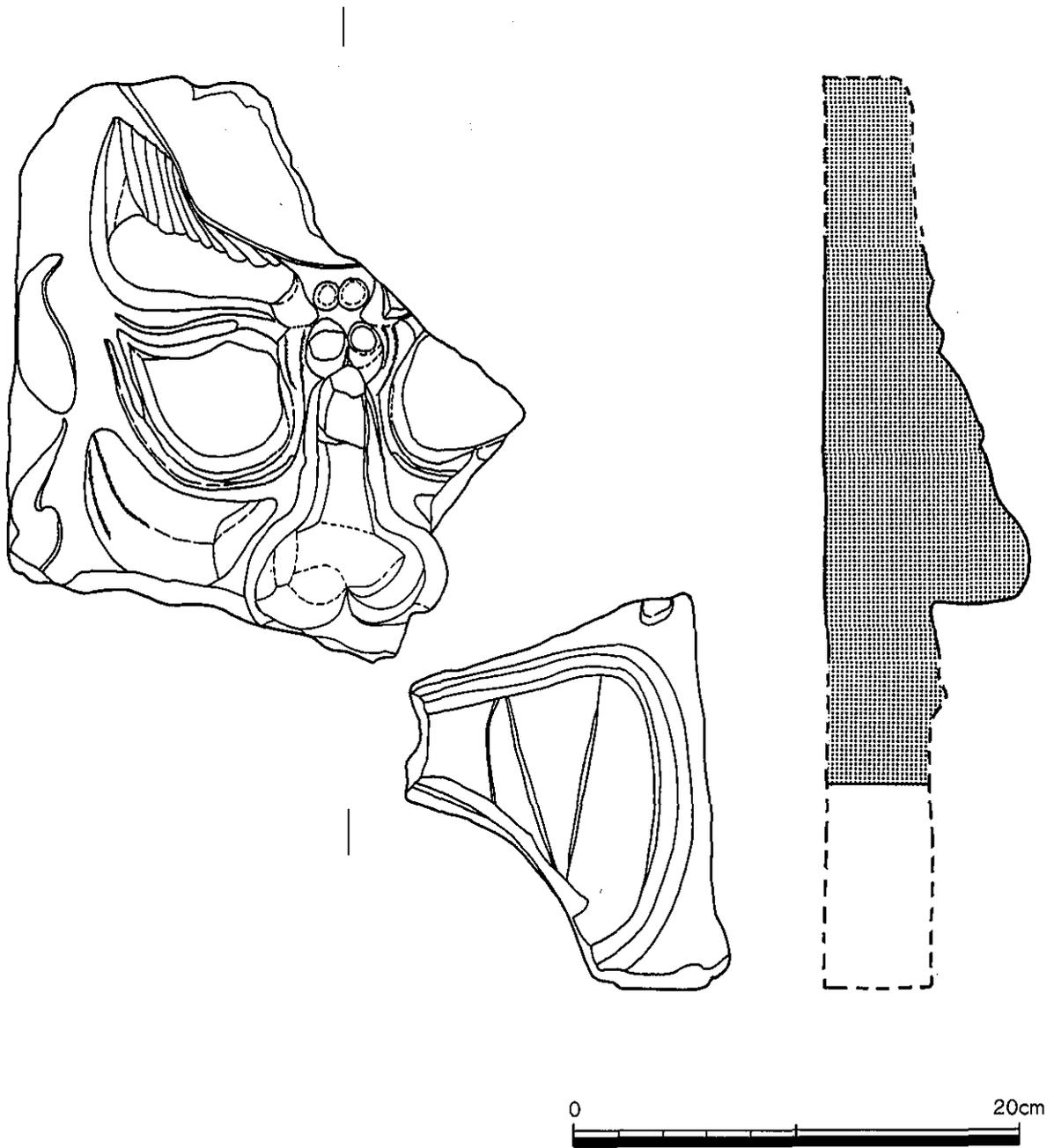
第53図 大圓寺所蔵鬼瓦



第54図 北浦廃寺出土鬼瓦

は古瓦と礎石があつて古代寺院とされてきたが、渡辺正気氏は塔心礎が発見されていないことやこの地域にこのような寺院を建立する有力な豪族が見当たらないことから、『延喜式』に見える「夜久(註15)駅」に比定している。

ところで、九州では奈良から平安時代にかけて、大宰府式鬼瓦（都府楼系鬼瓦）と呼ばれる鬼面鬼瓦が大宰府を中心に盛行する。この形式の鬼瓦は、顔面のみ表わし、下顎・下歯の表現を欠き、鬼面全体が高く盛り上がる。外形は円頭台形で、外縁にそつて珠文をめぐる。歯牙をむき、空豆形の眼と太い眉をつり上げ、額に同心円状の力瘤を表現する。力瘤の両端には頭髮、顎には細やか



第55図 大圓寺所蔵鬼瓦実測図 (1/3)

なまき毛を配する。頂部に半円形に浅く窪ませた部分を作って鳥衾のかかりとし、別に焼成前に1～2個の釘穴を穿つ。大宰府式鬼瓦については、毛利光俊彦氏より3種に分類されており、Ⅰ式が大宰府Ⅱ期の創建時、Ⅱ式はⅠ式とそれほど年代が隔たらない時期、Ⅲ式は天慶4年(941)藤原純友の乱後の大宰府再建期(Ⅲ期)に比定されている。^(註16) 栗原氏はⅢ式について「出土量が極めて少ない。さらには文様も形式学的に見て(Ⅰ式よりも)やや後出のもの」と考えている。^(註17)

北浦廃寺と大圓寺の鬼瓦は、大宰府式のⅠ～Ⅲ式ではないが、小田富士雄氏により「大宰府系の憤怒相鬼面の脱化形式である。」と指摘されており、平安時代に大宰府式鬼瓦を模倣して作製された鬼瓦と考えられる。それに対して、伊都歴史資料館(現伊都国歴史博物館)には怡土城の創建時に使用されたと考えられている鬼瓦が所蔵されている。^(註18) 毛利光氏はこの鬼瓦を大宰府式鬼瓦のⅠ式Aとしており、^(註20) 栗原氏もまたⅠ式Aとしており、Ⅰ式Aは大宰府と怡土城のみに用いられたと指摘している。^(註21)

怡土城第5望楼の発掘調査の結果、2期にわたる建物跡が確認されており、1期目が掘立柱建物(8世紀後半)、2期目が礎石建物(9世紀初頭)であると考えられている。^(註22) このことから、怡土城郭内の望楼・門等の建造物は9世紀初頭に建て替えが行われていることが想定される。もし大圓寺所蔵の鬼瓦が怡土城から出土したものだとするれば、第5望楼の発掘調査の結果から推測して、9世紀初頭の怡土城郭内の建造物の建て替えの際に使用された鬼瓦の一部と考えることができよう。しかし、現段階では推測の域を出るものではない。

まとめ

大圓寺所蔵の鬼瓦は北浦廃寺出土の鬼瓦と酷似しており、この鬼瓦が怡土城からの出土であることが確認できれば、怡土城では9世紀代に北浦廃寺系の鬼瓦が使用されていたことになる。怡土城の創建期に使用された鬼瓦は大宰府式鬼瓦(Ⅰ式もしくはⅡ式)であり、怡土城所用の鬼瓦は時期によってその供給地が異なることが想定される。このことは重要な問題点を提起しているといえよう。今後の怡土城に関する資料の蓄積と大圓寺所蔵の木下コレクションの整理が推進されることに期待がかかる。(瓜生)^(註23)



第56図 伊都国歴史博物館所蔵鬼瓦

註

1. 瓜生秀文2000『怡土城とその時代』（前原市教育委員会）
2. 梶島政司2000「木下讀太郎と創立期の筑前史談会について」（『県史だより』第111号、福岡県地域史研究所）
3. 『福岡日日新聞』大正6年6月20日
4. 『福岡日日新聞』大正6年6月28日
5. 『福岡日日新聞』大正6年7月10日
6. 『福岡日日新聞』大正6年8月11日
7. 『福岡日日新聞』大正6年8月11日
8. 『福岡日日新聞』大正7年2月14日
9. 『福岡日日新聞』大正7年2月14日
10. 栗原和彦2000「大宰府史跡出土の軒平瓦」（『九州歴史資料館研究論集』・25）
11. 波多野聖雄氏は平瓦・鬼瓦の他に丸瓦・軒丸瓦各1点を怡土城出土遺物として整理している。しかし、木下讀太郎氏から生前に寄贈を受ける際に各遺物の出土地について聞いたものの、この丸瓦・軒丸瓦各1点に関してのみどの遺跡の出土遺物であったのか記憶が定かではなく、とりあえず怡土城出土遺物として整理しているということである。このことから他の遺跡からの混入の可能性があるために割愛した。
12. 鏡山 猛1937「怡土城址の調査」（『日本古文化研究所報告』第六）
13. 高橋 章1983「鴻臚館系瓦の様相」（『大宰府古文化論叢』下巻、九州歴史資料館）
14. 『北浦廃寺』（北九州市教育委員会、1973年）。小田富士雄1981「北浦廃寺」（九州歴史資料館編『九州古瓦図録』柏書房）
15. 渡辺正気1987『日本の古代遺跡』34福岡県（保育社）
16. 毛利光俊彦1980「日本古代の鬼面文鬼瓦－8世紀を中心として－」（『研究論集IV』奈良国立文化財研究所学報38冊）
17. 栗原和彦1995「大宰府式鬼瓦・老司式軒瓦・鴻臚館式軒瓦」（『王朝の考古学』雄山閣）
18. 註(14)1973年
19. 註(12)

この鬼瓦は怡土城内の発見物ではなく、城址東南の末永地区の瓦窯と推定される遺跡から出土している。伴出する平瓦から怡土城所用と考えられている。
20. 註(16)
21. 註(17)
22. 『史跡 怡土城跡保存管理計画策定報告書』（前原町教育委員会、1979）。なお、第5望楼付近の土塁の城内側裾部より9世紀初頭の土器群が出土している。これは怡土城の土塁の修復工事に伴う地鎮祭に用いた土器群もしくは兵士が使用した土器群と考えられる。この土器群の出土からも怡土城は9世紀初頭まで「城」として機能していたと考えられる。
23. 註(12)。瓜生秀文2001「神功皇后伝承覚書」『筑紫野市史』資料編（上）考古資料（筑紫野市）。末永地区からはもう1点鬼瓦片が出土している。この鬼瓦片は目・鼻・前歯の一部分しか残っていないが、大宰府式鬼瓦の分類によるとII式に相当する。

(3) . その他の鬼瓦

平成11年度に高祖地区
一帯の聞き取り調査を実施
したところ、太平洋戦争期
に大鳥居口城門跡付近で少
なくとも鬼瓦が3個体出土
しており、大鳥居口城門の
北側土塁の頂上部に設置さ
れた祠の中にその鬼瓦は置
かれていたということであ
る。当初は祠の前面に鉄格
子があり鬼瓦は無事保管さ
れていたが、鉄の供出のため
その鉄格子が取り除かれ、
その後に鬼瓦は紛失したと
のことである。大鳥居口城
門の構造を解明する上で貴
重な資料であり、その紛失
は惜まれる。(瓜生)



第57図 大鳥居口城門北側土塁上部の祠 (木下謙太郎氏コレクションより)



第58図 大鳥居口城門 (城外側より城内側を望む)

3. 怡土城採集資料

(1). 大門地区土塁崩壊地点採集資料 (第59~61図、図版20-a・b)

昭和51年度に大門地区の土塁の一部が崩壊した。その際、多数の遺物を採集できたので紹介することにする。

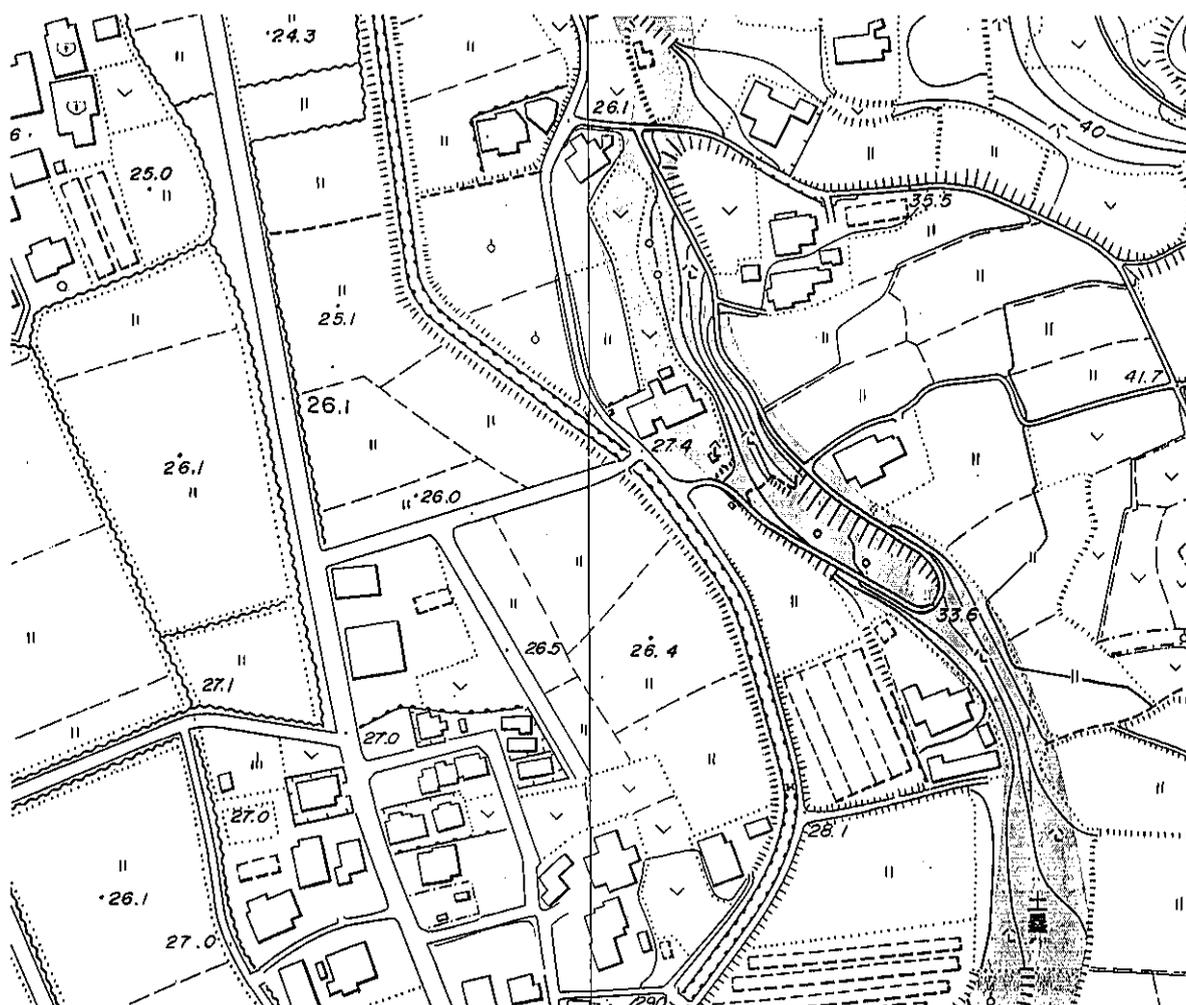
採集遺物は須恵器、土師器、鞆羽口、鉄滓、瓦、埴など総量はパンケース約15箱に及ぶ。限られた紙数のためその特徴的な遺物のみを報告する。また報告する遺物の詳細も表6の遺物観察表にゆずり、ここでは大まかな特徴を述べるに留まりたい。

須恵器

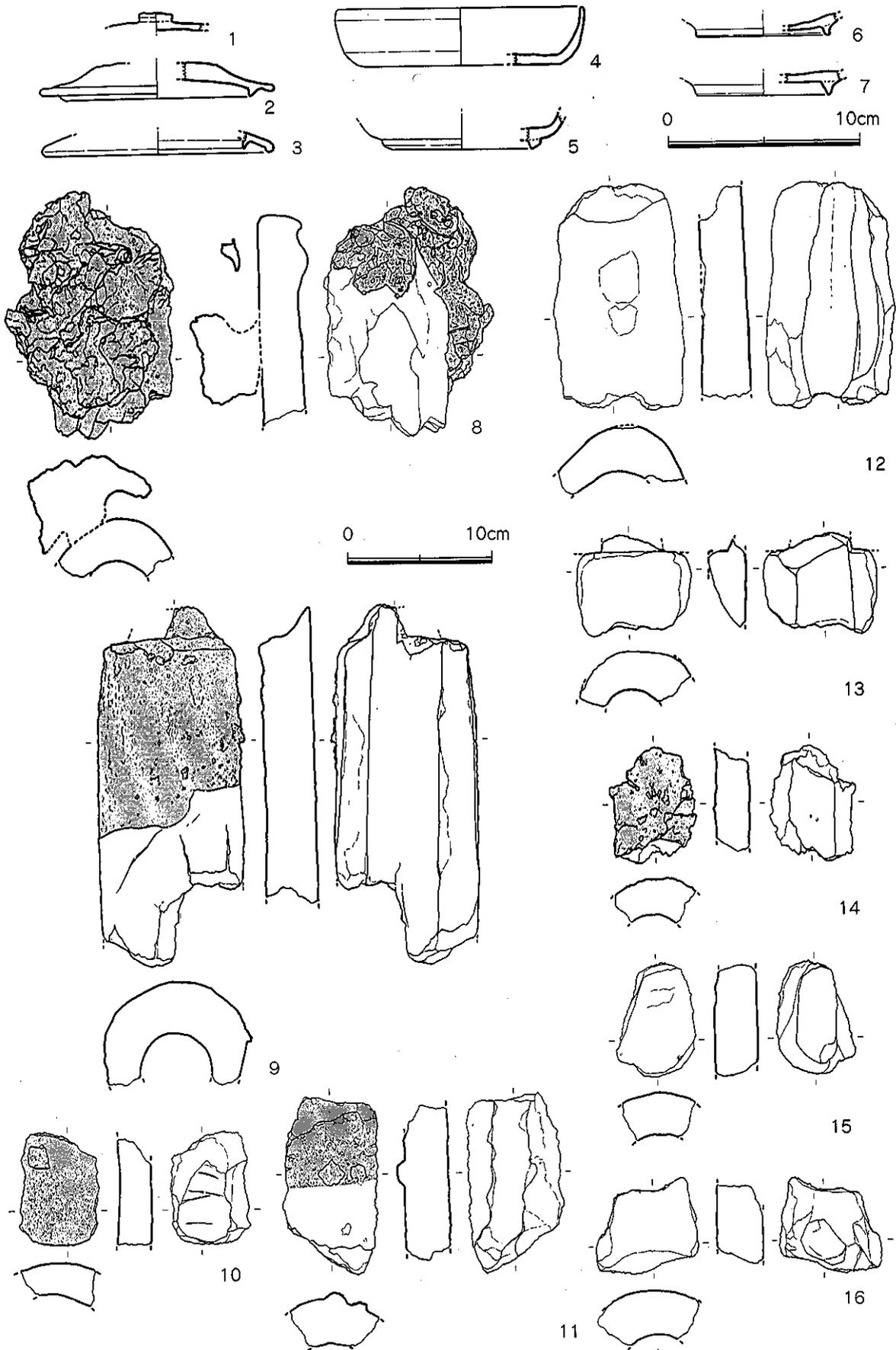
1~6は須恵器で、1~3は蓋、4は坏、5・6は埴である。1は天井部の破片でボタン状の摘みをナデ付ける。2・3の蓋は内面にかえりをもつが、2はナデ付け、3はナデによって摘み出す。4の坏は底径と口径の差がほとんどなく、体部はやや外傾気味に立ち上がる。回転ナデ成形後底部回転ヘラ切りする。5・6の埴は回転ナデ成形後回転ヘラ切りし、高台をナデ付ける。

土師器

7は土師器埴である。成形方法は上記の須恵器埴と同様に回転ナデ成形後回転ヘラ切りし、高台をナデ付ける。

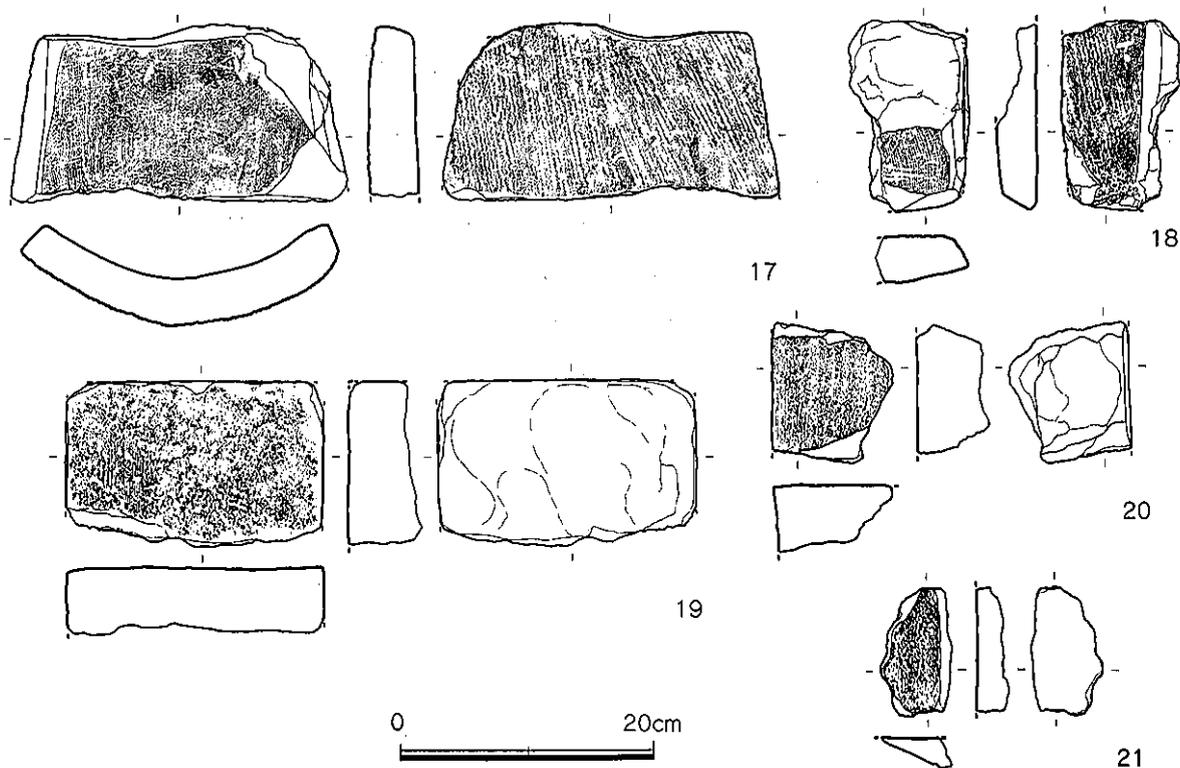


第59図 大門地区土塁崩壊地点 (1/2,500)



第60図 大門地区土壘崩壊地点採集遺物実測図1 (1~7は1/3、8~16は1/4)

は鉄滓・鉄分付着



第61図 大門地区土壘崩壊地点採集遺物実測図2 (1/6)

製鉄関係資料

8～16は鞆羽口である。形状は円筒状を呈し、9・13より先端部は有段になることが看取される。いずれも断片資料のため長さは不明だが、幅（直径）は9で10.3cm、孔径は4.8cmを測る。おそらく5cm前後の棒状工具に粘土を巻き付け成形し、棒状工具を引き抜き円筒状に仕上げるものと思われる。胎土は総じて粗く、3mm前後の白色砂粒を多く含む。表面には鉄分と思われる溶解物が付着し、割れ口にも広く認められることから使用時に破碎したと想定できる。8には鉄滓も付着する。

瓦

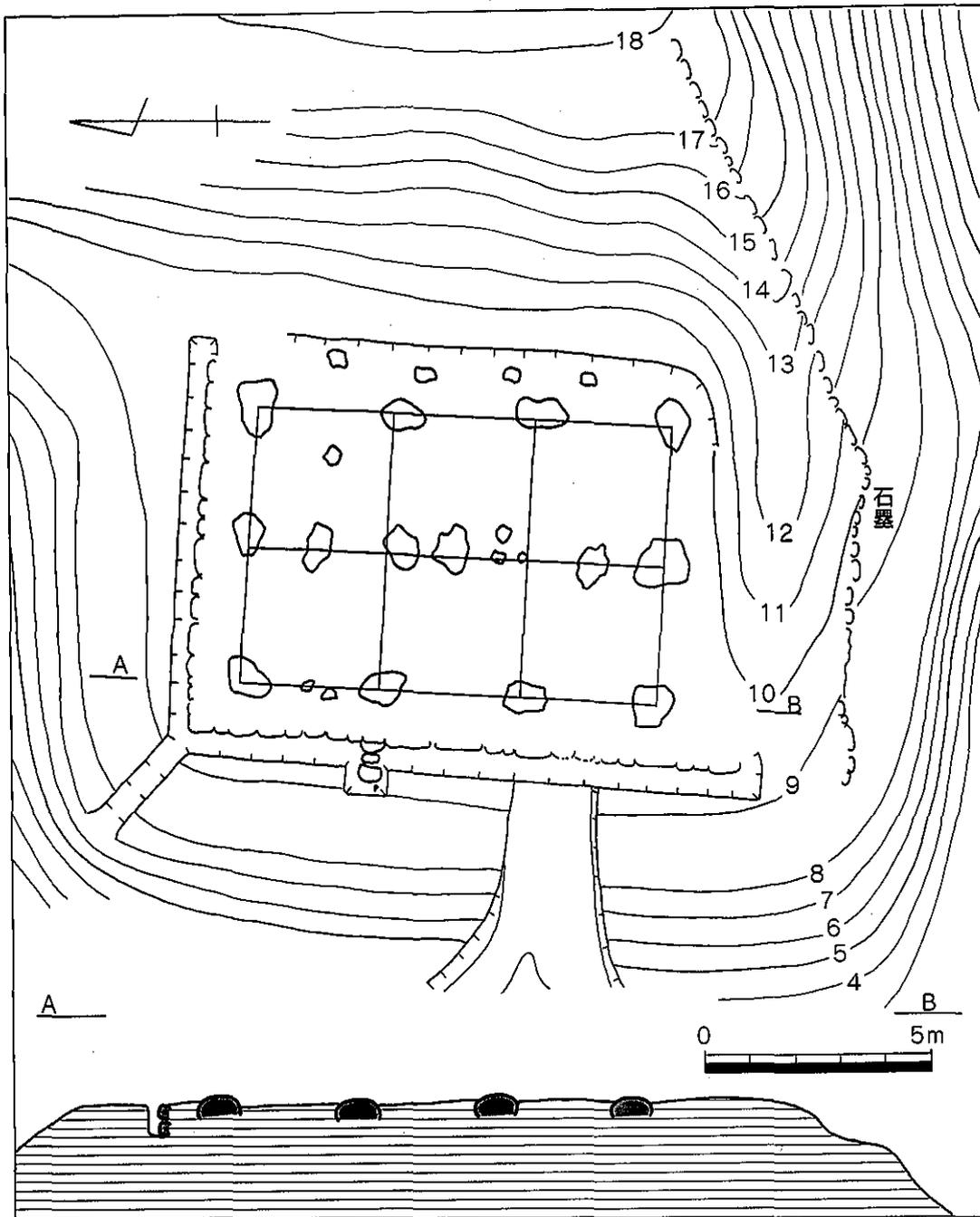
17・18は平瓦で一枚作りにより成形される。凹面には布目痕を残し、凸面は縄目タタキを施す。端部はヘラ削りにより面取りされる。破片のため長さ、幅は不明だが、厚さは17で3.3～4.0cm、18で3.2～3.8cmを測る。

19～21は無文埴でいずれも断片資料である。おそらく箱状の範型で成形されたと思われ、表面にはハケメを施すが、側面はナデやヘラ削りで調整される。破片のため長さ、厚さは不明だが幅は19で20.8cmを測る。

以上が採集遺物の概要だが、2・3の須恵器蓋や4の坏などは8世紀末頃に比定でき、怡土城が8世紀第3四半期に築城されたという記録と矛盾しない。また怡土城で当時使用されていた平瓦や埴の出土は土壘改修を示唆するのに加え、近辺にそれを用いた構造物があったことも予感させる。また鍛冶関連遺物である鞆羽口や鉄滓が多く表採されていることも注目に値する。ただこれらの製鉄関連遺物の帰属時期が怡土城の機能した時期なのか、それとも別の時期なのかは明確でない。また製錬、精錬、鑄造など製鉄のどの段階で使用され廃棄されたかは明確でなく今後の課題である。将来的には科学的分析が必要であることはいうまでもない。（山口）

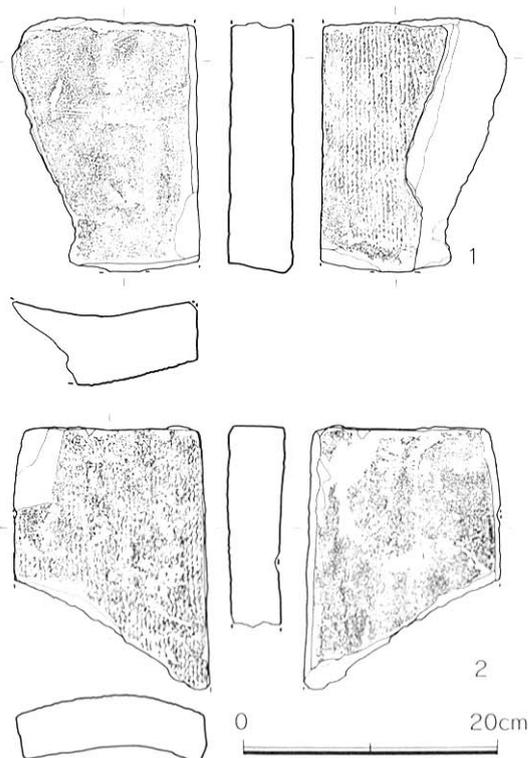
(2) 一ノ坂礎石群採集資料 (第62~64図、図版21-a)

一ノ坂礎石群は怡土城内の東部、標高約210mにある望楼跡である。1936年に鏡山猛氏によって発掘調査が実施されている。報告書によると、礎石は計15個検出され、礎石は表面を平にした自然石を石材としており、柱座の造り出しはない。平面プランは間口柱間三間、奥行二間を呈する。礎石の中心間の距離は十尺(約3メートル)を測る。ただし、中央の南北列の中心に礎石が一石があり、その両側に少し間を置いて比較的小さな2石の礎石があったことがわかっている。また、この礎石群は基壇と想定される石塁も検出されている。遺物としては瓦(平瓦・熨斗瓦)が出土している。



第62図 一ノ坂礎石群実測図 (昭和11年実測) (1/150)

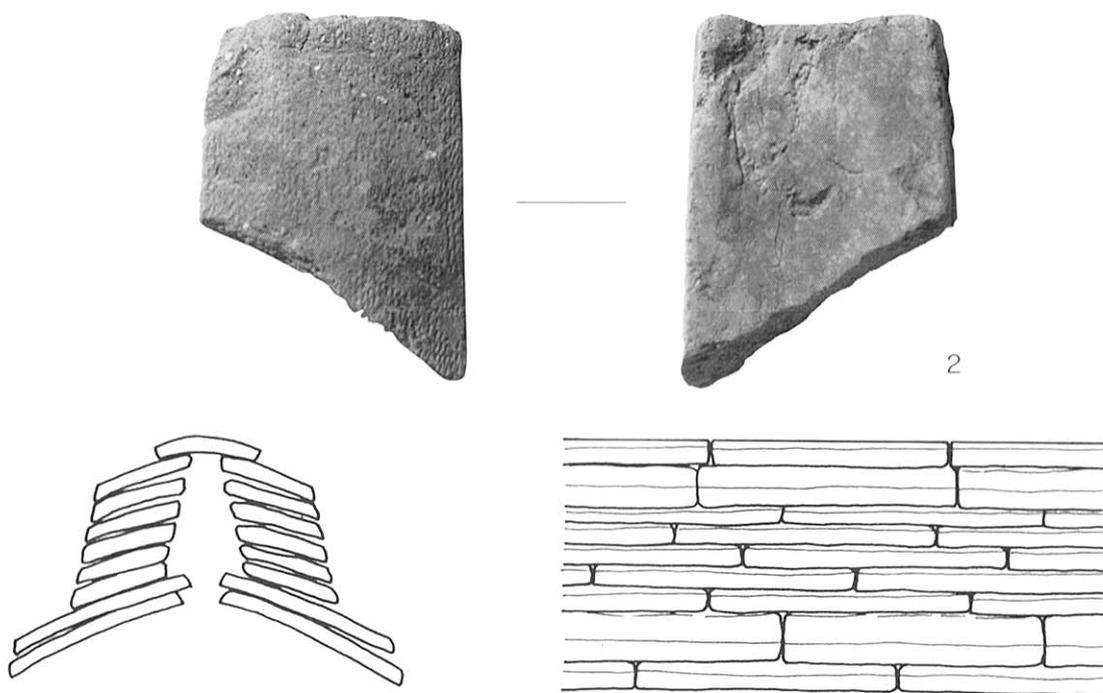
2003年1月の踏査時に幾つかの瓦片を散見したが、そのうち平瓦と熨斗瓦をそれぞれ1点ずつ採集したので報告する。1は平瓦で残長20.5cm、残存幅14.9cm（上・下端部を欠損）、厚さは4.8~5.7cm。焼成は良好、胎土はやや粗く、3mm以下の白色砂粒を多く含む。色調は灰黄（2.5Y6/2）を呈し、全体の1/4程度残存する。平瓦一枚作りにより成形され、凹面は布目痕を丁寧にナデ消し、凸面はタタキによる縄目痕が残る。端部はヘラ切りにより面取りする。2は熨斗瓦で残長21.4cm、上端部幅14.1cm、厚さ4.0~4.5cm。焼成はやや不良で、胎土は粗く、5mm以下の白色砂粒を多く含む。色調は灰黄（2.5Y6/2）で、全体の2/3程が残存する。平瓦一枚作りによってつくられた平瓦を半裁したものである。



第63図 一ノ坂礎石群採集瓦実測図（1/6）

なお今回の踏査時に中世末期に比定される多くの土師器皿も採集した。一ノ坂礎石群は怡土城廃城後に築城された中世の山城「高祖城」の大手道に位置し、多くの土師器皿も採集できることから、この礎石群は高祖城の郭の一部として再利用されていたと考えられる。今回は紙数の都合で報告に至らなかったが、次の機会に高祖本城出土の土師器皿と分類・対比して資料紹介することにする。

（山口）

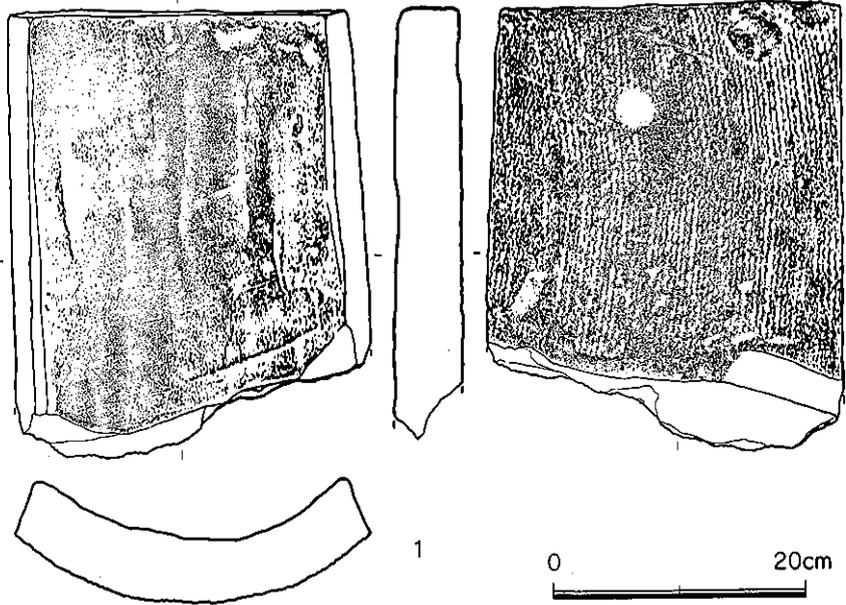


第64図 出土熨斗瓦とその使用例（熨斗棟）

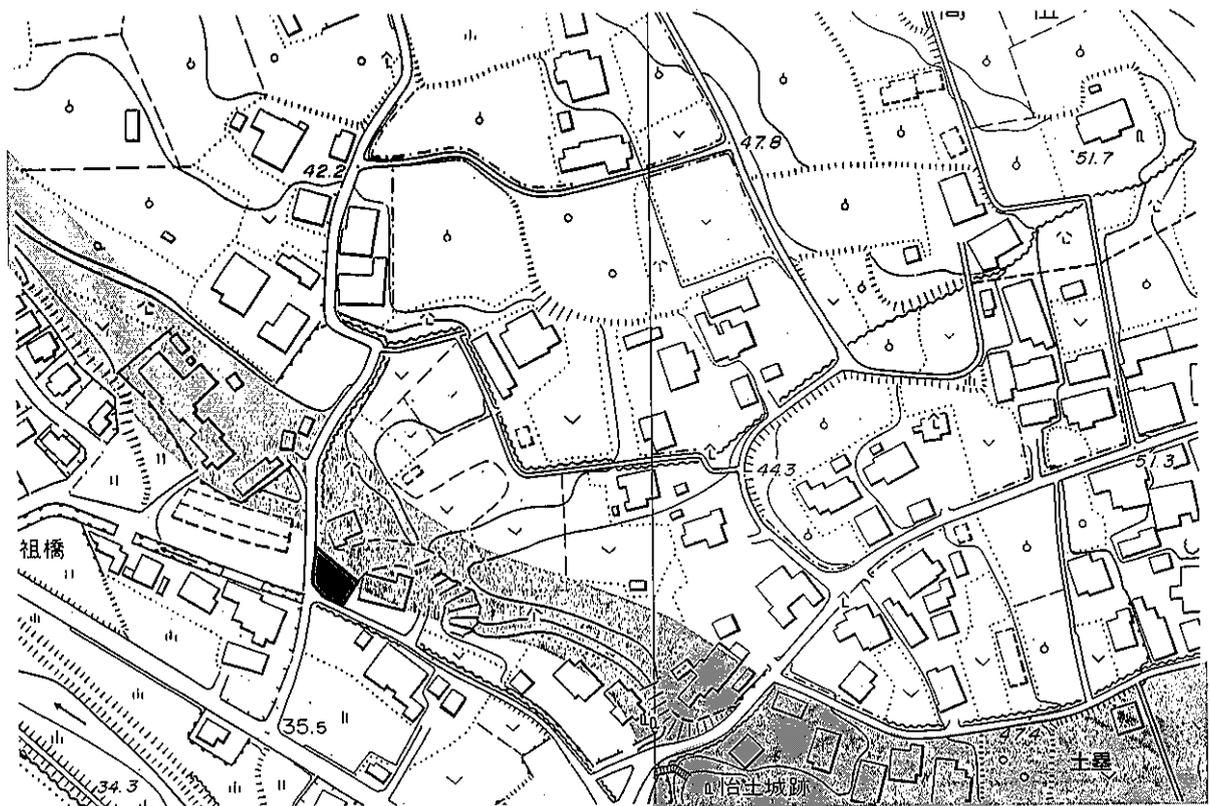
(3) 砂防工事に伴う出土資料 (第65、66図、図版21-b)

昭和58年度、高祖1437において高祖川砂防工事に伴い発掘調査を実施した、その際、遺構としては土壇3基、溝2条を検出し、遺物は須恵器等が出土した。その出土遺物のうち実測に耐える遺物を紹介することにする。

これは平瓦片である。残長36.2cm、上端部幅27.2cm、下端部幅は欠損のため不明で、厚さ4.9～5.7cmを測る。焼成は良好、胎土は粗く、5mm以下の白色砂粒を多く含む。色調は凹面にぶい黄橙(10YR6/3)、凸面灰黄褐(10YR4/2)を呈す。やはり平瓦一枚作りによる成形で、凹面は布目痕を残し、一部板状工具でナデ消す。凸面には細目タタキを施す。端部はヘラ削りにより面取りする。(山口)



第65図 砂防工事に伴う出土資料実測図 (1/6)



第66図 砂防工事に伴う採集資料採集地点 (1/2,500)

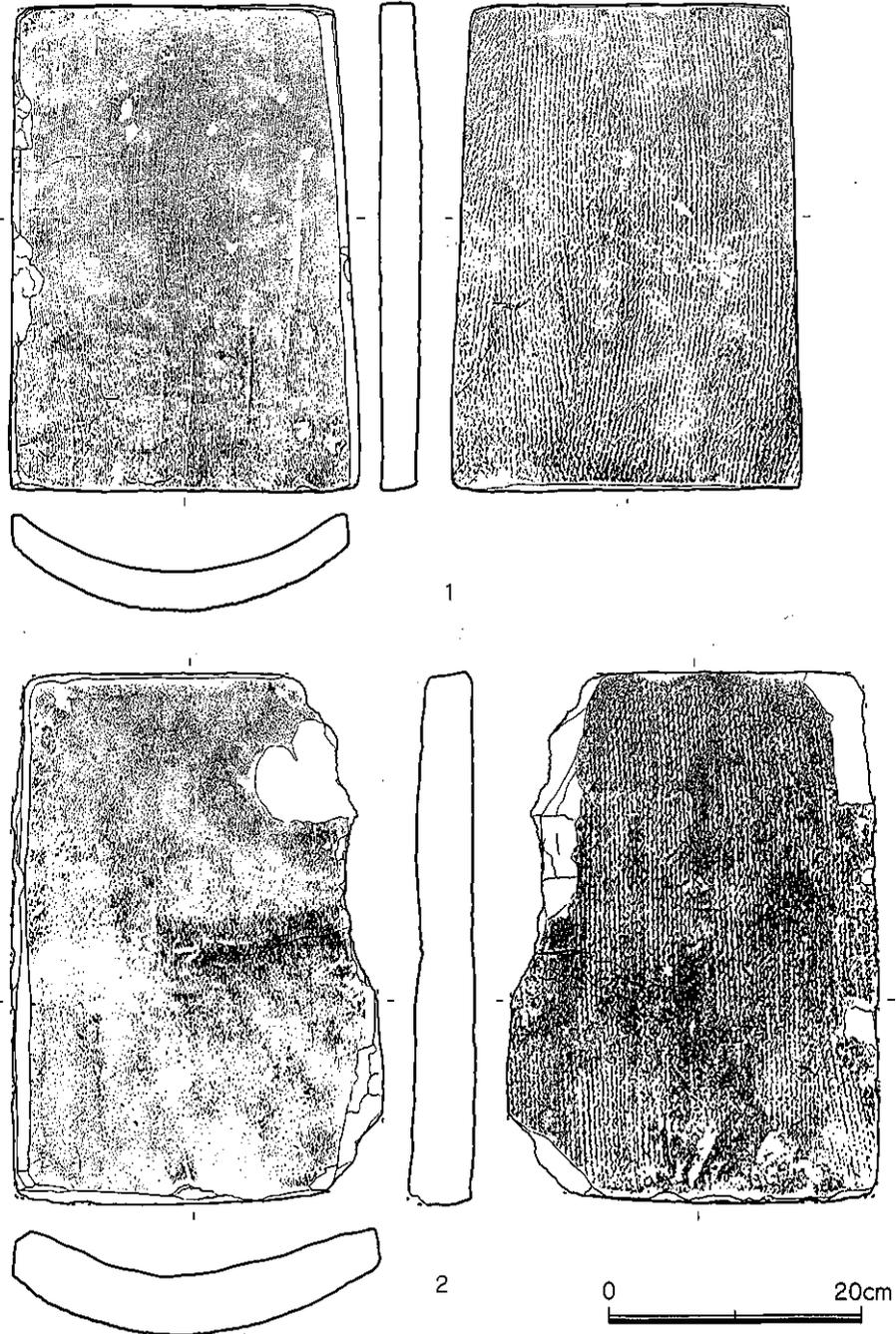
(4) その他 (出土地点不明) (第67図、図版22)

怡土城跡採集とされる平瓦が伊都国歴史博物館に2点収蔵されている。怡土城跡採集と伝えるのみで、採集時期や正確な採集地点は不明である。

1は長さ39.2cm、上端部幅25.4cm、下端部幅27.9cmで、厚さは2.5~3.3cmと他の平瓦と比べ薄い。焼成は良好、胎土はやや粗く、3mm以下の白色砂粒を多く含む。色調は浅黄(2.5Y7/3)を呈す。凹面に

一部剥離がみられるがほぼ完形である。2は長さ43.0cm、幅は29.8cm以上(上端・下端部欠損)、厚さ3.2~5.1cmを測る。焼成はやや不良、胎土は粗く、5mm以下の白色砂粒を多く含む。色調はにぶい黄橙(10YR6/4)を呈す。残存は一部欠損するがほぼ完形である。

1・2ともに平瓦一枚作りによる成形で、凹面は布目痕を残し、凸面は細目タタキを施すが、2は摩滅のため若干不明瞭である。端部はヘラ削りにより面取りする。(山口)



第67図 怡土城出土地点不明採集瓦実測図 (1/6)

VI. おわりに

1. 遺構

(1) 土塁

土塁の築造方法

現在までの踏査および一部の発掘調査の結果、怡土城の土塁には以下三種類の築造方法があったことを確認している。

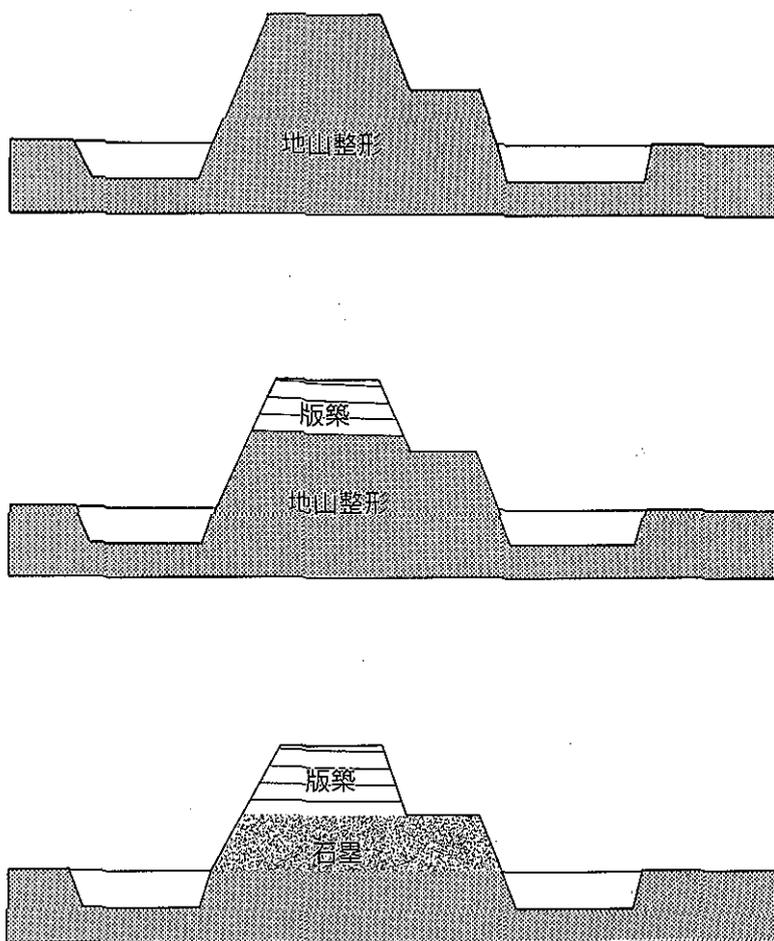
- ①. 地山整形の後、そのまま土塁として利用する。
- ②. 地山整形の後、その上部にさらなる版築を施す。
- ③. 石組みで基盤工事の後、その上部にさらなる版築を施す。

①の地山整形の後、そのまま土塁として利用する築造方法の箇所は第5望楼付近から山頂を經由して金龍寺付近まで確認できる。自然の地形を巧に利用した築造方法で怡土城の土塁の大部分がこの築造方法でなされている。

②の地山整形の後、その上部にさらなる版築を施す築造方法の箇所は現時点において、染井口一帯で確認している。なかでも、染井公民館裏（大門484-1）に所在する土塁の一部からは地山整形面の上に版築層（本体部）が確認でき、その版築層（本体部）を保護するように城外部には本体部に比べて少し粗めの版築が施されていた。さらに、本体部と少し粗めの版築層との間には板状痕跡（長さ約17cm、厚さ約3cm）

を確認している。これは版築の際に使用した「堰板」と考えられ、版築工事の際、抜き忘れられたのであろう。

③の石組みで基盤工事の後、その上部にさらなる版築を施す築造方法の箇所は大門一帯で確認している。地盤が軟弱もしくは排水処理が必要な場所であったためにこの築造方法をとったと考えられるが、城門と想定される部分にも確認できることから、補強が必要な部分にこの工法を用いて土塁を構築したと考えることができる。なお、大門遺跡の調査（大門29・30）では土塁の城外側に高さ約1.5mのテラスを確認しており、また土塁本体部の構造の一部も明らかになっている。



第68図 怡土城土塁築造方法想定図

版築工法について

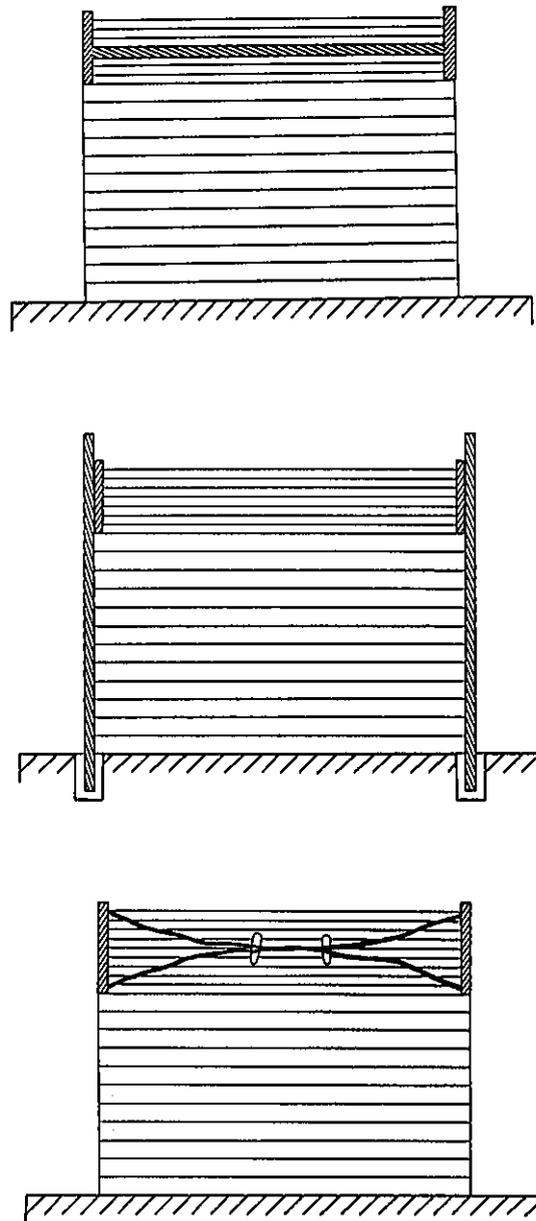
染井公民館裏（大門484-1）に所在する土塁の一部の土層確認調査の結果、怡土城の当該地区の土塁は本体部版築を保護するように城外側にはすこし粗めの外皮版築が施されていることがわかった。また、版築の際に使用されたと想定される「板」状の痕跡を確認している。この板状痕跡は版築工事の際に使用された「堰板」と考えられ、怡土城の版築工事の工程を知る上で貴重な資料となる。そこで、この土層確認調査の結果をもとにして怡土城の当該地区における版築工事について考えてみたい。

現時点において、版築の工法については以下の3種類の工法があったと考えられている。

- ① ある一定のかた枠を用いて版築工事を実施する工法。
- ② 等間隔に足場を設けて、内側に板材（堰板）を用いてかた枠を形成し、そのかた枠を用いて版築工事を実施する工法。
- ③ 板材（堰板）を内側から固定してかた枠を形成し、そのかた枠を用いて版築工事を実施する法。

当該地区の土塁の土層確認調査の結果、一部に板状痕跡が残っていた。この板状痕跡は版築工事の際に抜き忘れられた板材（堰板）と考えられ、これ以外の板材は版築工事が終了すると抜き取られたことが想定される。そして、その抜き取られた板材は次の版築工事に用いられたのであろう。このことから、当該地区の土塁における版築工法としては、②もしくは③の工法が候補として考えられる。ただし、今日までの怡土城の調査の結果、等間隔の足場跡と板材を内側から固定した痕跡を土塁の内部に確認し得ていないために②もしくは③のいずれの工法をとったのかは不明である。

なお、大門遺跡（大門29・30）の調査の際、石塁の上部に構築された版築層の一部にほぼ等間隔で水平に並ぶ円形の痕跡を確認している。この痕跡を①のかた枠の一部ととらえると、大門地区（大門29・30）においては①の工法で版築工事が実施されていたと考えることができる。



第69図 土塁版築工法想定図

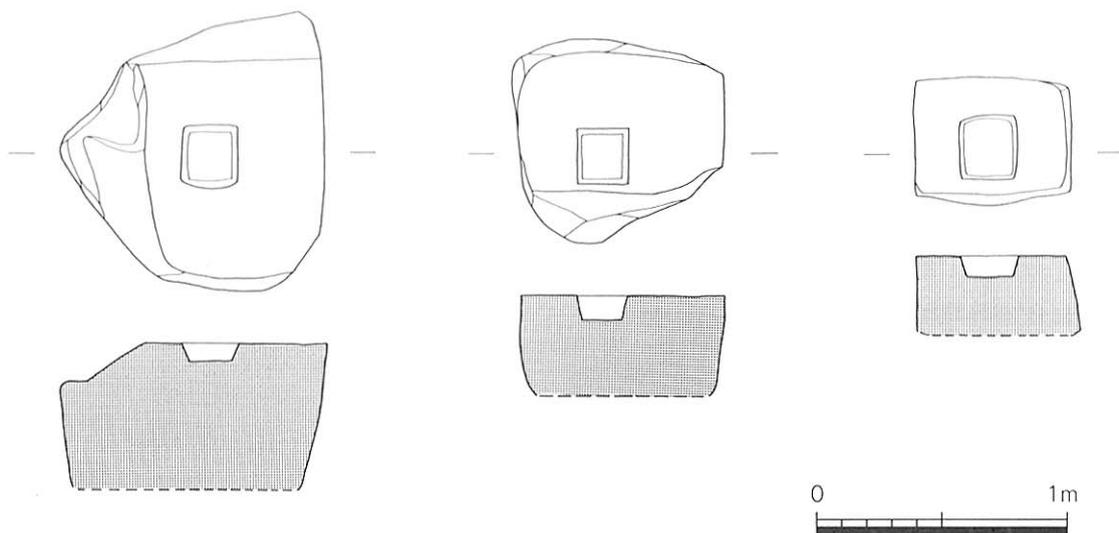
(2) 城門

昭和11年の調査結果によると、2ヶ所で城門の礎石を確認している。1ヶ所は大鳥居口といわれる高祖神社に登る参道路面に、中心に長方形の繰り込み孔を有する礎石が2個所在していた。礎石間の中心距離は12尺5分（約3.65m）を測り、正しく南北に並んでおり、孔の方向もそれに一致していた。この2個の礎石の他に別の礎石が近傍の石垣等に積み込まれていたが、大正6年の怡土城址記念碑建設の際に基石の一部として抜き取られ、3個だけ保存されている。その後の聞き取り調査の結果、大正6年の記念碑建設の際に基石として近傍の石垣から抜かれた礎石は計4個あって、その内の3個が記念碑の基石として現地保存されていることがわかった。このことから、大鳥居口においては昭和11年に鏡山氏が確認した2個の礎石をあわせて少なくとも計6個の城門の礎石があったことがわかる。ただし、大正6年に礎石を現地点まで引き上げる際、軽量化のためにかなり形を変えており、原形を留めていないとのことである。

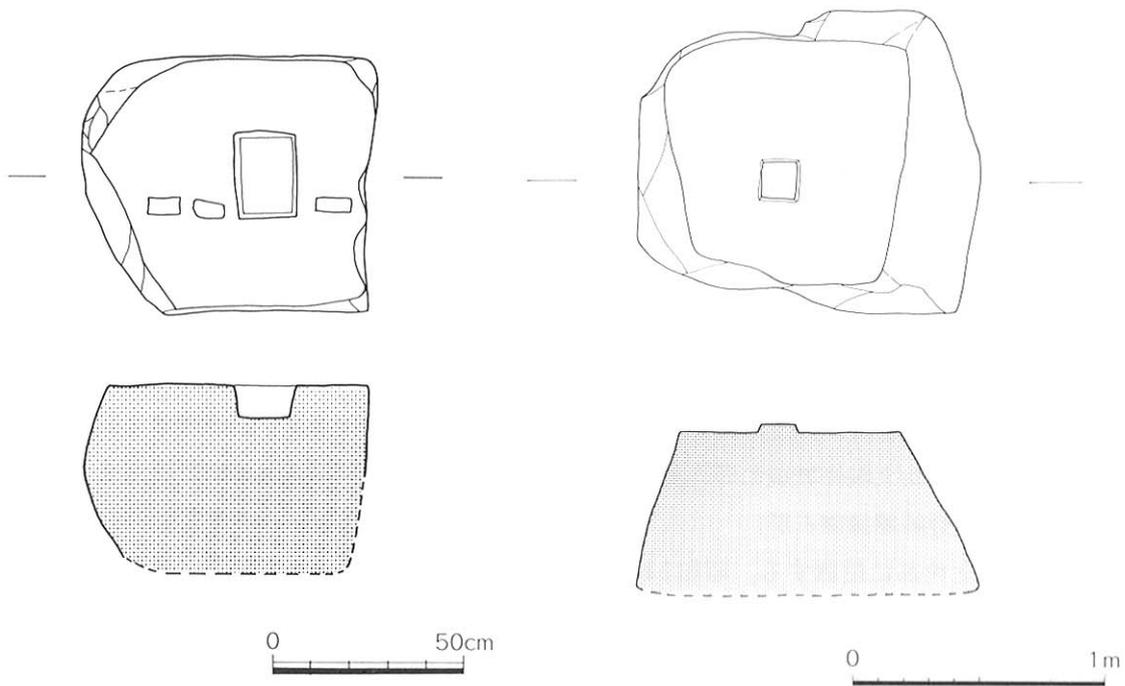
2ヶ所めは染井口周辺で、昭和11年に鏡山氏によって2個の礎石が確認されている。この礎石も中心に長方形の繰り込み孔がある。ただし、当地の礎石の2個のうち1個の礎石に方形



第70図 大鳥居口城門（城外側より城内側を望む）



第71図 大鳥居口城門礎石 (1/30)



第72図 伝大鳥居口城門礎石実測図 (1/20)

第73図 伝大門門礎石実測図 (1/30)

の孔が2つ確認でき、その2つの方形の孔は規則的に穿たれている。鏡山氏はこの礎石に関して「闕孔が如何なる役を持っていたものか疑問である。或いは切り出しの際の仕損じとも見られよう。」と報告している。その2個の礎石であるが、残念なことに現時点において所在地不明となっている。

さらに、大門口周辺にも城門があったと考えられる。『改正原田譜』にも「城門三所(大鳥居、小城戸、大門なり、城門水道猶あるべきも今残れるのみ記す)大門は大手也、大門村の東に在り左右に石壁残り門内は堀田と云う云々」とあり、この地に中央の門が設置されていたようだが、現時点において後世の削平をかなり受けているために土塁の石垣・水門等とともに門跡の詳細を知ることが困難な状況にある。しかし、後の聞き取り調査で、昭和30年代に近隣で県道工事が実施された際に、大門口周辺の土砂・石が運びだされたようで、当時、その作業に従事した人が「門礎」と考えられる整形した石材を発見し、自宅の庭石として置いていることがわかった。この「門礎」と考えられる整形した石材は中心部に方形の孔を穿するのではなく、逆に周りを削って中央部が方形に浮き彫りにされている特異なものである。大門口周辺に所在した門礎の一部分であろうか如何なる部分の石材であったか不明である。今後の調査・研究に期するところである。

最後に、『改正原田譜』には小城戸口周辺にも城門が設置されていたようだが、当該地に至っては何等の跡形もない状況であり、小城戸口周辺に所在した城門の詳細については不明な点が多い。



第74図 小城戸口城門

(3) 望楼

現在までの踏査、試掘及び発掘調査の結果、怡土城には計7棟の望楼を確認している。

一ノ坂礎石群

昭和11年に鏡山氏によって発掘調査が実施されている。報告書によると、礎石は計15個検出され、礎石は表面を平にした自然石を石材としており、柱座の造り出しはない。平面プランは間口柱間三間、奥行二間を呈する。礎石の中心間の距離は十尺（約3m）を測る。ただし、中央の南北列の中心に礎石が一石があり、その両側に少し間を置いて比較的小さな2石の礎石があったことがわかっている。また、この礎石群は基壇と想定される石垣も検出されている。遺物としては瓦（平瓦・熨斗瓦）と多数の土器片が出土している。なかでも多くの中世の土師皿が表採できることから、この一ノ坂礎石群は怡土城廃城後に「高祖城」の郭の一部として再利用されていたと考えられる。

第1望楼（草野陣鐘撞礎石群）

怡土城の東北角部に位置する。昭和11年には計9個の礎石を確認している。ここの礎石も表面を平にした自然石を石材としており、柱座の造り出しはない。平面プランは間口柱間三間、奥行二間を呈する。礎石の中心間の距離は八尺（約2.4m）を測る。ただし、中央の南北列の中心に礎石が1個あるのが確認されている。これは一ノ坂礎石群・第5望楼（丸尾礎石群）に共通する礎石の配置の仕方である。現在では計9個の礎石を確認できる。遺物としては平瓦片を表採できる。

第2望楼（相鐘礎石群）

昭和11年には計10個の礎石を確認している。ここの礎石も表面を平にした自然石を石材としており、柱座の造り出しはない。平面プランは間口柱間三間、奥行二間を呈する。礎石の中心間の距離は八尺（約2.4m）を測る。現在では計10個の礎石を確認している。

第3望楼（下ノ鐘撞礎石群）

昭和11年には計7個の礎石を確認している。ここの礎石も表面を平にした自然石を石材としており、柱座の造り出しはない。平面プランは間口柱間三間、奥行二間を呈する。礎石の中心間の距離は八尺（約2.4m）を測る。現在では計7個の礎石を確認している。遺物としては平瓦片を表採できる。

第4望楼（古城礎石群）

第4望楼は「改正原田諱」によると「古城」と記されており、峰の頂上部は削平され平地になっている。昭和54年、前原町教育委員会が調査した結果、礎石は確認できなかったものの、多数の奈良から平安期初頭にかけての柱穴群と中世の溝を検出している。また、周辺の踏査の結果、第4望楼の周りには中世の郭・堀も確認されることから、第4望楼は中世に「高祖城」の支城の一部として再利用されていたと考えられる。なお、当該地は岩盤を削平して造成しているため地耐力に富み、怡土城時代も礎石は他の礎石群ほど必要なかったのかもしれない。遺物としては瓦（平瓦・熨斗瓦・鬼瓦）、土器片が出土している。ただし、軒丸瓦・丸瓦が出土していないことから、当該地には平瓦葺の建物が構築されていたと考えられる。

第5望楼（丸尾礎石群）

怡土城の北西角に位置する。昭和11年には計9個の礎石を確認している。第5望楼跡も昭和53～54年にかけて前原町教育委員会が調査している。その結果、礎石は表面を平にした自然石を石材としており、柱座の造り出しはない。ただし、礎石の一部に方形の孔をもつものもある。平面プ

ランは間口柱間三間、奥行二間を呈する。礎石の中心距離は約3mを測る。また、現在の礎石の下層には複数の堀方を確認しており、先行する建物が存在した可能性がある。一ノ坂礎石群・第1望楼（草野陣鐘撞礎石群）と同じように中央の南北列の中心に礎石が1個所在するのも確認され、さらに地山整形基壇も確認されている。遺物としては瓦（平瓦・熨斗瓦）、土器片が出土している。

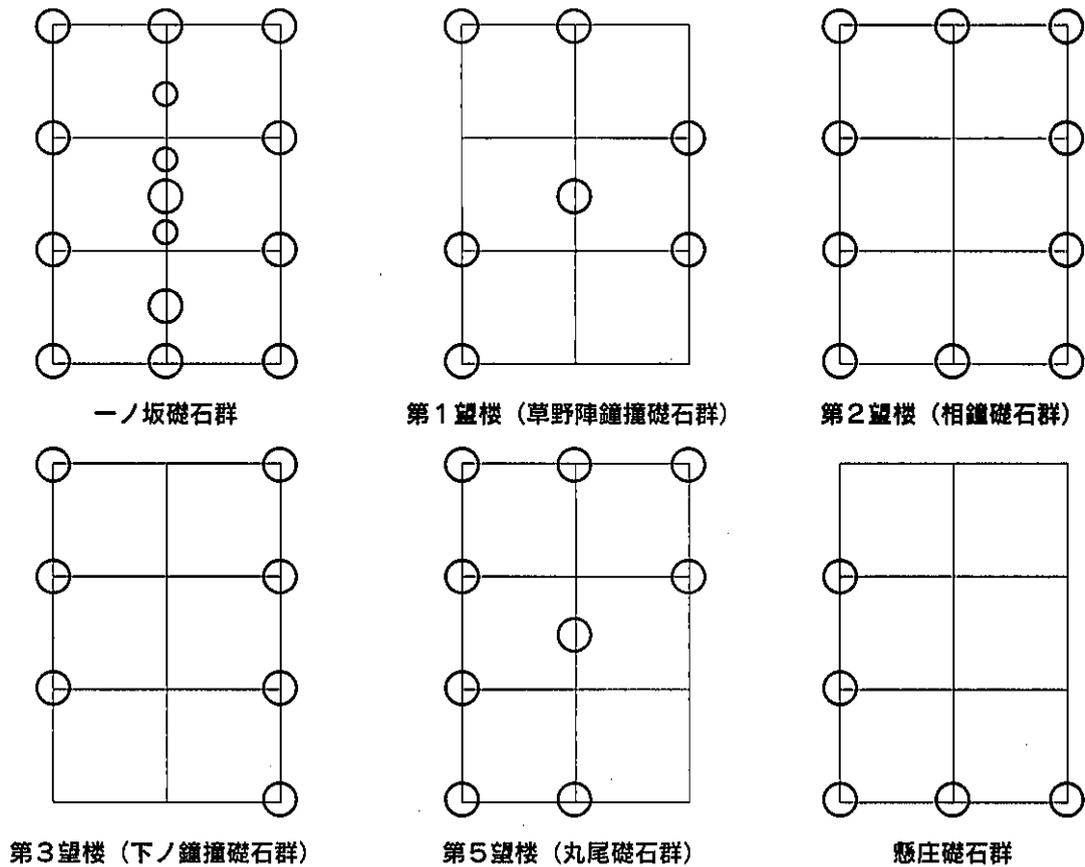
懸庄礎石群

懸庄礎石群は昭和11年の調査の際にその所在がはじめて確認されたのであるが、昭和55年に前原町教育委員会が再調査している。その結果、計5個の礎石を検出し、地山整形基壇も確認している。ここの礎石も表面を平にした自然石を石材としており、柱座の造り出しはない。平面プランは間口柱間三間、奥行二間を呈する。礎石の中心距離は約3mを測る。遺物としては瓦（平瓦・熨斗瓦・鬼瓦）、土器片が出土している。ただし、軒丸瓦・丸瓦が出土していないことから、当該地には平瓦葺の建物が構築されていたと考えられる。

その他の礎石群

その他の礎石群として『改正原田譜』には伊勢城戸周辺にも矢倉址（望楼？）があったと記し、昭和11年の調査で高祖神社南方礎石群・一丁目見礎石群等の所在が確認されていたのであるが、後世の開発のために跡形もなく消滅してしまっている。誠に残念なことである。

ところで、平成10年に高祖山の自然遊歩道の改修工事に伴う遺跡確認調査を実施したところ、高祖山頂上部に所在する中世山城「高祖城」の石垣の裏込めの部分から奈良時代の須恵器と怡土城の瓦片を発見している。聞き取り調査の結果、かつて高祖山頂上部においては足の踏み場もないくらいに怡土城と高祖城の瓦片が散乱していたということである。このことをふまえて考えると、高



第75図 望楼礎石配置図

祖山頂上部においても怡土城時代の遺構（礎石群）が存在した可能性が高い。今後の調査・研究に期するところである。

（4）水門

怡土城城内の水を上塁の外に排出するために「水門」が設けてある。その構造は塊石を上塁の基底部に敷き詰め、水は石の間を潜って外部にでる仕掛けになっている。通称「盲水門」とよばれているものである。特別に大きな水を通すための孔が開いているものではない。この浸透式の水門は大野城・金田城の水門にも認められる。

怡土城の水門は『改正原田譜』によると、「港、大鳥居の南、大霜、風音寺」の4ヶ所があげられているが、現在は一部分を除いてほとんど確認できない状況にある。なお、この他に小城戸口周辺にも水門があったと想定され、現時点においてはその水門の石組みの上部に版築上塁の上層の一部を観察できる。

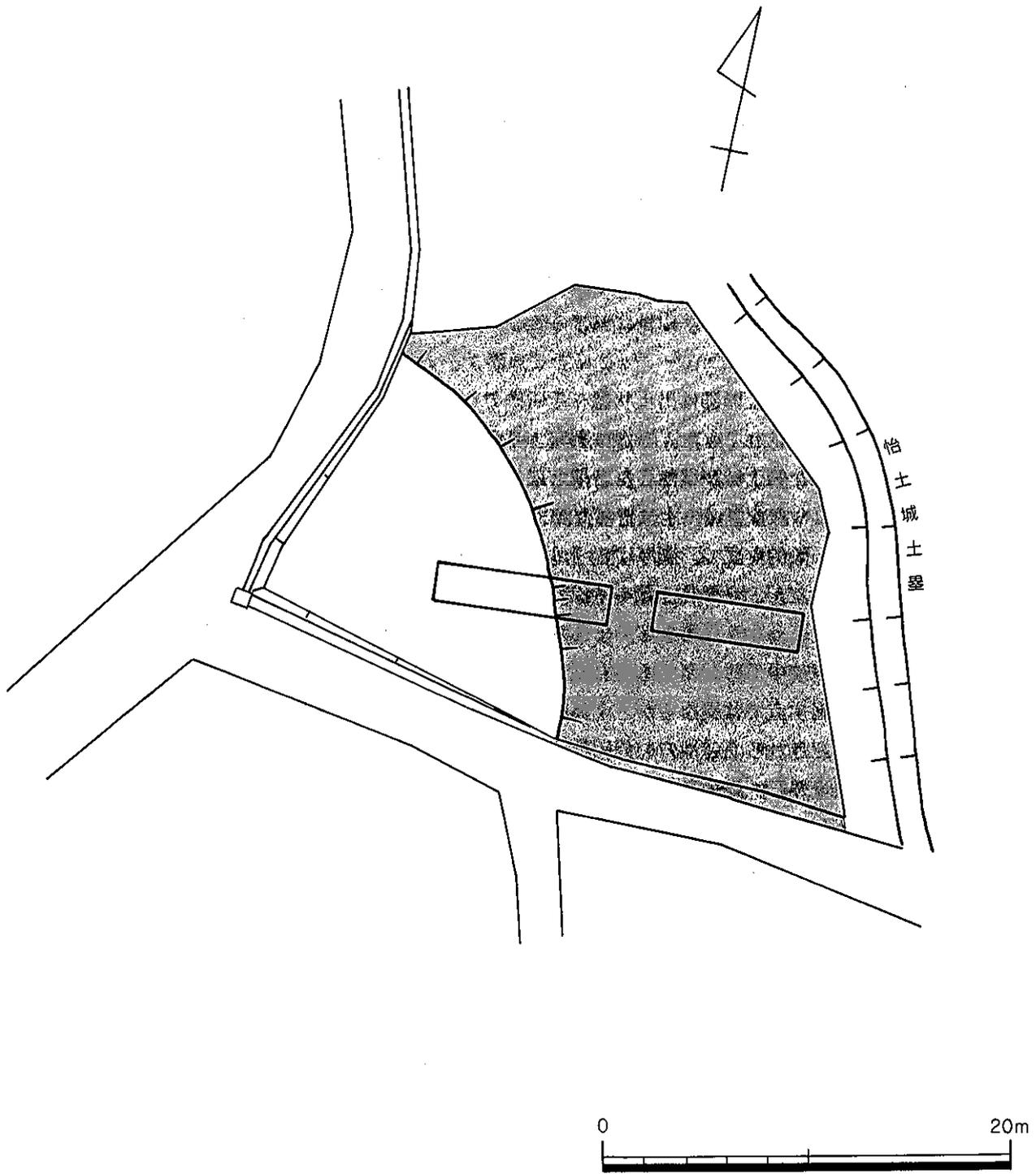
（5）濠

現在までの試掘及び発掘調査の結果、怡土城の上塁の城外側には約10～15mの濠があったことがわかっている。その埋土は上層に砂、下層になるにつれて礫を多く含み、かつては水が流れていたと想定される。『改正原田譜』には「高祖の南即ち一丁目見の外側の田を「堀」といふ」と記しており、『筑前國續風土記拾遺』にも「高祖村落の前にて南北に長隍を設け外郭の址確かに見ゆ。長隍は田となれり云々」と記されていることから怡土城の上塁の城外側には濠が設けられており、江戸時代末まではその痕跡を残していたのであろう。

ところで、昭和11年の鏡山氏の調査によると風音寺の上砂採集工事の際に、上塁の城内側に沿って濠を掘っていたことを確認している。また、試掘の結果、一部で「内濠」らしき大溝を確認しており、このことをふまえて考えると上塁の城内側にも濠があったと想定できる。ただし、内濠に関しては地形の制約を受ける部分があることから、上塁の城内側全範囲には設けられなかったと考えられる。



第76図 土塁と濠（高来寺地区）



第77図 怡土城城外側濠跡実測図（大門334）（1/300）

2. 出土遺物

怡土城跡の発掘調査ではすでに報告したように土器、瓦を中心とする遺物が多く出土した。また手嶋氏寄贈資料、末永出土鬼瓦など怡土城関連資料も併せて報告した。以下では遺物のうち土器、瓦について再考し、まとめとしたい。

(1) 土器

礎石建物の調査では、懸庄礎石群で図化できたのは2点と少なく、第4望楼では後述するように後世の混入に加え、底部資料が多いため時期比定は困難だが、第5望楼では一定量の古代の土器が出土した。報告でも述べたように8世紀後半～9世紀の特徴を示し、怡土城が機能した時期を推定する根拠となる。ただし^(註1)いずれの地点も供膳具のみの出土であり、貯蔵具や煮炊具をまったく含まないことはその意味も含め今後の検討課題である。

第4望楼では戦国時代に高来寺城が築かれたため、糸切り土師器や陶磁器など高来寺城跡に伴うと思われる遺物も多くみられる。また今回は報告に至らなかったが一ノ坂礎石群でも糸切り土師器が多く散布し、高祖城跡を含め、中世における怡土城跡の再利用という視点での分析が今後求められよう。

また手嶋氏寄贈資料の土器群は出土状態こそ明確でないものの完形品を多く含み、従来から怡土城跡の土器として認知されてきた。器形や調整より8世紀後半～9世紀前半の特徴を示し、第5望楼出土土器で示された怡土城が機能した時期とほぼ符合するものである。また先述のように礎石建物の調査では貯蔵具や煮炊具の出土は皆無だが、手嶋氏寄贈資料には10個体分の土師器甕を含む。大半が筑前地域で一般的な甕で、肥厚する「くの字」の頸部をもち、内面にヘラ削り（一部は外面にハケ）を施すものだが、2個体（第44図27・28）だけは全体的に薄いつくりで、内面にナデ、外面にタタキを施すまったく異質なものである。外面にタタキを有す当該期の土師器甕は管見の及ぶところではまず豊後中部に分布するいわゆる豊後型甕が挙げられる^(註2)。内面に当具痕を残し、外面頸部にはカキ目を施す点では異なるが、全体的に薄いつくりを呈す点は類似する。また豊前中部でも「続日本紀」に記される北陸地方の俘囚移配との関連性が指摘されている北陸系土器がみられる^(註3)が、内面に当具痕を残し、長胴形を呈す点で異なる。また内面にナデを施す点に着目すると、豊前北部に分布の中心がある企救型甕が挙げられる^(註4)。しかし外面に粗いハケを施し、下半部が下ぶくれ気味に膨らむ器形は今回報告した異質な土師器甕とは似つかない。よって現状のところ類似する資料を抽出するに至らないが、その出自を考える上で、上述した豊後型甕など筑前地域では客体的な存在だが^(註5)近隣地域で主体となる甕の影響も視野に入れておく必要がある。

また大門29・30地点や大門土塁崩壊部では土塁中から土器が出土し、土塁の築造時期を推定する手がかりとなった。大門29・30地点では怡土城築城以前の古墳時代の土器が出土したが、大門土塁崩壊部では古墳時代の土器に加え、後述する怡土城で使用された瓦や埴もみられるため土塁修築の可能性を示唆する。

(2) 瓦

今回の調査で出土量が最も多いのは瓦類である。紙数の都合でその多くを報告することができなかったが、総量はパンケース数十箱分に及ぶ。種類は平瓦・熨斗瓦・鬼瓦に限られている。鬼瓦については次項で詳述するのでここでは平瓦と熨斗瓦について述べたい。

まず平瓦は最も分量が多く、長さ41cm前後、上端部幅27cm前後、下端部幅30cm前後を測る。厚さは概ね3.5cm前後と5.0cm前後の2種に大別できるが、最も厚いものは6.9cmもあり、あまり類例をみない特徴的な瓦であることは古く中山平次郎氏も「糸島郡高祖山の厚瓦」と題して論及していることからも窺える。^(註6)

また製作技法について考えると、大半がいわゆる平瓦一枚作りによるものと思われる。平瓦一枚作りについては栗原和彦氏の詳細な検討がありそれを参考にして製作技法を検討したい。まず蒲鉾形の成形台に布を敷き、その上に粘土板を置き成形する。次に縄を巻きつけた叩き板で叩き締め、成形台からはみ出た端部はヘラ削りによって整えられる。桶巻作りの平瓦は土管状のまま乾燥させるため歪みは少ないが、怡土城跡の瓦は一枚ずつ乾燥させるため歪みが大きい。なお離れ砂はみられない。一方、手嶋氏寄贈資料(第47図40)、怡土城跡採集瓦(第67図2)、砂防工事に伴う採集瓦(第65図)は凹面に模骨痕と思しき凹凸を確認でき、桶巻作りの可能性がある。しかし端部はヘラ削りにより面取りされ、分割した際に生じる破面を残すものはない。

甍斗瓦はすべて長さを欠くため全形を窺えないが、幅から平瓦を半裁したものであることが推測できる。端部は平瓦と同様ヘラ削りによって面取りされるが、一方の端部に半裁した際に生じた破面を残すものもある。

さて現在この瓦を焼成した瓦窯跡は未確認だが、怡土城跡から南東1.2kmの末永地区で鬼瓦とともにこの平瓦片が採集されることは「V-2-(1)末永出土鬼瓦」で述べた通りである。鏡山猛氏はその立地から瓦窯跡を想定しているが、^(註8)現在まで未調査のためその説を裏付けることはできない。またこの瓦の分布は怡土城跡以外でも律令下の糸島地域で散見できる。ただ瓦本来の用途ではなく、今宿バイパス建設に先立って調査された波多江遺跡^(註9)では竪穴住居跡や溝からの出土で、「湿地の敷石用等に手頃なものとして、礫程度に使用されたもの」と考えられている。また近年調査された潤地頭給遺跡V区^(註10)では掘立柱の根固めに使用されていた。この他にも元岡・桑原遺跡群第31次調査^(註11)で15点、前原西町遺跡でも1点の出土例がみられる。^(註12)

なお、今回の調査では通常みられる丸瓦や軒先瓦の出土は無かった。ただ1937年の鏡山氏の報告^(註13)では、怡土城跡出土とされる丸瓦と軒丸瓦が1点ずつ怡土城跡内の金龍寺に保管されていることが紹介されている。今回その資料の追跡調査を行わなかったが、鏡山氏の報告を概述すると、丸瓦は破片資料で凸面に粗い斜格子タタキを施し、凹面には布目痕を残す。軒丸瓦はいわゆる鴻臚館系軒丸瓦である。内区の中房の蓮子は1+8で、蓮華文は8弁だが1弁のみが単弁で他は複弁となる。外区の珠文は24を数える。鏡山氏の他に、中山平次郎・小田富士雄・高橋章らの諸氏も指摘しているが、この軒丸瓦と同型式の瓦が筑前国分寺や観世音寺で確認でき、筑前国分寺ではこの型式の軒丸瓦の分量が最も多いため創建瓦と想定されている。その時期は国分寺建立の詔が出された天平13年(741)から怡土城の築城が完了した神護景雲2年(768)年までが想定されている。また福岡市大圓寺所蔵の伝怡土城跡出土の瓦(木下讚太郎コレクション)には瓜生秀文氏が紹介した鬼瓦(V-2-(2)大圓寺所蔵鬼瓦で先述)以外にも平瓦や丸瓦、軒丸瓦を含んでおり、紹介された写真(第52図)を見る限りでは鴻臚館系軒丸瓦(2個体分確認できる)でおそらく同型式のもの^(註14)とみられる。^(註15)また怡土城跡の城内ではないが、すぐ近接する高祖榎町遺跡^(註16)では1991年の調査で金海式の合口甕棺墓の中に落ち込んだ状態で同型式の軒丸瓦が須恵器壙3個と共伴している。今回の調査では丸瓦・軒丸瓦の出土は無いが、今後の調査で確認できる可能性は高いと思われる。ただ出土

したとしても絶対量としては平瓦や熨斗瓦に及ぶことはなく、わずかであることは変わらないであろう。

次に瓦の使用方法について考えてみたい。通常古代における瓦の葺き方は丸瓦と平瓦とを組み合わせるが、怡土城跡では調査で丸瓦の出土がないことから、平瓦と平瓦とを組み合わせる屋根に葺いていたものと推測される。この葺き方は平瓦葺きといい、中国大陸に起源をもつ瓦葺方法で今現在も中国南部やインドではよく見られるという。^(註17) 構造的には本瓦葺きとの相違点は見受けられない。また熨斗瓦は通常用いられるように屋根の棟に葺かれ、その先端には装飾性の高い鬼瓦と軒丸瓦が葺かれていたと推測できよう。

(3) 鬼瓦

鬼瓦は今回の調査で第4望楼と懸庄礎石群より外縁部の破片がそれぞれ1点ずつ出土した。また古くから怡土城跡の鬼瓦とされてきた末永出土の鬼瓦2点と瓜生秀文氏に紹介された福岡市大圓寺所蔵の伝怡土城跡出土の鬼瓦(木下讀太郎コレクション)が認知されている。^(註18)

個別報告でも述べたように鬼瓦は小田富士雄氏によって都府楼式鬼瓦と呼称されている一群である。都府楼式鬼瓦を含め日本古代の鬼瓦を総体的に研究した毛利光俊彦氏は大宰府式鬼瓦(都府楼式鬼瓦)を形態や法量などからI式A・B、II式、III式の4型式に分類した。^(註19) また近年『大宰府政庁跡』でIII式がA・Bに細分されている。^(註20)

末永出土鬼瓦のうち完形に復元され、広く認知されているもの(伊都国歴史博物館に常設展示)はI式Aに該当する。その特徴に関しては「V-2-(1)末永出土鬼瓦」で詳述しているのでここでは触れない。I式の上限年代は8世紀前半代(大宰府政庁II期)に比定され、怡土城築城の8世紀第3四半期まで存在することからかなり長期間にわたる范型の使用が想定できる。もう1点は破片のため金形は判然としないが、怒り目など部分的な特徴からII式に該当すると思われる(II式の年代もI式とほぼ併行)。大圓寺所蔵鬼瓦は大宰府式鬼瓦には該当しないが、それに酷似する北九州市北浦廃寺の鬼瓦について述べた小田富士雄氏は「大宰府系の憤怒相鬼面の脱化形式」と述べている。^(註21) この鬼瓦は北浦廃寺の創建年代である9世紀代に都府楼式鬼瓦を模倣して作成されたものと考えられることから大圓寺所蔵鬼瓦も同様の時期が与えられる。^(註22) なお毛利光氏の設定するI式Aは現在のところ大宰府政庁跡を中心として、大野城跡、水城跡、筑前国分尼寺跡などの大宰府史跡内でしか出土しておらず、以上のことは瓜生秀文氏も考察している通りである。

また調査では第4望楼と懸庄礎石群から鬼瓦片がそれぞれ1点ずつ出土したが、細片のため大宰府式鬼瓦のどの型式に該当するか判断しにくい。ただ第4望楼で出土した1点に関して述べれば外縁の珠文は小さく間隔は密であり、歯牙と外縁の珠文が接し、口端の卷髭の表現が無いことから『大宰府政庁跡』で新しく設定されたIII式Bに該当すると思われる。^(註23) この型式は現在まで大宰府政庁跡で1点と鴻臚館跡でそれと思しき1点があるのみでイレギュラーな型式といえよう。III式の年代に関して毛利光氏は9世紀(大宰府政庁III期)に下げて考えているが、近年は范型を用いず手作りされた鬼瓦との関係からI・II式をさかのぼらない8世紀代とする意見も提示されている。^(註24)^(註25)

註

1. 土器の年代観は以下の文献を参考にした。
山本信夫1992「北部九州の7～9世紀中頃の土器」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東—』（古代の土器研究会第1回シンポジウム）
山本信夫1996「古代前期の煮炊具—筑前・筑後・豊前・豊後・肥前—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東 煮炊具—』（古代の土器研究会第4回シンポジウム）
2. 坪根伸也1995「羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題」（大分市教育委員会『羽田遺跡II』）
中島恒次郎1998「A. 豊後型甕の出土」（太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡X』（太宰府市の文化財第37集））
3. 小田和利1994「豊前出土の北陸系土器について」『九州歴史資料館研究論集』19 九州歴史資料館
4. 佐藤浩司2001「豊前企救型甕考」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会
5. 外面にタタキを有す点から玄界灘沿岸に分布する玄界灘式製塩土器の可能性も考えたが、頸部が締まらない、内面に当具痕を残さず丁寧にナデ調整する、法量がやや大きいという点から玄海灘式製塩土器とは異なるものと考えた。
6. 中山平次郎1916「古瓦類雑考（五）」『考古学雑誌』第6巻第11号 考古学会
7. 栗原和彦1990「九州における平瓦一枚作り」『九州歴史資料館研究論集』16 九州歴史資料館
8. 鏡山猛1937『怡土城跡の調査』（日本古文化研究所報告第6）日本古文化研究所
9. 福岡県教育委員会1982『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第6集
怡土城跡にみられる平瓦と同様の平瓦片が6点報告されているが、うち1点は凹面に「模骨板痕が残り、桶巻き作りによる手法をとっている」と判断され、残りは「積極的な根拠はないが、一枚造りの可能性がある」と指摘されている。
10. 前原市教育委員会により平成14～15年度に調査。調査担当者の江崎靖隆氏より御教示頂いた。
11. 福岡市教育委員会が平成14年度より調査中。調査担当者の上角智希氏より御教示頂いた。2002年度の調査では10世紀の瓦窯跡が検出されたが、15点の平瓦片はその瓦窯跡に伴わないとみられ、胎土分析の結果から搬入品と解釈される。いずれも一枚作りによる成形との御教示を得た。
12. 前原市教育委員会2003『前原西町遺跡II』（前原市埋蔵文化財調査報告書第84集）
13. 註8鏡山論文と同じ。
14. 中山平次郎1916「古瓦類雑考（九）」『考古学雑誌』第7巻第4号 考古学会
小田富士雄1957・1958「大宰府系古瓦の展開」『九州考古学』1～6・13（のち小田1977『九州考古学研究 歴史時代篇』学生社に所収）
高橋章1983「鴻臚館系瓦の様相」（九州歴史資料館編『大宰府古文化論叢』下巻）吉川弘文館
15. 瓜生秀文2001「伝怡土城跡出土の鬼瓦」『溝渚』第9・10合併号 古代山城研究会
16. 前原市教育委員会1995『川原川右岸地区遺跡群I』（前原市文化財調査報告書第57集）
17. 上原真人1997「瓦を読む」（歴史発掘①）講談社
18. 註14小田論文と同じ。
19. 毛利光俊彦1980「日本古代の鬼面文鬼瓦—8世紀を中心として—」『研究論集VI』（奈良国立文化財研究所学報第38冊）
20. 九州歴史資料館2002『大宰府政庁跡』
21. 小田富士雄1981「北浦廃寺」（九州歴史資料館編『九州古瓦図録』柏書房）
22. 註15瓜生論文と同じ。
23. 註20文献と同じ。
24. 註19毛利光論文と同じ。
25. 註20文献と同じ。

3. 怡土城の終焉

怡土城廃城の時期については不明であるが、第5望楼の発掘調査の結果等から少なくとも9世紀初頭までは「城」として機能していたようである。その後、中世において原田氏が怡土城を再利用して「高祖城」を築城するが、このことは同時に時代を問わず当該地が軍事的に重要拠点であったことを証明している。

4. 怡土城その後（高祖城）

高祖山の自然遊歩道改修にともなう遺構確認調査のため、平成10年度に前原市教育委員会が高祖城の「上の城」の一部分の調査を実施している。その発掘調査の成果を紹介することにする。

高祖城は高祖山（標高416m）の頂上に築かれた中世山城で、「上の城」と「下の城」を中心として城郭が形成されている。最初に築城された時期は明らかではない。ただし、天正15年（1587）の豊臣秀吉の九州制覇の際、最期の城主原田信種は高祖城に籠城して豊臣方に抵抗するが、頼りにしていた島津氏・秋月氏の援軍がこないのがわかると交戦するのを諦め開城して豊臣秀吉の家臣小早川隆景の軍門に下る。その後、高祖城は廃城になったと考えられている。

遺構は石塁・建物の礎石・虎口（階段状入り口）・ピット群等を検出した。石塁は現存高約1.5mを測り、廃城以前は約2mの高さがあったと推定できる。築造方法としては扇状に勾配をもたせて石材を組むものではなく、垂直に石材を組む工法をとっている。織豊期（織田信長・豊臣秀吉の時代）以前にみられる典型的な在地の石塁である。礎石群の礎石間は約2.1m（約7尺）を測る。虎口は階段状に地山整形の後、ステップ部分に上面を水平に整えた石材を使用している。虎口幅も礎石間と同じく約2.1m（約7尺）を測る。このことから築城に際して「7尺」が規格の一つであったことがわかる。ピットはテラスの端部で検出した。乱杭の跡と考えられ、一部に杭の痕跡を残している。

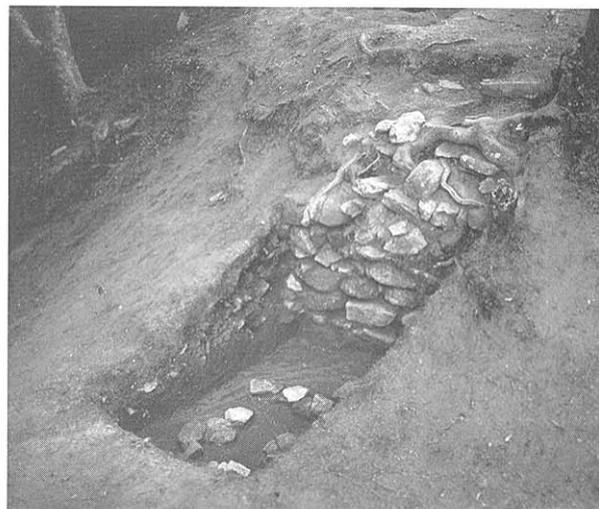
遺物は輸入陶磁器、土師皿、多量の瓦、釘（瓦止め）等が出土した。陶磁器の時期は16世紀中頃のもの大半を占めるが、一部には15世紀代の伝世品と考えられるものも含まれる。瓦については時期差があり、新しくても織田信長・豊臣秀吉の時代以前のものである。瓦は鬼瓦以下一式出



第78図 高祖城（上の城）

土しており、その出土量から当時の山城としては珍しい総瓦葺の建物が所在したことが想定できる。また、土師皿、火舎、甕、花瓶等も出土することから、この城は単なる逃げ込みのための城ではなく、城兵のみならず風流（華道等）を嗜む人物なども常駐していたと考えることもできる。

なお、破城（廃城）の痕跡も確認しており、当時の破城の作法（実施方法）を知る上で貴重な資料となっている。



第79図 高祖城石壘



第80図 高祖城出土瓦一式



第81図 原田信種像



第82图 高祖城堦定图 (小幡政義氏画)

表2 第5望楼出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	復元口径15.8 残高1.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ後天井部回転ヘラ切り→天井部回転ヘラ削り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：7.5Y6/1灰	口縁部片	
2	須恵器皿	口径14.2 底径11.2 器高2.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒をやや含む	内外：N6/灰	完形	
3	須恵器皿	復元口径13.6 器高1.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：10Y6/1灰	口縁部片	
4	須恵器皿	復元口径13.7 復元底径11.1 器高1.1	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：N5/灰	口縁～底部片	
5	須恵器皿	復元底径11.1 残高0.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：5Y6/1灰	底部片	
6	須恵器皿?	復元底径9.6 残高1.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：N6/灰	底部片	
7	須恵器皿	復元底径10.4 残高1.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：7.5Y6/1灰	底部片	
8	須恵器皿	復元底径9.4 残高1.4	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：2.5Y8/2灰白	底部片	
9	須恵器皿	復元底径9.0 器高1.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：N6/灰	底部片	
10	須恵器皿?	復元口径12.4 残高1.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：10Y6/1灰	口縁部片	
11	須恵器皿	復元底径9.8 残高1.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：N6/灰	底部片	
12	須恵器皿	復元底径10.2 残高0.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内：2.5Y7/3浅黄 外：10YR7/4にぶい 黄橙	底部片	
13	須恵器杯	復元口径9.6 底径6.0 器高2.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り?	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：7.5Y6/1灰	1/2残存	
14	須恵器杯	復元底径7.1 残高1.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：N6/灰	底部片	
15	須恵器杯	復元底径7.7 残高1.3	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：10Y6/1灰	底部片	
16	須恵器杯	復元底径6.2 残高1.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：5Y6/1灰	底部片	
17	須恵器杯	復元口径9.7 残高1.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：7.5Y6/1灰	口縁部片	
18	須恵器杯	復元底径7.0 残高1.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：N6/灰	底部片	
19	須恵器杯	復元底径7.1 残高1.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：7.5Y6/1灰	底部片	
20	須恵器杯	復元底径5.9 残高0.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：N6/灰	底部片	
21	須恵器杯	復元底径5.8 残高1.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：5Y6/1灰	底部片	
22	須恵器杯	底径6.2 残高1.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り?	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：5Y6/1灰	底部片	
23	須恵器杯	底径6.0 残高1.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：5YR7/2灰白	底部片	
24	須恵器杯	復元底径5.6 残高0.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内：5Y7/1灰白 外：5Y6/1灰	底部片	
25	須恵器塊	復元底径9.1 残高1.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り→高台ナデ付け	良好	密 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：2.5Y7/2灰黄	底部片	
26	須恵器塊	復元底径6.8 残高1.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り→高台ナデ付け	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：N6/灰	底部片	
27	須恵器塊	復元底径7.2 残高1.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り?→高台ナデ付け	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：5Y5/1灰	底部片	
28	須恵器?塊	復元底径7.8 残高1.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り→高台ナデ付け	不良	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：2.5Y8/2灰白	底部片	
29	土師器杯	復元口径14.0 底径8.6 器高4.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	やや不良	精良 ～1mmの黒色砂粒を若干含む	内外：10YR6/3に ぶい黄橙	底部片	

番号	器種	法量 (cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
30	土師器? 坏	復元口径12.5 底径8.4 器高4.1	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り	やや不良	精良 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外: 10YR7/4に ぶい黄橙	1/2残存	
31	土師器坏	復元底径8.0 残高3.1	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り?	良好	精良 ~1mmの白色砂粒を含む	内外: 5YR6/6橙	底部片	
32	土師器坏	復元底径8.2 残高2.0	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り?	良好	精良 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外: 2.5Y7/3浅黄	底部片	
33	土師器? 皿	復元底径9.6 残高1.4	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り?	良好	密 ~1mmの白色砂粒を含む	内: 10YR5/3にぶい黄褐 外: 10YR6/3にぶい黄橙	底部片	
34	土師器坏	復元口径10.3 底径5.9 器高3.7	内: 回転ナデ後ヘラミガキ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り? → 体部ヘラミガキ	良好	精良 ~1mmの白色砂粒を含む	内外: 7.5YR6/4に ぶい橙	1/2残存	
35	土師器坏	復元口径9.9 底径6.0 器高3.4	内: 回転ナデ後ヘラミガキ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り? → 体部ヘラミガキ	良好	精良 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外: 5YR6/6橙	1/2残存	
36	土師器坏	復元底径5.6 残高2.2	内: 回転ナデ後ヘラミガキ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り → 体部ヘラミガキ	良好	精良 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外: 5YR6/6橙	底部完形片	
37	土師器坏	底径5.1 残高2.4	内: 回転ナデ後ヘラミガキ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り → 体部ヘラミガキ	良好	精良 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外: 5YR6/6橙	底部完形片	
38	土師器坏	復元底径5.0 残高1.2	内: 回転ナデ後ヘラミガキ? 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り → 体部ヘラミガキ	良好	精良 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外: 5YR7/8橙	底部片	
39	土師器坏	復元底径6.0 残高0.9	内: 回転ナデ後ヘラミガキ? 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り → 体部ヘラミガキ	良好	精良 ~1mmの白色砂粒を含む	内: 10YR7/4にぶい黄橙 外: 5YR7/6橙	底部片	
40	土師器坏	復元底径6.6 残高0.7	内: 回転ナデ後ヘラミガキ? 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り → 体部ヘラミガキ	良好	精良 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外: 5YR6/6橙	底部片	
41	土師器坏?	復元底径6.9 残高1.2	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り?	不良	やや粗い ~1mmの白色砂粒を含む	内外: 5YR6/8橙	底部片	
42	土師器坏	復元底径8.0 残高1.7	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り	やや不良	精良 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外: 2.5Y7/4浅黄	底部片	
43	土師器坏?	復元底径7.8 残高1.5	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ後底部ヘラ切り?	良好	精良 ~1mmの白色砂粒を含む	内外: 10YR6/4にぶい 黄橙	底部片	
44	土師器坏	復元底径6.4 残高1.5	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り?	良好	精良 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外: 10YR6/3にぶい 黄橙	底部片	
45	土師器坏?	底径7.0 残高0.8	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ後底部ヘラ切り?	やや不良	やや粗い ~1mmの白色砂粒を含む	内外: 10YR6/4にぶい 黄橙	底部完形	
46	土師器坏	復元底径7.4 残高1.5	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り?	やや不良	やや粗い ~2mmの白色砂粒を含む	内外: 7.5YR6/4に ぶい橙	底部片	
47	土師器? 塊	復元底径8.0 残高1.0	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り → 高台ナデ付け	不良	精良 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外: 10YR6/3にぶい 黄橙	底部片	
48	土師器塊	復元底径7.4 残高1.1	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り → 高台ナデ付け	やや不良	精良 ~1mmの白色砂粒を含む	内外: 10YR7/4にぶい 黄橙	底部片	
49	土師器塊	復元底径8.8 残高5.0	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ後底部回転ヘラ 切り → 高台ナデ付け	やや不良	やや粗い ~3mmの白色砂粒を多く含む	内: 7.5YR6/4にぶい 橙 外: 5YR6/6橙	底部片	
50	平瓦	残長15.2 残幅13.1 厚さ3.1~3.4	※一枚作り 凹: 布目痕 凸: 縄目タタキ	良好	やや粗い ~2mmの白色砂粒を多く含む	凹凸: N5/灰	破片	
51	平瓦	残長8.3 残幅13.7 厚さ2.4~2.6	※一枚作り 凹: 布目痕 凸: 縄目タタキ	良好	粗い ~5mmの白色砂粒を多く含む	凹凸: 10YR7/3にぶい 黄橙	破片	
52	熨斗瓦	残長26.0 幅18.0 厚さ4.8~5.5	※平瓦一枚作り → 半裁 凹: 布目痕? → ナデ 凸: 縄目タタキ	やや不良	粗い ~5mmの白色砂粒を多く含む	凹凸: 10YR6/4にぶい 黄橙	4/5残存?	破面を残す
53	熨斗瓦?	残長14.0 残幅9.5 厚さ4.0~4.3	※平瓦一枚作り → 半裁? 凹: 布目痕? 凸: 縄目タタキ	やや不良	粗い ~3mmの白色砂粒を多く含む	凹凸: 10YR6/1褐灰	1/2残存?	
54	熨斗瓦	残長20.6 幅14.0 厚さ4.2~4.6	※平瓦一枚作り → 半裁 凹: 布目痕? → ナデ 凸: 縄目タタキ	良好	粗い ~5mmの白色砂粒を多く含む	凹凸: 10YR6/2灰黄 褐	3/4残存?	破面を残す
55	熨斗瓦	残長16.8 幅17.5 厚さ5.4~6.9	※平瓦一枚作り → 半裁 凹: 布目痕 凸: 縄目タタキ	良好	粗い ~5mmの白色砂粒を多く含む	凹凸: 5Y6/1灰	1/2残存?	
56	埴	長さ32.9 幅19.9 厚さ8.1	※型成形? 表: タタキ後ナデ? 裏: タタキ後ナデ?	良好	粗い ~8mmの白色砂粒を多く含む	表裏: 2.5Y7/2灰黄	完形	
57	埴	長さ33.3 幅21.1 厚さ8.7	※型成形? 表: 縄目タタキ 裏: タタキ後ナデ?	良好	粗い ~5mmの白色砂粒を多く含む	表裏: 10YR7/4にぶい 黄橙	ほぼ完形	石膏で復元のため 割口不明

表3 第4望楼出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
1	土師器皿	復元底径5.6 残高1.2	内：回転ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：5YR6/6橙	底部片	
2	土師器皿	復元口径7.8 復元底径5.4 器高2.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：7.5Y6/4に ぶい橙	口縁～底部片	
3	土師器皿	復元口径9.3 復元底径6.0 器高1.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR7/4に ぶい黄橙	口縁～底部片	
4	土師器皿	復元口径10.1 復元底径7.8 器高1.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR6/4に ぶい黄橙	口縁～底部片	
5	土師器杯	復元口径10.0 復元底径6.0 残高3.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内：10YR7/4にぶい 黄橙 外：7.5YR7/4にぶい 橙	口縁～底部片	
6	土師器皿？	復元底径5.4 残高0.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR6/3に ぶい黄橙	底部片	
7	土師器杯？	復元底径7.0 残高0.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR6/3に ぶい黄橙	底部片	
8	土師器皿？	復元底径8.5 残高0.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：2.5Y8/2灰白	底部片	
9	土師器皿？	復元底径9.2 残高1.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：5YR5/6明赤 褐	底部片	
10	土師器皿？	復元底径9.6 残高1.2	内：回転ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR6/3に ぶい黄橙	底部片	
11	土師器皿？	復元底径10.8 残高1.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR6/4に ぶい黄橙	底部片	
12	土師器杯	復元底径13.6 残高3.2	内：回転ナデ→底部ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り →板状圧痕	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR7/4に ぶい黄橙	底部片	
13	土師器杯	復元口径11.4 底径6.8 器高3.6	内：回転ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR7/4に ぶい黄橙	口縁～底部片	
14	土師器杯	復元口径11.1 復元底径8.1 器高2.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ後回転ヘラ切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：7.5YR6/6橙	口縁～底部片	
15	土師器皿	口径5.8 底径4.5 器高2.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：7.5YR6/4に ぶい橙	ほぼ完形	
16	土師器皿	口径6.9 底径4.1 器高2.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：7.5YR6/4に ぶい橙	完形	
17	土師器皿？	復元底径4.8 残高2.5	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：7.5YR6/4に ぶい橙	底部片	
18	土師器皿？	復元底径6.0 残高1.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：7.5YR6/4に ぶい橙	底部片	
19	土師器皿？	復元底径6.8 残高1.3	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR7/4にぶい 黄橙	底部片	
20	土師器皿？	復元底径7.6 残高0.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：7.5YR6/4に ぶい橙	底部片	
21	土師器皿	復元口径8.9 復元底径7.0 器高1.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR6/4に ぶい黄橙	口縁～底部片	
22	土師器杯？	復元底径8.8 残高1.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR7/3に ぶい黄橙	底部片	
23	土師器杯？	復元底径8.2 残高1.1	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：5YR6/6橙	底部片	
24	土師器皿？	復元底径8.8 残高1.0	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR7/4に ぶい黄橙	底部片	
25	土師器杯？	復元底径8.2 残高1.7	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR6/4に ぶい黄橙	底部片	
26	土師器皿？	復元底径9.0 残高0.9	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR6/4に ぶい黄橙	底部片	
27	土師器杯	復元口径12.6 復元底径10.0 器高2.4	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：7.5YR5/6明 褐	口縁～底部片	
28	土師器杯？	復元底径10.4 残高1.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR6/3に ぶい黄橙	底部片	
29	土師器杯	復元口径14.1 復元底径10.9 器高2.8	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転系 切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：7.5YR6/4に ぶい橙	口縁～底部片	

番号	器種	法量 (cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
30	土師器皿	復元口径17.8 復元底径11.6 器高2.2	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ後底部回転 糸切り	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：7.5YR6/3に ぶい橙	口縁～底部片	
31	土師器環	復元口径13.0 底径8.0 器高3.3	内：ロクロナデ→底部ナデ 外：ロクロナデ後底部回転糸 切り？	やや不良	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：5YR6/6橙	ほぼ完形	
32	土師器環	復元口径11.9 底径8.2 器高3.0	内：ロクロナデ→底部ナデ 外：ロクロナデ後底部回転糸 切り？→底部ナデ	やや不良	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：5.5YR6/6橙	ほぼ完形	
33	土師器環	復元口径13.0 底径8.0 器高3.0	内：ロクロナデ→底部ナデ 外：ロクロナデ後底部回転糸 切り？	やや不良	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：5YR6/6橙	底部完形 口縁部1/2	
34	土師器皿	復元口径10.8 復元底径7.4 器高1.5	内：ロクロナデ→底部ナデ 外：ロクロナデ後底部回転糸 切り？	良好	精良 ～1mmの白色砂粒を含む	内外：10YR6/4に ぶい黄橙	口縁～底部片	
35	土師製土器火鉢	残高7.8	内：ヨコナデ後一部ヨコハケ 外：ヨコナデ後口縁部施文 (摺文)	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外：7.5Y6/6橙	口縁部片	
36	青磁碗	復元口径12.3 残高4.0	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外(釉)：7.5Y6/2 灰オリーブ 断面： 5Y7/2灰白	口縁部片	
37	青磁碗	復元口径15.6 残高4.0	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ→施釉	良好	密 ～1mmの白色砂粒を若干含む	内外(釉)：10Y6/2 オリーブ灰 断面： 2.5Y7/3浅黄	口縁部片	
38	青磁碗	復元口径6.0 残高2.4	内：ロクロナデ→施釉後見込 み掻き取り 外：ロクロナデ →高台削り出し後体部施釉	良好	密 ～1mmの白色砂粒を含む	内外(釉)：7.5Y4/2 灰オリーブ 断面： 5Y7/1灰白	底部片	
39	白磁皿	復元口径10.4 高3.0	内：ロクロナデ→施釉後口縁 部掻き取り 外：ロクロナデ →施釉後口縁部掻き取り	良好	密 ～1mmの白色砂粒を含む	内外(釉)：2.5GY 8/1灰白 断面： 5Y8/1灰白	口縁部片	
40	白磁碗	復元口径6.5 残高2.7	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ後回転ヘラ削 り→高台削り出し	良好	密 ～1mmの白色砂粒を含む	内(釉)：2.5GY8/1 灰白 外：2.5Y7/2灰黄	底部片	
41	施釉陶器皿?	復元口径4.7 残高2.3	内：ロクロナデ→施釉 外：ロクロナデ後回転ヘラ削 り→高台削り出し?	良好	密 ～2mmの白色砂粒を含む	内(釉)：7.5Y5/2灰 オリーブ 外：7.5Y5/3にぶい橙	底部片	見込みに目痕
42	輪削口	残長9.8 残幅3.8	※櫛状工具に粘土を巻き付け 成形?	良好	粗い ～2mmの白色砂粒を多く含む	内外：10YR7/4にぶ い黄橙	破片	外面鉄分付着
43	製斗瓦	残長12.7 幅13.0 厚さ3.5～4.5	※平瓦一枚作り→半裁 凹：存目痕 凸：視目	良好	粗い ～5mmの白色砂粒を多く含む	凹凸：10YR5/1灰	1/3残存?	
44	丸瓦	残長6.6 残幅10.4 厚さ4.0～5.1	※范型による成形	良好	やや粗い ～3mmの白色砂粒を含む	表裏：7.5YR6/4に ぶい橙	外縁部片	

表4 懸庄礎石群出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	調、整	焼成	胎土	色調	残存	備考
1	須恵器塊?	復元底径12.1 残高2.5	内:回転ナデ 外:回転ナデ後底部回転ヘラ切り→下半部一部回転ヘラ削り→高台ナデ付け	やや不良	密 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内:7.5YR6/4にぶい橙 外:10YR6/3にぶい黄橙	底部片	未還元焰焼成
2	土師器坏	復元底径6.0 残高1.4	内:回転ナデ 外:回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	精良 ~1mmの白色砂粒を若干含む	凹凸:2.5Y灰黄	底部片	
3	平瓦	長さ42.6 残幅29.7 厚さ4.1~5.5	※一枚作り 凹:布目痕→ナデ 凸:縄目タタキ	良好	粗い ~10mm以下の白色砂粒を多く含む	内外:7.5YR5/4にぶい褐	7/8残存	
4	平瓦	長さ43.0 残幅29.0 厚さ4.5~5.0	※一枚作り 凹:布目痕→ナデ 凸:縄目タタキ	良好	粗い ~5mmの白色砂粒を多く含む	凹凸:10YR7/4にぶい黄橙	3/4残存	
5	平瓦	残長27.3 残幅22.2 厚さ2.8~3.2	※一枚作り 凹:布目痕→タテハケ 凸:縄目タタキ	良好	粗い ~3mmの白色砂粒を多く含む	凹凸:10YR6/4にぶい黄橙	1/2残存?	
6	製斗瓦	残長7.5 残幅16.2 厚さ4.6~5.0	※平瓦一枚作り→半裁 凹:布目痕→ナデ 凸:縄目タタキ	良好	粗い ~4mmの白色砂粒を多く含む	凹凸:7.5YR5/6明褐	1/5残存?	
7	不明瓦	残長11.4 残幅10.0 厚さ3.4~5.0	凹?:ナデ? 凸?:縄目タタキ→ナデ	良好	粗い ~4mmの白色砂粒を多く含む	凹凸:7.5YR6/6橙	破片	
8	鬼瓦	残長8.3 残幅5.8 厚さ3.5~4.2	※范型による成形?	やや不良	粗い ~2mmの白色砂粒を多く含む	表裏:10YR6/2灰黄褐	外縁部片	

表5 手嶋氏寄贈資料観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
1	須恵器坏	口径13.7 器高4.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り	良好	密 白色粗砂を若干含む	内外：7.5YR7/4に ぶい橙	ほぼ完形	未還元焼成
2	須恵器坏	口径12.8 器高3.9	内：回転ナデ後見込みナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り	良好	密 白色粗砂を若干含む	内外：7.5YR6/6橙	完形	未還元焼成 ヘラ記号
3	須恵器皿	口径13.6 器高2.5	内：回転ナデ後見込みナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り→板状圧痕	良好	密 白色粗砂を若干含む	内外：10YR6/3橙	ほぼ完形	未還元焼成
4	須恵器鉢	口径17.3 器高6.5	内：回転ナデ後見込みナデ 外：回転ナデ後底部ヘラ切り →底部回転ヘラ削り	良好	密 白色粗砂を若干含む	内外：10YR7/3にぶ い黄橙	ほぼ完形	未還元焼成 外面スス
5	須恵器甕	復元口径12.3 残高7.7	内：回転ナデ後見込みナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り→底部一部回転ヘラ削り	良好	密 ~2mmの白色粗砂を若干含む	内：5YR5/2灰褐 外：10YR3/1黒褐	底部片	
6	須恵器甕	残高11.0	内：ヨコナデ→同心円文当具痕 外：ヨコナデ後無文タタキ	良好	密 白色粗砂を若干含む	内外：N5/灰	胴部片	外面自然軸
7	土師器坏	復元口径10.4 器高2.6	内：回転ナデ後見込みナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り→板状圧痕	良好	精良 ~1mmの白色粗砂を若干含む	内外：5YR6/6橙	1/3残存	
8	土師器坏	口径13.6 器高4.0	内：回転ナデ後見込みナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り →板状圧痕	やや不良	密 白色粗砂を含む	内：5YR6/6橙 外：5YR7/6橙	完形	
9	土師器坏	口径13.1 器高4.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り	やや不良	精良 ~1mmの白色粗砂を若干含む	内：7.5YR7/6橙 外：5YR6/6橙	2/3残存	
10	土師器坏	復元口径6.6 残高2.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り→底部ナデ	良好	精良 ~1mmの白色粗砂を若干含む	内外：5YR6/6橙	底部片	
11	土師器坏	口径6.5 残高2.4	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り	良好	精良 ~1mmの白色粗砂を若干含む	内外：7.5YR6/4に ぶい橙	底部ほぼ完形	
12	土師器坏?	復元口径8.0 残高1.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り	良好	精良 白色粗砂を含む	内：7.5YR6/4にぶ い橙 外：10YR6/3にぶい黄橙	底部片	
13	土師器坏	口径7.0 残高3.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り?	やや不良	精良 ~1mmの白色粗砂を若干含む	内：7.5YR6/4にぶ い橙 外：10YR6/3にぶい黄橙	底部完形	
14	土師器坏?	復元口径7.5 残高1.6	内：回転ナデ後見込みナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り→板状圧痕	やや不良	精良 ~1mmの白色粗砂を若干含む	内外：10YR8/2灰白	底部片	
15	土師器坏	復元口径7.4 残高1.2	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り?	やや不良	精良 ~1mmの白色粗砂を若干含む	内外：7.5YR8/4浅 黄橙	底部片	
16	土師器塊	口径7.4 残高2.1	内：回転ナデ? 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り→高台ナデ付け	不良	やや粗い ~2mmの白色粗砂を多く含む	内外：10YR7/3にぶ い黄橙	底部完形	
17	土師器塊	復元口径6.2 残高2.7	内：回転ナデ後見込みナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り?→高台ナデ付け	不良	精良 ~1mmの白色粗砂を若干含む	内外：10YR7/2にぶ い黄橙	底部片	
18	土師器塊	復元口径7.2 残高2.2	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り→高台ナデ付け	良好	精良 白色粗砂を若干含む	内外：10YR7/3にぶ い黄橙	底部片	
19	土師器塊	復元口径7.5 残高2.5	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り→高台ナデ付け	良好	やや粗い ~2mmの白色粗砂を多く含む	内外：5YR6/6橙	底部ほぼ完形	
20	土師器高坏	口径16.8 残高5.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り→脚部ナデ付け	良好	精良 白色粗砂を若干含む	内外：7.5YR6/6橙	2/3残存	
21	土師器高坏	口径14.6 残高2.8	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り→脚部ナデ付け	良好	精良 白色粗砂を若干含む	内外：5YR6/6橙	坏部ほぼ完形	ヘラ記号
22	土師器蓋	口径17.5 器高3.1	内：回転ナデ 外：回転ナデ後天井部回転ヘ ラ切り→横みナデ付け	良好	やや粗い ~2mmの白色粗砂を多く含む	内外：7.5YR6/4に ぶい橙	ほぼ完形	
23	土師器鉢	口径15.6 器高6.7	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り	良好	やや粗い ~2mmの白色粗砂を多く含む	内外：2.5YR5/6明 赤褐	完形	
24	土師器脚付鉢	口径21.2 器高11.9	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 削り→下半部一部回転ヘラ削 り→脚部ナデ付け	良好	精良 ~1mmの白色粗砂を含む	内外：7.5YR6/4に ぶい橙	ほぼ完形	
25	土師器脚付鉢	口径17.6 器高8.0	内：回転ナデ後見込みナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ 切り?→脚部ナデ付け	やや不良	精良 ~1mmの白色粗砂を含む	内：5YR6/6橙 外：5YR6/8橙	ほぼ完形	
26	土師器甕	口径27.9 器高25.8	内：ヨコナデ後ヘラ削り 外：ヨコナデ後ナデ	良好	粗い ~5mmの白色粗砂を多く含む	内：5YR6/6橙 外：5YR5/4にぶい 赤褐	ほぼ完形	外面スス
27	土師器甕	口径27.0 器高21.8	内：ヨコナデ後ナデ 外：ヨコナデ後平行タタキ	良好	やや粗い ~5mmの白色粗砂を多く含む	内：5YR6/2灰褐 外：5YR5/2灰褐	ほぼ完形	外面スス
28	土師器甕	復元口径26.9 残高20.2	内：ヨコナデ後ナデ 外：ヨコナデ後格子目タタキ	やや不良	やや粗い ~3mmの白色粗砂を含む	内外：7.5YR6/3に ぶい橙	底部欠損	
29	土師器甕	復元口径32.6 器高22.3	内：ヨコナデ後ヘラ削り 外：ヨコナデ	良好	粗い ~5mmの白色粗砂を多く含む	内：5YR5/3にぶい 赤褐 外：5YR4/2赤褐	1/4残存	外面スス

番号	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
30	土師器甕	復元口径23.3 残高18.0	内：ヨコナデ後ヘラ削り 外：ヨコナデ後ナデ	良好	粗い ～3mmの白色砂粒を多く含む	内外：7.5YR5/2灰褐	1/4残存	
31	土師器甕	口径23.8 器高16.0	内：ヨコナデ後ヘラ削り 外：ヨコナデ	良好	粗い ～5mmの白色砂粒を多く含む	内：5YR6/6橙 外：5YR6/3にぶい橙	完形	外面スス
32	土師器甕	復元口径26.6 残高8.0	内：ヨコナデ後ヘラ削り 外：ヨコナデ	良好	粗い ～3mmの白色砂粒を多く含む	内：5YR6/4にぶい橙 外：5YR6/2灰褐	口縁部片	外面スス
33	土師器甕	口径18.5 器高12.7	内：ヨコナデ後ヘラ削り 外：ヨコナデ後ナデ	良好	粗い ～3mmの白色砂粒を多く含む	内：5YR6/6橙 外：5YR6/2灰褐	ほぼ完形	外面スス
34	土師器甕	復元口径31.2 残高6.6	内：ヨコナデ後ヘラ削り→口縁部ヨコハケ 外：ヨコナデ後タテハケ	良好	粗い ～5mmの白色砂粒を多く含む	内：7.5YR6/2灰褐 外：7.5YR7/4にぶい橙	口縁部片	
35	土師器甕	口径18.7 器高13.3	内：ヨコナデ後ヘラ削り？ 外：ヨコナデ後ナメハケ	良好	やや粗い ～5mmの白色砂粒を多く含む	内外：7.5YR6/4にぶい橙	完形	外面スス
36	平瓦	長さ40.5 上部部幅29.3 下部部幅32.5 厚さ4.2～5.4	※一枚作り 凹：布目痕→ナデ 凸：縄目タタキ	良好	粗い ～5mmの白色砂粒を多く含む	凹凸：7.5Y5/1灰	ほぼ完形	
37	平瓦	長さ42.9 上部部幅28.4 下部部幅30.8 厚さ4.0～6.0	※一枚作り 凹：布目痕→一部ナデ 凸：縄目タタキ	良好	粗い ～5mmの白色砂粒を多く含む	凹凸：5YR6/3にぶい橙	完形	
38	平瓦	長さ43.3 上部部幅27.9 下部部幅30.6 厚さ3.8～4.1	※一枚作り 凹：布目痕→ナデ 凸：縄目タタキ	良好	粗い ～3mmの白色砂粒を多く含む	凹凸：N6/灰	完形	
39	平瓦	長さ39.4 上部部幅26.8 厚さ4.5～4.9	※一枚作り 凹：布目痕→ナデ 凸：縄目タタキ	良好	やや粗い ～3mmの白色砂粒を多く含む	凹凸：5Y7/1灰白	ほぼ完形	
40	平瓦	長さ40.8 上部部幅27.3 厚さ4.6～5.2	※一枚作り 凹：布目痕 凸：縄目タタキ	良好	粗い ～5mmの白色砂粒を多く含む	凹凸：5YR6/3にぶい橙	ほぼ完形	

表6 大門地区土壘崩壊地点採集資料観察表

番号	器種	法量(cm)	調整	焼成	胎土	色調	残存	備考
1	須恵器蓋	残高1.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後天井部回転ヘラ切り →高台ナデ付け	良好	密 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外：N6/灰	天井部片	
2	須恵器蓋	復元口径12.2 残高2.0	内：回転ナデ→かえりナデ付け 外：回転ナデ→天井部回転ヘラ切り	良好	密 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外：N6/灰	口縁部片	
3	須恵器蓋	復元口径12.0 残高1.2	内：回転ナデ→かえりつまみ出し(ナデ) 外：回転ナデ	良好	密 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内：N5/灰 外：N6/灰	口縁部片	
4	須恵器坏	復元口径12.7 復元底径10.5 器高3.1	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り	良好	密 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内：N4/灰 外：N5/灰	口縁~底部片	
5	須恵器塊	復元底径8.2 残高2.0	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部ヘラ切り →高台ナデ付け	良好	密 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内：N6/灰 外：N5/灰	底部片	
6	須恵器塊	復元底径7.0 残高1.2	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り →高台ナデ付け	良好	密 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外：N6/灰	底部片	
7	土師器塊	復元底径7.1 残高1.2	内：回転ナデ 外：回転ナデ後底部回転ヘラ切り →高台ナデ付け	良好	精良 ~1mmの白色砂粒を若干含む	内外：10YR8/3浅黄橙	底部片	
8	輪羽口	残長15.7 残幅8.0	※棒状工具に粘土を巻き付け成形?	良好	やや粗い ~3mmの白色砂粒を含む	内：7.5YR7/6橙 外：N4/灰	破片	外面鉄滓・鉄分付着
9	輪羽口	残長25.2 幅10.3	※棒状工具に粘土を巻き付け成形?	良好	粗い ~5mmの白色砂粒を多く含む	内：7.5YR7/6橙 外：2.5YR4/1赤灰	1/3残存	外面鉄分付着
10	輪羽口	残長8.1 残幅6.0	※棒状工具に粘土を巻き付け成形?	良好	やや粗い ~2mmの白色砂粒を多く含む	内：7.5YR7/6橙 外：7.5YR4/2灰褐	破片	外面鉄分付着
11	輪羽口	残長12.5 残幅6.7	※棒状工具に粘土を巻き付け成形?	良好	粗い ~3mmの白色砂粒を多く含む	内：7.5YR6/6橙 外：2.5Y5/2暗褐黄	破片	外面鉄分付着
12	輪羽口	残長15.9 残幅9.0	※棒状工具に粘土を巻き付け成形?	良好	粗い ~4mmの白色砂粒を多く含む	内：7.5YR6/6橙 外：2.5Y6/3にぶい黄	破片	
13	輪羽口	残長7.1 残幅7.9	※棒状工具に粘土を巻き付け成形?	やや不良	やや粗い ~2mmの白色砂粒を多く含む	内：7.5YR4/2褐 外：7.5Y4/1灰	破片	
14	輪羽口	残長8.1 残幅6.0	※棒状工具に粘土を巻き付け成形?	良好	粗い ~2mmの白色砂粒を多く含む	内：7.5YR7/6橙 外：7.5YR4/2灰褐	破片	外面鉄分付着
15	輪羽口	残長8.0 残幅5.5	※棒状工具に粘土を巻き付け成形?	良好	粗い ~4mmの白色砂粒を多く含む	内：7.5YR6/6橙 外：10YR6/4にぶい黄橙	破片	外面鉄分付着
16	輪羽口	残長6.7 残幅7.1	※棒状工具に粘土を巻き付け成形?	良好	粗い ~3mmの白色砂粒を多く含む	内外：10YR6/4にぶい黄橙	破片	
17	平瓦	残長14.3 残幅26.9 厚さ3.3~4.0	※一枚作り 凹：布目痕→一部ナデ 凸：縄目タタキ	良好	やや粗い ~3mmの白色砂粒を多く含む	凹凸：10YR6/4にぶい黄橙	1/3残存	
18	平瓦	残長15.5 残幅9.6 厚さ3.2~3.8	※一枚作り? 凹：布目痕 凸：縄目タタキ	良好	やや粗い ~3mmの白色砂粒を多く含む	凹凸：10YR7/4にぶい黄橙	破片	
19	埴	残長13.5 幅20.8 残厚6.0	※型成形? 表：ハケ	良好	やや粗い ~3mmの白色砂粒を多く含む	表裏：10YR6/3にぶい黄橙	1/3残存	
20	埴	残長11.3 残幅9.8	※型成形? 表：ハケ	良好	粗い ~5mmの白色砂粒を多く含む	表裏：10YR6/4にぶい黄橙	破片	
21	埴	残長10.5 残幅5.8	※型成形?	良好	粗い ~5mmの白色砂粒を多く含む	表裏：2.5Y5/2暗灰黄	破片	

圖 版

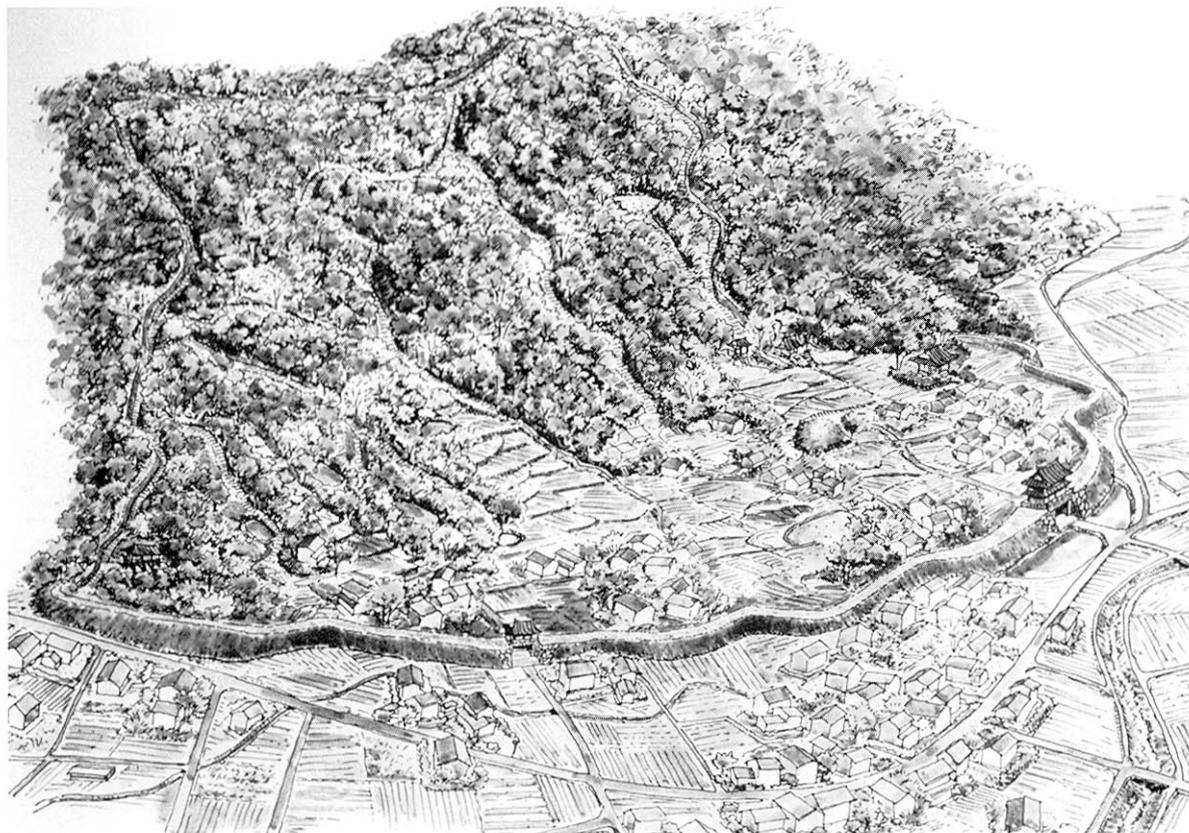


怡土城全景（南東より）

図版2



a. 怡土城全景（南西より）



b. 怡土城想定図（北西より）



a. 第5望楼 I区全景 (東より)



b. 第5望楼 I区近景 (東より)

図版4



a. 第5望楼Ⅰ区礎石（南より）



b. 第5望楼Ⅱ区全景（東より）



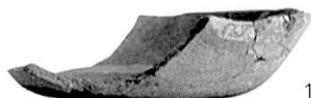
2



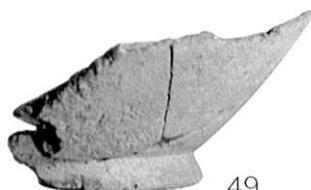
30



16

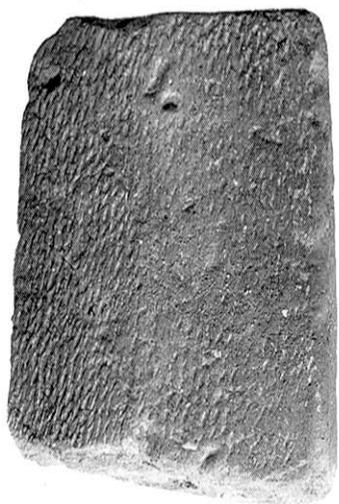


13



49

a. 第5望楼出土土器



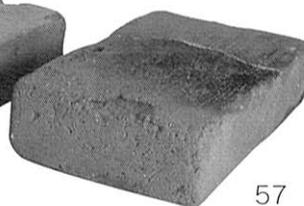
54



53



56



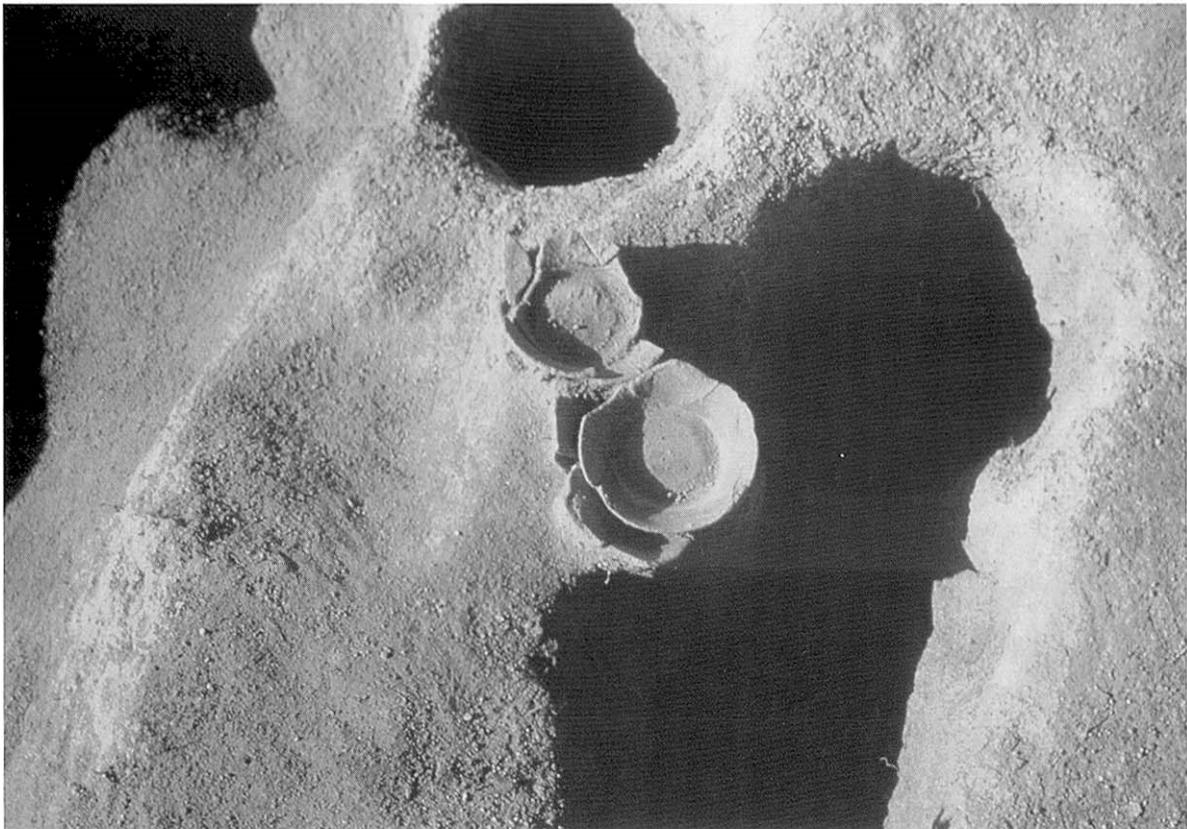
57

b. 第5望楼出土瓦·埴

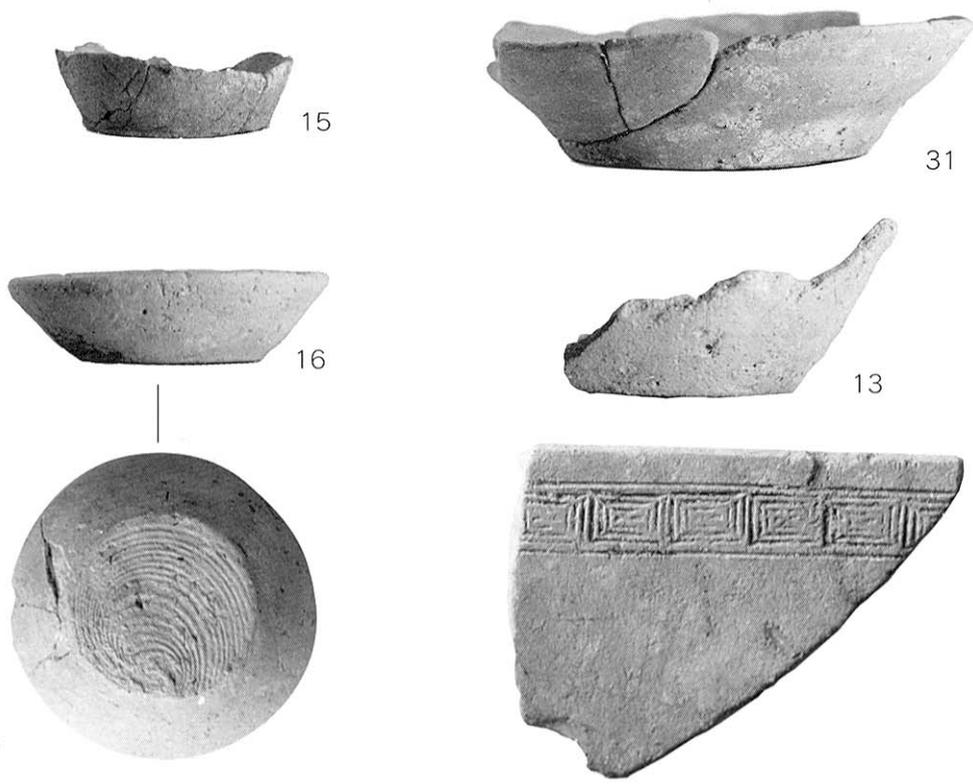
図版6



a. 第4望楼全景 (南より)



b. 第4望楼土器出土状況



a. 第4望楼出土土器



43



44

b. 第4望楼出土瓦

図版8



a. 懸庄礎石群全景（北より）



b. 懸庄礎石群全景（西より）



1



2



3



4



8

懸庄礎石群出土遺物



a. 高来寺遺跡（高来寺60-1）全景（西より）



b. 高来寺遺跡（高来寺60-1）Aトレンチ（北より）



a. 大門遺跡（大門484-1）全景（南より）



b. 大門遺跡（大門484-1）土層（南より）



大門遺跡（大門29・30）全景（南西より）



a. 大門遺跡（大門29・30）No.1トレンチ（南西より）



b. 大門遺跡（大門29・30）No.1トレンチ土層



a. 大門遺跡（大門29・30）No.2トレンチ（南西より）



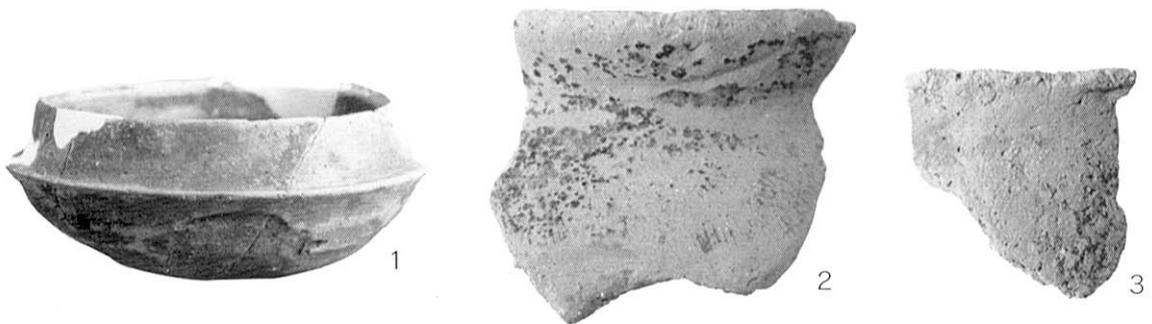
b. 大門遺跡（大門29・30）No.2トレンチ土層



a. 大門遺跡（大門29・30）石垣Ⅰ区



b. 大門遺跡（大門29・30）石垣Ⅲ区



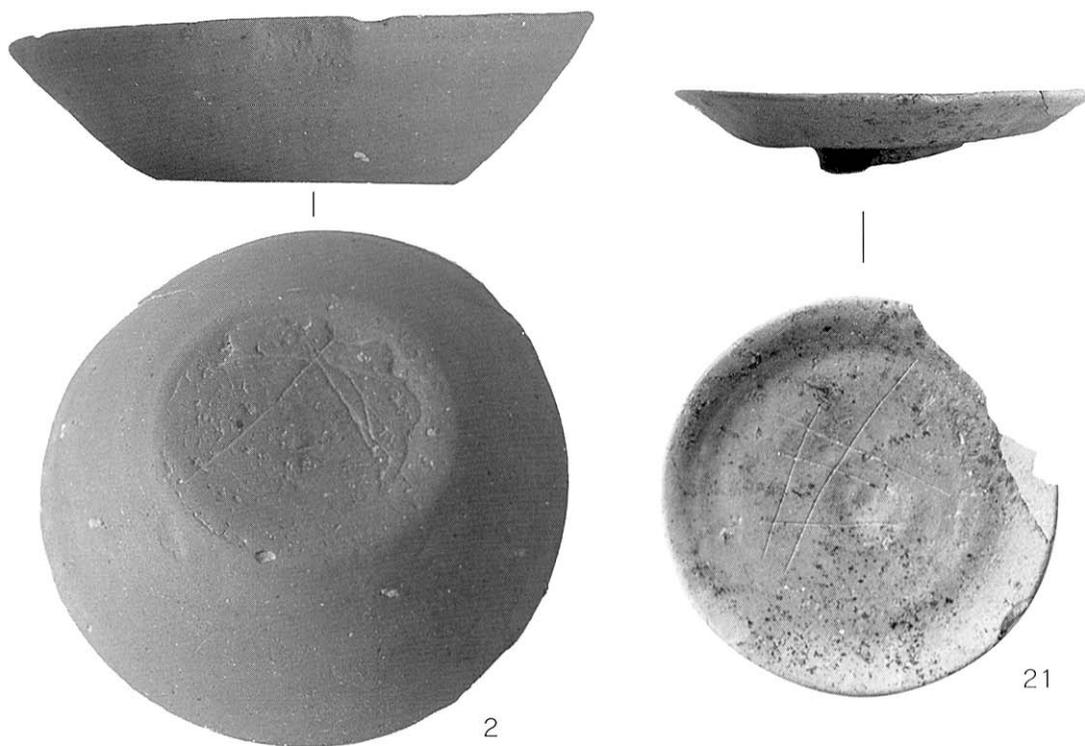
c. 大門遺跡（大門29・30）出土遺物



a. 手嶋氏寄贈資料 (集合)



b. 手嶋氏寄贈資料 (土器1)



a. 手嶋氏寄贈資料 (土器2)



b. 手嶋氏寄贈資料 (土器3)



36



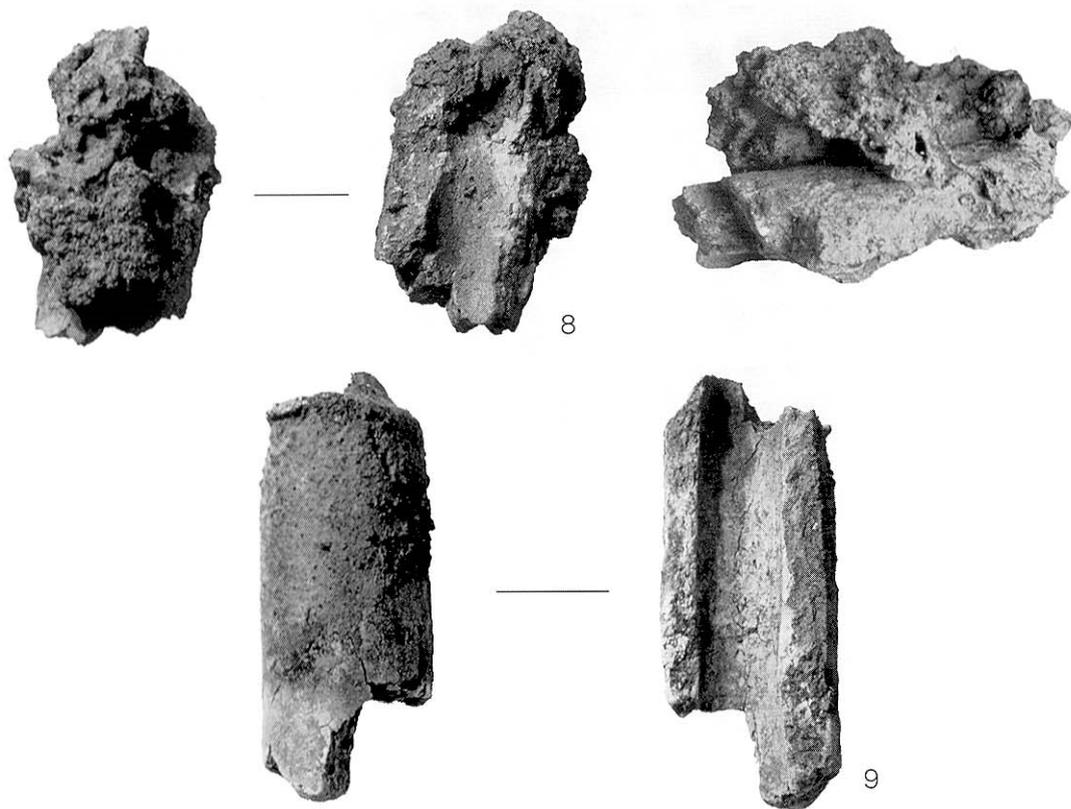
37



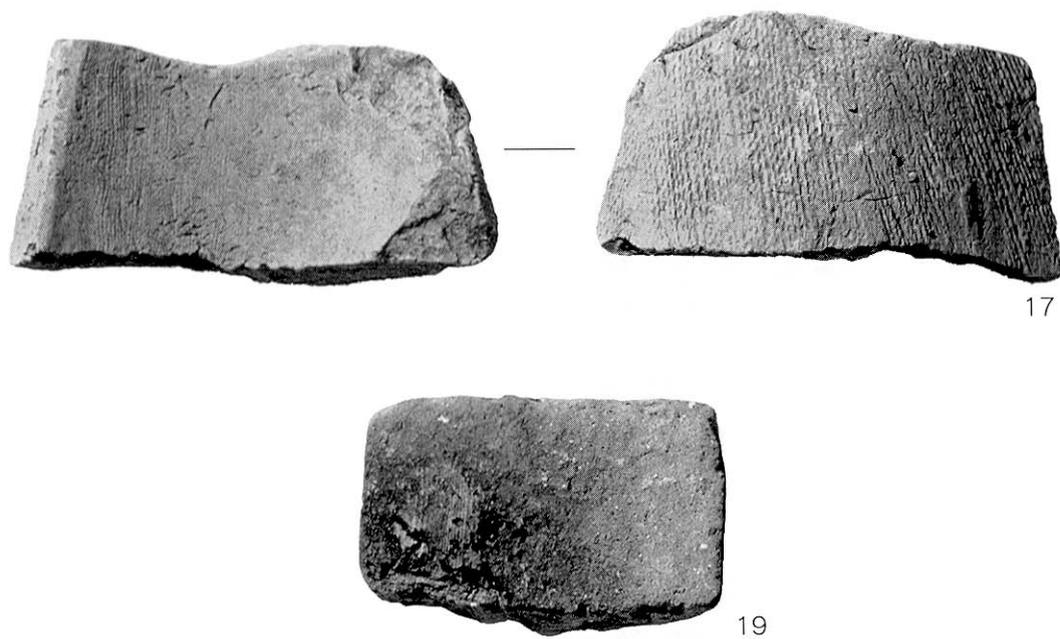
a. 末永出土鬼瓦



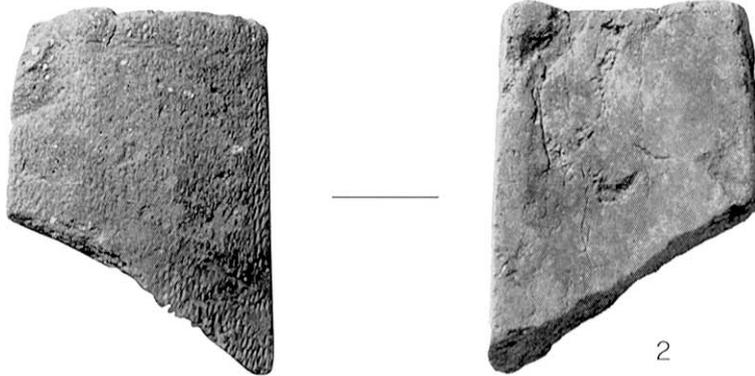
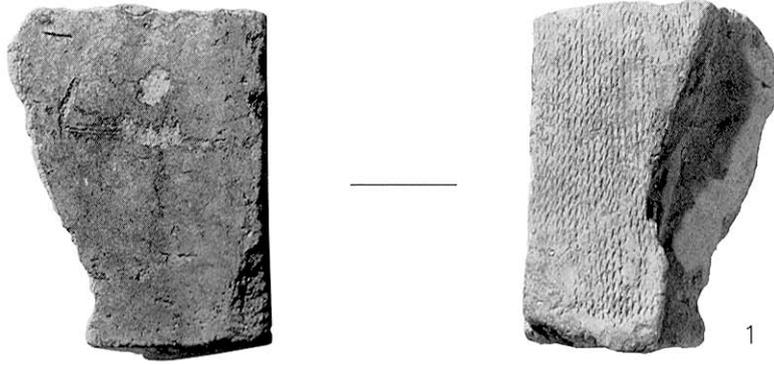
b. 伝怡土城出土鬼瓦 (大圓寺所蔵)



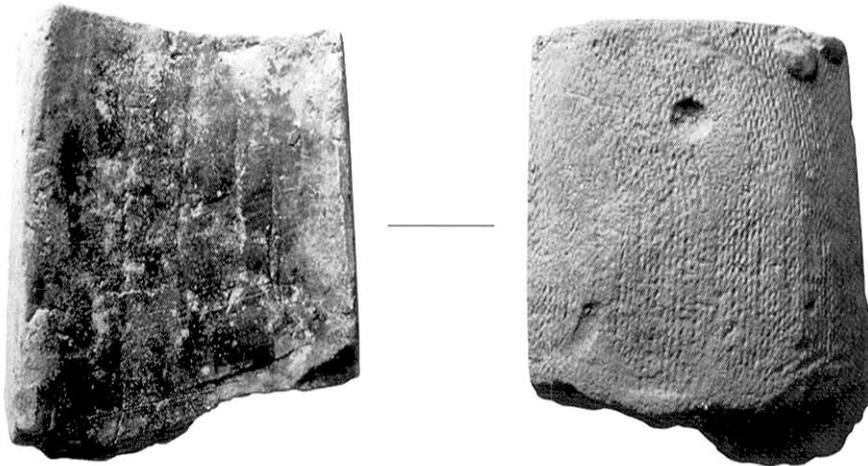
a. 大門地区土壘崩壊地点採集遺物（製鉄関係遺物）



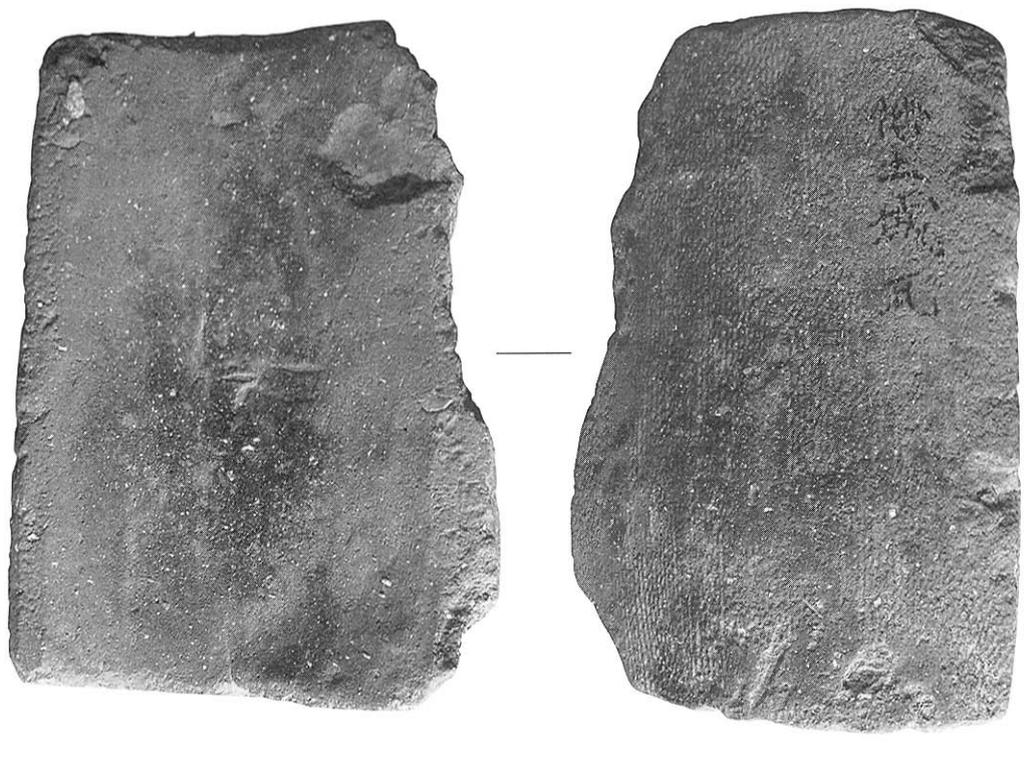
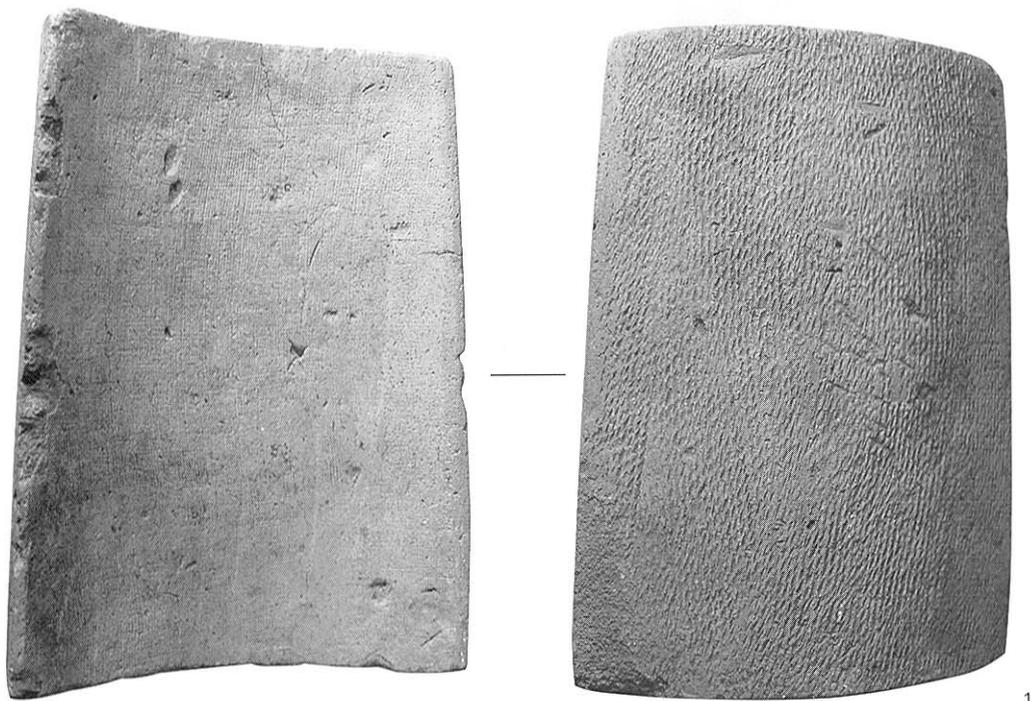
b. 大門地区土壘崩壊地点採集遺物（瓦）



a. 一ノ坂礎石群採集資料



b. 砂防工事に伴う出土資料





a. 大鳥居口城門



b. 怡土城碑



c. 大鳥居口城門礎石



a. 伝大鳥居口城門礎石



b. 伝大門礎石



c. 伝大門礎石 (天上部)

報 告 書 抄 録

ふりがな	くにしていしせき いとじょうあと							
書名	国指定史跡 怡土城跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	前原市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第94集							
著者名	川村 博・角 浩行・瓜生秀文・山口裕平							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	福岡県前原市前原西一丁目8番14号							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
保管場所	[写真] [図版] [遺物]	伊都国歴史博物館						
保管場所所在地	福岡県前原市大字井原96番地							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
怡土城	福岡県前原市大字高祖字東谷1717他	40222						公共事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
怡土城	城館跡	奈良～戦国時代	土塁、城門、濠、望楼		須恵器、土師器、瓦			

国指定史跡

怡 土 城 跡

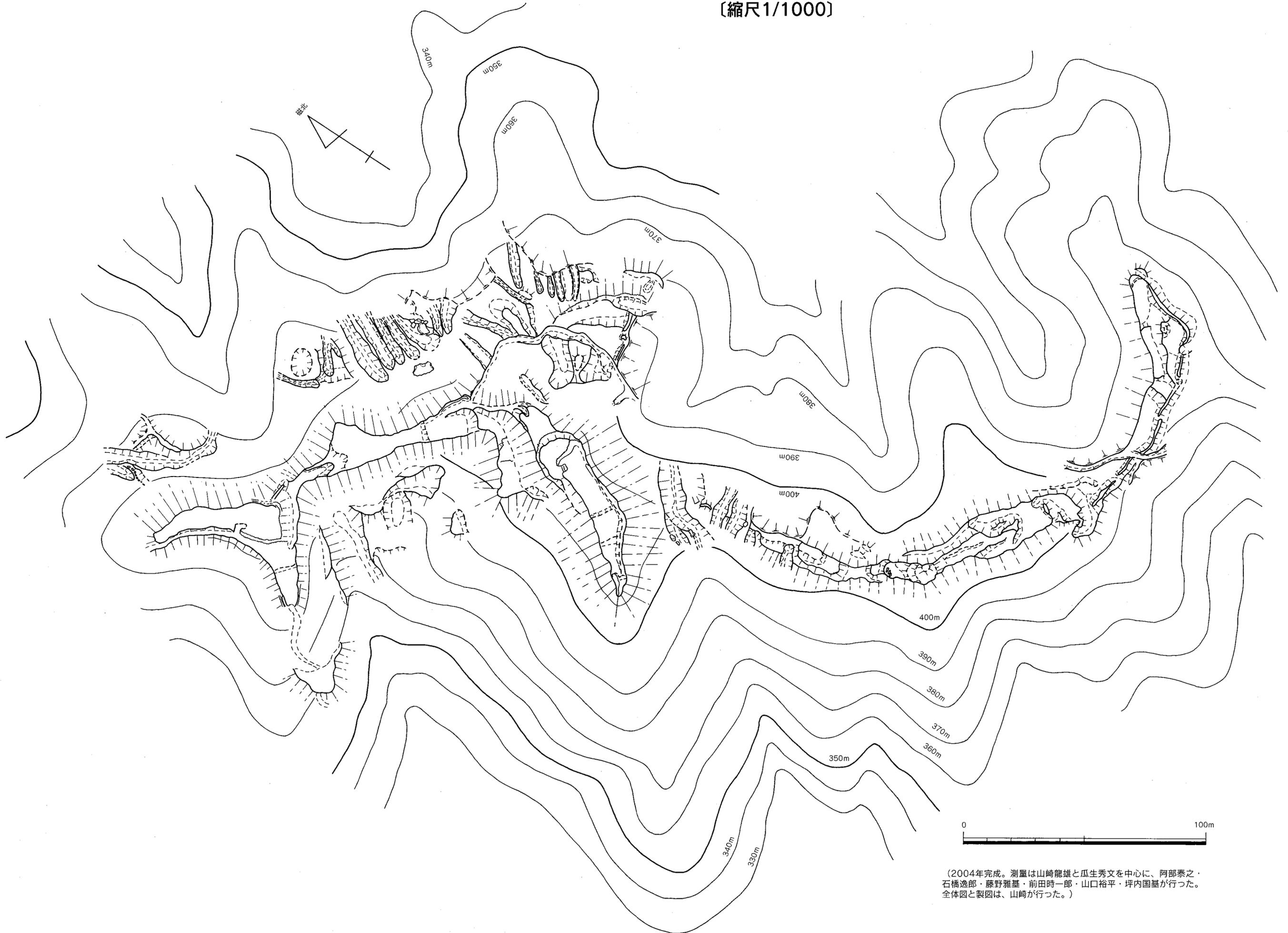
前原市文化財調査報告書 第94集
2006年3月31日

発 行 前原市教育委員会
福岡県前原市前原西一丁目8番14号
TEL 092-323-1111

印 刷 株式会社 重富印刷
福岡県前原市前原東三丁目1番8号
TEL 092-322-0191 FAX 092-324-2661

付図2 高祖城縄張図（福岡県前原市・福岡市）

〔縮尺1/1000〕



（2004年完成。測量は山崎龍雄と瓜生秀文を中心に、阿部泰之・石橋逸郎・藤野雅基・前田時一郎・山口裕平・坪内国基が行った。全体図と製図は、山崎が行った。）